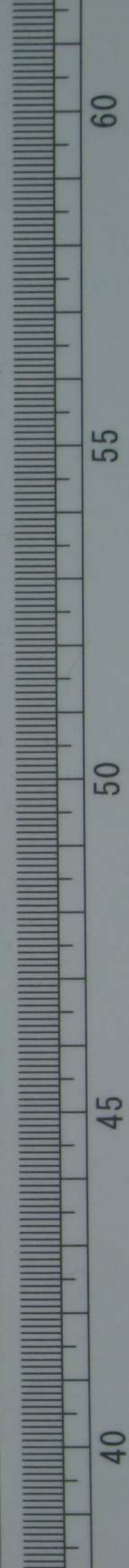


市島春城著

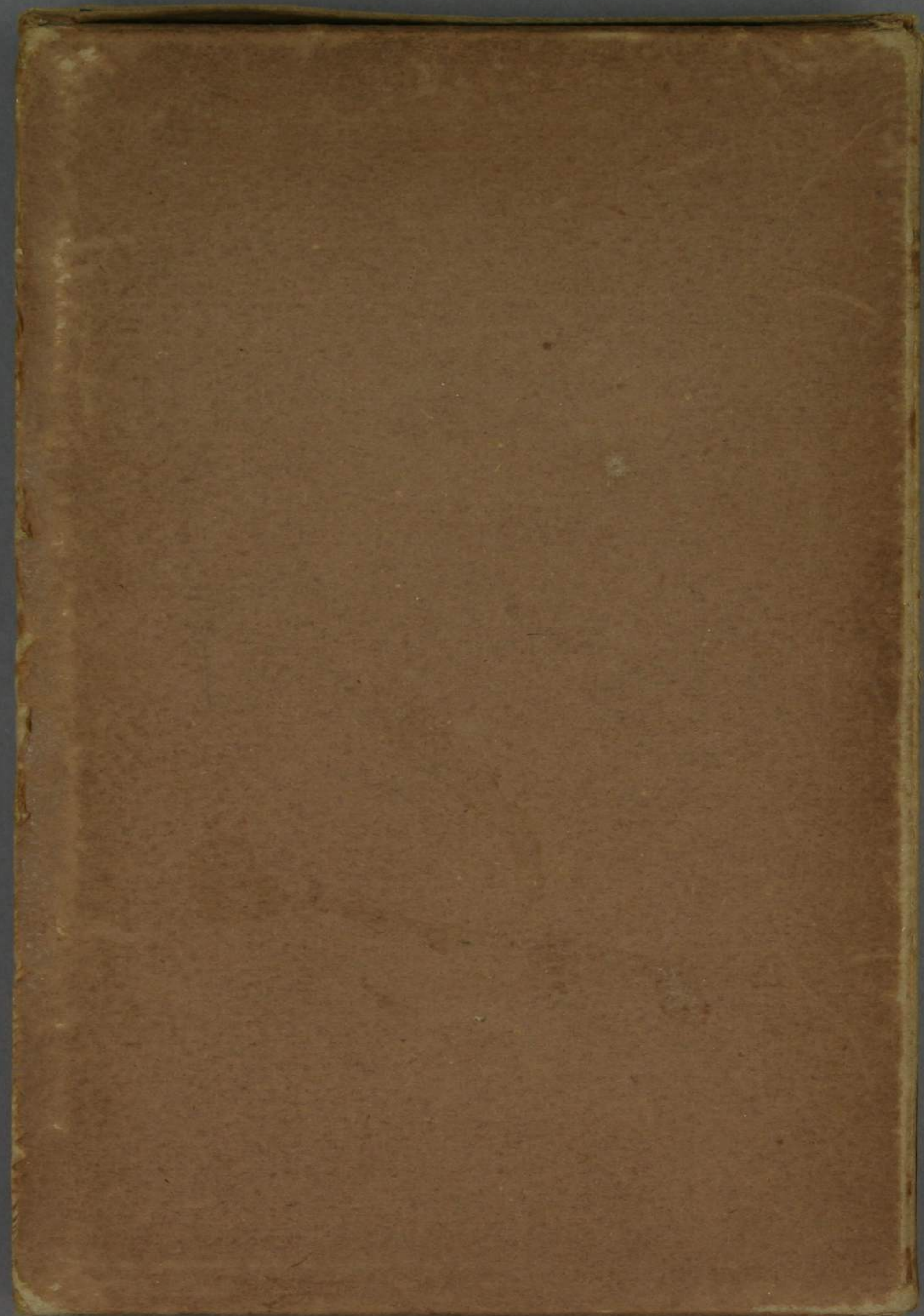
古今詩集

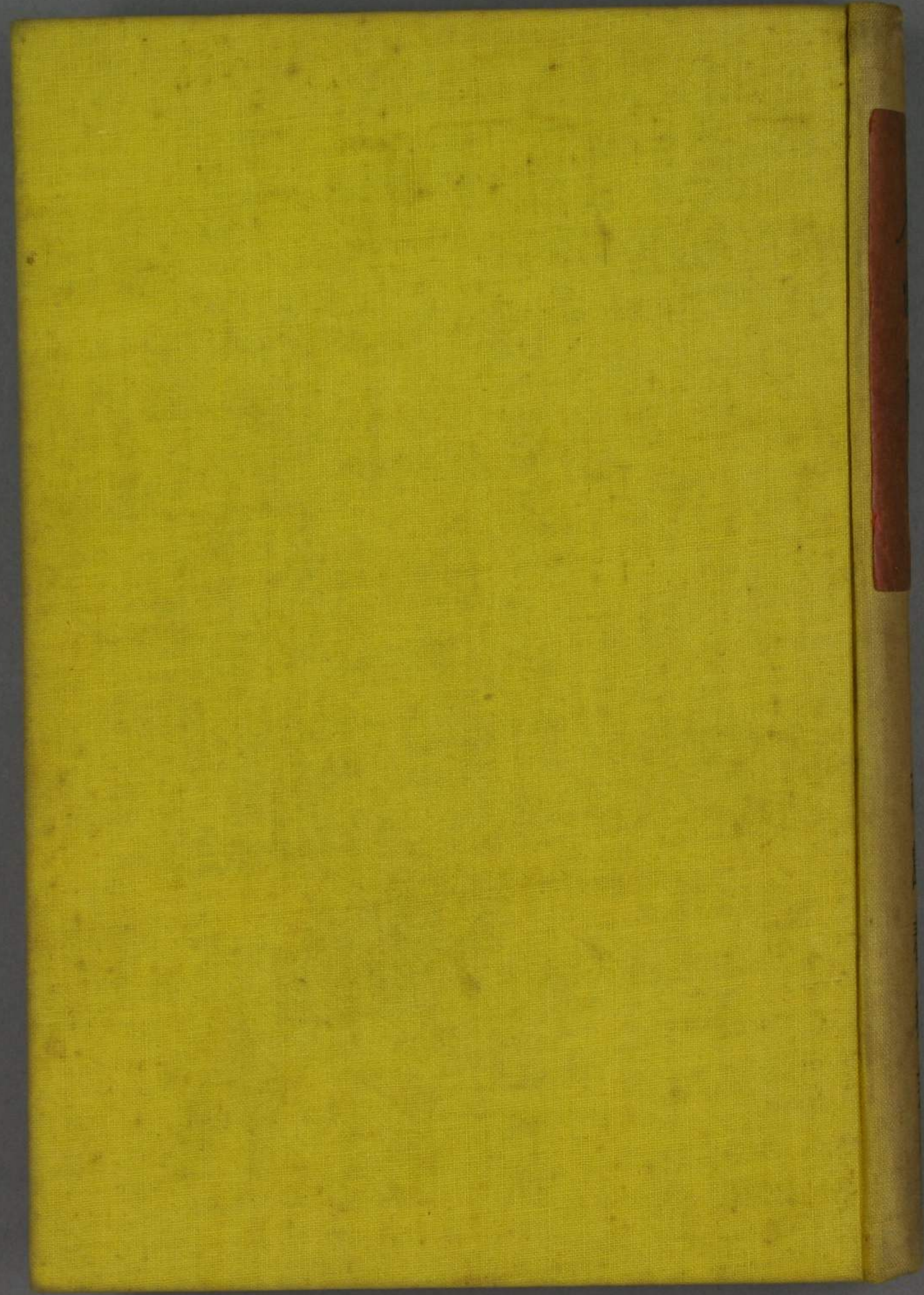
早稻田大學出版部發行



春城隨筆

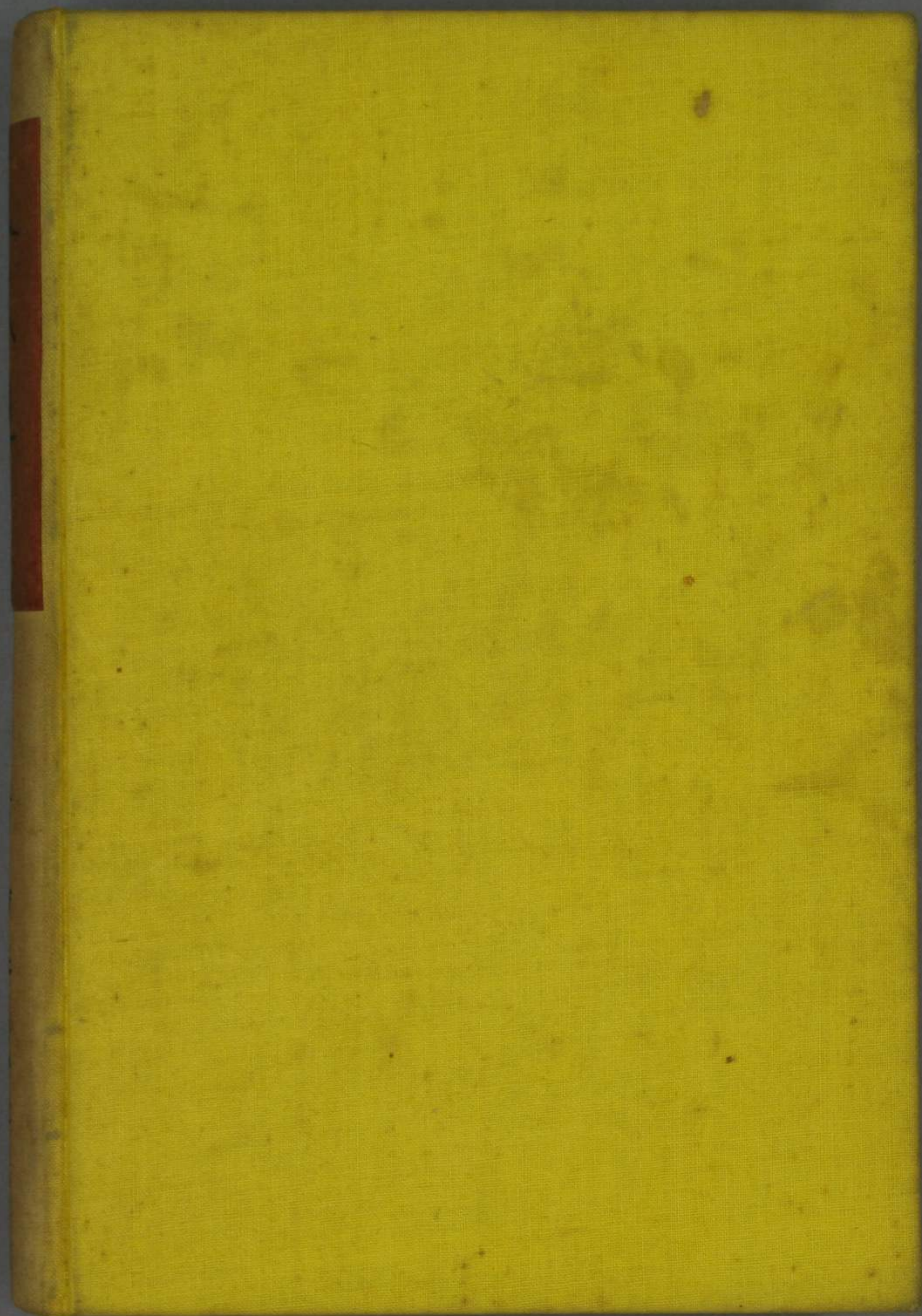
市島春城著





春城隨筆

市島春城著





古今詩萃

古今詩萃

はしがき

私は青年の頃から見聞を筆録しておく癖があつたが、それがいつしか習慣となつて、追々深く深く事物に興味を覚えるやうになつては、益々此の癖が募り、日々閑さへあれば筆録を事とした。時間の浪費に類すると思つたことも度々あつたが、午睡の代りと思へば、それほど時間強ち惜むべきでもない、と理窟をつけて、四十年を経た今も尙ほ同じ習慣を持続してゐる。ことし八月の初めに暑熱を忘れる一法として、豫て手當り次第に書留めておいたものを整理し、一種の隨筆を編纂して見て

はと思ひ立ち、多年の雜錄集を取り出して、暇に任せて取り調べて見ると、無論雜駁なものではあるが、採るべきものが無いでもない。そこで日課として書き抜いたり切り抜いたり書き足したりして、およそ二巻の書として出版し得る程の稿を得た。これが爲め約四十日間、毎日五六時間没頭したので、さまで苦熱を覺えないで盛夏を過すことを得た。

採り入れた材料の内には、人傳ひとづてに聞いたことや、古今の書を讀んで抄録したものや、折に觸れてふと感じたことなどが少なくない。人傳に聞いたことなどには誤りがあるかも知れず、書物で讀んだことも原文を其儘に引かないで要略を書いたのもあ

り、又書名を逸したのもある。何分一時の感興で心覺えに録したに過ぎないものから採つたのであるから、不備と心付きながら、それを一々補正することの出来ぬのを遺憾とする。

文體は成るべく統一につとめたが、他人に筆録せしめて雑誌や新聞に出したものの内には、十分手入が届きかね、多少統一を闕いてゐるものもあらう。特に斷つておくことは、「酒趣百則」と「水百態」の二篇だけは口語體でなく漢文崩しとなつてゐる。これは漢文崩しの方がよいやうに思つて、わざと統一を破つたのである。

今度出版の分は「春城隨筆」と名づけた。數月の後別な書名で

更に一冊發行する豫定である。「春城隨筆」には「雅俗相半録」と「趣味談叢」の二篇が互ひに其の一半を占め、篇名は異なれども共に趣味に屬するものである。但し私の趣味とする所が果して世間に趣味として受取らるゝや否や疑問だが、曩に「隨筆賴山陽」を公けにした時と同様の勇氣を鼓して是非を世に問はうとするのである。若し多く趣味上の同感者を博し得たなら本懐の至りである。尙ほ巻中の誤謬に就ては、謹んで博雅の指摘叱正を冀ふ。

大正十五年十一月

春城識

春城隨筆目次

雅俗相半録

一	帝皇文學の偉觀	一
二	櫻	七
三	松の風趣	一〇
四	戯號	一七
五	羽二重すれ木綿すれ	二四
六	一鳳齋國廣	二六
七	肉食僧雲華	二六
八	火振	三〇
目次		一

九 豪商の盛衰……………三二

一〇 神屋宗湛と豊太閤……………三七

一一 奇人好田礪溪……………四〇

一二 魚骨の貸借……………四二

一三 榮螺を撫でる……………四五

一四 蕪村と狸……………四六

一五 同巧異曲……………四八

一六 木曾の運材……………五〇

一七 所謂る名所舊蹟……………五二

一八 原始の活字……………五五

一九 先斗町の名の由來……………五七

二〇 學者の評判記……………五九

二一 元祿義舉の隠れた後援者……………六六

二二 昔の新しい女……………七〇

二三 若木の下では笠をぬけ……………七一

二四 昔の醫者の禁裏拜診……………七二

二五 伊達家の法帖の由來……………七四

二六 節用集の功德……………七七

二七 華山の俳畫論……………八一

二八 銚子に残れる華山の戲畫……………八二

二九 婦人の決闘……………八四

三〇 舞臺装置の變遷……………八八

三一 江川坦庵の家……………九一

三二 茶山鵬齋邂逅談……………九六

三三 不思議の菌……………九九

三四 草雙紙……………一〇〇

三五 木版と其材料……………一〇七

三六 麝香のはなし……………一〇九

三七 支那の觴政……………一一二

三八 中江杜徴……………一一五

三九 森槐南の俗歌……………一二八

四〇 麥酒の原料……………一三〇

四一 才人尾崎紅葉……………一三一

四二 江戸兒趣味……………一三四

四三 掬摸の著述……………一三五

四四 實寫の明文……………一三七

四五 近松門左の識見……………一三八

四六 頼山陽の逸事……………一三〇

四七 西國立志編の脚本……………一三二

四八 自然を愛する國民……………一三四

四九 紅皿缺皿……………一三六

五〇 小泉八雲と民謡……………一三八

五一 金貸し東叡山……………一四二

五二 石燈籠を墓に充つ……………一四五

五三 木米墓の洋行……………一四七

五四 銅人……………一四八

五五 大名の和蘭趣味……………一五一

五六 名人紋十郎……………一五五

五七 河内山宗俊の事……………一五七

五八 花のローマンス……………一五九

五九 昔の園遊會……………一六四

六〇 夜鷹蕎麥……………一六五

六一 靈鳥フニックス……………一六六

六二 家康の鑛山政策……………一六八

六三 人間の四大質……………一七〇

六四 支那人の淨瑠璃……………一七五

六五 鬘のいろ／＼……………一七七

六六 過渡時代の醫說……………一七九

六七 閑却されたる大火……………一八一

六八 名醫の機智……………一八二

六九 偽書恭夏堂集……………一八四

七〇 吉益東洞起身の事……………一八七

七一 登山畫興……………一九〇

七二 絲脈の起原……………一九二

七三 俳諧師氣質……………一九三

七四 隠れた藏書家……………一九六

七五 切支丹に因める珍話……………一九九

七六 蘭は色を好む……………二〇一

七七 緋縮緬……………二〇三

七八 避妊藥……………二〇四

七九 戀に上下なし……………二〇五

八〇 大名の本草道樂……………二〇六

八一 百鬼夜譚……………二〇八

八二 記念木材……………二〇九

八三 書物を祕した時代……………二一一

八四 藏書印小話……………二一三

八五 錦繪の彫師と刷師……………二一五

八六 版木藝術の行末……………二一六

八七 寶玉と犯罪……………二二八

八八 鷹の飼料徴發……………二二八

八九 植字難……………二二六

九〇 熊膽研究……………二三八

九一 メートル法の實施……………二二九

九二 不昧公の畫像……………二二〇

九三 名匠如泥……………二二一

九四 早稻田―茗荷―槳特……………二二五

九五 膝栗毛に序す……………二二七

九六 石 墨……………二四〇

九七 逍遙博士の詠志……………二四一

九八 佛蘭西の俳句……………二四四

九九 排佛毀釋……………二四六

一〇〇 碑 厄……………二五〇

一〇一 杏林内省錄……………二五一

一〇二 大槻磐水記念會……………二六〇

一〇三 緣切寺……………二六二

一〇四 光琳研究……………二七〇

一〇五 質作家西村兼文……………二七三

一〇六 詩仙堂と養石山莊……………二七六

一〇七 能樂界の椿事……………二七九

一〇八 釣の文學……………二八三

一〇九 伊東に遊びて……………二八八

一一〇 池永道雲の家……………二九一

趣味談叢

一 寺は趣味の淵藪……………二九三

二 茶人の趣味教育……………二九八

はしがき……………二九八

茶の趣味……………二九九

茶儀と禮法……………三〇一

鑑賞と鑑識の養成……………三〇五

配合の趣味……………三〇七

應用の趣味……………三〇九

反故趣味……………三一一

物を大切にすゝる風尙……………三二三

奥義は趣味の極致……………三二七

工藝美術と茶人……………三三〇

終結……………三三三

三 反故趣味……………三三六

四 書簡の六趣味……………三五六

五 書簡蒐集から得た三十則……………三七五

六 日誌の趣味……………三八五

七 圖書趣味一斑……………四〇一

八 古書あざりと圖書館生活……………四一一

九 豆本蒐集談……………四一四

一〇 百筆の蒐集……………四三三

一一 印の趣味……………四四〇

1 金石趣味……………四四四

2 書畫趣味……………四四六

3 文學趣味……………四四九

4 工藝趣味……………四五〇

5	骨董趣味	四五三
二三	書齋六面觀	四五四
1	家の要部	四五八
2	祕密の室	四九八
3	家の寶庫	四五九
4	趣味の場所	四六〇
5	築源地	四六一
6	構造如何	四六一
一三	酒趣百則	四・五
一四	水百態	五〇四

春城隨筆

市島春城 著

雅俗相半錄

一 帝皇文學の偉觀

前年御即位大典の折、京都の圖書館で歴代御宸翰の陳列があつて、私はそれを拜觀した。歴代御宸翰の審査は従前から行はれてゐたが、果々しく進まなかつた、それが、あの時は十分の審査を遂げ、各宮家は勿論各寺社及び私人の所藏にも及び、數ヶ月を費した。其の年代は後白河帝より始まり、孝明天皇まで五十一代に及び、蒐集した點數は五百六十九に達した。之れを

所藏者別にすると、七十九寺、七社、十四個人となる。勿論御宸翰の数は京都丈で二千餘點に上ると云ふが、審査委員は先づ五百六十九點を選び、更らに其内から粹を抜き、二百餘點を特に陳列したのである。

此陳列された歴代の御宸翰の概要を云ふと、一帝一通に止まるものあり、或は數通に及ぶものあり、更らに仔細に見ると、書もあり畫もあり、色紙、短冊、懷紙、經文、書冊など様々であつて、漢文もあれば和文もあり、詩歌俳諧もあれば、御筆の圖書の内には宸記、御製集、御撰書、勅序、御遺誡等、殆んどあらゆる方面の文書が網羅されてあつた。各御宸翰を對照して見れば一長一短はあるに相違ないが、概して名筆と謂ふを憚らぬ、殊に一種崇高の氣韻がどの御筆にも溢れてゐるのは、全く帝皇文學の特徴で、他に見ることの出来ない偉觀である。私は深く感じた、日本の文學で世界に誇るべき者は敢て少なくないが、吾帝皇文學も亦た世界に誇るべきものであると。

此の陳列は眞に空前の偉觀であつた、當時拜觀の折、私が心覺えに書いたものもあるが、それは繁雜にわたるから爰に略するとして、二三の餘談を掲げる。私は第一これほど立派なもの

の多いのに、何故これが國寶とされないものであらうと疑つた。實は國寶と指定されたものは二百餘點の内僅かに二點しか無かつた。此の私の疑は直ちに解くことが出來た。實は御宸翰の調査はこれ迄忽諸に附されてゐて、今度初めて國寶と指定し得べき多くのものが現はれたので、この陳列を機として國寶に指定されるのだと委員の語るのを諒解した。尙ほ委員から西本願寺が尤も多數の御宸翰の所藏者であり、現に二百通以上も藏してゐると聞き、それが何故であらうと考へた。委員の語る所に據ると、西本願寺の寺規として末寺に藏する御宸翰は皆な本山へ引上げることになつてゐるので、斯く澤山にある譯が知れた。尙ほ御宸翰には贋物が無いか否やを糺して見たが、矢張可なりにあつて、此の調査にもいろ／＼發見され、金時繪の箱に二重三重に襲藏されてゐるものにも贋物があつたと聞いた。併し割合に御宸翰は失せてゐぬ、その譯は他の書畫の如く、たやすく賣りかねるのみならず、書畫畑では某々天皇の御宸翰に限り、高い相場があるが、他には一定の相場も無い爲めに、却つて無事なるを得たのであらう。尙ほ不思議に思はれる一事は、幕末に御在位の孝明天皇の御宸翰の至つて少ないことである。一番新しい皇上的御筆は尤も多かるべきに、却つて少ない譯は、當時勤王家が全國に蜂起して討幕を

高唱した爲め、幕府は皇上の御動靜に對し猜忌の目を注ぎ、探偵警戒最も嚴密であつたので、陛下もいたく宸襟を惱まされ、近侍も深く警戒して、陛下の宸翰を所持するものは幕府の嫌疑をおそれて直ちに之れを焼き棄てたのだ。現に日野西侍従の直話に、御宸翰が下ると、他の見咎めんことを恐れ、入浴に託して浴槽中に拜讀し、直ちに風呂の鐵砲に投じて焼棄てるを例としたとある。輸札の類でなく徒然つれづれに物せられた詩歌などでも何等かの寓意ありと疑はれることを危ぶみ、あたら寶を皆な灰燼に附したのは誠に惜しむべきことで、此の大陳列に孝明天皇の御筆は僅かに東西兩本願寺に遣はされた和歌二幅が出たに過ぎなかつた。之れに徴しても幕末時の情勢が察せられるではないか。

尙ほ餘談として語るべきものが他に今一つある。それは此の御宸翰の調査の手がこれまで嘗つて觸れることの出来なかつた所にまで及んだことである。京都には皇族の御系統の内親王方を住職としてゐる尼寺が、幾寺もある。勿論男子の出入を嚴禁してゐる所だ。それにまで調査の手を延ばしたのは此際が始めである。申すまでもなく、維新前は皇族方の御降嫁は幾んど無く、皇族方同士で御婚儀あるのを通例とした、さるが故に工合よく配偶があれば可よし、さもない。

いと終生獨身生活の身となられる皇女もあつた。随つて右様の皇女方で俗縁を絶ち尼寺に入られたのも多かつた。中には種々の事情で生れながら尼寺に入られた方もあつた、そのために此等の寺は多く内親王を住職として、今でも十數ヶ寺あるが、皆な男子の出入を嚴に禁じてゐる。

扱て審査委員等が此等尼寺を訪問した模様を承るに、寺内素より男氣は更らに無く、例として一人の老尼が出て應接する。之れは一寺の事務を司どり、外事の交渉にも任じ、一見識ありて儼然たる態度を以つて居る、そして住職の尼君には滅多に外來者を引合はさぬことになつてゐる。併しあの際の御宸翰調べは、他の場合と異つて、歴代の天子に關係のある事なので、其の意を通じ、格別の御沙汰として高貴の尼君に拜謁を許されたと承る。

尼君の御平生はと伺ふに、絶対に外界と交通を絶ち、寺内に垂れ籠めてあらせられる結果、どの方も多くは中性の御資質に御見受け申され、小兒の玩具などを床に飾り置かれた向もあつて、無邪氣な御様子をお見しては、どこまでも天真の生活を送つて居られることが推せられ、神々しいまでに氣品が高く、委員等に對しても案外氣輕に御應對があつて、日常の御起居も至つ

て平和にお見受け申した、と委員の或る友人は語つた。長田幹彦氏の何かの作に、京都の尼寺に行つて超人的な崇高な女性の姿を拜せんとしたが、色の白い艶々しい顔で、性慾の氣が何處やらにほの見えて居るのに、いたく失望したと書いてゐるが、氏は恐らく生れながらの尼君をば拜し得なかつたのであらう。年長じて失戀の不幸に遇ひ、又は所天に別れて世をはかなみ、尼寺に入つた婦人には、流石に浮世を忘じかね、忍ぶれど情念の色に現はる、も亦た人情ではあるまいか。

此等尼君達は世捨人であらせらる、からに、日々消閑の業としては讀書學問書畫和歌などの外はなく、文藝が殆んど其の全部の生活であるから、書畫和歌には殊に堪能の方が多く、其の道の専門家をして後へに瞠若たらしめるものがあるといふ。浮華俗をなす今時の社會にあつては、此の一方面は眞に別天地で、尼君達の清く行ひ澄ましてゐらる、生活振は如何にも珍とすべきである。

二 櫻

櫻が日本の名花と呼ばれ、あらゆる花の代表の如く考へられたのは久しいことであるが、如何なる意味で名花であり、何故に日本の代表的の花であるかに就いては餘り適切な事が言はれて居ないやうである。之に就いて或る特殊の研究家から聞いた話によると、第一櫻は絶対に他の國に無い。ヒマラヤあたりに櫻の木があるとの説もあるけれども、其の研究家の調べた所に依ると、其れは日本の櫻とは違ふというてをる。支那は隣國で、現に櫻といふ字は支那から來て居るのだが、是れ亦た無論日本の櫻とは違ふ。さう云ふ譯で、古來色々の木が日本へ輸入され、其等の木は大抵諸國共通のものだが、此の櫻に限つて日本のと等しいものは他に絶えて無い。勿論近來になつて之れが外國へ移された例の無い譯では無い。米國あたりでは或る木に日本の櫻を接ぐことが行はれ、同じ花を發ひらくが、其れは全く日本より移した結果に外ならぬ。斯様に日本以外に無いといふのが此木の第一の特長であつて、それがやがて日本代表といふこと

になるのである。又大抵の木は盆栽になし得るものであるが、櫻に限つてどうしても盆栽に仕立てることが出来ぬ。無理に小さな木を盆栽にして見ても、僅か一年位保つ丈けで決して盆栽として育たぬと云はれて居る。此等の事を考へると櫻の性は極めて牢落不羈で、窮屈な天地に踞踏するを好まぬことが分る。さうして之れが又日本の國民性を現はして居るともいふことが出来る。又多くの木は伐れば勢の附いて來るのが例で、伐るといふことが一種興奮的の働きをなすものであるが、櫻に於ては伐ることは絶対に禁物である。諺にも梅は伐らぬが馬鹿、櫻は伐るが馬鹿と迄言はれて居る。昔し武士道の盛んな時分に櫻を以て武士にたとへた、其れは他の意味でたとへたのだが、伐られることを好まぬといふことも、又武士を代表して居るものと云へるであらう。又櫻が或る期節に至ると一時に花が咲いて、僅か三日も経たぬうちに惜氣も無く散つてしまふ、其の執着の無い、如何にも淡泊である處は、江戸ツ子の宵越の錢を使はぬといふ肌合にも似て居る。所謂宵越の錢を使はぬといふ如き浪費の風はあまり褒めた話では無いが、日本の國民性には何處かにさういふ淡泊な處のあるのを疑ふことが出来ぬ。凡そ此等の特長はあらゆる樹木のうち獨り櫻の持つ所であつて、若し櫻が日本の名花であり、且つ日本の

國民性を代表して居るものとすれば、それは此等の特長あるが爲めに外ならぬ。

猶ほ附加へていふべきは、櫻樹が日本の文化に非常な貢獻をしたことである。前にも言つた通り櫻は他の如何なる國にも無いのであるが、其の木は版刻の材料として最も適し、久しい間日本の書物を刊行するに用ゐられた。それは櫻の木ほど版を彫るに工合のいいものは無いからである。此の木には木理や繊維が殆んど無い結果として、刀を縦に下さうと、横に下さうと、少しも歪みが無い。さうして木の質は柔か過ぎもせず、又硬くも無い。斯様な條件は版刻に最も大切であるが、それを具備して居るものは櫻の外には無いので、古來文字を刻するに必ず櫻の板を選んだ。別して畫を刻するにはどうしても櫻で無くてはならぬとされた。例へば美人畫の如き、彫つてフツクリした味を出すには、此の木で無くては叶はぬ。浮世繪の版刻の發達した一つの原因は幸にして斯様な板が日本にあつたお蔭とも云ひ得る。日本に古く使はれた版が維新以來盛に支那へ持行かれたといふことも、畢竟支那にはかゝる良材が無い爲め、日本で使つた古版を磨り潰して更に之を彫刻の材料に用ゐる爲めに外ならぬ。古來櫻樹が文字の爲め又は繪畫の爲めに如何に多く伐られたか、實に莫大なものと思はれるが、併し其の木の多く伐ら

れたことが取りも直さず日本の文化に多く貢献したことになる。此の意味からいふと、此の木は日本の文化の爲めに日本に限つて産出された一種の文化木ともいふべきもので、其の點から見ても櫻は日本に頗る大切な關係を持つものと謂はねばならぬ。

三 松の風趣

我國の風景畫には松が附き物である。是は我國風景の特色が松の木にあるからで、廣重の東海道五十三次の圖などは、松の添はぬのは唯だ三枚丈けである。そして松を主として描いたのが殊に好い景色に見られる。

我々は餘りに松の風致に見馴れて特に夫れと氣が附かぬ様なもの、外來人に對して日本の風景を説いたり、又は日本の樹木中一番風致に富んで居る者を舉げる場合には第一に松の木を數へなくてはならぬ。若し我國から松の木を奪ひ去つたなら、世界に誇るべき此の蓬萊島の景勝も半は其の光彩を失うであらう。外人觀光客が我國風景の第一に目に付くものは松の木であ

るといふも當然であらう。

松が我國の風致景色に第一位を占めて居る證據には、之れを人工の庭園に見て、誰人も第一の飾り木として松を植ゑる、即ち我國風景の理想には松の木が尊位を占めて居るのである。之れは日頃松の木の風景を多分に見て其の美しさに憧がれて居るから之れを直ちに我が庭に取入れようとするのである。

之れを我國の三景に見るも、其の二つは松の木の景色である。橋立ての景は、白沙の洲に翠滴る青松を連ねて出來た鮮明な風景であるし、松島の如きは、松其物から出來た景色である。昨今の様に松島から鹽釜へ小蒸氣一時間の素通り見物では一向妙味もないが、和船の櫓を押して八百八島廻りをして見ると、其の島々が皆な浮いて動く様に見える處は、確かに無類の景色である。其他三保の松原、舞子の濱、熱海の錦が浦、博多の公園など、皆な松の景色である。

元來日本の景色は海岸に多い、そして海岸に育つ木は松に限る。四方海を環らして、白沙の長汀や、奇巖の曲浦から成る海岸線に、松が裾を端折つた形に身をくねらして居る姿態は世界に類のない景色であらう。花は櫻ならば、木は松であらう。日本男子を櫻花にばかり譬へるは

能がない、之を松に譬へる事も、其の節操の點に於て意味深いことであるし、日本一の名木を人格化する上に於て絶好な例であらう。

松の木の軀幹姿勢は剛健勇武で、曲りくねつて居ながらも更らに軟弱の態がない。其の枝ぶりに婉媚な處があるに拘らず、毫も浮華輕薄の處がなく、隆々として立つた幹が、頗る武張つた趣ではあるが、併し他の木の幹には見られぬ特色がある、そして其の葉は針の如く堅く、其の深緑の色は畫筆で之を寫すに苦む深みがある。凡そ草木の葉で松の葉程に翠色濃厚なものはない、恐らく西洋繪具を以てしても、其の生氣溢る、如き深緑を寫す事を難んずるであらう。そして其の風を受けて颯々たる松籟を起す趣に至つては、正さに高士塵寰の外に超脱するの風がある。

嘗に庭園や、名を取つた景勝地に限らず、我國には到る處に松の木がある。全國を飾るものは第一に松の木である。海に山に、松の木を見ない處はない。又道路の並木松、堤防上の松、懸崖絶壁の松、城壁の松、寺院の松、何れも松の木で風致を爲して居る。庭園の如き、他に如何なる名木が有つても松の木がないと、本尊がなく心が無い。庭園には、松が中心となつて權

威を添へるのである。但し庭園の松はひどく手入れを要するので、松を道樂息子に譬へるのは、其の手入れ費用を多く要するからである。かく費用を掛けて迄も松を植ゑて之れを賞つるといふのは、松が夫れ程に立流な木で風致上缺くべからざるものであるからだ。

又城壁に松を植ゑることは、其の濠の水に倒映して壯麗の趣を添へ、殺伐な城壘其物を風流な光景で軟らけ、其の松の木の間から三層の高槽を遙かに眺める處に無類の雄大な感じを起させる。

幾百年の老松亭々として高く聳え、或は蒼龍斷礎の水面に偃して封建時代の面影を偲ばしめる處は國民の美感と懷古趣味に資するところ多大である。江戸城を始め、各地の城址の松樹年古りて、或は公園と化し或は個人邸宅の一部となり、能く三百年の昔を語つて居る。城址朽ち石壘崩れて形を成さぬ處にも、唯だ堤上の松のみは、翠益濃くして城の經歷を語りかごとく見える。白河の古關址の如きは今も石壘の一角僅かに存して清流に臨み、其の上に葛蔓がからんだ老松を飾る處は、嘗て風流を解せぬ俗惡な旅客も、尙ほ秋風ぞ吹くと詠じた昔人の詩境に化する事が出来よう。

又地方へ行くと、大邸宅の周囲を飾るものは多く松の木で、そこでは都會の様な烟塵を受けないから、老松益々榮えて葉の光澤も一段と美しい。田舎の舊家などは、白堊の土蔵の傍らに枝ぶりの好い松が鬱として屋敷を圍んでゐる光景は、如何にも其の宅に堂々たる趣を添へる。又田甫の間に一むら、こんもりとした杜が望まれる處は鎮守の祠である、其の杜も多くは松であつて、松籟靜かに神樂を奏でてゐる。

又寺院の掃き清められた閑寂な庭に松樹の枝が地に這つて長蛇をくねらして居るのが、禪味豊かに見られる、殊に寺の前面の空地には老松鬱蒼と茂つて居るのが多い。芝三縁山の門前などは見事な松林で、以前は今より十倍も風致があつて、松の木の下に縁臺が並べられ茶店が開かれ俗地の間に閑寂な趣味掬すべきものがあつた。上野公園の松も次第に煤烟の爲めに減ぼされ行くは惜むべきであるが、猶ほ隨處に櫻や楓と交つて巨人の如く老幹をくねらして居る處、二百年の生き歴史を語る。

又鎌倉に遊ぶと、八幡社頭の立派な松並木、由井が濱邊の松林など、荒い海風にもまれて梳つた頭髮の様になびいて居る形が蒼古たる覇府の面影に一段の風致を添へて居る。建長寺、圓

覺寺も松で風致が保たれて居る。

又東京横濱の山の手で綠樹の重陰四隣を蔽ふと言つた松林で圍まれた洋館の奥から、洋々たる樂音の洩れるなどは奥床しい。或は船板塀に見越しの松などいふ數寄な下町情調も松でなくてはならぬ趣であらう。

山路を旅する折り、老松の根に腰かけて涼風を納れ、仰いで其の苔蒸した枝ぶりを眺めると、之れを里に移したらと、勿體ない程の氣がする。或は廢寺無住の庵を飾る松、又は驛路の端に茶を賣る媪の貧しい茅屋を飾る松などには、捨てがたい枝ぶりが多いものである。

更らに松で名を取つた勝地でなくとも老松の點綴に依つて始めて景色を活かして居る處が少なくない。嵐山の紅葉も、月の瀬の梅溪も、熱海の梅園も、あの間に松を交へなかつたら、景色が單調になり色の配合が調はないであらう。其他裾野の小松原、用水地の周邊を飾る松林などは、海岸のくねり松に對して之れは若々しい素直な女松で、山には山にふさはしい松の姿がある。殊にも蕎麥の花が雪のやうに咲いて居る傍に、こんもり茸狩り場所の小松林が続いて居る光景は、平和な田園の趣味を漂はして居る。又東北地方の高山の頂は、偃松はむまつで蔽はれ、其

の枝が冬期半ヶ年近くも雪に壓されて、其の軟かい葉が地上一尺二尺の高さに全山松葉の絨緞を布き詰めた形である。お山參詣者は、各自其の一枝を腰の瓢箪にくくり付けて歸るなどは、燒山の富士登山者には思ひ付かぬ情趣であらう。

斯ういふ風に、松は其の土地と風景に能く釣り合つた種類が育つて行く處に、一層の妙がある。白沙の海岸には青松があつて海水と緑を競ひ、山中や高原には女松の小松原が點々連つて野趣を添へる。之れを海岸の松に見ると、夫れは白沙を本宅とし、巖石を別莊として其の地の風景を助ける爲め生え出でたもの、様である。海水白沙を洗ひ、松は根元の土砂を失ひ其の根を露はしながら猶ほ毅然として立つて居る。海風は松を虐けて其の姿態を屈曲させ、其處に却つて艱難汝を玉にする枝ぶりの妙味が生れるのである。

更に又光悅寺には光悅の常に好んで蒔繪の下繪にした様な松があり、熱海の梅園には光琳の得意として描く松がある。廣重の描く松は峻はしい海岸の岩上に生えて、下に紺碧の海水白い泡を吹き上げるのと相映する種類のものが多い。南宗の松も北宗の松も流派の範となる松は到處にある。

松は陽性で、磽角なる沙地をも厭はず、又熱烈灼くが如き日光にも怯けず、雪中に在つて愈々青々たり、其の葉は常緑にして四季落ちない。其の狀男性的で、百難に堪へる氣魄があり、風雪を凌ぎ害蟲に負けず、能く勝利を占めて居る。近時は松葉の精、松の實と其の特效を稱へられ仙藥と崇められて居る。世界中、我國程に松の木が多く、白沙青松の好風景に富んだ國もないのである。白扇倒まに懸かる富嶽の麗姿も三保の松原がなくては淋しからう。

四 戲 號

名のつけ方によつて物を美化することが多いが、しかしおもしろい名や號を案することはたやすくはない。流石に詩人や歌人はこんなことにかけると才がある。茶器などに付いてゐる名は多く古歌から來てゐるが、それが婉曲であつて露骨でないから奥床しく感ずる。俗な名を風流化したり、眞面目らしい名に滑稽味を寓して、其名の由來を聞き人を噴飯せしめるなどは皆な才の働きである。巖谷一六が其別號を吞澤山人と云つたり喩霞と云つたが、一六は休暇で休暇

を俗にドンタクと云つたから此號がある。又古梅とも號した、則ち駒井小路に住したから、似寄りの音を取つたのである。一六が平河町にゐた頃、目下部鳴鶴や岡本黄石や杉聽雨なども同町内にゐた。互ひに往來して時に詩會を催したが、一六は其會に同調會とつけた。これには詩の意味もあるが同町の意もあつておもしろい。森槐南の印に「青山南麓百二精舎」と刻したものがあつた。槐南は青山南町六丁目に住してゐたので青山南麓の語があり、百二十番地といふので百二精舎の語が起つた。精舎は多く山の麓にある所から思ひつき、青山南麓に對應せしめた所に妙がある。森春濤が新潟に遊んだ時、當時花柳の地であつた古町の俗を厭ひ、或ものが何か雅名はあるまいかといふと、春濤は直ちに「風流萬千」といふがよからうと云つた。春濤が新潟に滞在中、鈴木柳塘といふ畫家が翁に雅名を請うた。翁は生面の人に如何なる名字が適するか分らぬので、困つたが辭する譯にも行かず、先づ通稱を問ふと、柳塘の云ふには「通稱は苦作ですが餘りトボケ過ぎてお恥かしい」翁之れを聞いて「ナニ苦作ソリヤ面白い、仁とか義とかいふと人も用ゐるから同名の者がイクラも出来る、名は苦字は子編が善からう、ナニ出處か、その出處は天智天皇の歌にある、秋の田のかり穂の庵の苦をあらみ、あらみはあみで、らの字

は助辭だと云ふ説もある、(恐くは春濤一家の説ならむ) 號を秋田とするも更に妙だ、イヤかり穂の庵だな、穂庵が面白い、君は定まつた號があるから穂庵は別號にしたら善からう」といふて柳塘を喜ばせた。

東京で誰れも知る菓子屋の風月堂は白河樂翁公が命じた名と聞いてゐる。東坡の赤壁の賦に風清く月白しといふ語から、風月の二字を堂號として、あの家の主人に清白の二字を名として與へた、菓子屋にはふさはしい名である。新潟では火葬場を白雲郷といつてゐる、いつ頃つけたものか、これが固有名詞となつてゐる。成島柳北の書いたものに「鷺目郷」といふ名がある、初めは不審に思つたが、後に貧民窟の雅稱であることが知れた。都下の場末の較々橋其他の乞食町ではもと穴錢を貴び、穴の無い貨幣を忌んだものだ。といふのは、不景氣で錢の貰ひが無いと、一枚しか無い着物を七つ屋に入れねばならぬが、此の時は穴の無い貨幣が手に入る、彼等はこれを不幸の事として忌むのである、鷺目は即ち穴錢をいふのである。中島棕隱といふ才人が、ある酒屋に頼まれて茂竹庵といふ額を書いてやつた、これは「餅クワン」といふ隠語である。酒屋に隣つた餅屋が此額の譯を聞きこみ、吾が家業を侮辱するものだと怒つて、中島

に談判に及ぶと、中島はそんなに怒るなよ、お前にも書いてやると、莎鷄軒と書いて與へた。莎鷄軒は「酒イケン」と音相通じ、酒を排するの語である。

島村抱月が或る先輩の園遊會に抱月亭の扁額をみづから製して掲げた所、己れの名の額を掲げるは無禮だと或るものが咎めたら、島村はそれは自分の名ではない、「ダキツキテイ」と讀むのだと言つた。同じ様なことが京都にもある。或る花柳の旗亭に畫家の松年が書いてやつた額に花蓮亭といふがある。或る人は之れを見て花蓮では語をなさぬというたら、松年は「ハナレンテイ」と讀むのだというて笑はせた。同じ家の三階にやはり松年の書いた奇勝閣と云ふ額が掲げてある。花蓮亭の額を非難した同じ先生が、三階の額はよろしいと評したのを松年が聞いて、あなたは此の三字の意味がわかるかと云うた。評者は高い處で見晴らしがよいから奇勝の二字を案じたのではないかと答へたら、松年は笑つて、そんなシカツメラらしい意ではない、登り詰めれば起請かくといふではないかと云つた。およそ此類の文嬉は枚舉に遑ないほどある。

露西亞文學で聞こえた長谷川四迷は二葉亭四迷というたが、其譯を聞いて見ると、自分は幼少の頃不勉強で、毎度親から「クタバツテシメイ」と叱られたので、それを名としたと云うた。先

頃故人となつた内藤鳴雪の名も「成行き次第」の意を寓し、老梅居の號は狼狽の意を寓したものだ。昔しの文人にもこれに類したものが多し。六樹園は小傳馬町の旅籠屋である處から「飯盛」と云つた。馬馬は大工の棟梁であつた處から戲名を「野見のてう納言」と云つた。其他京傳が俗名を「傳藏」と呼び且つ其地が京橋であると云ふ處から京傳と名づけた事などは誰も知つて居る。續いて十返舎一九は何うかと云ふに、之れは幼名を重田幾五郎と云ひ即ち「幾」といふ處から一九と遣り、一と九と合せば十となるゆる十返舎と號したのである。又同じ時代の戀川春町は、本名は倉橋春平、松平阿波守の家來で、小石川の春日町に住んで居つたので、其の關係から、戀川は小石川、春町は春日町を略したものだ。尙ほ鷄を書く名人として聞こえた若冲の名は、若狹屋仲兵衛からつけたものだし、逸雲門下の村泉は商人で畫を書いた、商人だから、損をするを厭ふといふので、逸雲が此の名を命じた、村泉は「損セン」である。

西洋では、水力電氣を白石炭と名けて居るが、之れなどは却々趣味のある名だ。此名の由來を聞くに、十九世紀の中頃、佛蘭西のある方面で、非常に高い山から水を引き來つて、茲に初めて電力を起した。其の山から來る水は、氷河を経て流れ込んで來るといふ所から、氷に因ん

で白の字を冠らせたのだといふが、必ずしも氷河といふ事を念頭に置かずとも、元來水は白いものであり、水力電氣は石炭の代用をするものであるから、之れを呼んで白石炭といふは、頗る當を得て居るのみならず、自から雅趣もある。又此頃銀座のカフェーハウスに行つて、一の洋菓を喫した。それは長方形の、薄い菓子で、外面はチョコレートに包まれてある。之れを喫して見ると、中はアイスクリームであつて、一種の風味がある。併し自分の氣に入つたのは、エスキモーバイと名けてある所にある。僅にエスキモーの字を借り來つて、氷の意味を寓した所に趣がある。

茶人が茶器などに命じた名で趣味を感じるものは少なくないが、それは略してこゝに一例として香の銘を一つあげる。香に「瘦馬」と銘したものがあつた。これは匂ひが薄く、匂ひかぬるといふ所から命じたのだ、即ち「荷を負ひかぬる」といふ意である。また伽羅に「月」と銘したものがあつた。何處から聞いても同じ香りで、遠近ともに薫ずるといふを月に喩へたのである。攝州有馬の豪家石井與三兵衛と云ふが、赤桐で作られた白を珍藏して、之れを京都の堂上方へ相應の銘をと懇望した時に、「夏衣」と云ふ銘を與へた。其意味は「うすの木」即ち「うす

き」「薄き」から、夏衣に通はせたのである。古歌に「夏衣うすきながらに匂ふかや、昨日の花の名残なるらん」より出たものだ。

筆の序に尙ほ一二を挙げると、中江兆民が國會開設の年に一女を挙げたので、此の盛事を紀念する爲めに名を國會と命じた。或る者が女子の名にはふさはしからぬといふと、中江は笑つて「くにも」と呼ぶのだといふた。又亡友山田一郎氏が歿した時、法名を村上專精師に相談した。師は山田とは相識で無かつたけれども、かねて其人の言行を聞いてゐるからと承諾された。やがて撰んで呉れたのが「廣宣院正論居士」と云ふので、ひどく氣に食つた。廣宣の二字は山田が天下の記者といふ名を博した程に、あらゆる新聞に其の説を宣布した事にも當り、又あの人は政府の機關となるやうな事なく、思ふが儘に自己の説を述べる正論家で、且つ正は政に通じ、措字撰語の適切なる、殆んど幾十年間故人と交際して其の性行を知りぬいて付けた様にピツタリはまつた。此の語の典據は觀無量壽經に「廣宣道教」又「樂在正論」と云ふ處から來たのである。

五 羽二重すれ木綿すれ

杉田玄白は日本に於ける最初の蘭醫であるが、此人の隨筆を讀んで見ると、大體は専門の醫術に關したものだ、流石に老練な大家の筆に成るもの丈けあつて、往々面白く感ずる所がある。著者自身若い時の事など書いて居る中に、田中俊庵といふ醫者が、嘗てお前は此の江戸で醫者をやらうといふのならば心得の爲めにいうて置くが、羽二重擦れ、木綿擦れといふことに能く注意せねばならぬということがある。自分(玄白)はまだ少年時代のことで教へられた意味も能くは分らなかつたが、段々年を取つて實地の醫術に當つて見ると成程と感ずることが多い。此の羽二重擦れ、木綿擦れといふのは取りも直さず人間の位置、階級、並に身體の強弱を現はすものである。柔らかな羽二重を着てさへ皮膚の擦れる人は弱い人である。木綿を着て擦れるといふのは極めて貧乏の者には餘り無いことである。且つ木綿を着る程の人が皮膚に擦れを起すといふのは、やはり身體の弱い人であることを現はして居る。そこで醫者が醫案を立て

るに當つても、第一に其の人間の體質の強弱を念頭に置かねばならぬ。何の病には何の藥を盛るべしといふ如く其の方劑はきまつて居ても、極めて大切なことは其の藥の分量で、其の患者の身體の強弱に依りよく斟酌せねば、場合に依ると弱い藥が非常に強かつたりすることがある。そんな譯で、少年時代に一向理解もせず、へんな事をいふと笑つて居た事に大に味ひを感じて來たといふやうなことが書いてある。

成程其の通りであつて、一體今日は洋家の藥が日本に行はれて居るが、元來此の洋家の藥は西洋人の如き極めて體質の強健なものに當てはめての藥が多い。勿論其の藥の功能は凡べての人類に及ぶべきものであらうが、之を用ゐる分量の點に至つては大に考へなければならぬ。西洋人に與へると同様の分量を日本人にも與へることになると、藥に依つては随分危険の事も無いとは限らぬ。現に或る醫學の大家も^{いっちゃん}目外之れにつき同様の事を言つたことがあつて、敢て自分丈けの素人論ではない。又此の羽二重擦れ、木綿擦れといふは單に醫者の方面計りの問題で無く、人事の萬端について矢張り一種の金言である。人間を取扱ふ場合、人間を使ふ場合などには、此の羽二重擦れ、木綿擦れといふことに付いて慎重に考へなければならぬ場合が少なく

ない。

六一 鳳齋國廣

徳川時代の將軍或は各藩の諸侯の中に畫を學んだ人は少からずある、中には極めて上手の域に達して文人と云つてもよい人もあつた。しかし此等の畫は狩野、土佐に非ざれば文人畫風のものであつて、當時頗りに流行した市井の畫、即ち浮世繪を能くする諸侯があつたかどうかは疑問に屬して居た、といふのは此の浮世繪は今こそ國民的の畫だと云はれる迄に持て囃されて居るが、徳川時代に於ては士林が賞玩するを屑しとしなかつたものである、随つて諸侯の如きはかゝる畫を學んだり、畫いたりすることを憚つたものである。

所が調べてみると、矢張り諸侯の中に此の浮世繪に非常に堪能な人があつたことが分つてきた。それは近年歌川豊國百年の追善忌を行つた折の展覽會に、豊國初め其門人等の多くの作品の中に一諸侯の物した浮世繪が兩三點陳列されてあつた。一鳳齋國廣といふのが即ち其れで、

師の豊國の國の字を取つたものである。ところでこれは何處の大名であるかといふと、伊勢は龜山の城主で、石川日向守と云うた人だ。身は藩主であつたが、化政時代の風氣を潤澤に受けた人であると思へて、三代目の菊五郎に四つ輪の紋所を與へたり、又師たる豊國の爲めに年の字を丸くして紋の形にしたものを作つて其れを授けたりしたやうな通人で、公務の餘暇には好んで浮世繪風の美人や或は役者の似顔繪などを書いたりして獨り悦に入つた。其んな事からして豊國の娘のきんといふ者、是は後に一鳥齋國香女と云ふ女畫師になつたが、其者を師との關係から自邸に招き、傍らに置いて繪の具解きなどをさせ、又江戸へ移つた時は乳母附のまゝ、自邸に置いたといふ事である。さて右の展覽會に出た此人の畫を見るに、全く文人跣足といふ位のもので、美人の立姿を書いたものなどは殆んど師の豊國と見紛ふ許りの出来である。其の畫には左の如き贊がしてあつた。

似たか似ぬか何れをこれと白波の是や瀬川の間なるらん

七 肉食僧雲華

頼山陽莫逆の友人僧雲華は趣味の該博な人で、種々の骨董品を持つて居た中に、非常に珍重し、且つ誇りとして居たものが一つある。それは文治年間製の卓子で、きやうがしまでら經島寺の舊物である。その拵へ方がいかにも古雅で、何人も之れを見て垂涎しないものは無い。そこで山陽は長篇の詩を作つて其の器物を賞めた、へたが、山陽の師たる菅茶山が其の詩を見て戯れ半分に、それ程の名器を肉食坊主の手に落したのは遺憾であると云つた。蓋し雲華は真宗の僧であるから勿論肉食もし妻も持ち、妻さへも蓄へて居たので、暗に之れを諷したものである。所が雲華もさるもので、それを聞き笑つて一詩を茶山に寄せた。

鴻爪不論泥與雪。秋南春北跡稜々。從來詩句厭蔬筍。一任君呼肉食僧。

後に又山陽の友人であつた筱崎小竹が之れを聞いて、雲華の爲めに作つた長篇がある。是れ亦甚だ興あるものだ。

凡僧昏々皆歡粥。大含上人獨食肉。凡僧歡粥面目醜。上人食肉腸胃馥。飽向大衆說大乘。天爲雨花鬼欲哭。餘芳沸々溢指頭。亂爲蘭竹迸素幅。笑他高閑未嗜葷。卻爲韓愈所窘辱。上人所味是道腴。貪饕何曾役口腹。船子黃能勞釣鉤。北禪白牛剩皮角。安得唇蛤七八斗。供養上人恣大嚼。噓出無數人物與樓閣。

即ち友人肉食僧の爲めに氣焰を吐いたものである。此の中に蘭竹云々といへるは、雲華が特に蘭竹の畫に有名なりし事を指したもので、又蜃氣樓で終りを告げてゐるのは、此の上人蛤が大好物であつた事實を取込んだのだ。

雲華は洒脱な人で、頗る才氣に富んだ。ある時人が千利休の肖像を携へ來つて賛を乞うた、雲華は直ちに筆を取つて

釋迦は人を佛にし孔子は人を仁にす大膽なる哉利休は人を茶にすとやつた。

雲華ある時某と酒席に會した。某は儒教の釋教に優越せることを示す考へで、釋迦と孔子と角力を取つて釋迦が投出され、孔子は兩手を舉げて勝ち誇つて居る圖を作つて雲華に示した。

雲華は微笑して

孔子之を知らず釋迦絶倒して之を笑ふ
と事もなげに應じた。

八火振

今日こそ、電信電話が都鄙あまねく通じて、東京の物價を全國に通ずるに何等の困難も無いが、その普通信機關の未だ備はらなかつた頃には如何にして相場を傳へたかといふに、大體は飛脚に依るの外は無かつた。従つて都市の相場を各地に通ずることは頗る緩慢であつた。併しある要衝だけには稍々敏活な傳へ方もあつた。それは火振といふ一つの方法である。其の法は、豫じめ申合をして置いて、夜間山の上で火を附けた松明を振る。すると他の山で其れを遠目鏡で見ても、更に次の山へ同様の方法で傳へる。さうして次から次へと傳へて、ある地點まで都市の相場を知らせたものだ。先づ大體大阪、京都あたりから伊勢の津あたり迄其の作用で相

場は傳へられたのである。

今いうたのは夜中のことであるが、日中は白と赤との幟を振つて知らせた。やはり遠目鏡で見ても、其れを次から次へと傳へて行くのである。そこで何圓何十何錢といふことを如何にして知らせたかといふに、幟の振り方、松明の振り方によつて自ら申合がついてゐたのである。たとへば左の方へ六度、右の方へ七度、前へ八度、後ろへ九度といふ風に振る時は、米一石に付代銀六十七匁八分九厘といふことになる。之に就て或る書に出てゐる所を次に引かう。

物の相場を其日の内に遠國まで知らせんとて山の上にて火振るなり。上方邊所々にあり。大阪より勢州へ知らせるには信貴山へ取り、笠置山へ移し、又伊賀の布引山へとり、夫より勢州青谷山へうつし、是を津、松阪等へ取るなり。晝は白赤等の幟を振て知らせるを遠目鏡にて見とるなり。夜は松明にてするとなり。(以下「譬へば」云々とて前記の例が記されてある)

九豪商の盛衰

元祿の頃京都には頗る多くのミリオンネアがあつた、其頃三井に因みのある人が五十軒ばかりの豪商の盛衰録を書いて居るが、なかく興味があつて、當時の有様が能くわかる。其の盛衰の次第を見ては自ら商家の戒めともなり、又或る意味に於ては歴史家の好史料ともなる。更に詳しく言へば、當時の諸大名と此等豪商との間に如何に貸借上の關係が頻繁であつたか、又此等豪商の資産は如何にして作られたものであつたか、その頃の豪商の心理作用は如何なるものであつたか、又幕府は此等の商人に對して如何なる態度を取つたか、諸大名は如何に此等の豪商を遇したか、其等の事情が悉く此の書に書かれてある。

此の五十軒許りの豪商の盛衰興亡の跡を尋ねてみると、其の富を成した原因は大抵大名の用達をやつたからであるが、其の亡びた原因も十の九迄は同じく大名の爲めに潰されたものである。當時の大名は紀州、尾州等徳川氏の親藩を初めとして、薩摩であらうが、肥後であらうが、皆其債務者であつて、何れも何萬、甚しきは十何萬といふ巨額の借金をかついで居たものである。さうして此等のミリオンネアが一朝にして非常に貧窶の境遇に陥つたのは、大部分は諸侯に貸した金を踏まれて、それが破産の原因となつて居るのである。全體貸した元金が完全

に戻り、その利息が毎月、毎年滞なく這入るものであるならば、世に金貸商賣ほど氣樂なものはない。この頃の京都の豪商等はやはり此の心理作用から、自分は勞せずして唯だ利息で財産を増さうといふことのみ考へて居たので、一朝債務者が不如意となると直に其れと共に倒れる運命に陥つたわけだ。彼等豪商は某侯にいくら、某藩にいくら貸金がある、その利息は年にいくら這入るといふことを當てにして、其の計算の上から頗る贅澤を極めた。彼等の贅澤は實に非常なものであつて、今日の成金の贅澤の如きは遠く及ばぬものであつたらしい。斯くの如く唯だ坐して利息の計算をして、一方に非常の贅澤をするのであるから、一旦蹉跌を來すと再び起つことの出来ないやうになるのは當然のこと、言つてよい。

勿論彼等といへども相當に諸侯を危ぶんだものに相違ない。初めの中は餘程の警戒をして、成るべく多く貸さぬ、前に貸した金の戻らぬうちは貸さぬといふ風に、随分用心に用心を重ねて居たが、しかし一方借方の方でも中々色々の策略がある。諸侯の番頭など、いふ者は金を借りるのが其の職務で、特に京都に居を構へ、非常な金を使ひ、色々の手段を以て豪商を籠絡したものである、即ち或は料理屋へ連れて行つて盛な御馳走をする、或は殿様の大切な寶物を與

へる、或は扶持を與へる、或は帶刀を許して士分の扱をする等殆んど位置顛倒で、武士の方から町人に膝を屈して百方媚を呈するといふ譯であるから、いかに豪商等が用心深く構へて居ても、いつの間にか此等の手段に引ずり込まれて段々深入りをする。即ち或る限度を越えて金を用立てるやうになる。場合によると自分の有金で事足らず、他から金を融通してまで貸す様にもなり、斯うして豪商等は時々刻々危険の淵に落込んで行くのであつた。

大體此等豪商の初代は自から身代を作る程の人間丈けあつて中々容易に諸侯の手には乗らなかつたが、二代三代となると追々其の心掛が緩んで来て、諸侯の手管に乗るを寧ろ喜ぶといふ風になる。先づ京都に盛なミリオネアで三代續いた者は少なく、此等が非常の豪奢を極めて、一朝或る大きな諸侯から貸金を踏倒されると全く其れで瓦解してしまひ、昔に變る落魄の境遇た沈む様になる。其の榮枯盛衰の迅速なること實に驚くべきものだ。さうして元祿時代に於ては大名が町人を踏倒したと云つても、幕府の方では別に之に對する制裁を加へなかつた。尤も此の弊が段々甚だしくなつて、後には幕府でも禁令を出し、諸侯が金を借りる事を禁じたこともあるが、最初は貸金踏倒しは勝手次第で、何十萬の債權があつても之れを幕府に訴へる事が

出來ず、又訴へてもお構ひなしといふ有様であつた。處が町人の方はどうかといふに、諸侯に用立てる爲めに他から金の融通をして居るのであるが、之れには相當制裁があつて、其の返金遲滞の場合には嚴重に裁判をして猶豫なく返辨させたもので、豪商は全く堪らない境界であつた。そこで此等豪商が破産の運命に陥り、京都にも居られなくなると、已むを得ず貸金のある藩々を辿つて行くのであるが、さうなつて見ると曩には頻りに媚を呈した藩の方では、今はもう用事が無いといふので丸で手の裏返す様な冷淡な態度を取り、多くは全く構ひ付けぬといふ有様で、極めてよい處で僅かに食へる丈けの扶持を與へる位が落ちであつた。此の記録に書かれてある諸藩の例を見るに、薩摩は金を借りたことはあるが、割合に迷惑を掛けて居らぬ。其他に至つては紀州でも尾張でも、非常な不義理をやつて居る。中でも肥後の細川が一番筋が悪かつたと言はれて居る。

之れが昔百萬長者の番付に乗つて一世の羨望する所となつた豪商の盛衰興亡の一端である。かういふ苦い經驗を嘗めて居るので、其の當時の金持の遺言の中には必ず「諸侯に金を貸すまじきこと」といふことが述べられて居る。

大阪は流石に維新の末あたり迄金持が多かつた。それは豪商等が互々には商賣敵であつたけれども、共同の利害の上には自ら同盟を形作つて居て、諸侯が殆んど何處にも借金の無いやうな顔をして金を借りに行つても、實はこの藩にはいくらかの貸金があるといふことが相互の間に報告されて居り、其の内情も能くわかつて居る所から、互に警戒して危いと思ふ所へは何と言つて來ても貸さなかつた。それ故維新の大變革に際しても大阪の豪商はあまり大きな迷惑を蒙らずに済んだ。もしか、る聯盟が出来上つて居らずにあの大革命が起つたとしたらば、恐らく大阪の豪商は悉く枕を並べて討死したであらう。

今日では主義者なるものが非常に資本家をいぢめて居るが、元祿の頃に於て資本家いぢめの最も大なるものは諸侯であつた。尙ほ諸侯に對する金貸の最後のものは平沼專藏であつたと云へる。これは主にも諸侯に金を貸して産を作つたので、元祿時代の豪商等が諸侯にいぢめられたのと正反對に、高利の金を貸して飽く迄も諸侯から絞り取り、其の爲め諸侯の破産したものが少なくない。平沼が惡魔の如く嫌はれたのは時勢が變つて富豪と大名との位置が顛倒した爲め、要するに彼は諸侯に對する金貸の一番最後の、同じ脈を引いた者といふべきであらう。

一〇 神屋宗湛と豊太閤

吾が知る人九州の平岡浩太郎氏の屋敷内に神屋宗湛の茶室が残つて居る。此の宗湛の三代許りの祖先は、足利時代に於て外國貿易を開いた最初の人として有名である。其の貿易の關係から巨萬の富を作つたもので、その流れを汲んだ宗湛も一面に於ては大富豪であつたが、又一面に於ては大茶人であつた。宗湛は豊太閤の大の御氣に入りで、利休とは同時代であるが、寧ろ利休よりも愛せられ且つ重んぜられた。

此の宗湛が自ら筆を取つて録した日記が今も存して居る。それは恐らく茶室と共に平岡家に依つて傳へられたものであらう。浩太郎氏は之れを益田孝氏に贈り、今は益田氏の所藏となつて居る。此の日記を見ると、宗湛は豊太閤の茶會には殆んど毎會缺かさず出席して居る。大阪で太閤が茶會を催すのに急飛脚に依り九州から息もつきあへずに馳せて來たといふやうな事が記されて居る。獨り茶會の事のみならず、豊太閤に關して目のあたり見た事は何くれとなく認

められてあるので、之れを讀むと太閤その人が髣髴として眼前に現はれて來るやうに覺える。此時の太閤の服装はどんなであつたとか、太閤は何と云はれたとかいふやうな事が巨細に書かれてあつて、何となく豊太閤の言葉が聞えるやうな氣持もする。太閤は常に宗湛を呼ぶに「九州の坊主」或は「博多の坊主」というたとある。扱て其の取扱はどうであつたかといふと、堺あたりから來た多くの茶人、富豪等も交じつて居る中に、宗湛一人丈けは特別の扱ひを受けて、酒宴の場合にも豊公廳下の群雄の間に特に席を設けられるといふ有様であつた。

此の日記には利休が初めて宗湛に出會つた事もあれば、又太閤がいつも利休に、此の坊主に茶を立て、やれと命じたことなどもあり、石田三成が太閤の命を受けて頻りに周旋をしてゐる所などもあつて、其頃の有様が躍如として現はれて居る。朝鮮征伐の際に秀吉の大本營に於て退屈しのぎに諸將が茶を立て、互に主となり客となつたといふことは世上にも臚ろけに傳へられて居るが、此の日記には其等の事が明らかに記され、其の應酬の様子も手に取るやうに敘されてある。それによると、たゞ陣中に茶杓を弄するといふ位の簡單なことでは無くて、太閤はその爲め特に茶室まで作つて居る。その茶室が明後日出來る、それ故明後日茶會に參れとい

ふ命を宗湛が受けた。其の積りで居つた處、豫定よりも早く出來上つたので、一日繰上げて即刻參るやうとの命令だ。それで宗湛大に狼狽して直に之れに馳せ赴いたといふやうなこともあつて、太閤のいかにも氣早である様子などがよく窺はれる。太閤既に斯くの如くであるから、諸將も自から之れに倣つて、陣中に茶室を作るといふことも頻繁に行はれたやうである。

此の日記によると、豊太閤はなかく茶に造詣が深かつたらしい、たゞ豪傑風にい、加減にやつたものと許り思はれない。ある時には頗る豪奢な風の茶を立て、居るかと思ふと、ある時には又極めてわびた事もやつて居る。豪奢の茶を立てた一例としては、黄金の茶といふのがあつた。それは文字通り何から何迄すべて黄金を用ゐたので、先づ茶室の柱を純金のノベ金で巻き、疊は悉く猩々緋で敷きつめ、障子は紅色の紗で張るといふ有様、勿論道具類は花瓶を初め、釜、茶杓、風呂、茶巾筒に至る迄悉く純金で作られ、いかにも華麗を極めた趣向である。かういふのが何人も想像し得る豊太閤流の豪奢な遣り口であるが、しかしわびた茶となると全然之れと趣を異にし、大茶人をしてアツと言はせる程の趣向を凝して居る。元來茶の湯には夫々の掟がある譯で、太閤の如き大明を呑む程の豪傑も茶となつては一々其の掟に従ひ、時刻等も決し

て誤る様なことがない。朝の茶などになると、夜も明けないうちに自から客を迎へる。暗がりには聲がある、それが太閤の聲であつたと宗湛が書いて居る。又自分が主であるから褥の上にも坐らぬといふやうな事まで記されてあつて、茶の湯の席に於ける太閤の行動を遺憾なく知る事が出来る。

此の日記はたゞ抹茶家の参考となるもの位に思つて居る人が少なくないやうだが、實は豊太閤の面目を見る上に之れ程確かなものは無く、又之れほど太閤その人を直寫した史料は無いと言つてもよい。

一一 奇人好田磻溪

昔し柳子厚は自分の別荘の色々な部分に名を附け、それに悉く愚といふ字を冠した。其名は曰く愚溪、曰く愚邱、曰く愚水、曰く愚溝、曰く愚池、曰く愚堂、曰く愚亭、曰く愚島といふ様に、此の八つの場所に悉く愚の字を附けて、さうして八愚の詩を作つたといふことである。

此の擧に倣つたものか否かは知らぬが、幕末の頃越後村松に好田磻溪といふ奇人が居た。此人頗る狷介の質で世の中と相容れず、人を見れば即ち愚物々と罵倒するので、遂に郷里にも居ることが出来なくなり、程近い五泉といふ町に移住せねばならないことになつた。五泉に移つてからも相變らずの悲歌慷慨で、權門の人を見ること土芥の如き有様であつたが、ある時外出して何處かで飲み、大分酩酊して歸つて來ると偶々一友が訪ねて來た。そこで其の友人に向つていふには、俺は今日愚事について一愚人に逢つたが、その愚人が俺を引留めて愚酒愚肴を以て饗應した、其の席上で俺に愚詩を求めたから、愚作を試みたが、それはこんなものであると其の詩を書いて示した。所が其の詩は愚作どころで無く、立派な出来であるので、友人は君は愚詩といふが中々そんなもので無いと言つて褒めた處、磻溪先生大に不機嫌で、イヤ君も詰らぬ男だ、之れを愚作でないなどといふのは俺に媚びるので、君の評は愚評だ、君も亦愚物たるを免かれぬと言つた。此の人は圍碁が非常に好きであつたが、相手が一子を下すと、それは愚手々々といふのが癖であつた。其の性癖は死ぬ迄改まらず、臨終の場合には、愚天下々々と再三獨語して遂に五十年を一期として死んだ。

此の人の傳記は漢文で書かれてあるが、その文章を重野成齋翁は評して、「人奇、事奇、文亦奇」之を讀んで絶倒せざるものは其の人必ず愚也というてゐる。

一二 魚骨の貸借

銚子といへば利根川のはげ口で、燈臺の置かれてある所であるが、此の銚子が江戸時代に於ては勘當息子の棄て場になつて居た。今日では東京から銚子迄一日もかゝらずに行き得るが、昔和船に乗つた頃には二日か、ともすると三日位かゝつたもので、をかしいことには吉原から直に道が通じて居たのであつた。即ち吉原通ひで身を潰した者は其の行末は大抵此の場所へ謫せられるといふ順序になつて居た。そこで江戸時代の川柳などを見ても、銚子へ逐ひやられる道樂息子の事を詠んだ秀句が澤山ある。何分江戸に近い所であるから、父母の情として勘當はするもの、成るべく遠くへは遣りたくないといふので此の土地を選んだものらしい。それに今一つの理由は銚子へ行くとなつたややく糊口が出来るといふ便利もあつて、旁々此の地が勘當息子

の謫所となつた。自分も二三度銚子に遊んで土地の人に此の事を聞いて見たが、今日の銚子の人々はあまり斯様な事を知つて居らぬ。しかし段々調べてみると、銚子といふ所は他國から來た人を排斥せず、寧ろ歓迎する氣風のある所で、且つ誰れも知る通りあの土地には昔から大きな醤油の醸造家が何軒もあつて、之れが中々多くの傭人を要するので、旁々他國から流れ込んだ者も直ぐ食ひ口がある。それらの關係から此の土地が勘當息子の棄て場といふことになつたものであらう。

銚子は漁業の盛んな所で、魚類の價は廉く、一體の生活が容易である。こゝに漁業について一つの話を思出すが、鯉漁の盛んな時になると、海濱一面に此の魚を以て山を築くが、此の鯉は大部分身を割いて鯉節を作り其の骨は肥料にするのである。茲に可笑しい事には斯様な大漁のある時には魚を貸すといふことがある。魚を貸すといふよりは寧ろ魚の骨を貸すと云つた方がよい。それは鯉節を作る爲めに身を切離した其のあとの骨には無論多少の肉が附いて居る。之れをほんくゝ刎ね出すと、銚子の町の無数の人民は皆な桶やバケツを持つて行つて、其の骨を自分の家へ運ぶ。さうして或は之を汁に煮たり、煮付にしたり、種々の調理法をして其骨をしや

ぶる、それがなか／＼うまい。ひとり貧民のみならず、中産階級の者でも皆な盛んに此の骨を家に運ぶ。漁場でも亦敢へて之れを咎めぬ。しかし此の骨は貰つて來るので無く借りて來るので、しやぶつた骨を必ず返さねば再び取去ることが出来ないことになつて居る。一體斯様な骨を肥料にするには必らずしも少し許りの肉の附帶を必要としない。それ故勝手に之を持去らせるのだ。持去つて用の濟んだ骨は再び之れを戻させて肥料とするのである。かういふ事が銚子の生活の容易いことの一端である。

此の土地の人から聞いた他の一話がある。鯉の咽喉部に星のやうな格好の小さな肉が附いて居て、やはり星と呼ばれて居るが、是れは非常に美味で、味を辨する者は最も之れを珍とする。併し其れが極めて小さいものである爲めに、特に其の部分を取出すことが面倒がられ、何萬といふやうに鯉の澤山漁れる場合には、此の部分も無差別に切り去られてしまふ。ある時東京の八百善の料理番が材料を求めに銚子へ行つた時、銚子では八百善の料理番に食はせる程のものは此の星より外に無いといふので、一尾について殆んど小指の先ほど無星を何百と集め、之を調理して食はせたので流石の八百善の料理番も非常に驚いた。驚いた筈である、之れだけ

の星を集めるには何百尾といふ鯉が切られたのだ。

一三 榮螺を撫でる

魚類に就て今一つ榮螺の話がある。是れは敢て銚子のみに限らず、上總、下總、房州あたりにかけてもあるが、此の榮螺は元來海岸の浪打際の岩に五十も百も這ひ上つて、その岩に着いて居るものである。そこで漁師が其の榮螺を取らうとして船を二三間の近間に進めると、榮螺は其の權の音を聞いて、自分の蓋を力一杯に引きしめる、其の引きしめる作用で、一齊にころりころりと海中に落ち込み、漁師は一つも取れないことになる。そこで之れを取るについては漁師の方に己づから祕術がある。それは格別のことでは無く、榮螺のいつも這ひ上る様な場所へ菰を敷いて置く、さうして置くと例の通りころがり落ちようとしても、今度は菰があるので、いくら蓋をしめて見ても、あちこちに出て居る刺が菰に支へられて、ころりと海中に落ちる譯に行かない。そこで漁師はそれを容易く拾ひ上げるといふことである。北陸あたりでも矢張り同じ

方法で榮螺を取るといふが、拾ふといふ言葉もあり、加賀邊では撫でるといって居る。榮螺を取りに人を誘ふ場合、「これから榮螺を撫でに行かう」など、言うてゐる。

一四 蕪村と狸

前年丹後の天の橋立に遊んだ折、謂ゆる與謝の海を距て、遙かに小さな村落を認めた。自分を乗せた輿夫がその村を指さして、あの村が有名な蕪村の生れた所で、今でも大根蕪が非常によく出来るといふた。蕪村は與謝を姓とし、且つ蕪に黄縁のある號を附けて居る所から見ると、此の邊の生れだと人のいふのも強ち無理ではない。併しながら實際は蕪村の郷里はよく分らぬ。あれ程の大家の出處が分らぬといふのは寧ろ奇であるが、どうもはつきりしない。單に與謝を姓とし、蕪の名を附けて居ることから、直ちに丹後の生れだとも断定し兼ねる。尤も一度びは此の邊に住んで居たことは確かである。多分そこに住んでゐた時分に附けた名が後迄も用ゐられるやうになつたのではあるまいか。

蕪村の晩年に著はした「新花摘」を見るに、此の丹後に見性寺といふ寺がある、其寺に竹溪和尚といふ住職があつて、俳諧もやり、なか／＼面白い人であつた、其の人と始終親しんで、且つ時々其の寺に宿泊した事もあると書かれてある、して見ると此の邊に居つたことは疑はれぬ事實だ。今此の見性寺に蕪村が泊つた時の逸事が可笑しいから其の大略を記す。ある夜蕪村が廁へ這入ると、何か妙なものに踏み當つて、毛の如きもの、障つたことを感じた、薄氣味悪く思ひ、暗がりに足で探ると、今度は何も無い、やつと用を済まして又寢床に這入つたが、兎角前の事が氣になつて眠り得なかつた。やがて疲れを覺えて少しくまどろむと、何ものか寢具の上をひどく壓し、磐石を載せたやうな心地がして苦しくて堪らず、刎ね起きて灯をつけて騒ぎ出したので、寺の坊主共も何事が起つたのかと皆な起きて來、果ては住職もそこへ遣つて來た。そこで蕪村が先程からの仔細を語ると、住職はさういふことは能く此の邊にある、恐らくそれは狸の仕業であらうと云つてあちこち戸を調べて見たが、別に戸の明いた處もない。やがて夜も明けか、つたので更に能く見ると、縁より簀の子の下に續いて梅の花を散らしたやうな足跡があつたので、さてこそ狸に違ひ無いといふことが分つた。それはそれとして、竹溪和尚は只

ならぬ物音に慌て、起き出で、来たので、帯も陸々せず、帽鼻種さへ外して遣つて来たのだが、此の和尚若い頃から一種の皮膚病で暇さへあれば擧丸を搔き、其のふくらかに引き伸ばされた様が極めて奇怪な形をして、さながら狸の擧丸の如くにも思はれたので、蕪村も狸の事は打忘れて頻りにそれを見て打興じた、その時竹溪の戯れに詠じた句が一首録されてゐる。

秋ふるや桶八疊の金閣寺

金閣寺は蓋し擧丸を搔くといふことにかけて利かしたのであらう。

尙ほ蕪村に有名な句がある。それは多分此の場合に思ひ到つて詠じたものであらう。

戸を叩いたぬきも春を惜みけり

一五 同巧異曲

亡友紅葉山人の隨筆の中に、ある書生が主人の吩咐で何處かへ電話を借りに出掛けた話が書かれてある。其の頃電話は一通話十五錢の料金であつたので、主人は十五錢を持たせ用事を命

じて使に出した。處が書生は間もなく歸つて来て電話は確かに掛けて來ました、是れは御土産でとす云つて一包の菓子を主人の前に出した。どうした仔細かと尋ねて見ると、ある菓子屋へ行つて、菓子を十五錢買ふから其の代りに電話を貸して下さいというて用を辨じて來たといふのであつた。

この頃、蘭醫として有名な杉田玄白の隨筆「形影夜話」を讀んで見ると、色々譬喩めいた話の澤山ある中に、丁度今の紅葉山人の話と趣の似たのが一つある。昔し大泥棒があつて多くの手下を持つて居た。ある時春雨降りつづいて徒然のあまり、此の泥棒の頭領が何か肴を一つ取つて來させて一杯呑みたいと考へた。そこで手下の泥棒に何處そこの町の何處そこにい、魚がある、貴様あれを盗んで來いと言ひつけた。處が此の泥棒が歸つて來て、番人が居た爲めに魚は取れなかつたと答へた。すると親分が笑つて、貴様の智恵では大方そんなものだらうと思つて居た、よし／＼と今度は又他の一人に同じ事を言ひ付けた。是れは少し才幹のある奴だから、多分獲物を携へて歸るだらうと思つて居た處、果して親分の言ひ付けた大きな鮮魚を提げて歸つて來た。其始末を聞くと、いかにも番人が居て魚を盗むことが出來ない、そこで其の近邊の家

に股引の干してあつたのをそつと盗み、それを賣つて其金で魚を買つて來た、盗んで來る譯に行かなくて甚だ面目ないと言つたとある。是れは前の書生の電話と同巧異曲の話である。

一六 木曾の運材

徳川時代に木曾の飛驒から檜材を岐阜の方へ出すにはすべて材を筏に組んで河に流したもので、其間の水路は或る期節に於ては非常の繁昌を極めた。當時の事であるから頗る緩慢な運搬の仕方であつたが、此の木材を流すことについて、話を聞いた丈けでも悚然として怖れをなす程のことがある。全體飛驒の河といふものは美濃に及んで、下麻生港に出るのであるが、美濃に入ると共に段々河幅が狭まつて來て双方の崖が迫り、その崖は何百尺といふ下から仰いで僅に其の絶頂を見るといふ位で、兩崖の迫つた中の水路は非常に深く、まるで淵のやうになつて居る。扱て段々材木を運んで此の狭い處へ來ると、なか／＼旨く流れない。動もすると其の材木が横になつて、全く水路を塞いでしまふことがある。之れが運搬に於て最も手数のかゝること

とで、横になつた材木を取放してしまはなければ次から次と流れて來る何千何萬といふ材木が悉くそこに停滯する譯であるが、之れを取放すことは殆ど人力では出來ない位困難である。さういふ場合どうするかと云へば、横になつて水路を遮つて居る材木を真ん中から切つてしまふより外は無い。しかし之れを切るのは随分危険なことである。そこには前に言つたやうに何千何萬といふ材木が停滯して居るのであつて、横はつて居る木を一本切ると、其の停滯した無数の材木が一齊にこゝへ落込んで來る譯であるから、勿論その木の上へ乗つて鋸で引く杯といふ譯には行かぬ。鋸などで引いて、木が切れて水が決するとなると、その水の勢で其人間は材木と共に激流に卷込まれるか、或は木の下に壓せられることになる。そこで兩方の崖の上に大勢の人が居て、一人の腕の利いた人間を繩で縛り、兩側でその繩を支へて居る。繩に縛られた人間は宙宇に吊されつゝ、材木のある所へ下つて斧を揮ふ。さうして件んの材木を斷ち切るや、その刹那に兩側の人々が之れを引上げるのである。その引上げるのが一刻後れると木を切りに降りた人間は悲惨な運命に陥るわけで、實に間髪を容れない早業である。土地では此の事を七夕といふて居る。

一七 所謂名所舊蹟

名所舊蹟を訪ふに當つては何人も多少の豫備知識を要する。全體、今日名所舊蹟と稱せられるものには、昔と地形の變じて居るものが多い。たとへば昔し山のあつた所に今日は山が無く、昔し相當に家屋のあつた所が今は全く桑田と變じて居るやうなことが少なくない。それらの變遷を頭に置いて、ありし昔を聯想してこそ興味もあり、有益でもあるが、たゞ現在の状態をすべて昔のまゝであると單純に解釋してしまつては、わざ／＼名所舊蹟を訪ふ甲斐も無いことである。今日は小學校などでも教師が兒童を引率して、見學と稱して名所舊蹟を彼方此方連れ廻るが、是れはよほど考へものであると、自分は平生思つて居る。所にもよるけれど、地形も何も全く變つてしまつて、たゞ昔を聯想する所のみ興味のあるやうな場所へ兒童を連れて行つても、まだ聯想などいふ高い智能の働かない子供に取つては頗る無趣味なもので、如何に説き聞かせても、彼等の頭腦に本當の理解の出來よう筈が無い。なまなか子供の時分にさう

いふ所へ引張り廻すのは、却つて他日成人してからそこを訪ふ時の害を爲す位のものである。

さういふ譯で、どこの名所舊蹟へ行つても、一種の考へが無いと一向興味を感じぬことが多い。たとへば京都の金閣寺、銀閣寺の如きは足利將軍が非常な豪奢を極めた所となつて居る。其の名稱も金銀といふ如き燦爛たる文字を以て名づけられて居るので、何人も此處を訪ふ時には非常な期待を持つて行く。ところが實際に行つて見ると、金閣寺も銀閣寺も至つて小さなもので、敢へて金銀の光り輝いた所も無く、庭園の規模も大きなものとは言へぬ。要するに今日の成金の別荘などに比して遙かに小さなもので、何人も其の想像とあまりに懸け離れて居るのに失望する。しかし實をいへば是れは失望するのが間違つて居るのである。全體、金閣寺、銀閣寺の建築は大部分足利時代のもので残つて居るとは云へ、實は幾回にも亘る修繕で變化もして居る。庭の樹木の如き、頗る古いものもあるけれども、一木といへども足利時代のもので残つて居る筈は無い、皆な後より追々と植ゑたものである。先づ金閣寺、銀閣寺に昔から残つて居るものを庭に求めたならば土石くらゐるのもので、其の他は悉く當時のもので無い、風致の如きも自然當時に比して多大の變化があるに違ひない。若し夫れ全體の規模の點に至つては昔と

今と實に非常なる相違がある。今日金閣寺の面積は七町七段四畝であつて、決して大きいものといふことが出来ぬ。之れが足利將軍の豪華を極めた所とは到底思はれぬ。所が昔ほど程の面積であつたかといふに、その總段別百六十町三段七畝であつた。此の數字を見て初めて成程と合點の行くやうなものである。又銀閣寺の方は今日の坪數は三千百八十三坪で、大隈侯爵邸の三分の一程に過ぎぬ小さなものである。然るに足利時代に於てはその坪數八萬八千五百坪許りのものであつた。即ち當時此の廣大なる面積を有して居たものを、長い間に段々狭められて、今日は僅かに其の形を存するに過ぎない有様となつたのである。多くの人は名所、舊跡、史蹟等を唯だ卒然と見て其の意外に小さいのに失望するのが常であるが、實は失望する前に昔の面積、規模、風致等がどうであつたかを考へて見なければならぬことは、此の例に徴しても明らかであると思ふ。

又京都の松尾に西芳寺といふ寺がある。是れは日本第一の名園といはれ、其の庭の事は支那に迄聞えて居る。有名な夢窓國師の經營したもので、金閣寺、銀閣寺も此の庭に倣つた者と傳へられて居る。自分も嘗て此處に遊んだ事があるが、鬱蒼たる老樹天を蔽うて、殆んど滿苑苔む

し、如何にも幽趣に富んだ庭であると感じた。扱て其の面積は何れ丈けあるかといふに、今日は僅かに二町二段六畝に過ぎぬ。是れ丈けの廣さではいかに風趣があつても、日本一の名園とは一寸受取り兼ねる節もあるが、其の作られた當時の面積は十九町八段であつて、やはりなかなか廣大なものであつたのである。それを聞いて見ると昔時の建物や庭園が大部分類廢に歸し、或は畑などに變つたこともわかり、金閣寺、銀閣寺の模範になつたことも、初めて成程と會得せられる譯である。斯様なわけであるから、名所舊蹟を訪うて、昔も今の儘であつたと早飲込に飲込んでしまふのは誤つた考へで、大抵の場合少なくとも其の五割や六割を掛けて想像を馳せない、到底當時のさまを髣髴することが出来ないものである。

一八 原始の活字

今日こそ活字が一般に普及して居るが、其の使用され初めた頃の活字にはなかく珍とすべきものがあつた。茲にその二つばかりの例を挙げよう。

前年、東京外國語學校開校二十五年度の展覽會に、島津家の出品で、數十本のアルファベット鐵印が陳列されてあつた。丁度水晶印に使ふ鑿たがねほどの太さで、長さは三四寸、そして其の一端にA、B、Cが彫りつけてある。それが大文字と小文字とイタリック、都合三體三揃であつた。これを捺して行つて謄寫の勞を省かうといふのである。又是に因て歐文捺印版ともいふべき珍奇な圖書も出來上らうといふ譯である。それに、これを用ゐて文にした當時の書類も添へてあつた。此の原始的な活字、春日遅々のタイプライターとでも云はれさうな器具は、彼の「成形圖説」などの著書で高名な榮翁島津重豪公の創意に成つたもので、公が彫師木邨嘉平に命じ、幕府の思はくを憚り、夜なく密かに調製させたのである。後年島津家が上海で印刷させて出した所謂「薩摩辭書」があるのも、其の由つて來る所遠しといふべしだ。

今一つは印刷文化展覽會で見た盲人葛原勾當の日記數冊である。之れを見ると、其の丹念さにも驚かされるが、其の日記を附けるに選んだ奇抜な、しかも合理的な方法は一層驚嘆に値する。先づ誰に言付けても直ぐ見分けのつく「いろは」と、數字や、月日などの極めて少數な漢字の木印を拵へ、座右に文選工ともいふべき助手を置いて、其の助手から所要の印を得、それ

を捺して日記を附けたのである。盲人として洵に恰好な思ひ付きだ。此の假字眞字兩様の印も日記と共に出陳してあつたが、字の大きさは今の四號活字くらゐである。

一九 先斗町の名の由來

京都のぼんと町といへば誰も知る通り柳暗花明の巷で、藝者屋が軒を並べて蕩兒の心をそつて居る場所である。その町の名も人の知る如く先斗町と書くのであるが、一體先斗と書いて「ぼんと」と讀ませるのも一寸可笑しいことである。此の事をいくらか詮索してみた友人湯淺半月の説に、昔しジェスイットの日本へ渡來した頃、京都には南蠻寺なるものもあり、多くの西班牙人が此地に來た。そこでポントなる言葉は西班牙語の何に當るかと調べてみると、橋といふ語である。今いふ先斗町の附近には一帯の川が流れてゐて、従つて多くの橋がある。昔は此のあたりは京都の場末であつたらしく、當時南蠻人と稱して人のあまり喜ばなかつた西班牙人を、恐らく此の邊に置いたものと思はれる。そんな事から、西班牙人が「橋の多い町」と

いふやうな事を言ひ出して、自然にそれがポント町といふ地名となつたものではあるまいかと。

然るにポントと呼び乍ら橋の字を用ゐずに先斗といふ字を宛てたのはどういふ譯であらう。「先」の字と「斗」の字を續けたのでは、日本風に考へても支那風に考へても意味を成さぬ。恐らく之れも外國語を假りに斯様な字を用ゐて現はしたものではあるまいか。セントといへば、外國語では Saint 卽ち聖徒或は傳道師等の事になつて居る。乃ちジェスイットの用ゐて居た宗教的の言葉を先斗といふ字に書き改め、一方西班牙人が始終ポント町と云つてゐたのと兼ね合はせて、現在の先斗町といふ字を慣用するに至つたものではあるまいか。是は故事つけかも知れぬが、セントといふ字が宗教に因みあり、又ポントといふ語が西班牙語であるとする、何としてもジェスイットに因縁のある土地といふことだけは外れぬやうだ。斯様に歴史的に宗教に縁のある土地が、今は花柳の巷として有名になつて居るのも奇とすべきである。

二〇 學者の評判記

明和五年に發行された學者の評判記(半紙二つ切より少し細き横本)で、江戸、京都、大阪の三ヶ所の學者の評判を書いたものがある。丁度大阪で名高い藁葎堂や、江戸では平賀源内などの居つた時分の評判記で、此等の連中が頭取と云ふ事で、以下色々の學者に就いての評判を載せてある。すべて評判記を作るには芝居の評判記に據つたもので、芝居の評判記は恐らく他の色々の評判記の元であらうが、芝居がだん／＼勢力を得ると共に評判記も流行した、そこで何でも彼でも、この芝居の評判記に倣ふ事になつて、寺院の評判記もあれば藝人の評判記もあり、諸商人の評判記もあれば金持の評判記もあり、さては遊女、藝者、蔭間などの評判記も出るやうになり、或は風景の評判記、魚類の評判記と云ふやうに種々様々なものが出来、終に學者文人にまで及んだのである。元來學者文人と云ふやうな堅苦しい先生達は、役者風情と同じ取扱を受けることを甚だ喜ばなかつたのであるが、併し事實流行に壓されて止むを得なかつたのである。一體

人間は人の批評をしたがるもの、また人の批評を聞きたがるもの、別して人のアラを聞きたがるものだ、この評判記は、即ちその役目を勤めるもので、今日なれば新聞などがあつて、人の缺點を剔抉し、人の批評をして呉れる機關があるが、昔はさう云ふものが無かつたから、評判記が重寶がられたのも無理はない。評判記は一種の人名録でもあり、同時に藝術の長短を語るものでもあるから、芝居に就て云へば、演藝史の材料はこれから取らねばらぬ、他の評判記も同じ意味に於て資料となるものである。

いろ／＼ある評判記の中で、今は文藝家の評判記に就て一二の説話を試みんとするのだが、先づ其の特徴と云ふべきは學者文人の俗名が擧げてあり、其の住所が記されてあることだ。學者文人は多く雅號で知られてゐるために俗稱の一寸知れ兼ねることがある、住所に至つては後世皆な忘れられて詮索しても容易に知り兼ねるものだが、此の評判記にはチャンと載つてゐる。尙ほ埋没して今日では誰れも知らぬ不幸な學者文人の名もあつて、それが兎もすると参考になることもある。扱て月旦批評に至つては一概に公平とは云ひかねるが、しかしおよそ當時誰れが人氣があつたと云ふやうな事は分る。この點からして此等の書は俗書ながらも取るべき所がある、そして興味は人々のアラを摘發してゐる所にあるは言ふまでもない。

文藝家の評判記には色々の種類があつて、芝居の評判記に倣つたもの、ほか、人名録と云ふ名前で發行されたもの、人物志と云ふもの、名家録と云ふもの等がある。これは江戸、京都、大阪に於て殆んど毎年發行されて、なか／＼數多くある。此等の本には人物に就ての評論はないが、學者、詩人、畫家と云ふやうな人達の名前が列記してある。さうしてその名前の列ね方の順に依つて、おのづから月旦になるやうになつてゐる。つまり上位にある者ほどえらく、中位から尻尾になるに従つて下つてゐるので、その順序が批評的の意味を持つてゐる。更に又この人名録の形式でなく、相撲番附の形式に倣つたものがある。勿論、大關だとか關脇だとか、勸進元だとか云ふ地位があるので、嘉永六年に大阪で發行した番附には一種の工夫がある。それは大阪の名高い橋と文藝家とを比較し、名橋長短録と云うてゐる。大阪の一番長い橋の天神橋百二十二間半に相對するに後藤松陰（頼山陽の門人）を持つて來て、勸進元にしてゐる。それから大關の席には何んな人が居るかと云ふと、廣瀬旭莊を詩人として、五十二間半の大江橋に見立て、西方の大關席を見ると、奥野小山と云ふ文章家を五十二間の龜井橋と對峙さ

せてゐるなど、なか／＼趣向を凝らしたものである。兎角、大阪の如く橋の澤山ある所で、その長短の差を以て、各文藝家と對照する事は、一種の批評でなければならぬ。こんな風なものが色々出てゐる事を考へると、如何に當時評判記風のものが、世間に流布し、世人に歓迎されて居たか、窺ひ知られる。

さて、この評判記、人名録など云ふものは、もとは書物屋が時好に投ずるやうに作つて、利を獲たいと云ふ事から起つたのであらうけれども、之れが世間に流布すると、結局、各文藝家の相場が定まる事になるので、學者達も唯だ笑つてすまされぬ事になる。自分が眼中にも無い者、寧ろ擯斥してゐるものなどが、評判記や人名録に上席を占めて居ると、世間もそれを見て、おのづから誰れよりも誰れが偉いと感ずるやうな譯であるから、やがて學者達が抗議を提出することがおこる。中には少し狡猾な文人手合になると、密々書物屋の參謀となつて、自分の都合の好い評判記や人名録を作らせる者もある。さうなつて來ると、各學者達は自衛上これを駁撃する爲めに、又それに似たやうなものを作つて、さうして自家の利益を圖らねばならぬ事になる。つまり評判記や人名録は、各自の廣告である。そこで文人達が、この評判記の名前

の順序に就て扼起となつて争うた有様を、聊か書いてみようと思ふが、實に滑稽なものである。尙ほ言ひ洩らした事で、この評判記や人名録の外にもう一種、妙々奇談と云ふやうなものが幾通りもある。これは著者の名は隠してあるが、多くは當時の有名な學者の手に依つて作られたもので、なか／＼持囃されたものだ。學者文人連の内幕を素破抜き、さん／＼にその缺點を指摘し、面白可笑しく俗文を以て書流したもので、それが又又人間に論戰の種となつた。

こゝに一例を挙げると、矢張り人名録の類であるが、詩佛や五山が自家廣告の爲めに作つたもので、詩佛、五山、その他の友人達が主なる地位を占めてゐる。その結果、他の儒者は蹴散らかされてゐる。そこで大田錦城は、扼起となつて詩佛や五山と喧嘩を始めた。喧嘩と云つても、口論するのではなく、文學者の事であるから、堂々と漢文を以て攻め、詩文を以て闘ひ、その陋劣醜惡をヒヤカした。それに對して詩佛や五山はいろんな人を使つて狡猾な戦略で逆襲を試み、即ちこの人名録は錦城がむしろ作つたものであると云ふやうな難癖を付け、自分等のした事を錦城にナスリ付けてゐる。その應酬の文章は、名士品題論と名づけてゐる。

さる程に、この議論が喧傳された爲めに、當時の文藝大名の増山雪齋が之を聞き、詩佛、五

山は不埒だと怒つて、その出版物を悉く焼いて仕舞へと、書物屋から版木を取上げて、葛西因是をして焼かしめた。さうしてこの騒ぎがあつてから、文人連は色々の事を詩に歌に云つてゐる、今その二三を紹介する。

○ 龜田 鵬 齋

新山虎吼五山震。(新山は因是の舊姓)

○ 同

四子欲逃々不得。錦城城裏泣天民。(四子とは五山、星池、綠陰、詩佛)

○ 大田 錦 城

星池月落晉齋昏。竹谷風腥深鎖門。詩佛堂前眠不就。無絃琴上綠陰翻。(無絃は五山の事)

○ 蜀 山 人

五山山崩一山無。天民如土民之愚。

大田錦城は山本北山の門下で、後ち分れて一家を成した人であるが、この論争の間に、詩佛や五山は錦城を罵つて云ふに、錦城は不埒な奴だ、北山の教を受けて居ながら、北山を尊敬し

しない、實に無禮な儒者にあるまじき人間だ、と突か、つてゐる。之に對して錦城は、北山の學問は甚だ缺陷があると云ひ、又その文章も拙劣極まるものとしてその理由を述べ、且つ北山の人品の劣等なる事を非難して、その妻君今川氏(細江女史)が門人の兼康祐悦と姦通して、遂に門人と出奔したにも拘はらず、その門人が死んだ後、妻君を元の鞘にをさめたと云ふやうな言語道斷の人間だ、又北山は非常な拜金家で、寄席や劇場などに金を借して、高利を貪る卑むべき人間だ、自分は斯様なだらしない人の教を受ける事は到底出來ないので、その門下を辭した譯で、決して師を思はぬ者ではない、と辯じてゐる。激論もさる事ながら、北山も傍杖を打たれて、飛んでもない怪我をしたものだ。錦城ともあらう人が、假令行き懸りからとは云へ、斯様な人の内事にまで立入つて、その一家の祕密を許くと云ふに至つては、その人の人格も推知されて淺猿しいが、又如何に當時の儒者が各々その地位を辯護するに苦心したかは、此等の事實が明かに物語つてゐる。

尙ほ一寸附け加へて置くが、前に述べた大阪で名橋長短録が出た時、多くの文人連は動搖した。さうして之に對抗して立派な折本で、その駁論が發行された。それは木版で、なか／＼手

のか、つた物で、縦横に論駁し、誰人と何橋との比較の誤れる事を指摘してゐる。例へば、廣瀬旭莊を大關席に置くのは好いが、詩人としては誤つてゐる、旭莊は單に詩人ばかりではない、儒學に於ける造詣も深く優に大家である、只詩才ばかり有ると云うて、中位の橋に比較するのは不當である、と不平を鳴らしてゐる。この折本は風流名橋競と云ふ外題であるが、一の評判記や人名録などが出ると、必ずその駁論が發行されると云ふやうな按排で、なか／＼神經質の文人連は黙つて居なかつた様子が見える。

二一 元祿義舉の隠れた後援者

赤穂義士の復讐は元祿年間太平無事の時代に於ける晴天の霹靂で、爾來これが芝居に仕組まれて、謂ゆる忠臣藏なるものは殆んど不朽の作と云はれるやうになつた。昔から芝居がはやらなくなるゝと忠臣藏を舞臺に上せば必ず景氣がつくと迄言はれ、今日でも忠臣藏は依然として劇界の人氣を喚んで居る。そこで市井の間には此の忠臣藏の淨瑠璃なるものが殆ど何から何迄事

實であるやうに思つて居る者もあるが、いふ迄も無く是れは頗る事實に遠ざかつた事も多く加味されて居るので、近年になつて段々實際の事實が現はれて來て、それに依り新しい芝居も仕組まれるやうになつた。

何人も知つて居る通り、吉良上野介の宗家には上杉家といふものがあつたが、此の上杉家では赤穂義士の復讐を非常に恐れて居た。表面からいふと上野介の子が宗家の養子になつて居るので、時の上杉家の當主は吉良家の出であるから、吉良が復讐されるといふことは上杉家から云へば親が殺される譯であり、従て上杉家で非常に心配したことは見易い事であるが、實際は其れよりもツと深い意味があるのだ。元祿時代に於て幕府は段々諸侯を減らして行き度いといふ政略で、従て何か過失があれば其れを機會に其家を没收する方針を取つた。それで、此の赤穂義士の復讐の卷添へで、宗家上杉家がどさ／＼紛れに幕府から減ばされては困るといふのが、何れかといへば上杉家に取りより多く重大の事で、同家の重臣の心配したのは寧ろ其點にあつた。上杉家の主人が赤穂義士亂入の晩、吉良家應援の爲め兵を出さうとしたのを、千阪兵部が苦諫したといふのも、畢竟その卷添を恐れた爲めであらう。普迪世間に傳はつて居る話

に、吉良上野介は義士の復讐を恐れて本所の邸を拔出で、徳川頼倫侯の邸であつた麻布飯倉の上杉家へ移らうとした、若し復讐が今一週間後れたならば吉良は最早上杉家へ移つてしまつたあとであつたのだといふ。處が實際は吉良が上杉家へ移つて來ては復讐の面々が其處へ押寄せて來ないとも限らぬから、上杉家では内實大に當惑し、家の普請をするから暫らく待つて貰ひ度いといふやうなことにかこつけて段々日を延ばして居たのだといふやうに傳へられる。何れかといへば此の方が事實に近い説であらう。

此の義舉について一番大切な眼目は何かといふに、折角襲撃しても其の邸が抜け殻であつては證も無いことであるから、目ざす敵が果して在宅であるや否やを確かめる事であつた。それにつき、茲に近頃面白い事實が現はれた。それは或る高名なる學者が此の大切な役目を勤めたといふ事實である。是れ迄の俗説では赤穂の義舉につき俳人寶井其角が豫め當夜の事を知つて徹夜に其の消息を窺つたといふ名高い話がある。それも事實ではあらうけれども、此の復讐を全うする駆引には別段關係が無い。最も重大な役目を勤めた高名なる學者といふのは即ち荷田春滿である。是は強ち人の知らない事實では無く、福本日南氏の元祿快樂錄などにも此の事實

が出て居る筈だが、併し其の證據といふものは是れ迄現はれて居ない。然るに茲にありくと其の事についての記録が出て來た。それは弘前に大石良雄の何代目かに當る人が現存して居る。矢張り大石姓を名乗つてゐる。其の家には大石家の系圖も傳はつて居り、當時の手紙や日誌の類など多く存在して居るが、其の記録の中に明らかに春滿の手引したことが載つて居る。但し名が羽倉齋とあり、或は單に「齋」とも記されてある。處で此の羽倉齋が即ち荷田春滿のことであるとは、此の記録を持つて居る大石家でも氣付かなかつたのを、段々詮索した結果、それが確かに春滿であることが判明した。全體春滿は京都の伏見の稻荷神社御殿預正五位下羽倉主膳正信證の子で、通稱を齋宮と云つてよく齋の一字を用ゐましたから、羽倉齋とあれば春滿であることは疑ひが無いのである。私は其の記録の寫しを所持してゐるけれどもそれを載せるのは繁雜であるから略するが、其の荒筋を云へば、元祿十四年十二月十三日の處に、羽倉齋が大石の一族である三平といふ者を呼んで、上野介在宿であることを知らせた。それで早速其の三平から堀部彌兵衛などに知らせ、同志相談の結果、愈々十四日討入と決定したといふことが明らかに録されてある。之れが即ち春滿が赤穂の義舉に参加した確證である。春滿は日本の國學

者の祖で、其の門下から賀茂真淵が出て、それより續いて本居其他の學者の輩出したことは何人も知る所であるが、其の人が元祿の義舉に最も重大な役目を勤めたのである。

二二二 昔の新らしい女

昔し漢學の盛んであつた頃には矢張り其の感化で婦人にして男子を凌ぐ程の文才を有する者も稀に現はれた、文苑に其の名を知られた原采蘋女史も其の一人である。采蘋は九州の醫者の娘で、其の父を古所と云つた。當時の醫者は概ね相當の學者で、多くの場合家塾を開いて門生を養うて居た。此の采蘋はさういふ家のお嬢様で、容貌風姿他にすぐれ、人の目につき易い美人であつたが、其の氣象は全く男まさりで、詩を作れば秀句口を衝いて出で、常に塾中の男生を壓して居た。其の態度も女の態度では無く、塾生の居る所へ出掛けて行つて、或は胡坐をかき、或は股もあらはに立膝をするといふやうな態度に、塾生達は寧ろ辟易して、どうもあなたにはかなはん、若い者の前でさういふ事は困りますと小言を言つたといふ位である。此の婦

人、ある時何れかへ外出した。別に侍女も伴はず、一人で出掛けたが、ある山林を通りかゝると一人の賊に遭つた。此の賊采蘋を見て頻りに何か奪らうとするけれども、ほんの假初の用達に出掛けたので何物も携へて居らぬ。さりとて此の儘手を空しくして立去る事も出来ぬので、せめて女限りの持物だけでもよいから何とか私の顔を立て、呉れと迫つた。處が采蘋ハ、アと合點して、いきなり前を捲つてこれかと云つたので、賊の方ではあまりの大膽な態度に却つて驚き、こいつ柔術の手を知つて居るナと早呑込をして、遂に犯すことなく立去つたといふ逸話を残して居る。此の人の詩は多く残つて居るけれども、世に刊行されて居ない。其の詩の中には男女間の事を臆面も無く、赤裸々に詠じたものなどもある。或る九州の知人の話に、采蘋は癩病系の家に生れた爲めに、終生遂に配偶を得なかつた、その非常な美人であつたといふのも矢張り一つは此の病氣の然らしめた所であらうと云うた。

二三 若木の下では笠をぬげ

今ではあまり言はぬ諺であるが、甚だ意味のある昔の諺に「若木の下では笠を脱げ」といふのがある。其の意味は、まだ成長しない小さな木でも、相當の敬意を以て之れに對せねばならぬ、今こそ誠に弱々しい木ではあるが、焉んぞ知らん、後には追々に成長して大木となり、遂には亭々として雲を凌ぐ偉觀を呈するやうになる、さう考へると無暗に之れを侮つてはならぬといふのであるが、是れは必ずしも木にのみ限つたことで無く、人間について見ても、若い者だと云つて侮つてはならぬ、所謂後生畏るべしであつて、今日は一介の青年で大したことは無いにしても、後日天下に聲名を馳する俊材傑士が此の若い人達の中から出ないとも限らぬといふやうな意味もあり、甚だ意味の深い諺であつて、今日の世の中にも適切であるやうに思はれる。

二四 昔の醫者の禁裏拜診

昔し高貴の方を醫者が診察するについては、色々かしい宮中の掟があつて、甚だ面倒なものであつた。故大隈侯の話に、明治の大醫として知られた、佐藤尙中翁が時々宮中に召された

が、昔からの掟で、至尊の御脈を拜診するについては、匍匐して玉體に近づくといふのが例になつて居た、然るに翁のいふには、一體人間といふものは立つ動物である、それを如何に至尊の御前なればとて殊更に不自然な匍匐の態度を取るのには、禽獸の眞似をすると同じいとて、之れを肯んぜず、至尊も苦しくないといふやうに仰せられて、遂に匍匐を免かれたといふことである。

是れは明治になつてからの事だが、ずつと昔に溯ると、中々匍匐どころでは無く、侍醫の外は至尊の御居間に入ることさへも許されなかつた。天正、慶長の頃名醫の聞えのあつた曲直瀬道三が、當時の至尊を初め、將軍家其他有名なる武將、學者等を多く治療して居るが、此の人の書いた醫案が「醫學天正記」と名づけられて世に残つて居る。是れには諸名家の病症がいろいろ書かれてゐる、加藤清正が酒の飲み過ぎで病を得たことや、淀君が氣鬱病にかつたことや、片桐且元の妻が淋病を病んだことや、其他著名な武將で唐瘡たうざき即ち今日の梅毒に罹つたもの多かつたことなど、色々面白い事實が録されてある、其中に當時の醫者の禁裏拜診の模様の窺はれる記事がある。即ち至尊の御惱重らせられ、宮中に居る多くの醫者が手を上げてしまつた時、平生宮中に入り得ない町醫者を召された。此等の者は當時の掟として至尊の玉體に近づく

くことが出来なかつた。然らば如何にして拜診したかといふに、戸外に坐して、戸の隙間から遙に御様子を拜察するのみで、世にいふいんみやく絲脈なるものに近いものであつた。又慶長三年九月一日に、皇上俄に眩暈を催はされ、多くの侍醫が手を盡したけれども其の效なく、十一日夜半に御危篤に陥らせられた。そこで道三が召されて、その治療功を奏し、十一月半ば頃迄に御本復遊ばされたが、道三は其間には是非灸點を用ゐなければならぬと再三申し述べたけれども、九條、一條、其の他の公卿達は、先づ舊例を調べた上にとて色々取調べ、終に其の例がないというて許されなかつた。其れより三年の後、再び同じ御惱のあつた時、又も灸點の事を申上げたが、今度は初めて許された。それ以來灸點を施しても差支へないといふ先例が出来たのである。斯様な譯で、當時の醫者が宮中の慣例に拘束せられ、施すべきことも施すを得なかつた趣が能く察せられる。

二五 伊達家の法帖の由來

仙臺の伊達家に王羲之の書いた孝經の法帖が傳はつて居るが、その來歴が面白い。此の法帖は昔文祿の朝鮮役に王城に攻め入つた際、細川家の家臣が分捕つたものである、當時武將の中で文學趣味のあつた伊達政宗がそれを見て、欲しいと思つた、しかし細川の家臣が得たものであるから其れを横取りする譯にも行かず、徒らに指を唾へて羨ましがつて居たが、何分日を経れば経る程垂涎の情が増す許りなので、遂に其の法帖を手に入れたい許りに細川家と姻戚の關係を結び、是非あの帖を割愛して貰ひ度いと懇願に及んだ。處が細川家でも王羲之の書といふので、餘程大切がつたものと見えて、全部は與へず、之れを兩分して半分を残し、一半を政宗に與へた。之れが抑々王羲之の孝經の法帖が半分丈伊達家に歸した由來である。

扱て政宗は兎に角名帖の一半を得て聊か渴を醫したが、他の一半が又伊達家に歸するやうになつたのは政宗が歿してすつと後のことで、不思議の因縁から遂に完璧を得ることになつたのである。それは名高い伊達騒動の擧句、義村といふ人が伊達家を繼いだが、此の義村が、幕府の殿中にて細川侯が殺害されたといふ椿事出來の際に偶々殿中に居合はせた、さうして殺されたと見ると、逸早く細川侯を介抱し、人の見ない中に直に自分の駕に乗せ、不取敢自邸に送り、

表面は卒中で倒れたと吹聴した。いふ迄も無く當時幕廷に刃傷の沙汰ありて血を以て殿中を汚すものあれば、其の家は滅びる掟である。義村は伊達、細川兩家が以前から縁つゞきである關係より、臨機の取計らひで直ちに斯様な恫巧の手段を取つた、それが爲め細川家は別に幕府の咎めも受けずに、無事なるを得た。一體義村は久しく民間に居つたゞけに、所謂世の中の酸いも甘いも噛み分けて、頗る世故に通じた人で、随つて咄嗟の間にかゝる才略を出したものである。尙ほ今一つの言ひ傳へがある。義村は苦勞しぬいた人で、他の諸侯とは違つて何でも金ほど大切なものは無いと感じ、如何なる場合にもいくらかの小判を懐中にするのを忘れなかつた。此の日も無論平生のごとく小判を懐中して居たが、細川侯の屍體を運ぶときに、鮮血が疊の上に斑々たるを見て、懐ろから小判を出し、一々其の血潮の上に置いて、それを隠しながら屍體を運ばせた。いふ迄もなく何人にもあれ、此の血潮を片付ける者には小判をやるといふ謎である。斯様な機宜の才略で細川家の安泰を得た爲めに、同家でも伊達家を深く徳とし、後に多くの禮を贈つたが、其の時舊臣のうちに昔政宗公が王義之の孝經を頻りに欲しがられた事を記憶して居るものがあつて、細川家に保存してあつた法帖の半分をも其の禮の中に加へて贈る。

ことになり、茲に初めて伊達家の孝經は完璧となつた。

此の法帖の刻本は兎もすると坊間にあるもので、且つ王義之の書とはいふけれども、事實は甚だ疑はしく、今日の研究ではそれを正しいとはしないものであるが、しかし當時に於ては之を正しいものとして、朝鮮の王室でも非常に大切がつたものと見え、色々の名家の題跋も添はつて居る。物は格別のものでは無いが、その半分づ、手に入れた経路に、頗る興味を感じしめるものがある。序でにいふが、細川侯が殿中に殺害されたのは人ちがひの爲めで、同じ九曜の星の紋所の他の諸侯を覗つて居たものが、偶々紋の同一なる所から、誤つて細川侯を刺すに至つたものである。以上は館森袖海氏から會つて聞いたまゝ、をしるす。

二六 節用集の功德

昔し蒙者の爲めに一種の字引があつた、それは節用集と呼び慣らされ、頗る重寶な工合に作られたもので、單に字を知るのみでなく、凡そ何事でも日用必須の事は悉く書き集められ、い

は、極めて小規模のエンサイクロペディアともいふべきものであつた。その一冊を持てば大抵の事は間に合つたわけで、たとへば日本の年號とか、歴史の大略、色々な禮式、甚だしきは男女の相ひ性の事まで録され、字も日常使ふ字を楷書で書き、その傍らに草書の書きぶりも教へてある。明治になつてからも此類の字書はやはり重寶がられたもので、博文館で明治節用と題する可なり大きなものを出したことがあつた。私は或る友人が外國へ行く時に、思ひついて此の節用を一冊買つて贈つたが、其人は十三年間歐米を廻つて、歸朝後、それが非常に役に立つたと禮を云つた。

是れは今日でも猶ほ節用が重寶なものであるといふ一つの實例であるが、茲に節用が非常に役をなした一話がある。「南漂記」といふ書——寛政九年の或る月、日本の船頭清藏といふもの、海上南風に逢つて吹流され、遂に安南に漂着したが、その船頭たちの實話に依り安南國の色色な事情を書いたものが此の「南漂記」で、餘り外國の事情を詳しく書いたといふので、當時絶版されたものである。此の清藏並に他の船乗は、いふ迄も無く眼に一丁字の無い人物で、日本^の事についても何も知らず、日本の文字も陸々知らぬ位であるから、まして面倒な漢字などを知らう筈がない。さういふ者が異國に漂着し、久しくそこに滞留した間の不自由さは洵に思ひやられる。が、此の清藏の一つの心掛に、船に乗る時は必ず節用集を携帯し、此の度も石の巻から出帆するに當り、「和漢節用無双袋」並に「大々節用萬字海」といふ二冊の節用を携へて居た。知らぬ土地へ漂着して、何か物を言はうとしても言語は勿論通せず、物を求めるにも頗る困難であつたが、此時にこそといふので、二冊の節用をひねくり廻し、皆々總が、りて必要の字を調べる、無學の人たちが其れを調べる困難も察するに餘りあるが、文字の徳は有難いもので兎に角一通りの用事は之れで足りた。たとへば水が欲しければ水といふ字、腹が減れば米といふ字を調べ出して、それを書き示せば安南の人も理解して、必要の品を給するといふ有様で、不自由のうちにも非常の便利を得た。

扱て一同は久しく安南に滞在して居たが、其の間に親方の清藏も死し、他の船乗にも死んだものがあつて、残る所は幾人かの仲間と、大切な節用二冊となつた。生存者は、此の二冊の本を我々の命を助けた何よりのかたみだに珍重して居たが、滞留久しき間には安南國の通譯なども來て、自然に此の本を見るやうになつた。巻を繰つてみると、彼國の人にはすべてが奇異に感

ぜられ、別けて男女の相ひ性の事などは頗る不思議に感じたらしく、又日本の女の風俗繪にも大に興味を感じ、有名な武將などの圖の澤山あるのを見ては、日本には逆もかなはぬと閉口の態を示すなど、兎に角是れは珍書であるといふので大に評判になり、お前達の國へ歸る時には非國王に獻じて行つて貰ひ度いとまで言つた。それで大切な本ではあるが、色々厄介になつたことだからといふので、愈々歸國の時に王城へ暇乞に行き、國王に謁見の時、其の一冊を獻上した。それより歸りがけに左甫といふ所迄來ると、こゝにも此等の人間を取扱ふ官人が居て、残る一冊の節用を見て頻りに之を珍重がり、是れも亦是非にと懇望するので、止むを得ずそれを残して來た。當時日本との交通の極めて不便な異域に漂着し、數年の久しきに亘つて滞在し、其の間不完全ながら用を足し得たのは、全く此の節用の御蔭だといふので、彼等無學の者らも今更らのやうに文字の功德の偉大さを感じ合つた。つまりぬ俗書も、イザ人間死活の場合になると、其の用を爲すことが絶大であることを感ぜざるを得ぬ。

二七 華山の俳畫論

渡邊華山は近世に於ける天才畫家で、行く處として可ならざる無き縦横の才を有した。山水でも、人物でも花鳥でも、苟しくも其の筆に上れば、必ず群を抜いた。傍ら俳畫にも時々筆を染めたが、之れが又一種の風韻を備へて、藝苑に珍とされるに至つた。

此の人の俳畫論といふものを見るに、簡單ながら甚だ要を得て居る。その大意は、俳諧畫は唯だ趣を第一義とする、元祿の頃一蝶、許六などあるが、風韻は乾山などがまさる、此の風流の趣は古い所には無く、瀧本坊、光悅などが始まりであらう、立圃の畫も見事で、近頃は蕪村一流を始め、面白く覺える、全體俳諧畫を描くには、面白く、器用に書かうといふ心掛が最も悪い、その反對に出来る丈け悪しく書くことに力むべきである、之を人に譬へていふと、世事に賢く、抜目が無く、起居振舞、物の言ひ様のよいのは悪しく、世の中の事にうとく、且つ訥辯で、質朴であるのが風流に見えるものだ、俳畫を書くには此の按排をよく呑込まねばならぬと

いうて居る。俳畫といふものは、いふ迄もなく俳諧が其の背景となつて居るものだから、その調子が自然に俳諧に調和するもので無ければならぬ、華山の論は極めて味ふべきものだ。

二八 銚子に残れる華山の戯畫

下總の銚子は多くの文人が遊んだ場所であるが、曾て渡邊華山も此の地に遊んだ爲めに其の作品が間々同地方に在る。華山の行つた時分偶々此の地に祭禮があつて、年々の例として戸々に燈籠を立てることになつて居た。其の燈籠には夫々何か畫を書く譯であるが、田舎のことだから畫家などいふものも無く、すべて其等の事は提灯屋の仕事になつて居た。どうせ提灯屋の畫であるからい、加減のものたるはいふ迄も無いが、それでも張つたり書いたりしなければならぬのでなかく、忙がしく、手が及び兼ねる有様であつた。折柄華山が此の地に遊びに来たので、其の宿をした何某の家では、之れが有名な華山先生とは知る由も無かつたが、唯畫を書く人といふことだけは分つて居たので、件の提灯屋に向つて、私の家には江戸から畫を書く人が

來て泊つて居るが、助けて貰つてはどうかと話した。提灯屋は喜んで、早速華山に助勢を依頼すると、華山も面白がつて、宜しい、いくらでも書いてやると、匆卒に筆を揮つたが、其の用筆の速かなること驚く許りで、見て居る間に十五も二十も出來た。提灯屋は畫道の心得の無い者ではあるが、書かれたものを見ると、いかにも筆力が縦横で、滑稽諧謔の味ひがあり、人をして妙を呼ばしむる趣があるので、大に感心し、多くある中に一番氣に入つたものを自分の家に立てる燈籠に張り込んだ。今日残つて居るのは其の提灯屋に藏してあつたもの丈で、銚子の名物の一つになつて居る。其の畫は頗る滑稽を弄したもので、紙は西の内位の大きで、一人の婦人が寢床に寐て居る、其の傍らに一人の男が身を片寄せて行燈の火を消さうとして居る圖である。其の火を消さうとする身體の工合など如何にも眞に逼つて、筆力が活動して居る。

尙ほ今一つ華山の筆として残つて居るのは、同地に別莊を御所有遊ばす伏見宮の御所藏にかゝるもので、是れは燈籠に貼つたもので無く、戯畫ながら一つの掛物になつて居る。其の圖は鬻女が海に投げようとする利那の光景で、腰に纏うてゐる湯巻が風に煽られてさつと捲れて居るあたりに筆力が見えてゐる。もと土地の某家で珍藏して居たのを、故大宮殿下が御覽になつ

ていたく興を覚えさせられ、遂に御懇望になつて、宮家の御愛藏品となつたものだといふことである。

二九 婦人の決闘

西洋では誰も知る如く封建の遺風として決闘デュエルといふ風習が久しく遺つて居り、法律も全く之れを度外に措いて傍觀したやうなことが長かつた。つまり男の一分が立たぬといふやうな場合に、相手と決闘をして是非を決するのであるが、其れには矢張り相當に式があつて、たとへば介錯人を立てるとか、或は何の武器を以て闘ふとか、卑怯の振舞があつてはならぬとかいふ事を定め、いつ何日何處をここに於て仕合をするといふ順序になる。勿論是れは命懸けの仕合であつて、單に型計りを遣るのでは無い。さういふ風習がツイ近頃迄獨逸あたりの學生間に行はれて、其の決闘に於て勝を得たり、或は傷を負うたりすれば、却つて名譽として世間から持囃されたものである。近頃又聞く所によれば往々飛行機、飛行船等に於て一種の決闘のやうな事が

行はれるといふことである。成程空中には法律が無いから、大空に於て斯様な決闘をやつた處で、それを如何とも仕様の無いことであらう。

日本の戰國時代に於て、男子間に之れに近い事あつたのはいふ迄も無いが、茲に其の時代の遺風として婦人の間に決闘に似たやうな事が行はれて居たのに稍々興味を感じる。寶曆頃の人で八十の齡を重ねた新見某といふ老人が「筆のすさび」に書き残した記録によると、たとへば妻を離別して間も無く後妻を迎へると、其の別れた妻から必ず決闘に似たやうなことを申し込む。之れを名づけて騷動打さわどうだといふのであるが、こゝに面白いのは此の騷動打を計畫するのに、男子は決して與らず、女同士にて一切の事を定めるのである。そこで身分によつて十人、二十人、多きは三十人、五十人といふやうな女の戰士が出来て、大體の準備が整ふと、新妻の方へ使を出すのだが、此の使の役丈けは男子が勤めることになつて居り、身分によつては家老が使者になつてゆく。其の口上は、御覺も之れあるであらうが、何月何日の刻に騷動打に罷り出る、持參の道具は何々として（棒、竹刀、木刀の類）豫じめ通告する。さうすると先方でも相當の男の家來が出て之れに挨拶する。或は承知いたしたと云つて直ちに承諾することもある。

り、或は事によると誠に相済みませぬと詫をいふこともある。しかし當時の風習として斯様の詫言を云つて避けるのは一生の耻辱として世の指弾を受けることになつて居たから、多くの場合合宜しいと云つて承諾するのが例であつた。男子の携はるのは唯だ之れ丈けの事で、其他には一切關係しないのが慣例であつた。扱て其の日限になると、離別された妻は大将といふ格で、乗り物に乗つて大勢を率ゐて進む。配下の女どもは或は袴を穿き、或は纏をかけ、或は髪を亂し、或は鉢巻をする等、何れも扮装甲斐々々しく竹刀又は木刀を携へて、駕に付き従つて押寄せる。そこで相手の家へ到ると、先づ門を開かせて必ず臺所口から亂入するのが例となつて居る。さうして鍋、釜、茶碗等の臺所道具や、障子、戸棚などを當るを幸ひに打壊はし、散々の光景を現出する。其の内に仲人が現はれて調停を試みるといふ段取になるのであるが、此の仲人になるものはや、年を取つた女で、それが兩方の側から現はれて色々辭を盡して仲裁し、それで騒動が納まるのだ。此の騒動打に仲人となるものは多少手腕の要ること、見えて、始終仲人に頼まれて行く専門家らしい者もあり、此の新見老人の話中にも、八十許りの女が諸所の騒動打に頼まれて一生涯に十六度び仲裁に出掛けたとある。かういふ風習は徳川氏の初期迄存し

て居たものと見え、百年以來此等の事は全く絶えてしまつたと此の老人は語つて居る。

要するに此の風習は、騒動打或は後妻打おぼせうちというたが、矢張り決闘のやうな形のもので、離別されてから一ヶ月も立たぬ中に後妻を迎へるのを、先妻に對する侮辱なりとし、之に對し復讐を行ふ譯である。それが前以て日を打合せ、或は携へて行く武器を通告する等の事は、全く決闘の趣がある。但し是れは唯だ形式を取るのみで、敢へて殺傷することき慘事を仕起すので無く、臺所道具を打壊はす位のこと、結局仲裁者が現はれ落著するといふあたりは、婦人丈けに柔か味があつて、男子間に行はれる決闘とは此點に於て違ふが、先づ大體に於て決闘に近い風習と見るべきものだと思ふ。

尚ほ以上の婦人の決闘に似たことが吉原にも行はれた。これは嫖客を奪はれた遊女の復讐で、嫖客を取り返すため双方で嫖客を取り合ふのであるが、之れを踏み合あひあというた。寛永以來の習慣で、享保十八年名主の發議で娼家全體と遊女の總體が申合せて停廢されたが、此の踏み合も一人對一人でなく、双方共身方が大擧して打合ふのであつた。

三〇 舞臺装置の變遷

最近西洋の芝居に行はれて居る舞臺装置の事について、聊か語ることがある。西洋の芝居も東洋と同じく、昔は極めて粗朴なものであつたが、段々寫實に重きを置くやうになり、中にも舞臺装置は、頗る寫實的になつて、たとへば王侯貴人を現はす芝居に於ては、舞臺に宮殿を築かねばならぬといふ程に迄なつた。従つて非常の費用を要し、舞臺装置のみでも巨萬の金がかかるので、どうしても其の反動が起らねばならぬ譯であるが、最近に至り之れが反動とも目すべきものが現はれて來た。その一つは劇といふものは斯様に寫實的にやるべきもので無い、劇の眞味は自ら別にあるので、寫實が必ずしも劇の極致で無いといふ説が起つた。此の説に従へば王侯貴人を現はすに必ずしも宮殿を作らねばならぬといふことは無い、却つてそれは劇の本來の性質から見ても可けないことになる。又今一つの反動は時勢の關係から起つたもので、大戰以來世界が非常に民衆化し、藝術の如きも餘程民衆的になつて來た、芝居の如きも、當然之れ

に伴はねばならぬものであるが、今日の如く、一回の舞臺装置にも巨萬の費用が掛るやうでは劇場は單に貴族富豪の歡樂場たるに止まり、一般民衆は之れに參することが出来ぬといふのである。以上二つの反動的思想から歐米諸國ではずつと昔行はれた粗朴な舞臺装置に戻るやうな風が見え初めて來た。流石に英國だけは、保守的の國柄として、未だ此の風が一般に行はれる様になつたとは云へぬが、米國の如きは戰爭中既に此の事に氣が付いて頻りに舞臺研究を始め、露西亞の如き爭亂の絶え間の無い國でも矢張り其の研究を怠らず、其他の歐洲諸國何れも舞臺装置の改良に苦心して居るといふやうな譯で、今日では大戰前に比し、よほど其の装置が變つて來て居る。

然らばどんな風に變じたかといふに、舞臺の爲めに大道具大仕掛の装置を爲すが如きことは殆んど止み、且つ演劇を必ずしも劇場といふ特定の場所のみに限定せず、たとへば寺や、公會堂や、又は天幕張りの見世物小屋等を應用し、そこに聊か芝居に要するだけの設備を加へて、それを劇場にするといふ風になつて來た。極めて大なる建物などを應用する時には、日本風の屏風を立て、之れを仕切り、且つ其の屏風が直ちに背景になるやうに工夫し、今迄のやうな寫

實萬能主義は全く廢つて、多くは役者の仕草しきさによつてその物を現はすことになつた。たとへば物を食ふにしても、従前は必ず食物を陳列するといふ寫實的のものであつたが、今はさういふ些細な事はたゞ仕草によつてのみ現はす風になつた。此頃も其等の舞臺装置の事を書いてある色々の書物を見たが、中に興味を感じたのは、人を牢に入れる場合に、以前の寫實時代ならばやはり實際の牢獄に形どつたものを作つたものだけに、今は大きな籠のやうなものを置いて、牢獄に擬することになつて居る。此の事に面白いのは、日本の能で、土蜘蛛つちぐもなどを入れる時に矢張り籠を用ゐてゐる。さういふ器物を能の方では作物つくりものといひ、又此の籠のことを籠屋ろうやと言つて居る。それはロウは牢に通ずるのであつて、籠を以て牢に擬するのは其處から來て居る。西洋に於ては既に日本の能の装置をいつしか取込んで居るのである、即ち言ひ換へれば日本の作物を舞臺に上せ、之を以て實物に擬して居るのである。又前に話した屏風で仕切つて、それを直ちに背景とする如きも、矢張り日本の能を學んだものと言へる。其他調べてみたらば色々日本の能を學んで居ることが多いだらうが、茲にはあまり詳しく語る譯にゆかぬ。何にしても西洋の摸倣の仕方は日本の如く露骨で無い。たとひ摸倣するといつても之れをセオライズし、又

よく之れをアシミレートするから、その摸倣の痕跡が目立たない。現に米國は最も多く日本の舞臺装置を取込んで居る。露西亞は日本といふよりは寧ろ支那の方を取つて居る觀がある。毎々識者のいふことだが、日本は摸倣に巧な國で、何でも西洋の眞似をすることにのみ汲々として居るが、其の西洋が逆に日本のものを採りつゝ、あるに氣が付かず、却つて西洋人の捨てんとするものを採り、足許にある日本固有のものを閑却しつゝ、ある如きは、頗る笑ふに堪へたることだ。

三一 江川坦庵の家

伊豆の長岡温泉は近年開けた温泉で、よく人の行く所であるが、そこに到る者は何人も前面に葦山の江川太郎左衛門の作つた反射爐を望むであらう。之れが日本に於て初めて洋風の兵器を作つた火爐である。今では頗る頽廢して居るが、或る西洋人は若しその全部を譲るならば買受けて本國に持歸り、博物館に据付けたいと計畫したこともある。此の反射爐の附近に、それ

を作つた江川の家が今猶ほ残つて居る。此の家が江川太郎左衛門と共に有名なもので、其の或る部分は鎌倉時代の建築にかゝるものだが、それが儼然と今日迄存して居るのである。元來宮や寺で鎌倉時代の建造にかゝるもの、残つて居るのは珍らしくないが、個人の家で残つて居るのは珍らしい。それと併せて此家の有名であるのは、嘗て日蓮が此處に來たことがあると傳へられ、現に日蓮の書いた題目が墨痕淋漓として残つて居て、凡そ日蓮の流れを汲むの徒は、第一に身延山を訪うて、其の歸りには必ず此の家を訪ねることが例になつて居り、毎日々々幾十幾百の群衆がおとづれて來る、それに對し江川家では日蓮の眞筆を刻した御札を無料で頒與してゐる。

扱て此の古い建物は一體どんなものであるかといふに、其の玄關の入口が幾百年も風雨に曝されたやうな趣があつて、式段でも柱でも頗る老蒼の味ひがあるが、しかし此等は決して鎌倉時代のものでは無く、よほど後の時代に作られたものであらう。茲に鎌倉時代のものと明らか
に考古家が鑑定もし、又事實疑ふ可からざるものは納戸の方にあるので、それは昔し江川が新鑄組を組織して大に武を練つた當時、雨中などは此所で操練を行つたものと傳へられて居る。

なるほど其の規模はなかく、大きなもので、恰かも今の學校の雨天體操場の如く、全部土間になつて居て、天井張といふものも無く、直ちに屋根裏が見える。其の屋根裏の高さも非常なもので、よほど廣大な寺で、も無ければ之れに匹敵するものを見ない位である。其の建築は極めて素朴で、第一木材に匏などは掛けてない。其の他色々の點に於て鎌倉式の構造が仄めいてゐる。之れを見ると何人も一種の感興を催はさざるを得ないが、しかし如何に鎌倉時代と云つても、普通の民家として斯様に廣大な、天井の高い家屋を作るべき譯は無い。何れ斯かる建物を作るには何等か特別の必要があつての事だらうとは何人も想到する所である。そこで歴史家の研究が自ら其方に向けられるに至つたが、近頃になつて恐らく是れは酒屋であつたのだらうといふことに、ほゞ考證が定まるに至つた。といふのは鎌倉時代或は足利時代の文書を見ると、所々に江川酒といふ名を散見する。現に自分が銚子に行つた時、ある舊家に二三の古文書があつて、其の道の研究家と共に之を見たが、これも矢張り足利時代のもので、其の中に伊豆の江川酒を幾樽送るといふ意味の文字があつた。此の江川酒といふ名のあること、江川が伊豆で最も古い家柄であること、を思ひ合はせると、江川家では昔し酒造を業として居たことが窺は

れる。斯様に考へれば、前に言つた建物の馬鹿々々しく高い天井や、其處丈げが軍隊の操練も出来る位に廣く作られてあるのが全く醸酒の爲めであることも初めて分る氣がする。是はずつと古い時代の事であるから、江川家にも昔し酒造を營んだことは傳へられて居らぬらしい、つまり古文書から現はれた一つの發見であると思はれる。

江川坦庵は何人も知る如く、幕末に於て文武共にすぐれた英傑の士であつた。外國船が伊豆へ來た際、それに對する應接には必ず此の坦庵が當つたといふ程で、見識もあり、學問もあり、且つ武に於ても秀で、平生士を養つて居た關係上自ら相當の武力をも擁して居た。之れが爲め明治の新政府は内實甚だ江川を憚つたものである。それに付興味のある話がある。此の江川家の當主は英龍といふ人で、相當の年輩であるが、如何に人が訪ねて行つても決して面會せぬ、ところが幸ひに此人に面會した。それは自分の友人で日蓮の大崇拜者たる法學博士山田三良氏が此人の女婿であるといふ關係から、或年の正月二日だかに訪問した處喜んで出で迎へ、色々のことを語られた。其の話の中に維新當時の物語もあつた。英龍氏は當時十七歳であつたが、或時新政府から召されて、取調の筋ありとの事で白洲へ廻された。當時は尙ほ舊幕時代そ

の儘、白洲には石が敷いてあり、取調役は一段高い所に坐して威丈高になつて取調べ、被告人を呼ぶに「其方」といふ調子であつたのだが、此時取調の任に當つたのは木梨精一郎氏で、其の取調べの調子は非常に柔らかく、「其方は朝廷に對して別に異志はあるまいナ」といふ風であつた。そこで英龍氏は、朝廷に對して異志どころでは無い、自分の家は代々勤王の家であるというて段々其の事績を述べ立てた。取調役は其れを聞き了つて「宜しい」といふと共に態度一變し、どうぞこちらへ御上り下さいといふ。英龍氏は不審に思ひつ、躊躇して居たが、どうぞと言はれる儘證方なく上座に坐つた。役人は遙か下座に坐つて、斯く申す某は、嘗て新錢座に於て先大人の教を受けた木梨で御座る、初めて拜顔を得て如何にも御なつかしく存するといふやうな譯で、それより段々昔話も出で、今の新政府はまだ混亂中であるが、京都に居る桂小五郎を御訪ねになれば、決して悪くは取計はぬ筈であるというて、一封の手紙を認めて英龍氏に與へたが、其の時の光景は如何にも芝居が、つたものであつたと云ふ。此の木梨氏は後に長野縣の知事等もした有名の人である。

三二 茶山鵬齋邂逅談

菅茶山は中國で名高かつた詩人で、頼山陽の師であるといふやうな事はいふ迄も無い。又龜田鵬齋は同時代に江戸に於て名聲を馳せた大儒である事は、是れ亦誰も知る所である。此の兩人互に其名を知りつゝ、久しく相會することを得なかつたが、或る時偶然の機會で握手することが出来た。其の機會が如何にも奇であるので、當時文壇に於て之れを喧傳した。

自分は嘗つて此の兩人遭遇の景を畫にしたのを見たことがある。それは谷文晁の書いた掛物で、日本橋の中央に二人の人物が立つて互に喜んで居るさまを現はし、一方には遙か彼方に富士が屹立して居る、其の上方に鵬齋が詩を書いてをる。

身是關東醉學士。公是西備茶山翁。日本橋上笑相見。共指天外芙蓉峰。都下閩傳爲奇事。便人寫山畫圖中。

二人の文豪が日本橋の真中に出逢つたことが面白いと思つて居ると、計らず此二人が偶然出會した模様を詳しく書いたものを得た。それは茶山が江戸から國へ歸る時、伊勢の人で茶山の門人である河崎敬軒といふが、茶山に隨伴した、さうして其道中の事や、茶山が江戸滯在中の事などを録して一書を著はしたが、其中に今の出來事が詳しく書かれてあつて、茶山と鵬齋が其の邂逅の奇を長篇に詠じた詩も録されてゐる。興味のある出來事であるからといふので、敬軒が二翁に頼んで特に作らせ、當時茶山の塾の留守を預つてゐた北條霞亭に之れを送つたとある。二翁の長篇を茲に掲げることは繁雜であるから略するが、大要をいふと、其頃丁度或人の壽筵が日本橋の某酒樓に開かれ、當時の有名な文人墨客は悉く其席に列つた。鵬齋も勿論之に招かれ、例に依り痛飲淋漓の末、他に先立つて其の席を辭し、酔歩蹣跚として日本橋にさしかかつた。當日茶山も宴に招かれたのであるが、大分後れて出掛けたので、丁度鵬齋が日本橋に差し掛ると、橋上雜鬧の間に向うから一種仙骨を帯びた異相の老人がやつて来る。曾て見ない人ではあるが、是れは必定菅茶山であらうと直覺で判斷して、いきなり、あなたは菅先生では無いかと問うた處、茶山も驚いて、如何にも自分は菅であるが、さういふあなたは誰かとの尋ね。自分は龜田である、實はあなたの名も久しく聞いて居り、且つ昨今江戸へ來て居られる

ことも知らぬ譯で無い、併し色々多端で在られる所へ伺つて清暇を妨けてはならぬと遠慮して差控へ居つた次第である、誠によい折にお目にかゝつた、どうか此方へいらつしやいといふ様なことで、手を引いて今出て來た酒樓に再び行つてみると、まだ其壽筵に列した多數の文人が居る。そこで鵬齋は一同の者に茶山を紹介し、且つ日本橋の上で偶然邂逅した始末を語つたので、座中の面々は非常な興味を覚え、一時に其の話が藝苑の珍談として響き渡るに至つた。茶山の詩の一節に「陌上憧憧人馬間、瞥見知余定何緣、明鑒邵勝楮李野、歷相始得孟萬年、拏手入筵誇奇遇、滿堂屬目共歡然」といひ、鵬齋の詩の一節に「陌上醉認骨相奇、云翁得非西備某、援手共上市中樓、披膽頻勸三盃酒」と云つて居るのは、共に其の奇なる邂逅を敘したものだ。

この事を河崎敬軒が面白いと感じ、自分は幸ひ文晁と心易くもあるから、國への土産に兩人邂逅の圖を書いて貰はうと、文晁に依頼して筆を揮つて貰つたのが即ち冒頭に話した圖であつて、鵬齋が之を見て興に乗じて題贊を試みたのが前に引いた詩である。敬軒は其の紀行中此の事を録して、是は正に江戸土産中の第一に位するものだと言つて居る。

三三 不思議の菌

紀州和歌山に可なりに大きな或る倉庫會社がある。その會社は印度の綿を多く取扱つて居て、倉庫にはぎつしり綿が積まれてある。倉庫内の品物をすつかり取出すなどいふことは滅多に無いが、ある時全部の綿を取出した。さうして倉を掃除してみると、其の隅につひぞ見慣れない菌が生えて居る。是れは日本には曾て見ない菌だが、或は調べてみたなら面白いものであるかも知れぬと云つて、幸ひ紀州には南方熊楠といふ本草學者が居るので、其人に見せた。南方氏は非常に博覧の人で、日本の事は勿論、世界中の事殆んど知らぬものは無い位だが、扱て此の菌を見て少々閉口した。流石の先生も曾て見たことの無いものなのである。段々研究してみると、或る印度の書物に一種の菌の圖が出て居る。それは人間の陽物の龜頭の形に酷似したものであるが、今の倉庫の隅に生えた菌も非常に其圖に似たもので、矢張り同様の形をして居る。彼れ是れ研究の結果是れは印度に於ける一種の菌で、その種子が綿に附著して來て、ある

氣候の作用により發生したものであらうといふ事になつた。それから更に歩を進めて佛教の書物杯を調べてみると、其の菌がどうも佛典中にある菌と同様の物に思はれた。佛典の中に、釋尊が或る者に命じて、何處其處へ行くと斯くくの菌があるから其れを取つて來い、併し其途中若し女人に會ふ様な事があらば決して之れを見せるな、必ず丁寧に隠して來いと嚴かなる命を傳へたといふ事がある。それは此の菌は非常に婦人の淫慾をそゝるもので、苟くも其の匂を嗅ぐと如何なる婦人も直ちに恍惚として淫交を欲してやまぬといふ位に猛烈なものであるから、佛が特に斯様の注意をした譯である。その香は恰かも牛旁のそれのやうだといふ。南方先生は何事にも熱心な研究家であるから、その實否を實地に驗めしたところ、果して效驗があるので、てつきり是れは佛典中にある印度特種の菌であると斷じたと聞いてゐる。

三四 草 双 紙

日本の小説は極めて古い時代から相當に發達して居たものであるが、しかし古代に於ては殆

んど貴族の間のみ讀まれたもので、民衆的に小説の讀まれるやうになつたのは、すつと下つて徳川期に入つてからのことだ。即ち版木といふものが盛んに行はれて、文章や挿繪を木版に彫つて廣く一般に流布するやうになつてからのことだ。其以前に於ては文章も繪も書いたものであるから、中々一般に及ぶ譯が無く、先づ貴族階級に限られて其れが讀まれたに過ぎなかつた。従て其小説が如何に傑作であつても、低い階級に對しては殆んど何等の文化的感化をも與へなかつたのは當然である。それが木版の作用に依り廣く一般民衆に及んで、女子供も小説を讀むやうになつたのは、日本の文化史上に特筆すべきこと、云つてよい。

今茲に言はんとするのは特に草双紙についてであるが、是れは今いうた民衆的小説の最も熟した時代の産物である。今日は草双紙の如きは殆んど高閣に束ねて見る人も無い。少しも漢字を交へずに、假名ばかりで、句讀も切らず、風のやうな小さな字を紙の全面に書き列ねたものを今讀むのは、頗る面倒なことである、従つて若い人達には、殆んど草双紙を知らぬ者もあらう。が、徳川時代に於ては、此の草双紙が種々なる著述家の手に依つて作られ、江戸は勿論、廣く全国に行はれて、民衆的文藝として驚くべき勢ひを有して居たのである。其の最も隆盛の

時期を代表し、且つ草双紙の作者として最も有名であつたのは柳亭種彦である。種彦の草双紙には何人も知る田舎源氏を初め種々のものがあるが、此等の著作は正に一世を風靡するの概があつた。當時曲亭馬琴は八犬傳其他の大作に名聲を馳せたが、どうも一般の評判は馬琴に無くて寧ろ種彦にあつた、それで馬琴の本を出版し又は販賣する書肆が時々馬琴に向つていふには、先生もえらいが、世間では種彦先生の物を中々持離して居る、畢竟種彦先生の作は書き方が通俗的で、殊に艶つぽく、分りがよいからであらうと吹掛けた。獨り書肆のみで無く、馬琴の友人で、其の作の出る毎に批評したと云はれて居る殿村篠齋の如きも、頻りに種彦に感心して、あなたもあれを餘り度外に置いては可かぬと注意した位である。そこで傲岸の馬琴は、ナニ俺にだつてあれ位のことは出来る、負けぬ氣になつて非常に艶つぽいものを書いたのが、例の美少年録である。しかし馬琴の持前の學問を銜ふ風はこゝにも付き纏うて、小説家の本領を離れ、兎もすると長々しい考證を擔ぎ出すので、やはり一般の受けは種彦にあつた。

そこで草双紙に就て少しく考へて見ると、之れが其の當時に於てよくも工夫されたものだといふ事を今更ながら感ずる。文體は必ずしも言文一致では無いが、殆んど其れに近いもので、

全然漢字を用ゐず、假名のみで、極めて幼稚のものにも理解の出来るやうに書いてある點は、よほど民衆的の味を持つて居る。又草双紙の今一つの特長は、半ばは繪を以て目に訴へるといふ趣向で、各頁に互つて繪が挿まれ、それを見れば大凡その意味が了解されるやうに工夫されてゐる。順々に紙を繰つてみると、次の頁は前の頁と畫面が直ちに接續する様に出来て居り、何百枚はぐつて見ても、其の経路が一目瞭然と分るやうに筋を追うて描かれてある。斯様に何十冊、何百冊の長篇でも、初めから終り迄其れを翻して行けば、文章を読まずとも略々其の大意が分る位に細密な繪を掲げてある有様は、ちやうど今日の活動寫眞を見るやうな味ひがある。況んや其の本文の妙味に至つては、とても今の活動辯士の類では無い。固より作者にもよるが、種彦の如きは、相當の學問もありながら、敢へてそれを振廻はさず、極めて通俗的で、しかも濃艶無比の文字を驅り、具さに世態人情の機微を穿つた點は、全く今日讀んで見ても三嘆の外は無い。あの位柔か味のある圓轉自在の文章は、古今の文學に於ても稀に見る所であると思ふ。

草双紙の挿繪に就ては尙ほ少しくいふ必要がある。當時の小説は繪に重きを置いた、勿論作

者の見識からいへば繪はお伴に過ぎぬと考へたのであらうが、一般の讀者は先づ第一に繪を味つたものである。少なくとも繪が作者の言葉を非常に助け、ある意味に於ては文章以上の働きをしたのである。當時は小説のみならず、一般に繪を入れることが大流行で、狂歌の本でも、俳諧の本でも、立派な大家の繪が挿まれてあるものが少なくない。勿論狂歌の本ならば狂歌が本位で、繪はただ景物といふつもりであつたのだらうが、今日では其本を買ふ者は繪の爲めに買ふので、肝腎の狂歌は寧ろ邪魔になる位に考へてゐる、それだから當時北齋の如き、自分の伎倆を信ずることの深い畫家になると、中々作者に負けて居らず、一體君の本の賣れるのは文章の爲めで無く、俺の繪の爲めだなど、揚言して、屢々作者と喧嘩したこともある位で、畫家の鼻息が頗る荒かつた。

實際、畫家の威張るのも道理で、此の挿繪については非常に骨の折れたものである。別けて草双紙に於ては最も苦心を要し、一頁毎に連続した人物、或はその人物の行動を現はしてゆくといふことは、中々容易の事では無かつた。それが動もすると何百頁、何千頁と追うてゆくのであるから、凡庸の畫家ではとても手に終へない仕事である。種彦の如きは、田舎源氏の出版に

當り、悉く自己の圖案を授けて、それに従つて描かした。田舎源氏はいふ迄も無く源氏物語に形どつたものであるが、併し時代をすつと下けて室町時代としたものであるから、すべて衣服でも、調度でも、皆それ相應のもので無ければならぬ。従つて普通の浮世繪師には一寸書けないことがあるので、種彦は非常に苦心して一々畫家に圖案を授けたのである。全く田舎源氏が一般に受けたのは、第一に其の繪の極めて精妙であつたが爲に相違ない。此の長篇の小説について感ずることは、主人公の光氏がいかに美男子であるにしても、年を取るにつれて段々老いてゆくのは當然である。嚴密にいへば十頁も隔たれば其の顔に多少老けた所が無くてはならない。更に何百頁も隔たればよほど年の寄つた面影が無くてはならぬのだが、挿まれた繪を順順に見て行くと、チャンと此の理窟に適つて居て、卷の進むに従つて段々光氏なり其他の人々の顔容に變化を來たし、明らかに年月の経過を現はして居る。是れは田舎源氏のみならず、挿繪に苦心した草双紙はすべて同様だ。外人が日本の草双紙を見てあつと云つて感心するのはそこにある。

今になつて種彦を初め當時のすぐれた作者の遣り口を考へてみるに、其頃として極めて新し

しい行き方をしたものと云へる。それは或る意味に於て今日西洋の作家の遣つて居る、或はそれに倣つて日本の作家が遣つて居る所と甚だ近いものだ。馬琴流の堅苦しい文字などは用ゐるに、さら／＼と假名のみで綴つてゆく點や、其の内容が人情本位であつて、特に濃厚な男女の關係を描き、きはどい處の描寫も敢へて避けない點や、又目に訴へる爲めに連續的の繪を重ねて全くパノラマ式に事件の展開を示して行く點などは如何にも新らしい試みであつて、特に其の繪を何百枚、何千枚と限りも無く重ねて行く如きことは西洋にも餘り類の無いことである。今日の活動寫眞は之れに似た趣も見られるが、それが此の時代に於て早くも行はれ、特に畫中の人物が悉く活動して、卷の進むに従ひ年輩等も幾つ位とピッタリ當て嵌る程度に描寫して居るなど、寧ろ今日以上の點も無いではない。要するに此等の草双紙は其の内容に於て、戀愛、性慾等人間の本能を主題とする今日の小説に比し、決して遜色の無い許りで無く、其の挿入の繪畫に於て、殆んど古今東西に例の無い趣向が凝らされてある。さういふ草双紙が當時非常な歡迎を受け、種彦等の作が一世を風靡したのは決して偶然で無い。

三五 木版と其材料

徳川期に無比の發達を見た浮世繪の木版彫刻は、ある意味に於いて世界に誇り得るものである。如何に印刷術が進歩しても、極めて精巧な物になると此の木彫に譲らねばならぬ。西洋人が日本の錦繪を珍重する所以は一つは其版といふ處にある。勿論其の版を彫る技術が巧妙で無ければならぬが、之に附帶して色を着けて刷る刷り師の力も非常な助けをなしたもので、兩々相俟つて西洋人の垂涎する錦繪が出来上る譯である。然るに段々西洋風の印刷術の進むと共に、木彫の名人が次第に凋落して、今日では將に絶えんとして居る。是れは日本の工藝美術の爲めに遺憾なことで、何とかして之を保護存続したいものである。

此の版木のことについて自分が實地に感じた一二を云はう。自分は古い、繪の這入つた本などを、僅に残つて居る版木師に彫らせて見て、妙なことを感じた。其の本には文章の所もあり、繪の所もあるのだが、繪であらうが、文であらうが、版木師の彫る勞は一つで、どちらで

も同じやうに門外漢は感ずる譯であるのに、實際はさうで無い。版木師の方では繪ならば喜んで彫るが、字の方は成るべく御免蒙りたがる。同じ刀を使ふ譯であるが、繪ならばどんく^{はかど}抄るのに、文字の所は一向抄らぬ。それはどういふ仔細かといふに、繪の方は興味があるため、それに釣り込まれて抄るけれども字の方になると全く無趣味で、仕事に飽いて堪らぬと云うてゐる。成程木彫の如きも一種の藝術であるから、興味の有ると無いとに依つて仕事の成績に相違を來たすのも、道理あること、いはねばならぬ。

また昔し版木を作る時には其の材料を選ぶことが非常に八釜しく、極めて精巧な版を作るには櫻に限るといはれたものであるが、其の櫻にも甲乙丙いろく種類があつて、一番よい櫻は伊豆の櫻であるとされて居た。其れは一つは暖地の産である爲めもあらうが、今一つは海と何等かの關係があるものと見えて、伊豆の櫻は版木の材料として日本一と云はれ、其の材を用ゐれば非常に彫り易く、又いかなる繊細の箇所でも旨く彫れる。いふ迄も無く此の材は餘りに柔らかくても餘りに硬くても可けないのだが、其の硬軟中を得たといふ一種の材が即ち伊豆の櫻である。ところが今日は最早や斯様な材は得られぬ。やはり櫻を使ふとはいひながら、其の材

が軟らか過ぎ、且つ甚だ粗悪である。今日浮世繪などを複製するに當つて、最も大切な部分、たとへば顔や毛髪や衣服の極めて細かな模様などになると、櫻の材では十分に行かぬ。其の爲め此等の箇所には黄楊の埋め木をして、繊細の刀を揮ふことにして居る。さうして出来上つた畫は、素人の目では分らないが女人が見ると直ちに埋め木であることを看破する。黄楊は櫻よりも堅味が多く、従つて繊細な彫りが出来るが、櫻のやうなフツクリした味ひが缺けて居て、幾分ゴチくした所がある。殆んど肉眼では辨じ得ない程度のものであつても、其道のものには直ちに見分けが付く。かういふ譯で今日では版を彫る技術も段々廢れて來た許りか、其れを彫る材料さへも良いものが無くなつて來たのは、我國特有の工藝美術の爲めに惜むべきことである。

三六 麝香のはなし

麝香は昔から美人に喜ばれて居る、其の美人は知るや知らずや、麝香其れ自身は性慾に關係

のあるものである。麝といふ獸の陰部近くに毛に包まれた袋のやうな物があつて、其の中に此の香氣のする一種のものがある。何故か、るものがあるかといふに、其れは此獸が其匂を以て相手を呼ぶ用に供するのであつて、即ち性慾を幫助するものである、と今日は言はれて居る。自分は嘗て此の麝香の包まつたま、のものを見たことがある。それは大小もあるであらうが、直徑凡そ一寸足らずの圓形のもので、四方から毛が起つてそれを圍んで居り、其の中央に聊か穴がある、是れ即ち麝香を包藏するもので、此の圓い形の袋のやうなものが麝の陰部の附近に附着して居るのである。

此頃偶々本草學者大槻磐水の「蘭畹摘芳」といふ隨筆を見ると、麝のことが詳しく書かれてある。それはレーメレーといふ外國の醫者の著述を譯したもので、之に依り初めて麝香といふものがどういふ風にして出来るものであるかを知る事が出来た。それを見ると、今云つた毛で圍まれた袋の中に脈が通じ、血も注がれて居つて、其の血の凝結したものが、所謂麝香になるといふのである。そこでどういふ工合で斯様なものが出来るかといふに、一體麝の住んで居るのは奥深い山の中で、冬になると雪が一丈も一丈五尺も積もる。數ヶ月の間雪に閉ぢ籠められ

て、其間麝は何も食ふものが無く、飢餓を忍んで春の來るのを待つ。扱て春になつて雪が消えると、食物が澤山あるので、腹の空いたのに任せて暴食する。其の結果膽汁が一種の惡液となつて身體全體に氾濫し、それより熱を起し、遂にそれが膿のやうなものになつて、今の袋に注入する。其の膿のやうなものが充ちると、麝は非常に煩悶して、身體を靜かに置くことが出来ず、或は袋を自分で木の根などに磨擦したり、或は石などに自らぶつつけて袋を裂き、其膿を淋漓として外に迸らせる。そこで麝香を作る者は、此の季節に臨んで其の部分丈けを切裂いて、之れを熱烈なる天日に干す。干すと一種の粉末となつて、其の色の極めて白いのが上等とされ、や、薄黒い色を帯びたのを下等とする。古來美人に珍重される麝香の本體は如斯きものである。

全體腫れ物の膿など、いへば何人も之れを厭ふべきであるのに、それが紅閨の佳人に喜ばれるといふのは、一寸不思議のやうであるが、必ずしもさうで無い。元來人間といふものは人種に依つて色々の臭氣を好んだり厭うたりする。たとへば日本人などは腋臭を非常に嫌ふが、西洋人は身體全體を塞いで居る爲めに大抵の者は腋臭があつて、それを厭はぬ。又支那人の如き

は陰部の臭氣を非常に喜ぶものもある。斯く考へてみれば、麝香が麝の膿の香氣であると云つて、強ち厭ふべきで無いかも知れぬ。だから進化論者が此臭氣を以て同じ獸類間の性慾を誘ふものだというて居るのも一理ある。偶然之れが人間に喜ばれて、やはり同じく性慾に關係ある花柳の荖などに多く用ゐられて居るのも奇とすべきだ。麝もし知るあらば、之れを何と云うだらう。尙ほ磐水の書いたものには、一語も性慾の問題に及んでをらぬ。恐らく磐水の時代にはまだ進化論者が斯様の説を唱へなかつた爲めであらう。序でにいうて置くが、麝は原名をムスクス・シールといふ。

三七 支那の觴政

支那の觴政といふものは種々なる趣向で相手に酒を飲ませる仕掛になつて居る、例へば御籤のやうなものに夫々詩などが書かれてあつて、其の引當てた言葉に依り酒を飲まねばならぬといふ様な遣り方である。自分は此頃觴政双六ともいふべきものを手に入れた、それは日本の双

六のやうな工合になつて居て、やはり六角の賽の目が附いて居り、支那の有名な地名を現はした圖面から成立つて居る。先づ六人の酒客が會したとすると、各自が籤を引いて其の役割を定める。役割は第一が漁夫、第二が羽士、第三が劍俠、第四が美人、第五が緇衣、第六が詞客であつて、之を六仙と名づける。圖面には古來著名の山川史蹟、たとへば浣紗溪、天竺、赤壁、釣臺、廬山、易水、滹沱河、醉翁亭、鴻門、桃葉渡、章臺、醴泉、龍門、巫山、三峽、礮溪、銅雀臺、桃源、九折坂、長安市の如き、多くの地名があつて、其の地の歴史により、美人必ず一杯を飲まざる可からざる所あり、特に美人の飲を恕する所あり、劍俠、詞客それ〴〵特に飲まざる可からざる所あり、又六仙悉く飲まねばならぬ所もある。場所によつては行詰りの爲め最初の位置へ逆戻りをせねばならぬ所もある。此の双六には「攪勝圖解」といふものが附いて居て、それには圖中の地の歴史を註し、又六仙の何れが飲むべきかを示してある。今その一二をいへば、浣紗溪は昔し或る詩人が水邊に絹を洗うてゐた女子と詩を以て應酬したといふ來歴のある地で、此處に至れば詞客、美人共に一杯を傾けねばならぬ。赤壁は周瑜が曹操の舟を燒打にした處、又蘇東坡が月明に乘じ舟遊をした處であるから詞客、劍俠、羽士こゝに會すれば一

杯を飲む。天竺は浙江に在りて僧徒の必ず掛錫する所であるから、緇衣はこゝに至ると一杯を飲まねばならぬ。釣臺は宋の隱士吳儀が漁釣を試みた地であるから、漁夫一杯を傾けねばならぬ。廬山にては五仙皆な一杯を擧ぐるも、ひとり美人を免すは其の高山なるが故である。易水は燕の太子丹、秦に仇を報ぜんとして荆軻を遣はす時之れと別れた地、鴻門は漢の高祖、項羽と相會し、樊噲の働きで危く難を免れた地であるから劍俠茲に至れば一杯を傾くべく、醴泉は昔し唐の貞觀中泉自ら湧きて味ひ甘露の如くであつたといふ地であるから、此處にては皆々大杯を擧げねばならぬ。巫山、三峽は地形行きつまりの故を以て、こゝに至れば罰杯を享けて又もとの出發點に戻らねばならぬ。銅雀臺は曹操朝夕こゝに宮女を舞はしめた贅縁により、美人一杯を傾けねばならぬ。長安は大都市であるから各仙一杯を飲まねばならぬといふ類のものである。此の双六は大體日本の名所双六と同じやうなものだが、支那だけに舞臺も廣く、酒に因める變つた趣向もあつて、なか／＼に興がある。

三八 中江杜徴

文人が互に藝を戦はして遊ぶうちには興味のある事が少なくない。たとへば一夜に詩を百首作るといふ如きことはあまり容易い業では無いけれども、天才の詩人などには屢々あつたことである。祇園南海は漢詩の天才であつたが、其の若年の時一夜に百の詩を作つた處、あまりによく出来て居るので、何人も之れを一夜の即吟に成るものとは信じなかつたので又一夜に百吟を試み、前後二百の詩を二夜にして詠じた。尤も二度目の時は最初の時ほど時間が早くなかつた。それも其の筈で、最初の時に詠じた題材や詞句に一切重複しない様に格別の苦心を要したから、時間のかゝるのも已むを得ない事であつた。是れは文苑の雅談として傳はつて居り、且つ其の詩も刻されて世に行はれて居る。しかし一日に百詩を作るといふ如きことは、強ち珍らしい譯でもない。嘗て頼鴨尾が北海道に渡つて江差に遊んだ時に、偶々松浦武四郎が同地に來合せて居た。此の松浦は多藝な人で、繪も描き、篆刻の技にも長じて居た外に、又骨董の趣味

もあるので有名であつた。そこへ詩や書を以て親ゆづりの天才鴨匡が圖らず一緒になつたので、ある人が是は面白い機會であるから、日をトして頼君が一日に詩を百首作り、松浦君は其の詩中の言葉を取つて百印を彫る、即ち一日百詩百印を戦はすことを試みてはどうだと發議した。成程面白いといふので、或日早朝より詩と篆刻の競技をやらせた處、一詩成れば一印亦成るといふ譯で、かなり深更に及んで詩も印も百に充ちた。其の百詩百印共に匆卒の作としてはなか／＼出來がよかつたので、當時は勿論今日も尙ほ藝苑に之れを珍重して居る。

茲に又似たやうなことがある。中江杜徴といふ人は近江の出身で、もとは黄檗の僧であつたが、多藝の人で、詩も作り、書も能くし、畫も描き、琴を弾するにも妙で、又篆刻にも秀で、居た。此の人は後に還俗して四方に遊んだが、其の還俗した譯は、自分が僧門に入つて居ては生き残つて居る母を養ふことが出來ぬからというて俗人となり、各地に遊歴するに當つても母を携へ、後に越後に到つて出雲崎に久しく足を留めた。其の内に母が同地で病歿したので遺骨を携へ、京都に出でんとする途中、高田を過ぎた。此の土地には知人も澤山あつたので頻りと悔みを述べられ、且つ是非數日此地に足を留めて貰ひ度い、母堂の爲めに供養も營み度く、且

つ其席にて篆刻を百個試みて貰ひ、之れを當日參列の者に一顆づ、贈つていたゞき度いと勧められた。杜徴は深く其の厚意を謝し、且つ一日百印も敢へて辭せぬが、斯様の事は兎もすると名聞を求むる爲めの仕業との批評を受け易いものであるが、如何のものであらうと躊躇した。處が知人等は決して左様の斟酌に及ばぬと百方杜徴を説いて遂に之を承諾させ、日を定めて某の寺に母の法會を營むことになつた。當日になると、其の近傍の者知るも知らざるも多數集まり來り非常な盛會となつたが、其席上杜徴は印刀を採つて百の印材を片端から片付けてゆく。一顆出來上れば直ちに座に居る人へ順番に與へるといふ譯で、其の神速なる妙技には來會の大衆感ぜぬ者はなかつた。かくて早朝より日没に及んで百印残らず刻し終つたが、其の時の印影は發企者の手に依つて集められ、一冊の印譜として残つて居る。其の第一の印は「惟孝」の二字が刻せられ、最後の印は「波羅蜜」の語を以て終つて居る。此の首尾の言葉に杜徴の意の籠つて居ることはいふ迄も無い。之れが寛政五年の夏のことであつた。

杜徴の畫は今日迄埋没して餘り人の知らなかつた位のものであるが、近頃になつて具眼者の爲めに世に紹介され、漸く賞揚を受けることになつた。其の高簡蒼老の筆致は直ちに宋元大家

の學に迫るものがあつて、もとより紛々たる俗畫家の比では無い。杜徴は文化十三年五月六十八歳にて死んだ。墓は越後の出雲崎の淨女寺にある。

三九 森槐南の俗歌

森槐南は一代の詩豪で、其の詩才が父の春濤老人よりもすぐれて居るといふやうな月旦は、今更いふ迄も無い。春濤夫婦は和歌にも長じ、特に夫人が巧みであつたので、春濤は妻の代作だと誤解されるのが癪だと云つて止めたと云ふ説もある。其の衣鉢を享け繼いだ槐南が縦横の才のあるは當然で、興に乗じて俗歌ぐらゐる作つたのは格別怪しむに足らぬ。

全體槐南は書があまり上手で無かつたので、其の筆に成るものは多く傳はつて居ない。だから槐南の揮毫したものは斷簡零墨といへども珍とするに足るのであるが、茲に別けても面白いものがある。それは或る男女の關係を俗歌に詠み込んだもので、其の人の誰であるかはまだ究めないが、此の一枚の戲墨は鹿爪らしい詩の草稿よりも却つて珍とすべきものだ。ある人が之

れを珍藏して居つて、槐南の友人である永坂石埭翁に、何か餘白に書いて呉れと頼み、翁は早速其の請を容れて筆を走らせた。翁のいふ所によると、槐南は醉中や、もすればこんな戯れをやつたと云ふ。此の俗歌が宮内省の用紙に書かれてあるといふのも亦一興である。

戀のむらさきゆかりの藤は 枝垂る、何としよ 本が水性で澤で咲く 年寄りの浮かれ筋

さりととは焼けますね テナコトオツシヤイマシタネ

又も助。兵と云はれうがま、よ 涎る、何としよ 市兵まちから主通ふ せつけんのシヤボ

ン玉 さりととはとけますね テナコトオツシヤイマシタネ

三寸妙舌、十丈蓮花、秋波禪侶、醉中戲諺、往々如是

玉池老人周諷誦一過

丸のついてゐるのは、前のは女、後のは男の名で、石鹼云々は男の吝嗇を暗に諷したものであらう。

四〇 麥酒の原料

麥酒を造る最も大切な要素はホップであることは誰も知つて居る。日本では此のホップをからはな（唐華）といひ、又むぐら（葎）ともいひ、一種の蔓草で、木曾の山中や戸隠山や其他諸所の山にある。其の葉は葡萄の葉に似てゐて、秋になると極めて小さい花が咲く。それに生ずる實が即ち麥酒の原料たるホップである。自分は常に麥酒の厄介になつて居るものであるが、ホップといふものに如何なる働きがあるかといふことについては、つい此の頃まで知らなかつた。其の作用について初めて知つたのは、此のものに一種麻酔的の働きのあるといふことで、昔から不眠性の人は此の草を枕の脇に置いて寝れば安眠が出来ると言ひ傳へられ、又此の草を煎じて飲めば睡眠が出来ること云はれて居た。斯様の作用は酒には極めて大切なものであるが、ホップはまだ其の外に色々の働きを持つて居る。麥酒の原料として之れを用ゐる第一の必要は其の酸敗を防ぐことで、又一種の苦味を持つて、これが健胃的の働きを爲す。一つの植物の實

で斯く色々大切な要素を備へて居るものは恐らく他に無からうと思はれる。誰が此のホップを麥酒の原料にすることを發明したかは知らぬが、如何にも面白い原料を探し當てたものである。此の學名をヒュミユリウス・リュピユリウスといふ。

四一 才人尾崎紅葉

明治小説界の明星と仰がれた故尾崎紅葉と自分とは「讀賣新聞」の關係もあつて久しい懇意の間柄であつた。自分は曾て唐本類を澤山集めて持つてゐたが、山人はよく來ては其の唐本を借りて行く、さうして彼れの工夫がいろ／＼此の唐本中から産れたのである。彼の「破れ茶碗」の如きも其の翻案の一例であるが、そこは才人丈けに換骨脱體、頗る其の妙を極めて毫も翻案の痕を止めぬ。

或時、ブラリとやつて來て例の如く唐本漁りを始め、「一夕話」といふのを選出して讀んでゐるが、此の書中には唐人が才力を弄した險難な對話を集めた部類がある。紅葉は讀み乍ら餘

程興味を感じたらしく、頻に「支那人は的對（一つ言葉があると、其の反對のやうな字面で而も語調の相近い言葉を擇び、人の意表に出るやうな言葉で之れに相對せしめること）に巧なものだ」と激賞多時であつたが、終に「僕も一つ試みて見ようか」と獨り言のやうに言ひ残して去つた。

其後二三日して今度は自分が先方を訪ねると、山人頗る面白さうに突然「やつたよ、やつたよ」といふ。そして五六枚も書いたものを出して示すので、自分は夫を手に取つて見ると、一種妙なものではあるが紅葉山人其人の如何に才藻に富んでるたかを窺ふに足るもので、自分の知る限りに於て、斯ういふ草稿は他に未だ見たことがない。茲に其の二三を抜くと、いはゞ山人が日本風に作つた對句集で、唐本「一夕話」の例を追ひ、而も其の想と形を異にした手腕が見える。

小町大路を行く

風吹いて下り藤は上り藤

三杯目にはそつと出し

下男上人を呼ぶ

水映じて立澤瀉は逆澤瀉

五人力にてうんと差し

浮ぶは海の月か海月か

橋に立つては橋辨慶

雪を固めては雪達磨

今朝の雪、電信不通

露出するは馬の脚

夢か、現か、幻か

鬼に目あれども眠る事なし

草刈薬師

走大黒走らずして壁に在り

降るは村の雨よ村雨よ

舟に居つては舟辨慶

血を染めては血達磨

昨夜の火、親類丸焼け

引込まするは猫の舌

袖か、袂か、懐か

墨に花無きも散る事あり

骨拔地藏

飛火野飛ばずして地に横る

此他まだいくらかあつたが、概ね此類で何れも才人の戯れとして面白いものであつた。其の時の山人の話に、之れを門下に見せた處、「先生結構ですが、併し對句は自分で都合よく拵つたのでは妙で無い、人から一句を出されたるに對して自分が或句で應ずるといふ所に其の潑刺たる才氣が窺はれるものでせう」と大いに一本參られたので、「ヨシそれなれば君等から何で

も出して挑んで来い」と僕も面白づくにいふと、一門人が「十三七ッ」と聲を懸けたから言下に「九〇六」と答へたよと、語り畢つて大笑したことがあつた。

山人は又曾て「寝すがた百種」といふものを案出するとて、三四十も書き附けたことがあつた。それを見ると、洗練の字句、一語にして寝姿を髣髴させるやうな文字がいろ／＼に配列されて、種々なる寝すがたが紙上に生々と現はれてゐるやうであつた。其の草稿は逝ける斯の才人を追想するに無二の好紀念として今も自分の手に残つてゐる。

四二 江戸兒趣味

いつぞや郊外散歩に出掛けての歸るさ、四谷の端れの一寸した茶屋で、食事をした處が先客に職人體の男が二三人居て、酒を酌みながら頻りに何やら語り興じて居る。聞くとともに其の話を聞いてると、一人年の老いた男が此んな話をした。若い時分、さる大名屋敷に奉公して居つた頃であつた、ある日の夕方、屋敷の用事で瀬戸物を買ひに行つた歸りがけ、偶然にも思

ひもかけぬ舊友と途上に邂逅した、珍らしくはあり、なつかしくはあり、是非何處かで一盃飲みながらゆつくり話をし度いと思つたが、自分は屋敷の用達しに來た事ではあり、それに夕刻となつて、屋敷の門限もあることだから其れも出來ず、エ、口惜しいことだと、地團太を踏みながら友達の手を握り、斯ういふ譯で今日はゆつくりして居られないが、これを以て一盃遣るのに代へようと、持つて居た瀬戸物を、いきなり地上に投げつけて粉ナ微塵に壞してしまひ、そのまゝ、再會を約して立ち別れたといふ。こゝらが本當の江戸ッ兒趣味といふものだらうと、自分は深く感心したことがある。

四三 掬摸の著述

人にはさまざまの嗜のあるもので、兎もすると意外の人に意外の趣味があるのに驚かされる。茲に可笑しい話は、掬摸の親方に不似合な金石癖があつたことである。此の親方は江戸中の寺々を捜し歩いて、名家の墓とし云へば仔細に調べて之れを書き留め、終に巻帙となし、墓

癖家の参考として喜ばれるに至つた。其書は南葵文庫に藏してあつて、自分も一見した事があるが、其著者なる掬摸の親分といふは明治迄生存して居た者で、表面は俳諧師である。姓は林で、昔し關西に名を博した大江丸の名を繼いで三代大江丸と呼び、俳號を舊竹と云つた。其の著はした書物は自筆本で、十二卷あり、書名を「墓碣餘誌」といふ。其の中には豪傑、儒者、各種の藝術家等の墓を夫々分類して編纂し、全部で十二類を成し、そして其の卷頭には石川文莊の漢文の序が載つてゐる。此の文莊といふは「本朝替人傳」を著はした盲人で、其の序文には、當時墓癖を有する連中の集まりに掃苔會といふものがあつて、舊竹も文莊も共に會員であつた緣故に依り序を書くといふやうな事が書かれてある。此の舊竹なるものを今往々知つて居る者がある、其の話によると、これは世にいふ箱師といふもので、始終東京から静岡邊を往來し、多く汽車中で仕事をやり、箱師の仲間には隠れも無いものであつたといふが、何故か遂に縛に就かずに終つた。一説に此人はもと相當の宿屋の子で、幼少より俳諧其他風流の遊びを好み、財産を蕩盡した爲めに掬摸にまでなり下つたといふ。全體掬摸といふものは、いつ何時逮捕の繩目にかゝるかも知れぬ境遇に居る譯だから、斯様な趣味をもつて十數冊の著述をなし終

るまでには随分身の發覺を危く感じた場合もあつたであらう。然るにその趣味の爲めには危い場合も殆んど忘れ、頻りに各所の墓地に徘徊し、一生懸命に調べたことを考へると、自からさういふ人間の心持にも別天地があつたかにも想像されるが、併し墓所は身を隠すに屈竟の所であることを思ふと、身を暗ます折々に墓所の探討をしたのだとも解釋される。

四四 實寫の名文

實境を寫した文章ほど人を動かすものはない、到底大文章家の企て及ばざる自然の妙がある。昔し船乗が、絶海に漂流して、僅かに死を免かれ、本國へ戻つて其の筋へ上申した口上書の中に、船中水が缺乏して困つたことを陳べてゐるが、語は簡潔で文は粗野であつても、一讀人をして泣かしめるの妙がある。左の一文を通讀せよ。

正月七日より十五日まで水なく、十五日頃少々曇り候に付、若しや雨にても降り申す可きやと各々喜び居り候處、少し許り降り申候て、器物に汲み溜め候やうなることは成り不申候

に付、帆を外へ出し、少しにても濡らせ置き候て飲み申し度、帆へ雨を受け申候處、それよりは雨降り申さず候に付、右五人の若者共、あまりに水を飲み申度、右の帆へ口をつけ、水氣を吸ひ取り候由、實に乳のなき小兒に、良き乳を與へ候様に御座候、後には唇も帆にて磨り切れ痛み申候、云々。

四五 近松門左の識見

多紀世庭の醫事隨筆「時選讀我書」の中に、近松門左衛門の逸事一則を得た。それは弟の岡本一抱との應答で、近松の文藝的識見を見るべきものであるから全文を左に抄する。

山崎涉園先生話す、近松門左衛門少年の時放縱なるを以て、兄弟不諧にして往來もせざりしに、齡や、積て其格實になりしかば、其弟岡本一抱子これと相會せしとき一抱のいふ、兄の奇才を以て心を無益の雜劇稗説に費すこそ惜むべけれ、さほどの精神を醫術に施したまはゞ許多の用をなしたらんにとありしかば近松の答へ、我も亦弟に告ぐべきことあり、弟好んで醫書の諺解を作れども某は心得ぬことにこそ存すれ、如何となれば、後世庸輩が諺解のみを讀みて醫は容易になすべきものと思ひて敢て精しく學問

せず、淺薄の術をもつて人の生命を誤ることあるに至らんかといへりしに、一抱深くその言に感服して、その時方に素問の諺解を撰じ、半ば稿を脱したりけれども其ま筆を擱たりとぞ。

岡本一抱は相當名聲のあつた醫家で、其の専門に屬する著述は少なからずあるが、多くは難解の醫書を通俗的に注解したり、或は漢籍を國譯したものである。近松がそれを却つて喜ばず、困難を感じず醫書に通ぜしめるは、醫業を輕んぜしめる端を啓くもので、自分の取らざる所だといふたのは流石に卓見である。原書の貴い所以は著者の原意が存してゐるからである、諺解や反譯は動もすれば本意に違ふことがあるのみでなく、原書は解するに困難はあるが、其の困難と闘つて讀み且つ解する所に、研究もあり、啓發もそれから生ずるのである。西洋あたりの原書を翻譯するに就ても、近松が云うたやうに、翻譯は到底原書の意味を十分一も髣髴し得ないものである、眞に著者の本意を知らんとするには、縦令困難でも原書を繙讀するに限る、近松は宛かも今日の譯書の爲めに諷した趣があつて面白く感ずる。

四六 頼山陽の逸事

頼山陽に關する逸事は拙著「隨筆頼山陽」に大抵收めたが、茲に脱漏を補はん爲め一二を録する。山陽が廣島を脱走した時、叔父の春風が搜索の衝に當つたことは事實であるが、しかし自から足を舉げて踪跡を尋ねたのではない、春風の命を受けて實地追跡した者は外にある、それは石井豊洲である。此人は春水の門人で、山陽とは同窓の關係もあり、又遊び友達でもあつたらう。これが苦心して搜索し、一旦は取押へたのであるが、取り逃したこともあつて、容易ならぬ苦勞をしてゐる。當時山陽の窮迫時代に此人と山陽が往復した書簡が今日存在してをれば、他人に公言の出来ないことなどが露骨に書かれてあるに相違なく、當時の山陽を知るには屈竟の材料であらうに、それが一つも残つてゐぬ。何故かと調べた人があるが、此の豊洲は餘程注意深い人であつたらしく、歿する時に遺命を傳へて、山陽から寄せた書簡を全部棺に納めさしたと云はれてゐる。多分それが世に現はれると、山陽の名譽の傷つくことを恐れて、斯く

はしたのであらう。

山陽の夫人梨影のことに就ても補足を要することがある。通例小石玄瑞が此婦人の假りの親となつて正式に結婚したやうになつてゐるが、事實はさうでなく、最初は妾として納れ、後に正室に直したものらしい。此頃歿した光吉元次郎氏が、徳富蘇峰氏に頼まれて多くの山陽の書簡を整理し、其内から發見した書簡の中に、梨影を「朝雲」と呼んでゐるものがあつたといふ。朝雲は蘇東坡の妾の名であつたやうに思ふが、梨影が正室であれば、斯くいふ筈はない。尙又梨影を最初から正室として迎へたとすれば、母に隠しても置くまいが、調べて見ると、最初は母にも祕したと見えて、何事も筆まめに録してゐる、母梅颯の日記に梨影の名の見えてゐるのは、納れてから数年の後である。梨影は十八歳で山陽の妾となつたので、十九歳として傳へられてゐるのも誤りであることが知れた。

山陽が心安かつた京都の鳩居堂には山陽の寄せた書簡が今も四十通程残つてゐるが、中に彼れが利殖を圖るために若干金を鳩居堂に託し或人に貸し付けた處、それが遂にフイになつて、山陽の失敗に歸した消息を傳へたものがある。彼れが貯金の利殖を圖るに抜け目のなかつたこ

とは、初めて知る譯でもないが、鳩居堂にまで頼んで之をやつたと聞くのは珍らしい。又是も鳩居堂に與へた一通に、房事を戒めた珍書状がある。それには自分は父の喪に服して三年の間房事を廢し、それが爲め身體の強健を覺えると吹聴し、君も少々之が過ぎるやうだから、吾れを學べなどというてゐる。三年の禁房もアテにはならぬが、こればかりは事實の調査が不可能だから、山陽崇拜家は事實と信じて大いに敬服するもよからう。

四七 西國立志編の脚本

スマイルスの「セルフ・ヘルプ」を翻譯した「西國立志編」が明治の初年我國上下の社會に非常に流布した事は誰も知つて居る。其の翻譯は随分間違もあるが、何分人格の高い學者として有名だつた中村正直翁が苦心して翻譯した相當の美文であるとの故を以て、此書は殆んど冷熱なく一般の尊敬を受けて居る。そして其因縁から今日に於ても其の原書が諸學校の教科書に用ゐられて居る。恐らく此原書は之を生んだ本國よりもはるかに多く讀まれ、且つ其の感化

も亦却つて日本の方に多く及んで居ること、思ふ。實際「西國立志編」の出版された當時は、都會は勿論、寒村の讀書生も争うて之を購ひ、爲めに洛陽の紙價を高からしめたもので、従つて其餘響は色々の方面に及び、嘗ては此立志編中の或る部分が芝居の脚本に書かれ、且つ其れが舞臺に演ぜられた事さへある。自分は其脚本を二種所有して居るが、一つは立志編卷の二より材料を取つたもので、其標題が「其粉色陶器交易」となつて居る。即ち陶器を焼く貧乏人の立志の意味を表はしたものである。今一つは卷の十にある事實を脚色したもので、題は「靴補童教學」と名けてある。之れも靴直しの微賤の少年が大に志を立てたといふ話が筋になつて居る。明治五年の出版で、作者は京都の佐橋富三郎といふ者である。之れには極彩色の錦繪が這入つて居て、文章は全然舊式劇の臺帳であり、繪は西洋人を描かんとして成らざる極めて幼稚なものだ、版元もやはり上方である爲め何と無く厭味があるけれども、しかし幼稚の味が漲つて却つて興味を感じる。今から之れを見ると噴飯を催すやうなものであるが、「西國立志編」が劇にまで作られ、且つ舞臺に演ぜられ、現に坪内逍遙翁の如きは幼時其の芝居を見たことさへあるといふに至つて、當時此書が如何に廣く行はれたかを知ることが出来るであらう。此脚

本の巻頭には「精神一到何事不成」といふ題字があるが、先づこゝらが普通の臺帳と其の趣の違つて居る所で、何事も新奇を競うた明治早々の世相が之に依つて窺はれる。

四八 自然を愛する國民

歌麿の描いた雪景色の繪に一人の小娘が其の銀世界を眺めて立つて居る圖がある。其小娘が眞白の雪を少しでも汚したくないと云つた様子を見せて、「まア綺麗な雪だこと、どこに茶滓ちやぢを捨てようか知ら」といふ意味の詞書きを書き添へてある。外國人は此んな繪を見て日本人は非常に自然を愛する國民だと評して居るが、如何にも其の通りである。日本の建築などについて見ても、全く自然主義というて宜しい。材料の如きも白木を其儘に用ゐて、支那の如く又西洋の如く少しも塗料を用ゐない。又戸障子などの構造も自由自在に開閉することが出来て、いざといへば全部開放的のものとなる。まるで自然そのものが室内へ流れ込むといふ有様になつて居る。其の開放主義である所が極めて自然にも適ひ、且つ自然を愛するといふ所から來て居る

ので、西洋の建築などには全然類を見ないものである。尙如何なる貧乏人も盆栽などを買つて草木花卉を愛するといふやうな事も西洋には類の無いことで、此等も自然を愛する一端といふべきだ。且つ無風流の者が随分遠方へ山水の見物に出掛けるなどいふことも、日本では珍しくない。一體日本には山水の絶景と云はれるやうな場所は到る處に在るが、とりわけ山深くして人跡を絶つといふやうな處に絶景が多い。川柳に「絶景に金つかふべき所なし」というて居るが、全く邊鄙の處には山水美がより多く秘されてある。處が段々交通が開けてくると、此の邊境の山水が富豪に賞せられ、或は別莊を構へ、或は茶室を築いて楽しむといふやうな事が行はれる。然るに兎もすると此等富豪の折角經營した樓臺邸舎が一朝にして激流に流されたり、或は山崩れの爲に破壊されたりするやうな危険がある。全體山水の美なる處は懸崖聳え、激潭珠を飛ばすといふやうな地域であつて、いはゞ危険區である。かゝる場所は川柳子のいふ如く、金使ふべき處なしといふのが本當であつて、斯様な處に豪奢の經營をするといふのは危険を顧みぬ無謀の振舞といふべきだ。此等の樓臺が時に災害に會するのは畢竟冒すべからざる危険を冒すからで、必至の結果である。私はかつて云うたことがある、山水の秘境に第宅を營むに於

ては、山水神に税を捧げねばならぬ、動もすると非常な害を蒙むるのは、取りも直さず山神水神に税を拂ふのであると。

四九 紅皿缺皿

牛込には早稻田近く山吹の里といふ處がある。是れは昔し太田道灌が始めて江戸を開いた時分、此のあたりを狩りくらし雨に逢ひ、蓑を借りようとして或る民家に入つたが、一人の少女が立出で、山吹の花を捧げ、「みの一つだに無きぞかなしき」といふ古歌の意を以て答へたといふ有名な古跡だ。此の山吹を捧げた少女はいかなる者かといふに、應仁の昔、細川、山名の合戦に武藏の國に落ちのび、早稻田のあたりに隠れ住んでゐた武士の娘であると傳へられて居る。此の娘は母親に死に別れ、父なる人に伴はれて武藏に下つたが、後に父親に後妻が出来て、異腹の妹が生れた。處がよくある例で、母親は實子を愛して兎角姉娘を疎んじ、姉の方に紅皿といふ名の附いて居たのを妹に與へ、姉には缺皿といふ悪い名を附けた。しかし此の姉が

氣立もよく、教育もあつて、咄嗟の間の思ひつきから、古歌を以て道灌の詩に答へたところに其の素養の當ならざる所が見える。是れは小説或は脚本等の材料として屢々使はれて居る事實で、馬琴の「皿々郷談」の如きもやはり紅皿、缺皿の事を脚色した者だが、名前をあべこべにした例は敢へて此事實のみに限らず、日本では「落窪物語」にもあり、西洋には「シンデレラ物語」といふのものもある。馬琴は單に紅皿、缺皿の名を附けかへた事實を中心として「皿々郷談」を書いてゐるが、實は此の紅皿（即ち後の缺皿）については今一つ艶のあるローマンスがあるのだ。初め道灌は古歌の意を解しかね、みづから耻ぢてそれより歌道に志ざしたと傳へられて居るが、尙ほ面白いのは、かやうの感激が媒を成して遂に其の婦人を申受けて自分の愛妾にしたといふ事實のあることである。此の事實は今日も矢張り牛込に傳はつて居る。大久保余丁町に西向天神といふ古い祠があつて、そこに僅か一字の梵字を刻した碑が立つて居る。之れが即ち姉娘の紅皿の墓であつて、其の神社に傳へられて居る所によると、紅皿は道灌の妾になり、老年に及んで尼になつて、終に此處に葬られたといふ。

右のごとき面白いローマンスが何故今日迄小説や脚本に取込まれなかつたかといふことは一

寸不思議のやうにも思はれる。然るに近年此の事實が坪内逍遙翁の着目する所となつて歌劇の材料に用ゐられ、始めて世にあらはれた。畢竟此の文豪の筆を待つために久しく祕されて居たものとも云へる。逍遙翁は大久保余丁町に住んで、西向天神とは僅かに一町程しかへだたつて居ない。且つ翁は殆んど一生を早稻田大學に捧げた人で、早稻田の名を以て概稱される其附近の土地にも非常に深い縁がある。此の面白いロマンスが數百年の後に至り初めて其人の筆にかゝるといふのも、亦不思議な縁といふべきであらう。此のロマンスを仕組んだ歌劇は「道灌と缺皿」と題し、早稻田の大隈會館に於ける兒童劇に演ぜられた。

五〇 小泉八雲と民謡

日本の古い歌、就中俗謡、民謡の類は今は段々廢れつゝあつて、人の記憶をも去らんとして居る。何分西洋音樂全盛の時代であるから、西洋の音譜に合はぬものは皆捨てられてしまふ有様で、洵に惜むべきこと、謂はねばならぬ。全體日本のみで無く西洋でもさうであるが、民謡

といふものは概して口から口に傳はつて來たもので、物の本などに書かれてないものであるから、若し之れが口から口に傳はらぬといふことになる、全く亡びて了ふより外は無い。それで心ある者は之を惜んで、古來の民謡を書き集め、其の研究に掛つて居るのであるが、我國で最も早く此事に氣が附いて、其の研究を始め、又種々の民謡を集めたものはラフカディオ・ハーン即ち日本に歸化して小泉八雲と名乗つた人で、今日色々の人が此の研究に従つて居るのも畢竟ハーンの啓發に因るものである。

此種の民謡は頗る其の數が多く、地方々に依りて多少の特徴もある。中には随分猥褻のものも少なくない。意味のあるものもあるけれども、單に語調のみで全く意味の無いものもある。西洋でも之れをナンセンス・ヴァースと云つて居るが、如何にも無教育の男女が口にするものであるから、他愛も無いものが多い。しかし其間に純真なる感情の閃めきがあつて、無下に捨てかねる趣を存して居る。又中には迷信を現はして居るものもあり、戀を祈つて居るものもあり、ズツと高尚な宗教上の哲理などを唄つて居るものもあり、物語體のものなどもあつて、之を選択してみると一概にナンセンス・ヴァースなどとは云へないやうに思はれる。今日のやうに

理窟許りで物を選択し、取捨するといふやうになつて來ては、此等のものを全然取るに足らぬとして捨て、顧みない者のあるのも當然だが、しかしナンセンス・ヴァースも亦一種の詩だ、何れかといへば、あまり理窟を云はずに、人間性の有りの儘を歌つた、一見他愛も無いと思はれる此種の歌に却つて盡きせぬ詩趣が存して居るとも云へる。

ハーンは如何に日本の民謡を見たか、氏は大體日本の此等の歌を六つに區別して居る。一、天氣と天象との歌、二、動物に關する歌、三、種々なる遊戯の歌、四、物語の歌、五、羽子突歌、手毬歌、六、ネンネコ歌、之れである。しかし此分類が果して全部の民謡を包括し得るや否やは疑はしい。たとへば漁夫の歌、馬子の歌、舟子の歌、雲助の歌、旅行の歌(伊勢詣り歌のごとき)、臼搗き歌、田植歌、絲繰り歌、伐木の歌、機屋の歌といふやうなものは、強ひてハーンの種類の中へ入れ、ば入れられるかも知れぬが、正しくいへば矢張り職業歌とか旅行歌とかいふ類別を設ける必要があると思はれる。今ハーンの所説を一々掲げる事は出来ないが、羽子突遊びといふ新年の行事に付如何に彼が興味を感じたかを、或人の譯文に依つて爰にあらはして見よう。

正月の休暇には街道は年若き乙女子の數組が或は羽子をつき、或は種々なる手毬の遊戯を爲すが爲頗る

美觀を呈するなり。袖長き色様々の晴衣をまとひたる此等幾多の小娘に勝して美はしきものを想像せんはいと難し。光りまばゆき胡蝶のみぞ之れにたぐへつべき。東京の畫工は其の温雅優美なる様を畫くに甚だ巧みなり。此等の畫工は手毬つける幾群れの乙女子の色刷にしたるを年毎に供して、仙女見たらん乙女子の其の微笑める面と輝く瞳とを稍や上向けて花の唇少しく開き手に羽子板携へつゝ、飛び行く羽の玉を見やる様の繪を示して……我等を悦ばすなり。されど實物が繪にも優して美しきが屢々の事なり。また如何にも驚くべきは羽子板のことなり。裏には絹のモザイク細工の、或は山水の景、或は庭園、或は古代の貴紳の姿のまこと夢に見るが如きを貼りて……されど其のチャームはたゞに眼に映するもののみ非じ。……此等の仙女は遊戯の折、奇しき節奏と旋律を有して、之を記憶するは(西洋人には)不可能なる、聽きて如何にも心地よき小歌を歌ふなり。

尙ほ附加へて言ひたいのはネンネコ歌のことである。ハーンはネンネコ歌は母の慈愛の自然の發露であつて、愛情の最も古い形式を表示したものだと云つて居るが、全く此のネンネコ歌は時と處とに拘はらず、社會上に種々の變化があつても、嘗て其の影響を受けなかつた所のものである。其れに付奇とすべきは、日本のネンネコといふ言葉に極めて近い言葉が西洋にもあることだ。即ち佛蘭西の或る地方の方言では、やはり赤ん坊の事をネンネと云つて居る。勿論それは偶然其の言葉が同じといふに過ぎないので、決して語源が一であるといふ譯では無い。

日本でネンネといふのは寝るといふ動詞から赤ん坊といふ意味に移つたので、佛蘭西で直にネンネといふのを以て赤ん坊とするのとは語源が違つて居るが、しかし我國で「ネンネ〜」と云つて赤ん坊の守をするのと、佛蘭西の家庭で搖籃を動かして、矢張り「ネンネ〜」と歌ふのと偶中して居るのは面白い。

五一 金貸し東叡山

徳川氏の盛んな時分に、今の上野、即ち東叡山の權威が非常なものであつた事はいふ迄も無い。何しろ此寺には徳川家の祖先の墓があつて、東叡山が其の菩提所であり、且つ皇族が其の座主でおはしたといふやうな關係で、どの意味から考へても東叡山は萬人崇敬の府とならなければならなかつた。そこで徳川家も東叡山に對しては色々特別の待遇をしたものであるが、段山の財政の不如意になると共に、幕府は文化六年に及んで安い金を東叡山に交付して之を高く貸すことを許した。其の金高は五百萬兩であつて、之れを幕府が五分の利息で山へ貸出し

て、一割の利を取ることを許した。即ち五分の利差が山の所得となる譯で、しかも其れが五百萬兩といふ大金であるから、東叡山の収益は實に莫大なものであつた。扱て山ではどういふ風に此の金を貸出したかといふに、一口にいへば各藩の諸侯に對して強制的に之を貸出したのである。諸侯の中には借りる必要のない者もあつたらうが、借りたくない者までも借りざるを得なかつた。つまり大小の藩の格式に應じて豫じめ其の金額を割當て、否應なしに之を貸出したのであるから、五百萬兩といふ金は殆ど遊ぶこと無しに、悉く利子の附く金として活用された譯である。處で各藩の諸侯といへども自ら貧富のあることだから、場合に依つては借りた金を踏み倒す者が無いとも限らぬ。山ではそれに就て一つの名法を考へた。それは今日は殆ど其の影も見えないけれども、上野の山には昔し何百といふ大きな宿坊があつた。此の宿坊は夫々各藩の諸侯に割當て、どこの坊はどの藩の宿をするといふやうに其の宿割がきまつて居た。徳川氏の佛事でもある場合には、諸侯は必ず宿坊へ行き種々用意をして式に臨むのが例で、決して之を怠ることが出来なかつた。さういふ關係から諸侯に金を貸す時は必ず夫々の宿坊を其の保證人にさせたものである。それ故貧乏の諸侯も、保證人に迷惑を掛けてはならぬといふ所か

ら必ず借りた金を返済し、一回でも其の借金を踏んだ例は無い、恐らく是れ位大丈夫な金貸は無からう。

扱て其の貸借の計算は如何にしたかといふに、期限を一箇年と定め、毎年十二月一日より十日迄の間に必ず元金を返済せしめる。しかし金を返すと同時に又借りることを許す、否、是非借りなければならぬ。つまり一旦利息の計算をした上に又否應なしに其金を貸付けたものである。返すと同時に借りるのであるから、何千兩でも何萬兩でも、持つて行つて金さへ見せればよいのであるが、しかし其れ丈の金は是非正金を持つて行かねばならぬので、諸侯の中には之れを調達することの出来かねる向もあつた。さういふ時にはどうするかといふに、矢張り又其れ相應の方法のあつたものである。即ちホンの一日だけ其見せ金を貸す商家が坂本に五六軒あつた。つまりそれは一種の銀行であつて、其處から何千兩でも何萬兩でも借りる。其の借りた金を千兩箱に收めて之れを幾十も釣臺に積んで山へ擔ぎ込む。さうして山で検査を受けた上、利子丈を計算して又貸して貰ひ、歸り路には其金を商家へ返して行く。此等の見せ金を用立てる商家はどれ程の利息を取つたかといふに、其れは法外に高いものであつて、日歩といふ

よりは、寧ろ時歩ともいふべき大變な高利を取つたものであつた。しかし之れが非常に重寶だといふので、手元の不如意な諸侯は皆な其處へ掛つて行つた。此等の商家は皆大なる金持になつたが、其れは全く東叡山の御蔭で、又山内の數多の宿坊が頗る經濟向の裕かであつたのも、やはり此の貸金制度の餘惠に外ならぬ。

けれども東叡山はたうとう此の金を失つてしまつた。といふのは貸した金を取上げない中に維新の革命が起つて、諸侯は其の金を返さずして濟んだからである。しかし考へてみれば、此の東叡山の金貸の事は我國の經濟史上餘程面白い變態の現象であつて、殊に千兩箱を何十と釣臺にて擔ぎ込み、歸りには又之れを商家へ返してゆくといふが如き、今日から見ると頗る奇なことと感じられる。

五二 石燈籠を墓に充つ

昔の大名は參觀交代などの時に、非常に荷物の多かつたもので、自分の平生愛して居るもの

は大抵携帯し、わけて書畫、茶器などで、どうしても其の身邊を離すことの出来ない品は皆な之れを持ち歩いた。さうして行列を作つて優々たる道中で、天候の関係其他で場合に依り半月も一月も一所に逗留せねばならぬこともあつた。さういふ時に此等の愛藏品を取出して左右に置き、恰も家に在る時のやうな思をしながら之れを弄んだものである。是れは徳川氏の盛時、即ち其中葉以後のみの事で無く、慶長頃にもやはりさういふ風が行はれたものと見える。茶道の方に有名で、又武將としても其の名の高い細川三齋には、平生非常に愛藏して居る石燈籠があつた。三齋は此の石燈籠と片時も離れるに忍びず、普通の旅行の折にも出征の折にも必ず之れを携帯し、泊りくゝの宿屋の庭先に其の燈籠を立て、之れを楽しむを常とした。此の三齋は趣味の方になかく徹底したもので、自分が死んだら墓を作るに及ばぬ、此の石燈籠を以て墓に充てよと命じた。京都紫野大徳寺の塔頭たつちうの高桐院に三齋の墓所がある。そこにはこの石燈籠が墓となつて、法號宗立大居士の字が刻されてある。按ずるに此の燈籠は世にいふ春日形なるもので、其材は奈良石である。奈良は燈籠を作るに最も佳石を産する所だと云はれて居る。

五三 木米墓の洋行

青木木米は我國の陶器界に於て空前の名工といはれ、極めて氣品の高い種々のものを作つた。相當に文學もあつて、山陽、竹田など、交はり、生前にも名聲が高かつたが、今日に至つては、木米の作となると、其の陶器たり書畫たるを問はず莫大の價を有して居る。此の人中の變り者で、嘗て家族に言付けて、自分が死んだらば藏に入れてある大切の土と自分の骨とを捏ね交ぜ、それを焼いて一つの燒物にして呉れと遺言したといふ話が傳はつて居る。是は支那で某大酒家が自分が死んだら粕漬にして酒樽に納めて埋めて貰ひたいと遺言したのと似てるが、木米と親しく交つた竹田なども此事を書いて居る所を見ると、全く根據の無い傳説のみでは無いやうに思はれる。

斯様に其の道に熱中した木米のことであるから、生前自ら陶器の墓を作つて之れを京都五條阪の上行寺といふに建てた。其の墓は六角形の青磁で、高さ一尺五六寸位、少しく黒鼠色を帶

びたものである。名工の自ら作つたものだといふので京都に於ては頗る名高く、寺の住職も特別に之れを保護して居たが、段々時代が経つて木米の孫に當る青木幸兵衛といふものが生計に困つた爲か、よからぬ心を起して、住職の不在に乗じて其の墓を取出し、之れを古物商に金十兩で賣飛ばした。其の古物商は之れを携へて神戸に赴き、或る米國人に譲り渡した。それを買った米人は日本の名工の作だといふので之れを本國に持歸つたが、後轉々して今はボストンの博物館に納められてゐるといふことである。畢竟名工の作といふことが累を爲したのであつて、普通の墓ならばさういふ災難には罹らなかつたであらう。しかし木米も死んでから洋行をした譯で、あんな洒脱な人だから、却つて地下に微笑を洩して居るかも知れない。

五四 銅 人

人間の身體を銅で作つて之れを其の人の爲に記念する銅像なるものは西洋から始まつて來たのであるが、支那にも古くから銅人といふものがあつた。其の支那の銅人はやはり人體に形ど

つたものであるけれども、西洋の銅像とは全く目的を異にして、醫學の研究用として作られたものである。其の始まりは宋の頃であらう。此時分支那の醫學は最も重きを鍼灸とに置き、鍼灸を以て萬病を治療し得るものと考へて居た。其の鍼を打ち灸を据ゑる參考の爲めに斯様なものを作つて醫學寮ともいふべき所に備へ附けたのである。是れは支那で朝廷に於て一二を作つたといふ丈で、澤山あつたものでは無い。然るに日本にも嘗て其の銅人が一つ來たことがある。それは洪武年間に武田明寶といふ人が明に入つて一つ持歸つたのであるが、不幸にして明曆の大火に焼失した。支那の本國にすら一二を數へる程しか無いものを、折角日本へ齎し來りながら之れを焼いて了つたのは、如何にも惜しい心地がする。

醫書に書いてあるのを見ると略々此の銅人の構造が窺はれるが、それは頗る精巧なものであつたらしい。四肢の完備せるは勿論、脈絡の如きも悉く備はつて居つて、ある一端から水を注ぐと、其の全部の脈絡に水が通ずるやうになつて居る。又鍼を打つ可き處には穴が穿つてある。それで當時鍼の試験をする時には穴を蔽うて其處に鍼を打たせて見て、其の能く適中する者を以て及第とする様な事もあつた。又某といふ名醫を試験した時、眼を蔽うて其の銅人に鍼

を打たして見た處、悉く其の定まつた穴に打込んだと云ふ話も残つて居る。此の銅人は宋の時代に作つたのが元に至つて大分破損したので之れを修繕したこともある。元史の工藝傳に載つて居るのに依ると、或る外國人が囚はれの身となつて來た、國王が其の者に向ひお前の長所は何かと尋ねると、自分の藝は像を作り鑄金をするのが専門であると答へた、そこで國王は宋代から傳はつて來て居る銅人を示して、かういふものを知つて居るかと問ふと、知らぬといふた、國王は試みに之れと同じものを作つて見よといふと、自分は此の物を初めて見るけれども、型があれば出來ぬこともあるまいと諾して専ら原型に形どつて作り上げたものが、元の標準銅人となつたといふことであるが、其の工藝家も自ら摸造して見て實に其の精巧なるに驚いたとある。

支那では此の銅人に就て種々の傳説がある、或は之れを粗末にすると疫病が起るとか、又此の物は自然に海上から浮び出たものとか云はれて居るが、其れは何れも附會の説で、事實は前に述べた通り、醫學の大切な參考資料として作られたのだ。つまり今日人體解剖の模型のあるのと同じく、異なるのは唯だ銅で作られてあるといふに過ぎぬ。

五五 大名の和蘭趣味

日本の貴族が西洋趣味を持ち始めたのは可なり古いことで、天正、慶長のころ、例のゼシユイットが盛に渡來した時代から始まつて居る。伊達政宗が羅馬字で自分の名を書いたり細川幽齋が羅馬字の印を作つたりしたものも今も残つて居るが、さういふ事が當時の貴族間に中々流行した。それが徳川期に入つて鎖國令の布かれると共に一時禁止されたけれども、徳川氏の末期に近くに從ひ貴族間に於ける和蘭趣味は又非常に盛んになつた。前年長崎にシーボルト渡來百年の記念會があつて、其れを機會にシーボルト自身の認めた日記が翻譯されたが、之れに依り在來知られて居なかつた色々の事が明らかになり、當時の大名の和蘭趣味に關しても種々興味ある事實が分つて來た。

此の日記はシーボルトが江戸へ來た時のもので、一八二六年即ち我が文政九年のことである。シーボルトが江戸へ來た時、諸侯の中で非常に其れを待ち焦れて態々大森まで出迎へに行

つたものが二人ある。其の一人は薩摩の島津侯（頼豪）今一人は中津の奥平侯（昌高）で、此の出迎へを發端として、シーボルトの江戸滞在中幾度か微行して訪問し、又公けの意味でも面會して居る。一口にいへばシーボルトの僅かな江戸滞在中、此の二人の殿様は殆んど浮身を窶して彼に物を問うたといふ趣がある。薩摩侯は當時八十四歳の老人であつたけれども頗る達者で、シーボルトの見た所では六十五歳位にしが見えなかつた。其の始終の物語は蘭語を交へて話すといふ譯で、動植物の話の出た時には、特に剝製の方法などを尋ね、其の依頼によりシーボルトが或る動物を剝製にしてやつたこともある。中津侯は特に蘭語が達者で、シーボルトに向ひ「どうか私の家へも御出で下さい、私は貴方から手紙や品物を頂戴して有難く思つて居ます」と述べた、其の蘭語までも日誌の中に掲げられてある。

薩摩侯と中津侯とは殆んど競ひ合つてシーボルトを訪問したらしく、薩摩侯は其の世子をも伴はれた。且つ老侯が偶々手に丹毒を患へて居られたので、どうか之れを治療して貰ひ度いと患部を示された。無論老侯には侍醫も附いて居るのであるが、シーボルトは其の患部に塗つてある藥を見て、此んなものは利かぬと思つたけれども侍醫の感情を害してはならぬと考へ、

大分斟酌して治療をしたことなどが載つて居る。此の二人の大名の中、薩摩侯は最早や隱居の身であつたが、中津侯は身分上現職に居つては屢々會見する事も出来ぬとあつて、遂に其の職を抛つたといふことが録されて居るが、其等の事を考へて見ても、如何にシーボルトに會する事に興味を持つて居たか窺はれる。シーボルトの他の記事の中には、或時薩摩侯は其の愛妾を伴ひて、何か胸に痛みのあるのを治療して貰ひ度いと頼まれた。シーボルトが其の診察にかからうとすると、日本婦人の例として身體を現はすのに躊躇したので、醫者の職務として其れを見せて戴かねばならぬと頼んで漸く診察した。シーボルトは日本の貴婦人は如何にも品位があつて、人に對しても傲らないと云つて、頻りに其の態度の優雅な事を褒めて居る。

此等の大名には夫々和蘭通の人達が伴はれて其の會見の席に列したもので、互に興が乗つて來ると色々の話が湧き、頗る滑稽味もあつたものと見えて、或日の會談の條に、シーボルトは自分が生れてから之れ程奇抜な喜劇を見たことは初めてあると、同座の和蘭使節に、和蘭語では分るから、特に佛蘭西語で耳打したと書かれてある。多くは微行で會見したが、表向き盛んな供勢を伴れて訪はれたこともあつて、其の場合には澤山の贈り物をせられ、シーボルト側

では盛宴を開いてもてなした。其の席上でダンスをして興を助けたのを、中津侯が評して、日本と西洋のダンスは、西洋では足で踊り、日本では手で踊るの差別があるといふ、極めて簡にして要領を得たことを言はれたなど、記されてある。

こゝに又筑前の福岡侯もシーボルトと深く交はられた事實が此の度發見された。當時の福岡藩主は齊清公であつて、此の人も非常に和蘭趣味を持ち、動植物學に委しかつた。齊清公の養子は長溥公というて、前に述べた島津頼豪公の子である。此の長溥公も實父竝に養父に似て和蘭趣味を有し、屢々シーボルトに面會した。全體長崎の警備は佐賀と福岡とで受持つて居たので、福岡藩主は屢々長崎に往來し、西洋文明には早くから興味を持つ資縁があつたのである。此の福岡侯とシーボルトとの問答録が此の度初めて公けにされたが、それは福岡藩の儒者の書いたもので、之れを見ると長溥公は動物學に關する知識に長じ、特に鳥の事に委しかつたため、シーボルトも非常に驚き敬服したといふことである。シーボルトが二度目に日本へ來た時、即ち前に言うたやうに頻りに諸侯の往來した時は、もう日本にも餘程西洋の文明が傳はつて居た時で、種々新しい趣味家のあつたのはいふ迄も無いことだが、貴族方面の事があまり世に知ら

れて居ないから、特にこれ等の事を録して置く。

五六 名人紋十郎

淡路は昔から人形使ひの名人を出す國といはれて居る。大阪の文樂に光輝あらしめた名人は多くは此の淡路の産である。さうして其の名人の最後といふべきは、今は故人となつた紋十郎で、やはり淡路の産であつた。

自分は大阪で二三度此の紋十郎の藝を見た、いふ迄も無く斯様な名人が登場する時は、例の覆面などをせず、面を現はし、袴を著けて人形を操縦するのである。紋十郎の藝に感じたことの一つは、多くの者は人形を操縦する間に其の人形の氣が移つて、非常に興奮したり、哀傷の情を現はしたり、ともすれば聲を發したりするのが通例で、其の面貌には種々の表情を見るのであるが、紋十郎には斯様な事は絶えて無く、實に神色自若たるものであつて、始終其顔を見つめて居るに、如何程愁嘆の場合にも神經二つ動かないといふ落付き切つた態度には、寧ろ不思議

に感じた位である。無論其の藝に至つては最後の名人といはれる丈けあつて、自由自在に人形を扱ひ、恰かも神ありて之れを操縦するかと思はれる程で、いつ見ても感嘆に堪へなかつた。

此の紋十郎が嘗て東京に出て来て、當時第一の小説家であつた假名垣魯文の家を訪ねた。魯文の書齋に通つてみると、床には古い佛像が置かれ、襖は古寫經で張り詰めてあるといふ風に、すべて佛教趣味を以て固められて居るので、自然に談話が其等の事に涉つた。其の時魯文が紋十郎に向つて、貴君も時には佛教に關係した藝をやられることがあるだらうが、御心得の爲めに一寸庭へ出て御覽なさいといった。其の言葉に従つて庭へ出ようとすると、靴脱ぎの處に妙な草履があつた。其れを指して魯文のいふには、此の草履は蓮の葉を乾かして作つたものである、蓮の葉はブク／＼して居て、軽く柔らかだ、此の庭の中には肉眼に見えぬ程の小さな蟲がどれ程居るか分らぬが、斯様に柔らかな草履を穿いて庭に出れば、誤つて蟲を踏んでも之れを殺すに至らぬであらう、左様の用意から特に此の草履を作つたのである、佛を尊ぶといふ以上は其れ位の心掛がなくてはならぬと自分は思つて居る、貴君も何か佛に關する藝をやられる場合には、斯様の事が参考にならぬとも限らぬといった。其の後、紋十郎が歿する少し前に

文樂で近松の「釋迦如來誕生會」を出した。其の時自分は丁度大阪に居て、新聞を見ると今いたやうな話が掲げられてあつて、魯文の意匠に本つき釋迦には蓮の葉で拵へた草履を穿かせると記されてあつた。自分もそれに興味を感じて見物に行つて見たが、紋十郎は一度は左様に考へて蓮の葉の草履を穿かせようとしたが、やはり跣足はだしの方がよいと考へ直したと見えて、人形の釋迦には遂に其の草履を穿かせなかつた。是れは矢張り穿かせない方がよいのであつて、流石に紋十郎には他人の説を取捨する丈けの見識のあつたことが窺はれる。

五七 河内山宗俊の事

今は震火の爲めに焼けてしまつて跡方も無くなつたが、下谷練塀町に河内山宗俊の住んだ遺跡があつて、それが壽しほといふ料理屋になつて居た。嘗て或る友人に誘はれて其處へ行つて見たことがあるが、妙な狭い露路を這入つて行つた處で、格別大きな家でなかつた。無論河内山の住居した時代のもものでは無く、後に改築されたものであるが、唯だ元の家の材木がいくらか用

ゐられて居るといふことであつた。此の料理屋は壽といふ名ではあるけれども、寧ろ河内山といふので知られて居た。二階などもある家だが、いかにも狭苦しく取立て、いふ程のことも無かつた。

此の河内山宗俊は前年左團次に依つて扮せられ、何人も知つて居る詐僞師である。しかも中大規模の詐僞師であつて、徳川三家の一たる水戸家の弱點を突き、少なからぬ金を強請り出したといふ、泥棒でいへば、石川五右衛門に匹敵する程の大詐僞師である。此の人間が如何なる様子の男であつたかといふことに就て、同時代の鈴木白藤といふ人が目に見る如くに書いて居る。其の記す所に依ると、或日白藤が今の向島の枕橋あたりに舟を浮べて、酒を飲んだり釣をしたりして遊んだ。其の折藝者のお時といふのを伴れて行つたが、舟中でお時の語るには、今より十数日前一人の客が柳橋へ来て船と藝者とを吩咐け、やはり此んな様にして遊んだ、其の客は坊主であつて、其の扮装は白縮緬の單衣に殆んど餘地をあまさず大きな鬮を染出し、それに二尺餘りもある卒塔婆を染抜いて、卒塔婆には身の上知らずといふ字が大きく書かれてあつたといふた。白藤は豫ねて聞いて居るものだから、其れは色の白い、肥えた人間では無か

つたかと聞くと其の通りだといふ。そこで白藤のいふには、其れは確かに當時名高い無頼の詐僞師だ、何でも其の家の床柱は磔刑の柱のやうに出来て居て、おれは結局は此の木に上らなければならぬと平生いうて居るさうだと語ると、お時も成程と思ひ合はす所あるもの、如く、其の人は金を使ふこと湯水の如く、少しも惜まぬ、それ故藝者達も初めは喜んで出て居たが、段段恐ろしくなつて皆な避けて其の招きに應ぜず、柳橋邊を通ると人が皆な出て見物するといふた。これが即ち河内山宗俊の事を書いたものであつて、今日に残つて居るものでは之れより外に無い。前にいうた壽の家には果して其の磔の柱があつたかどうか、つい心付かずして尋ねて見なかつたのを遺憾とする。

五八 花のローマンス

西洋の神話を見ると、花が色々な場合に材料として使はれて居る。たとへば誰某は花の化身であるとか、何某が死んで花に化けたとか、或は人間の血が花に注がれて其れから其の花の色

が赤くなつたとか、或は神女の乳に矢が立つて、其の乳汁が逆つたので白い百合が生じたといふ様な神話が澤山ある。西洋ばかりでは無い、支那、日本でも上代の神話的物語に花が材料となつて居るものは少なくない。其れは何故であるかといふに、先づ第一に上代は東西共に迷信が人間を支配した世の中であるといふことを考へなければならぬ。又花の美であること、其の美である爲めに女性美に擬せられること、それから延いて花と愛との間に自ら連絡を生ずるに至つたこと、其の結果花に事寄せて戀を語つたもの、多いことなどを何人も思ひ浮べるであらう。花は詩人には最も大切な材料であつたに相違ない、それ故上代の神話に花が多く取込まれて居るのも、決して不思議とするに足らぬ。又迷信の深かつた時代の慣ひとして、花には靈があると思はれた。成程花には活力がある、朝と晩とは其の趣がちがひ、季節の移り代りに随つて盛衰代謝がある、活物であるから靈があると考へたのも無理は無い。靈ありとする以上は花が人間に化身したり、又反對に人間が花に化身したりすると考へたのも尤もなことである。

愛人の死に逢ひて、其の愛情の結晶が花になつたといふやうな例は西洋の神話に最も多く、

寧ろ之れが一つの型になつて居ると云つてよい。勿論譬喩的に花に事寄せたのが、事實と信ぜられるに至つたものなども多いやうだ。婦女子の名を花になぞらへる例は、日本、支那にも多く、現在でも行はれて居る。源氏物語などを見ると、色々の花が人間の名になつたり、又篇名になつたりして居る。たとへば藤壺とか、末摘花とか、葵とか、夕顔とかの類だ。婦人と花との關係について、支那の例をいへば、項羽の妾が自害して、其の鮮血から生えた草が虞美人草だといはれて居る。西洋では、薔薇は、ベツレムといふ所の小娘が火に焼かれて悲惨の最期を遂げた、其の焼跡へ生えたのが此の花であるといふ。又バンジーはもと白の一種しか無かつたのに、キュービットの射た戀の矢に觸れてから今の色になつたといはれ、アネモネは、ピナスが情人である青年アドーニスの死んだのを見て太く悲しみ、其の時流した涙が情人の血と混じて其處に生えた花だといふて居る。水仙を西洋ではナルシサスといふ、是はナルシサスといふ美少年が、水の面に美人の顔の映るのに見とれて溺死したが、後に水仙となつて生ひ出たので此の名がある。日本にある福壽草は、ある可憐な女神が不幸にも土龍の神に嫁いで自殺を遂げた、其の跡に生えたものだ、アイヌの土人間に傳へられて居る。斯様に數へ来れば際

限も無く色々のことがある。

支那の小説、隨筆には花精、花妖などいふ文字が頻りに用ゐられてあつて、其の花精が人の妻になつたとか、或は深山に入つて立派な美人に逢つた、それは花妖であつて、互に詩を以て應酬したといふやうな事が多く書かれてある。日本で立てば芍薬、坐れば牡丹といふのを美人の形容に用ゐたり、海棠を美人の睡後の状態に例へたりするのは珍しくないが、此等は大體支那感化であらう。

又花を婦人の形容に用ゐるのみで無く、性慾の意味に用ゐることが、東洋にも西洋にもある。たとへば花心といふ語は淫を思ふ心で、花柳といふのは淫を賣る巷である。又蓮華は婦人の生殖器を象つたものだとせられるなど、兎角花が生殖と離れない關係を有して居る。西洋では今日尙ほ花詞、即ちラングエージ・オブ・フラワーといふものがある。それは本來は懸想文などに代へて若い男女の間に取換はず謎のやうな記號であるが、此等もやはり神話から傳來したものであらう。其の謎のやうなといふのは、花の形や或は其の美醜等によつて吉凶を判斷するのである。たとへば此の花は戀を満足させる花だとか、此の花は不吉の花だとかいふことに付、

夫々の傳説が附屬してをつて、其の数は頗る多く、一寸記憶も出来ない程ある。其の一二をいふと、躑躅には節制といふ意味があり、石楠花には危険といふ意味がある。又黄楊には禁慾或は確實不變、榛には仲直り、木槿には纖弱なる美人等の義あり、百日紅は雄辯を現はすものとされて居る。先づ大體此んな工合になつてゐて、之れが今日も猶ほ交際社會に實地に使用されて居るのは、畢竟古代から花に伴ふ傳説の非常に多かつた其の名残りとも見るべきであらう。此等の内では日本人として一寸解しかねるものもあるが、それは日本の事で西洋人に理解されないもの、あるのと同じことである。たとへば日本の武士道では椿の花を嫌ふ、それは恰も首の落ちるやうにポツツリと花が落ちるからだ。又蘭は幽谷の君子に譬へられ、薊は毒婦に比せられるが、此等の事は或は西洋人には理解することが出来ぬかも知れぬ。それと同じく日本人としては百日紅を雄辯と考へたり、木槿を纖弱なる美人と解したりすることは、一寸出来ない。是は國々によつて其の傳説や國民の感情の異なるためであらう。

五九 昔の園遊會

園遊會といふものは事實の上に於て古くから日本にも存してゐた。しかし園遊會なる名の附き始めたのは近頃の事で、其れは大隈侯から始まつたといはれて居る。侯の外務大臣時代、初めてガーデン・パーティーとして、外國の公使達を自邸の庭園に招いて宴會を催した、それ以來園遊會といふ名が行はれたのである。斯様に近い話は何人も知つて居るが、古い頃はどうかであつたかといふに、豊太閤が醍醐に花見を催したなども、やはり園遊會といふべきである。此の時は豊公が一世の豪奢を極めて、あらゆる武將が之れに参加し、豊公の夫人、後宮の愛妾等が皆な此の會に參じ、其の壯麗なること前代未聞と稱せられた。此の花見の事について、小瀬甫庵の書いて居るのを見ると、今いふ摸擬店なども作られ、色々の大名の催しで、今日の如く團子屋とか、蕎麥屋とか、すし屋とかいふ類の店を出して、大名の妻や娘が假裝して接待した。太閤興に入り、或る摸擬店へ立寄つて、何か摘んで食べた後立去らうとすると、二十歳許りで

其の店の女房に擬した婦人が、太閤の袖を控へて、「どうぞおあしを」と云つて請求したとある。だから園遊會并に摸擬店を作る趣向なども、必ずしも今日に始まつたことで無く、昔からあることだ。是は日本のみで無く、支那にもある。ある帝王が宮中の庭に園遊會を催した時、やはり摸擬店を作つたことを、誰やらの隨筆で見たことがある。

六〇 夜鷹蕎麥

明治八年頃までは徳川幕府の制度がいくらも市井に存してゐて、それが自然に守られてゐた。乃木大將がまだ少尉か中尉位な時、寒中夜ふけて家へ歸る途中、夜鷹蕎麥を賣る老爺に出遇ひ、これ幸と一本熱燭をつけてと頼むと、此の老爺は「それは天下の御法度だから成りません」といふので、乃木將軍も驚いて、何故と聞くと、深夜通行する人に酒を飲ませると、其の人に盗心を起させることがあるので禁じてありますと聞かされ、將軍も成る程と感服し、蕎麥を喫しながら、尙ほ他にお前達の守るべき掟があるかと聞くと、老爺の語るには半鐘がジャン

ジャン鳴り出すと、直ちに其の方向に出かけて、火事場に働く人の用を足すことになつてゐると
いうたとある。此の話を曾つて大内青巒氏が小野梓氏に聞かせると、日本の法律資料を得るに
熱中してゐた、小野氏は頗る感心して、是非夜鷹蕎麥を喰ふ附き合をしてくれ、そして其の商
人からいろいろの話が聞きたいとあつて、大内氏も已むなく深夜ヤット街頭に夜鷹蕎麥を探し
當てたが、その商人は一向何も知らぬものであつたので失望したとは、大内氏がいつぞや小野
氏の追悼會席上で語つた逸事である。

六一 靈鳥フェニックス

自分の書齋に掛けて居る、坪内逍遙翁の書いたフェニックス (Phoenix) の畫幅について、
多少の話がある。是は火災の揚つて居る處に、鳳凰に似た鳥、即ちフェニックスの飛んで居る
圖である。此の鳥はアラビヤの古い傳説に、五百年を経過すると、自ら其の死期を知つて火に投
じて死ぬ、併し一旦は死ぬが、間も無く更生して又灰の中から飛び揚るといはれて居る。勿論
一種の寓言に違ひないが、逍遙翁が前年の震災火災に罹つた人から何か書けと頼まれ、思付いて
書いたのが此畫であつて、如何にも復興といふことを寓するには新らしい工夫というてよい。
此ごろ偶々森島中良の「紅毛雜話」を讀んでみると、其の中に此の鳥の事が載つて居る。勿
論今より百年許り前和蘭人の來た頃に其の話を聞いて書いたものであつて、記述に多少の誤り
もあるか知れぬが、大體此の鳥を説明して居るやうであるから左に抄録する。

フェニス
弗尼思

フェニスは鳥の名、明人の製する星の圖に火鳥と譯す。此鳥四五百歳にして死す。かれて其終る日を知
り、香木を積み置きて其上に立ち、天氣甚だ熱する日を待つて、尾を搖して火を起し、自ら火中に焚死
すとなり。其灰變じて一つの蟲となり、其蟲化して鳥となる。故に天下に唯だ一羽のみ。西洋の諺に二
つ無きものをフェニスといふ。此鳥の圖、ヨンストンス其餘の蠻書にも出でたり。實は寓言のよし也。

尙ほ西洋にはフェニックス・インシュランスと名を命じた火災保險會社もあつて、火に燒けても
復興するといふ目出度い意味の名とされて居る。

六二 家康の鑛山政策

今日では鑛山事業は國家重要な産業となり、巨大の資本を投じて之れが採掘に従事する者多く、従つて鑛山に關する法律も立派に成立つて居るが、扱て古代はどうであつたかといふに、勿論諸國で鑛産物を採掘し、之れを朝廷に獻上したといふやうな事は種々の記録にあるが、當時其の採掘は非常に困難で、第一に所要の機械類も調はず、又之れを操縦する方法も宜しきを得ず、單に目前に見えて居る所を掘るといふに過ぎなかつた。斯様の場合に當つて鑛産を盛んにすることに着眼した政治家は、勢ひ之れに向つて大なる獎勵法を行ふの必要を感じるは當然であらう。徳川家康の如きは、此點に於て最も大膽なる鑛山政策を行つた者だ。

家康の取つた鑛山政策ともいふべきものは、其の當時として如何にも思ひ切つた保護獎勵を行つたものであることが、山例五十三條なるものを讀むと窺はれる。先づ此の五十三條中の重なる條項を左に擧げて見る。

一、假令ひ名城の下なりとも鑛うち於て有之は採掘不苦

一、山師、金掘師を野武士と號すべし

一、山師、金掘師の儀は關所見石一通りにて可相通事

一、山師、金掘師人を殺し山内に駈込むとも留置仔細を改め如何なる事も山師、金掘師の筋

明白相立候は留置働かせ可申事

即ち城下といふやうな所に鑛脈のある場合には、そこを避けて採掘せぬのが普通の例であるのに、家康は、たとひ城下であつても、苟くも鑛脈ある以上は之れを採掘すること一向苦しくないと定めて居る。又鑛山の採掘を行ふ者を昔は山師と唱へた。當時に於ては此の山師といふ言葉は格別卑下した言葉ではなかつたであらうが、併し決して名譽ある言葉で無かつたに相違ない、家康は鑛山に従事する者に對しては相當譽れある名稱を與へねば進んで山に行かぬと考へた爲めに、山師、金掘師等はすべて之れを名づけて野武士と云つた、即ち野といふ字こそ附いて居るが、兎に角之れを以て武士に準ずることにしたのである。又此等鑛山業者の待遇に就ても、一種の特權を與へたものであつて、當時關所を通るには非常に面倒な掟があつたに拘ら

ず、山師、金掘師が關所にか、つたならば、一應取調べて通して宜しいといふことを號令して居る。尙ほ山師、金掘師が殺人の行爲あつて鑛山に駈込んだ時には、之れを留め置き、情狀を糺して、其の筋が明かになつたらば、矢張り之れを働かせて宜しいと申渡したのである。

當時の文章は如何にも簡潔であつて、一寸意味の判然せぬ所もあるが、兎に角其の時代の八釜しい法律を、餘程寛やかにして取扱ふといふ迄に鑛山に居る者に特權を與へた事から考へてみても、如何に家康が國富を開拓することに意を用ゐたか、察せられる。何れ其の當時は殆んど命いのちしらずといふ程のもので無ければ、鑛山の仕事に従事する勇氣も希望も無かつたのであるから、尋常一樣の方法を以てしては、到底鑛産の獎勵などは行ひ得なかつたに相違無い。家康が其の點を考慮して、少しく軌道を逸しては居ないかと思はれる位、大膽な特例を設けたのは、流石に大政治家である。

六三 人間の四質

人の資質を見てあの人は神経質だ、多血質だ、頑固性だなどとは何人もいふ事であるが、西洋では早くから此事を研究して其れを具體的に説いて居る者がある。或は人の資性を四質に分ち、或は六質に分つて居るが、其の四質に分つて居るのは、一に曰く多血質、二に曰く粘液質、三に曰く胆汁質、四に曰く黒胆汁質、即ち之れであつて、六質に分つて居るのは以上の外神経質、強筋質の二を數へて居る。リゼランドといふ人などは六質論者であるが、四質論者の方では、神経質は常體で無く多く病體に發顯する一症であるから別だ、又強筋質は多血質中の變化に過ぎぬから一類とするに足らぬというて居る。按ずるに神経質は必ずしも病體と見る事は出來ぬが、しかし要するに多血質や胆汁質或は黒胆汁質に伴ふ一質であるから、之れを一類と見ぬ方がよいかと思ふ。さういふ次第で先づ四質分類が通例となつて居るやうだ。かゝる研究は相學者などの領域に屬するもの、やうでもあるが、一面醫學に連絡あることはいふ迄も無い。すべて斯様の偏質者は、病者では無いけれども、其の甚しいものになると治療を要することにもなる。醫家も病客を治療するに當つて此等の質を心得て置かねばならぬことは勿論である。

偶々安政の頃出版された廣瀬天目の「三才雜辯」といふ阿蘭陀醫說の譯本を見ると、中に四

質論一篇があつて、其の大略を擧げて居る。所謂四質をかいつまんで、自分の言葉に直していうてみると左の如くなる。

(一) 多血質 其の相貌、顔面赤く玫瑰ばなばなの花の如し。身體のなりたちは備具して不足なく、膚目の硬軟宜しきを得て肥満し、相は溫柔にして、身の長高からず低からず、毛髪は細くして稀少、手足の舉動輕捷にして迅速なれども速かに疲勞するに至る。常に睡眠を嗜む、されど覺めて後は神氣爽快なり。神經の覺力は活潑にして感動し易く、思慮殊に轉移し易し。記憶力、想像力共に強く、物に觸れて忿怒し易きも解散するも易し。概して性急なり。此の質に屬する人の血液は多量にて運行も速かなり。總じて驕慢にて娛樂を好み安逸を欲する者の固有質は此の多血質なり。

(二) 粘液質 此の質の者は常に怠惰なるを以て惰慢質の名あり。天稟鋭敏の才なく、思慮常に粘着にして速かに決せず、記憶堅からず、心神定まり難く、精神萎微揮はず、是非辨じ難し。好んで睡眠を貪り、又恐怖し易し。此の質の人、體中の水質多量、諸液過量、其の運行遲緩なるが故に、諸機の運営も亦怠慢なり。其の水質多量なる故を以て或は多水質ともいふ。

大體此の質の人脂肪多くして肥満し、皮膚滑澤軟柔にて膨脹し、脈は遲緩なり。總て濕地にして池沼多く、或は濕霧多き地方に住する者に此の質の人多し。又蔬食して多量の水液を嗜好するものにも此の質の人多くあり。

(三) 膽汁質 此の質のものは身體の構成堅固壯健にして纖維強硬、體軀肥大にして重量あり、固形部の作用は流動部のそれよりも勝れり。毛髪は繁茂して深黒且つ太し。眼目灼々として光を放ち、脈動は強硬なり。食慾は強くして多食なれどもよく消化し、膽汁の分泌は甚だ速かなり。身體諸器の運営活潑にして容易に疲勞せず。よく熟睡し、心思堅剛、七情の發動劇熱にして屈撓すること無く、甚だ忿怒し易し、故に火氣質の名あり。概して驕慢にて貪慾なり。然れども其の職に熱心して疲勞を感じず、一たび事を企つる時は他事を顧みず一意遂行を期す。肉食、過酒の人に此の質多くあり。

(四) 黑膽汁質 一に頑固質と名く。此の質の者老人、職人、殊に座業者、筆工などの如く、體軀の運動常に靜にして年月を積むもの、固有性なり。此の質のもの己れの業に心思をこらし、よく努力し、其の勞苦を厭はず、事を爲すに輕薄なること無く、物を極むる故に藝に達

するものあり。心中常に鎮靜ならず、危難を怖れず、人を輕侮して諫言を用ゐず、能く苦患に堪へ、忿怒して事に臨めば危難を避けず、往々自負の爲に事を過つことあり。性頑固にして物の爲に動かさず、一たび怒る時は之れを解く能はず。然れども才能鋭く、智慮深きものあり。此の質のものは概して體軀骨立して皮膚は乾燥し、諸筋強直且つ硬固なり。睡眠常に少く、容貌鬱憂なるもの多く、眼窠凹みて常に愁に沈み、疲憊せるもの、如し。此の質のもの極熱の地方に多し。又常に粗大硬固の物を食する人に多し。

以上は人間の四質の概略であつて、之れを讀めば何人も自問自答で自分ほどの質に當つてゐるかを直ちに判じ得るであらう。ある友人は多く人の集まる懇親會などに臨んで巧みに此の四大質を説き、皮肉や滑稽を交せて到る處喝采を博したことがある。實際十把一からけに臆面も無く人の急所を衝くの法は之れであつて、急所を衝かれたからというて怒ることも怨むことも出來ず、おのづから諷刺ともなつて其の人の反省を促がすことにもなる。

六四 支那人の淨瑠璃

支那人は他國の言葉を學ぶのが頗る器用で、三年位外國に居ると、日本人が十年も居て尙ほ覺えられないやうな外國語を巧みに操つる。そこへ行くと、日本人程外國語に不器用のものは無いと云うてよい。日本の俗諺の如きは、普通の言葉とはちがひ、よほど外國人が學ぶには六かしいものであるが、それすら支那人は多少の心掛があると、日本人よりも遙かに長ずるものがある。現に自分が五六年前支那に旅行した時、奉天で多數の支那人に招かれた、其の席上或る若い支那人が自分等一行の爲に日本の都々逸、端唄、追分などを歌つて興を添へたが、何れを聞いても實に旨いもので、是にはアツと敬服せざるを得なかつた。恐らく日本人の玄人の間に伍しても、此の支那人の藝は決して遜色ないものと思はれた。

昔し長崎へ支那人の頻りに往來した頃、陸明齊といふ者が來て、暫らく長崎に滞在し、其の間能く日本語に通じた。其後或る薩摩人が海上難風に逢つて船が沈没し、支那へ漂着したこ

とがある。丁度其の到着した土地に陸が居たので、支那の官廳では取敢へず同人を呼んで色々通辯をさせ、又陸が日本の事情に通じて居る所から、其の家に漂流人を宿泊せしめた。陸は日本人に同情を寄せ、日本の器物を用ゐる、日本料理を以て賄つたのみならず、夜になると旅愁を慰めるために自ら忠臣藏の淨瑠璃を語つて聞かせたが、遠い異國で斯かるものを聞くは實に珍しいというて、皆々驚き且つ感心したといふことが、水戸の青山延光の隨筆「雪夜清話」に載つて居る。自分の實驗した前の話と考へ合せてみると、無論此等は事實であつたに相違ない。序でながら、支那人がしきりに長崎に來た頃は深く日本人の義勇である事を感じ、日本の淨瑠璃中でもとりわけ忠臣藏竝に國姓爺を喜び、それが非常に評判になつて居たらしい。又古い時代に或る朝鮮人が日本へ來て感心したことがある。それは子供が柱に頭を打付けて痛い／＼と泣き出したのを、脇に居た母親が「此奴が悪い奴で」と柱を手で打つた爲め、子供は忽ち泣き止んだのを目撃して、日本人はなか／＼恐るべきものだ、小兒といへども復讐心があるといつて、深く感心したと云ふ逸話もある。

六五 鬘のくさ／＼

日本の劇は非常に複雑な變遷を経て今日あるを致したもので、從て之れが研究も中々容易の仕事では無い。近來に至り劇に關する研究は大分歩を進めて來たやうであるが、併し何れかといへば其研究は未だ疎枝大葉に止まり、部分的の事には及んで居らぬ憾みがある。單に舞臺といふ丈の研究でも頗る廣汎の範圍に亘り、坪内博士の如きは多年之れを心掛けて居られるから、遠からず舞臺史といふやうなものも現はれること、思はれるが、さういふ稍々大きい事は遠からず發表されるとして、極く些細な事で、しかも日本の劇を研究する上に閉却することの出来ないものが少からずある。たとへば限取或は鬘といふ類のもので、追々部分的に研究されねばならぬ時が來るであらう。

今茲に一二云うて見たいと思ふのは鬘の事である。考へて見ると随分馬鹿々々しい鬘が工夫されたと思はれる者がある。たとへば大百、半百、濡百、車鬘といふやうな鬘のあることは、

芝居通は勿論知つて居ることであるが、しかし今日では段々かういふ鬘を理解するものが少なくなつて行きつゝ、あるやうに思はれる。現在でさへ大百とか車鬘とか云つても何の事か分らぬ人が多いのであるから、まして之れから數十年も経つたらば丸きり其の意味が分らぬやうになるであらう。併し此等の鬘は全く日本固有のものであつて、今日といへども依然或る種の劇には用ゐられて居るのである。それで大百とは何の事かといへば、百日かづらに大の字を冠して、之れを約めて言つたものである。即ち入牢等に依り百日も剃刀を當てないといふ所から、多くは悪形の被る鬘で、石川五右衛門等に扮する俳優の用ゐるのは此の大百である。勿論入牢のみに限らず、扮する人間の強みを添へる場合に此の鬘を用ゐる場合も多い。自雷也や犬山道節などの鬘は其の一例である。又半百といふのは五十日位剃刀を當てない様を現はすに用ゐられる。濡百といふのも多くは悪形の用ゐる鬘で、牢屋などを逃げ出して水門を潜り出る時、例の百日鬘がいくらか水氣を帯びて濡れて居るといふ所から來て居る。車鬘といふのも矢張り荒事師の著けるもので、兩側の鬘が非常に張つて、何と無く細い菊の花が咲き亂れて居る如く見える異形の鬘である。「暫」の主役の如き、思ひ切つて人間を強く見せようとする場合に用ゐられる。

此等の鬘は今日の劇には段々廢れ行きつゝ、あつて、やがては骨董の部に入るであらうが、斯様な不思議ともいふべき鬘が工夫せられ、それが舞臺の上に一種の意味を成して居た時代を振り返つてみると、馬鹿々々しい間にも又甚だ興味がある。

六六 過渡時代の醫說

西洋の醫術が初めて日本へ入つて來た頃は我が醫學界の混沌たる時代で、一方に一から十まで西洋説に左袒する蘭學者もあれば、他方に於ては舊來の漢方説を固持する者もあり、或は又漢方醫にして洋風の醫書を読んで兩者を折衷する者もあつた。左様の過渡時代の常として種々なる珍説の唱へられたのは敢へて異しむに足らぬが、茲に其の一例として挙げたいのは、嘉永年間に版本になつた、忍藩の侍醫河津省庵の著述に「醫則發揮」といふのがある。其の中に、西洋風の醫家は生殖器の名を男女別々に附けて居る、即ち陽器の或る部分を舉丸と名づけ、之

れに相當する陰器の部分の卵巢と呼んで居るが、是れなどは甚だ間違つて居る、自分の研究する所によると卵巢も卵巢も少しも異ならぬ、卵巢も左右に二つあり、又動脈の關係其他悉く卵巢と同じ工合になつて居る、然るに西洋家は之れを卵を藏する所だといふ點より卵巢と別の名を附して居るが、是れは頗る心得ぬ、宜しく男性のを男卵丸、女性のを女卵丸と稱す可きであると言つて居る。是れなどは過渡時代の説として有りさうな事にも思はれる。自分は醫學の事には門外漢であるが、嘗てある醫學博士に此の事を話した處、成程、卵を藏して居るといふ一事を除いては全く卵丸と同じであるから、之れを女卵丸といふも強ち無理では無いと答へた。

茲に今一つ卵丸について可笑味のある話がある。それは紀州の醫者に花岡隨賢といふ人がある。外科が専門で、明治に跨つて生きて居た人で、非常の名醫と呼ばれた。敢へて西洋の醫術に倣つた譯でも無いのに、魔睡藥等の工夫もあつたと云はれる。此の人色々の患者を手がけた中に、ある時卵丸の三つある患者が來た。花岡は之れを診察したが、それが自然に然るものか、或は病的のものであるか、判断がつかかね、之れを検査する爲めに機智を弄した。それは患者を仰向に寝かせ、晃々たる刀を揮つて、「さア之れから切るんだ」と威した。不意に斯く言は

れて患者は大に驚き卵丸は縮み上つて收まつたが、手を出して調べて見ると、其中一つ收まらぬものがある、之れある哉と、漸くそれが病的のものである事を知つて、治療を施した爲め、病は早速癒えたといふことである。

六七 閑却されたる大火

古來我國に大火のあつたことは數しれぬが、中にも日本の文獻に大なる禍を成した點に就て人多くは應仁の兵亂をいふ。如何にも此の兵亂が文化の上に禍を成したことは云ふ迄も無いが、併し朝廷の大切な文書を取扱つて居る家に特に兵を置いて守護したとも云ふから、或は案外輕かつたものとも思はれる。却つて多くの人の注意を拂はぬ安元といふ時代の火災が、非常に文獻に禍した。其の事實は當時の記録「玉海」に次の如く記されて居る。

安元三年四月八日、曉更人告云、夜前火猶未消、京中人屋多以燒亡云々、隆季卿文書不殘、紙一紙燒失了云々、又隆職文書多以燒了、宮中文書拂底歟、凡實定、隆季、資長、忠

親、雅頼、俊經等皆富文書家也、今悉遭此災、我朝衰滅其期已至歟、又尹明文書六千卷同時燒了云々、燒亡所々、大極殿以下八省院一切不殘(後略)

安元三年は安元の最終の年で、次に治承と改まつて居る、丁度平清盛全盛の時代である。右の記事を見ると、大極殿以下八省悉く焼失したとあり、引かれてある人名は多く文獻に富んだ家柄で、それが悉く罹災した。此事を考へてみると、大切な文獻は殆ど此時に全滅したといふ形である。いふ迄も無く當時の書籍は全部寫本で版本は絶対に無かつた、且つ此の當時支那の書籍は未だ多く渡來せず、亡びたものは概ね國書であつたに相違ない。しかも僅か一本しか傳はつて居らぬといふやうな貴重な寫本が、悉く亡びたことを思ふと、日本の文獻史に頗る重大の關係がある。史家多く應仁を語るが、此の事を閑却して居るのは心得ぬ。

六八 名醫の機智

まだ洋醫の行はれなかつた時分に、産科醫として名高かつた賀川子女といふ人がある。京都

に住して、其の道には非常に重んぜられ、産科に關する有名な書物も残つて居る。ある時、皇后様が非常な御難産の折、此の賀川が宮中に召された。勿論それ迄に、宮中の侍醫等は百方手を盡して見たのであるが、どうしても御安産に至らないので、遂に賀川を召されることとなつた。處で朝廷の慣例として、民間の醫者を召される場合には、如何にして御病氣を治療するかの醫案を尋ね、然る後拜診せしめることになつて居たもので、子女の場合にも矢張り其れを尋ねられた。之れに對して子女のいふには、自分は術の人で、文の人で無い、學と術とは自ら異なるもので、自分の施す術を書立てよと云はれるのは甚だ迷惑である、併し文には書けないが其の方法を眼前に御覽に入れることにしようというて、周圍四寸五分位の竹を厚さ一寸許りに切らせて、折ふし座中の菓子皿に盛られて居た饅頭の上へ其の竹の輪切りを乗せ、指を以て輪切りの中から饅頭をつまみ取つた。周圍四寸五分の竹の輪切りといへば小さなもので、指を二本入れ、ば一杯になる、其處から易々と饅頭を取上げて扱て、自分の術はかういふ仕方のものだと云つた。元來子宮の周圍は四寸五分と云はれて居るので、之に擬するに竹の輪切りを以てしたものである。其の座に立會つた人々は、何れも此の卑近なる實例を見て成程と感心し、

直ちに拜診を許された。そこで子女が得意の術を施した處、陛下には御惱み止んで御安産あらせられたとある。是も醫術の進歩せぬ時代の状態を語るものといふべきであらう。子女は指が非常に細く且つ餘程の力があつたと云はれて居る。

六九 偽書慕夏堂集

朝鮮の慶尙北道大邱を西南に五里許り離れた所に友鹿洞といふ所がある。其處に幾百の人が一團をなして住居して居るが、之れが日本人を祖先として居るといふ歴史があつて、其の部落限りで結婚をして、殆んど他と血族上の關係を結ばず、一種の日本村を形造つて居る。此の部落の祖先は如何なる者かと尋ねると、昔し豊太閤が朝鮮に兵を出した時、日本の部將で、三千の兵を率ゐて朝鮮に降つた者がある、それが此の部落の祖先で、子孫連綿として今日に至つたものだと言つて居る。其處には立派に其祖先の碑も建てられて居て、部落の人達は、何と言つても日本の武將の後裔だと云ひ張り、其れを一種の誇りとして居る。彼等は嘗に斯様の事を、口

碑に依て傳へ來つたのみならず、之れが立派な證據だというて持出す所のものである。それは「慕夏堂集」といふ、如何にも立派に刻されたる文集であつて、之れこそ我等の祖先の文章を集めて版にしたものだと言つて居る。其等の意味からして、此の「慕夏堂集」は日本人の間に特に興味を以て讀まれて居るのであるが、併し是はどうしても正しいものではなく、何者か爲にする所あつて作つた偽書に相違ない。其の事は文集中の事實に歴々として現はれて居る。

此の文集に載つて居る事實をかい摘んでいふと、文祿の役に、加藤清正の先鋒を勤めた武將に沙也可といふ者があつた、此の人當時二十二歳の若者であつたが、かねて支那古代の聖明の世を慕うて居た所から、其の流れを汲む朝鮮に對して無名の師を起すは甚だ宜しくないとて、三千の兵を率ゐて朝鮮に降つた。朝鮮では大に其の人を徳とし、後には種々の官職を授けて、相當立派な地位に押上げ、國王は之れに授けるに金忠善の名を以てしたといふので、其の文集には戦役に關したことなどが多く書かれてある。

所が第一に疑問であるのは、日本には沙など、いふ姓は無く、也可といふのも、日本人の名としては疑はしいものである。又、當時清正の如き勇將の下に立つて、三千の兵を率ゐて居る

程の武將が、他愛も無く敵に降るなどいふ事は何としても想像がつかぬ。三千の兵を率ゐるといふ者は、當時の格式から考へると、五萬石の大名で無ければならぬ。五萬石の大名が、あの大切な戦役に敵に降るが如きことあつたとすれば、それは戦機に重大なる関係のある譯で、日本の記録にも何とか無ければならぬ筈である、然るに日本には絶対に左様の記録が無い。尙ほ此の友鹿洞といふ所は沙也可が晩年に及んで隠退した處だといふが、眞に三千の兵を率ゐて降つたものであれば、晩年まで左右に居て進退を共にした者も少なくない筈であるが、絶えて一筆も其等の事に及んで居らぬ、唯だ極めて寂寥たる孤獨の境涯に居たやうに書かれてあるのも、甚だ疑はしい。更に其の墓誌といふものを見るに、沙也可は隆慶二十五年正月三日に生れたとあるが、隆慶は明の穆宗即位の時の年號で、僅に六年にして萬曆と改まつて居る、それを二十五年としてあるのは何事であるか。畢竟、二十五年としなければ沙也可の年齢と合はない、もし六年とすれば、其頃沙也可は赤ん坊に過ぎぬ爲、強ひて斯様な故事付けをしたものであらうが、年號迄も虚構するに至つては、もはや他の考證を一々行ふ迄も無く、其の偽書たること瞭然たりと謂ふべきである。

但し、友鹿洞の住民が日本人の後裔なることは恐らく事實であらう。それは沙也可の事は拵へ事であるにしても、當時征韓の役に捕虜となつて歸國することも出来ず、朝鮮に止まつて居た者も少なくない、斯様の者が一團となつて住んだのは有り得べきことである。其れ故、彼等が日本人の血統たるは疑を容れざる所であらうが、たゞ「慕夏堂集」の如き偽書を金科玉條となし、誤まれる年號の日を祖先の日として拜して居る如きは、沙汰の限と云はねばならぬ。此等の住民も追々に其の非を悟ることであらうが、兎に角斯様な偽書のあることは、趣味の上からすると甚だ面白味がある。數百年間斯様な書籍が正しきものと信ぜられて居たのは一種の珍談とすべきであるが、今日でも、日本の學者中、一概に之れを偽書と斷ずることは出来ぬといふ者あるに至つては、寧ろ滑稽である。

七〇 吉益東洞起身の事

吉益東洞は名を周助といひ、隠れも無い醫界の大立者で、本草家として特に聞えて居る。著

述も澤山あつて、今日尙ほ甚だ尊重されて居る。京都の人で、やはり醫者の家に生れたのであるが、一時非常に貧乏で、母を養ふ爲め人形を作つて渡世したことがある。或る大きな人形の問屋へ自作の人形を持つて行つては、金に代へて、糊口の資として居た。其の時代の逸事として傳はつて居る、興味ある話がある。

或時、此の周助が、いつもの通り人形を擔いで問屋へ行つて見ると、平生と異なり、家の中が何と無く混雜して居る。何故かと聞くと、老母が重病で、今夜も測り兼ねるとのことである。そこで周助は、自分も醫者の家に生れて、多少は其の道の心得もある者、左様の御重態ならば一應拜診致したいと申入れた。主人は其んなものに見せても甲斐のない事とは思つたが、平生如何にも實體の男であり、別に邪魔にもならぬこと、考へて、いふが儘に診察させることにした。周助病人の脈を見てから、一體主治醫は誰かと聞けば、山脇東洋先生であるといふ。東洋は禁裏御所の侍醫で、京都切つての大家である、然らば醫者に不足は無い、序に藥を拜見したいといふので見せた處、周助いふには、藥は結構であるけれども、此の中に石膏が交つて居る、之れ丈けは省いた方がよいと思ふ、何れ山脇先生見えられたらば、私が左様申したことを

お話し下さいと言ひ残して立歸つた。程無く東洋が診察に來たが、調劑に當つて、如何にも考に餘るやうに頻りに呻吟して居るので、主人が傍らから、申上ける程の事でも無いが、先頃出入の者が診察し、先生の盛られた藥を拜見して、石膏を除いた方がよいと申したと、露骨に話をした處、東洋ハタと膝を打つて、成程、實は私も今其れを考へて居た、此の石膏を除くか除かぬかに就て思案して居た、斯様の事をいふ人は、餘程醫術に達した人に相違ない、私は其れに従はうと、石膏を除いて調藥した處、其れ以來病人の経過目に見えて宜しく、さしもの重患が僅か數日の中に本復した。

石膏を除いた其の日に、東洋は早速駕を周助の家にめぐらした。行つて見ると、潰れ小屋のやうな陋屋で、匏屑などの散らばつた中に、周助は人形作りに餘念が無い。段々話して見て、東洋は益々周助の非凡の人物に感じ入つた。其後人形問屋の老母が恢復したに付、主人は金子や鮮魚等の謝禮を携へて東洋の家に參じたが、東洋は、あの病氣は、若し周助の助言が無かつたならば、或は私が誤まつたかも知れぬ、此謝物は私の受取るべきもので無いと云うて魚丈け取つて、金子は返却した。其時東洋がいふには、アレは豪傑だ、金を遣つても直に受取るまい、

あれ丈けの醫術があつて、人形作りなどさせて置くのは如何にも惜しいものである、もし醫を以て立つ心があるならば、お互に世話をして、其の志を達せしめようでは無いかと云つた。そこで人形問屋の主人が周助の意中を尋ねた處、老母を養ふ爲に人形作りをして居るが、全く志は醫者にあると語つたので、種々助力して門戸を張らせ、一面東洋も大に其の宣傳に力めた爲め、忽ちにして周助は大名を成すに至つた。周助の偉なるはいふ迄もないが、聲望比ひなき身を以て周助に下つた東洋も、亦頗る高しとせねばならぬ。

七一 登山畫興

前年大隈老侯に随伴して、比叡山に登つた時、老侯の休息所に宛てた室の床の間に、一幅の畫が掲げられてあつた。見ると一巨漢が山に登るの圖で、其の背後には、一僮夫が撞木のやうなもので件の巨漢の腰を推しながら、急坂を攀ち登つて居る。上の方に一詩が題してあつて、詩畫共に杉聽雨老人の筆である。其の巨漢は誰であらうかと思つて首を捻つて居ると、老侯は自

分を顧みて、其の人は分るかと思はれた。分らないから考へ中ですと答へると、それは俺だと云はれ、十年の御巡幸の時、陛下の御代參に此の山に登つた時は、また足も達者であつた、其時杉が同行して戯れに之れを作つたのだと語られた。此の幅は寺の記念物になつて居たのを、老侯の休息されるを機會に茲に掲げたものだといふことが分つて、大に感興を催した。

之れに似たやうな事が、去年秋田の旅行中にあつた。秋田に滞在して居る中、一日鑛山専門學校に招かれて饗應を受けたが、其の席には、秋田出身の名人の筆に成る種々の畫幅が掲げられてあつた。其中に平福穂庵の筆に成る一幅の畫があつた。穂庵はいふまでも無く秋田出身の名工で、今の百穂氏の先代である。其の畫は矢張り登山の圖で、紋付の羽織を着た一人の男が人夫の背に負はれて、山に攀ち登る所が描かれてある。是はどういふ譯かと思つて、上方の題詩を讀んでみると、其の羽織を着た人物は大窪詩佛であることが分つた。詩佛も秋田に遊び、久しく滞在したもので、滞在中、一日生保田の鑛山に遊んだが、此の畫は其の實寫であつて、其の際詩佛の詠じた詩を長三洲が録して居る。是は前の大隈侯登山の幅と並び稱すべきもので、叡山の事を想ひ起して一種の興を覺えた。詩佛の詩は左の如くである。

道途處險人多負。不惟負物亦負人。人乘人時人爲馬。去云則去勝馬馴。傍人大笑似稚子。雙鬢皤然白於銀。偷樣爲圖卻不惡。恰似孝子負老親。

七二 絲脈の起原

昔し漢方の醫術の行はれた頃、高貴の人の身體に觸れるのは恐れ多いとあつて、絲を身體に結び付け、其の絲で脈を見た、之れを絲脈と稱したと云ふ。此頃小島知足の隨筆を讀んでみると、此の絲脈のことが書いてある。それに依ると、全體、絲脈といふものは、どういふ所から起つて來たものであるか、あらゆる醫書を調べて見たが頓と分らぬ、多分是は支那あたりの、何かの寓言から起つたものであらうと考へて居ると、果して支那の小説に、其の起原とも思はれるものがある、それは例の西遊記の中にあることで、玄奘三藏が非常の艱難を冒して西域を訪うた時、伴つた從者の中に、孫悟空なるものがあつた、是は靈妙不思議の力を持つて居る猿であるが、ある地に達すると、其の國王が重患に罹り、國中の醫師が匙を投げて居るといふ際

であつたので、其の不可思議力を具へた猿の治療を受けたといふことになり、茲に孫悟空が國王の病氣を診察する段になつた、所が一方は國王、一方は獸類であるといふ所から、直接手を觸れるのは恐れ多いとあつて、王の身體に絲を繋ぎ、孫悟空がそれに依り脈を見て、遂に其の病を治したといふことがある、或は斯様な事から、それが日本に於ける一つの醫法となるに至つたものではあるまいかと言つて居る、多分其の通りであらうと思はれる。

七三 俳諧師氣質

俳諧とは、無造作にいへば、たゞ十七字を並べればよいものである。巧拙こそあれ、十七字位は誰でも並べ得るもので、俳諧が昔から平民文學と云はれて居るのも、何人にも入り易いからである。斯様に作り易い處から、都會は勿論、僻地にも俳諧を好む者多く、其の爲めに昔は俳諧師は、旅から旅へと一種の無錢旅行をすることが出來た。何程か宗匠風の間人になると、僅に矢立を腰に挿し、頭陀袋を下けた丈で、次々に紹介を得て、何處迄も旅行を続け得た。

之れが後には段々墮落して、芭蕉の定めた行脚あんぎやの掟などは蹂躪せられ、行く先々に迷惑を掛けることが多くなつたので、果ては、俳諧師が来た、いくらか錢を捻つてやれなど、云はれる迄になつた。芭蕉の掟といふのは、他人の迷惑になるやうの事をしてはならぬ、人を訪ねるにも、食事頃には遠慮せねばならぬ、又夕方など人を訪ねてはならぬ、初対面の時には、自分の豫て詠じた句を二つ位、旅中に詠じた句を一つ、其の人を訪ねて門に入つた時の句を一つ認めて、之れを初見參の禮とすべしといふやうな事で、初めは俳諧師の行脚にも此の掟が守られて居たものである。其の時分の事であらう、ある俳諧師が地方の豪家を訪ねて、挨拶を済ませた後、主人に向つて、甚だ我儘な事を申しますが、どうか御許しを得て、着物を着換へたいと申した。主人が、決して御遠慮に及ばぬといふと、俳諧師は初めて行李を解いて、着物を着換へた。木綿の着物で這入つて来たのを、黄八丈の絹づくめの着物に換へたので、主人も可笑しくなつて、大層御叮嚀な挨拶で着物を換へられたが、如何なる仔細かと問うた。俳諧師のいふに、私共は遊び人同様のものので、別に力仕事をするでも無く、い、加減に世の中を渡つて居る事故、平生は絹物でないと、肩などが凝つて困る、併し斯様の行脚をする場合には、行く先々

で人の御厄介になる譯だから、假にも贅澤な服装は慎しまねばならぬ、それで態と木綿の着物を着て出掛けたが、何分着馴れぬこと、て事實は困るので、特にお許しを乞つて着換へた次第であると答へた。まだ其の頃迄は芭蕉の遺風の守られて居たことが知られる。

是れは俳諧師が素人の家を訪ねた時の事だが、相當聞えた専門の俳諧師が居る所には、矢張り交際上其處に立寄ることがある。斯様に俳人同志の相見える時には互に相下らぬ拮抗的態度を持したものである。其の例として一つの逸話がある。幕末の頃、太筈といふ有名な俳人があつた。ある時其の附近へ一茶が歴遊して来て數日滞在した。太筈は、一茶が屹度自分の庵へも立寄ること、思ひ、外出を見合せて待つて居たが遂に來なかつたので、どうした事かと動靜を探らしてみた處、昨日既に他へ出發したとのことである。俄かに其の跡を追うて、とある宿驛で出會した。何故訪ねてくれなかつたと問ふと、一茶は平然として、貴方を訪ねる程の用事も無かつたからだといふ。先づ兎に角之れから戻つて私の處へ來て呉れといふので、一茶も止むなく、又立戻つて太筈の庵を訪うた。互に負けぬ氣の俳人同志の間に於て、太筈の此の遣り方は、事毎に負けを取つて居るものである。第一に、一茶が來るだらうと云つて、外出を見合

せて居るのに、遣つて來ない、それで先づ負けて居る。跡を追ひかけて、是非來てくれと頼んで伴れて來る、再び敗を取つて居る。そこで自分の家へ伴つては來たが、例の俳諧師の法である、連句を一巻願ひたいといへば、益々敗を取る譯故、言ひ出し兼ねて、酒など出して、いろいろもてなした。夜になると、太筈が机を取出して、寫し物を始めた。一茶が、何を書いて居るのかと問へば、太閤記を寫して居るといふ。面白い、私も寫さうと云つて、二三枚助筆をした。そんな譯で、結局太筈も我を折つて、連句を一つ願ひたいと言ひ出し、遂に全局の敗を取つた。當時の俳人同志の附合は大體斯様なもので、互に見識を持つて、相手に下るまいと心掛けたものである、但し一茶は澹泊な人であつたから、太筈を訪づれなかつたのは張合の爲めとは思はれぬ。

七四 隠れた藏書家

徳川時代の大藏書家といへば、第一に指を加賀の松雲公に屈し、次いで水戸の彰考館を挙げ

ねばならぬ。松雲公が水戸の彰考館よりも更に大なる藏書家であつたことは、近頃まで餘りに知られなかつた。が是は單に藏書の數が多いといふ許りで無く、天下の珍籍は悉く茲に集まつたともいひ得る程のものであつた。江戸の方面では何と云つても聖堂が第一で、塙檢校の温古堂、古賀侗庵、狩谷棧齋、蜂須賀家の阿波國文庫などが、藏書家として聞えた。

茲に江戸に、隠れた大藏書家があつて、其藏書の數は十萬卷に達し、聖堂に次ぐと云はれたに拘はらず、其の事歴が世の中に聞えて居らぬものがある。其れは守村次郎兵衛といふ、幕末に死んだ、藏前の札差ふだましの一人で、自ら十萬卷樓と號して居た。札差は、いふ迄も無く當時非常な富を擁したもので、勢ひ種々の方面に豪華を極め、中には能狂言などに整澤を盡して、公儀の譴責を受けた者などもある。此の守村が十萬卷の書籍を集めたいささつ経緯に就ては、今知ることを得ないが、恐らく金のあるに任せて何でも彼でも買ひ集めたといふ類であらう。必ずしも珍本、奇籍を擇んで蒐集した譯ではあるまい。又書物に對し十分なる鑑賞の力があつたかどうかも分らぬ。併し當時に於て此の人の蒐藏は甚だ有名で、種々の學者或は好書家は多く其家に入したといふことである。

此の守村は書物道樂をする丈けあつて、可なり文字もあつたものと見える。「俳諧年表」には其の名が載つて居るし、「五山堂詩話」には幾何か其の詩も録されて居る。此の人、字を抱儀といひ、號を鷗嶼と呼んだ。ある書物に守村善太郎とあるのを見ると、次郎兵衛といふのが通稱で、事實の名は善太郎であつたらしい。晝は抱一に學んだとある、字を抱儀といふのも、多分師名の一字を取つたものであらう。妻女もやはり俳諧を作り、其の句も幾らか残つて居る。當時の札差などに斯様に文字のある者は、寧ろ珍しいといふべきであつて、其の大なる蔵書家であつたのも、強ち世の中に街ふ爲め許りでもなかつたやうに思はれる。

此の守村の藏した十萬卷の書物はどうなつたものであらうか。大抵の蔵書家の書物は、世の中に散じて居るが、此の人の書物は、殆んど一冊も世の中に存して居ない。勿論、札差の事であるから、榮枯盛衰當ならぬ譯で、此の人が四十二位の年、即ち萬延元年の「文晝人名録」などには、もう藏前には居らぬことになつて居る。さうすると繁榮時代は極めて短い間で、此の時は既に亡びたと見える。亡びた結果書物も散亂したものか、或は全部火災に罹つて亡びたか、それは知るに由ないが、兎に角大蔵書家として、圖書史上に逸すべからざる事實である。

七五 切支丹に因める珍話

足利末より織田、豊臣時代を経て徳川時代初期にかけ、耶蘇教の問題は最も八釜しい案件であつたが、近頃此等の事に關する研究の進むにつれ、種々意外の事實が分つて來て興味を覺えることが多い。三代將軍家光が、伴天連を白洲に呼び、自身之れを取調べたことがある。將軍自ら白洲へ臨んで取調べるといふのも洵に珍しいことであるが、尙ほ其れに附加へて珍と感ずるのは、澤庵和尚と柳生但馬守を、其の席に陪せしめたといふことである。澤庵和尚は當時の名僧であるから、宗教上の議論に此の人を立合はせたものであらう。それが世に聞えた澤庵である所に、頗る面白味を感じしめる。併し、當時有名な擊劍家であつた柳生但馬守を其の席に陪せしめたのは、如何なる譯であつたらうか。恐らく、伴天連は魔法を使ふと云はれて居るので、イザといふ場合、名刀を揮つて之を退治せしめる爲め、特に其の席に侍らしたのではあるまいか。さう解釋するより外に仕様も無いが、今から考へると一笑を禁じ得ないことである。

此の異数な糺弾に逢うた伴天連はなかくの者であつて、將軍直々の取調でも、之れを如何ともすることが出来なかつた。

溯つて慶長のころに、當時の碩儒林道春が、高名な連歌師松永貞徳を紹介者として、不干といふ僧を訪問し、耶蘇教の説を聞いて、議論を闘はしたことがある。此の不干は禪僧であるが、耶蘇教信者となつて、同教徒の爲めに非常な働をしたものである。今は日本に殆んど絶えしたが、當時天草版と唱へて、「平家物語」、「太平記」、其他色々のものが出版された。是は皆な此の不干の書いたものである。勿論、平家とか、太平記とか云つても、在來傳はり來つた平家や太平記を其の儘版にしたもので無く、問答體に書き直したものである。其等を見ると、此の坊主は中々文筆に長じて居ることがわかる。さてこの不干は、後には又元へ戻つて、耶蘇教を攻撃して「破提字子」といふ本を書いて居るが、羅山の面會した頃はまだ耶蘇教に熱心であつた。羅山は四十二歳、まだ血氣盛んな時で大に問答を闘はした結果、羅山は「破邪論」一篇を書いたが、此の二人の論戰を、今から想像して見ると、頗る興味を感じる。別して其の紹介者が、連歌界に聞えの高い松永貞徳であつたといふことも、亦た甚だ珍とすべきである。此の事

柄の分つたのは、近頃新村博士が取調べた結果である。慶長十一年六月十五日、林羅山が頌遊と同伴して不干を訪問したといふ事が、羅山の文集の中に出て居るが、扱て其の頌遊といふ者は誰であるか、今迄知れなかつた。然るに其の頌遊が即ち松永貞徳であることが、新村博士に依つて發見されたのである。かういふ事實から考へてみると、耶蘇教など、は一向縁の無い筈の者が、事實に於て色々の關係のあつたことが知られる。貞徳は勿論耶蘇教信者ではなかつたのだが、何かの因縁から不干と交はりがあつたものらしい。近時、耶蘇教傳來當時に關する研究が歩を進めると共に、斯くの如く、意外の人に意外の事のあつたことが發見されるが、それは興味もあり、又甚だ有益の事でもある。

七六 蘭は色を好む

蘭は幽谷の佳人などと呼ばれ、頗る風韻のある草として、文人に賞翫されて居る。如何にも、其の花にも葉にも甚だ高雅な味ひがある。之れを幽谷の佳人といふは、人跡到らずして、

俗塵を離れた處に、寂しげに綺麗な花を發して居るからであるが、其の一面に於て、昔から支那で蘭は婦人を喜ぶといひ、尙ほ進んで蘭は淫を好むとさへ云はれて居るのは何故であらうか。明人謝肇淛の書いたものに、蘭はよく婦人を好む、恨らくは僧房のものにあらずとある。蘭のやうな幽雅の花弁は寺に於てふさはしいものなのに、婦人を好むから寺には禁物だといふの意であらう、實に案外である。全體蘭は何故か、言ひが、りを受けたであらうか。或は婦人が頭髮をなぶり脂氣を帯びた手で其の葉を摩すると葉に光澤を生ずるといふあたりから、婦人を喜ぶとの言ひがけを受けたものではあるまいか。「五雜俎」には蘭を養ふ法として、毎朝頭髮を梳つた其の油のついた手で葉を摩すべしとあり、又婦人の手を用ゐて摩すれば最もよろしいとおつて、そして俗に蘭は淫を好むものだと附記してゐる。これによつて見ても蘭の好淫説は古く俗間に行はれてゐる事がわかる。尙ほ又支那では蘭の花を婦人の頭飾りとする習慣が昔からあつた、其ために蘭に關する性慾的のロマンスが色々ある。婦人が喜んで蘭を身に着けるといふ所から、蘭を婦人に與へる事が情交の媒となつた例も見えてゐる、宮女が蘭を貰つた夢を見たといふを君王が聞いて、事實蘭を與へて枕席に侍せしめたなどの逸話もある、兎角蘭に

は婦人が付き物で性慾がからんでゐる。「淮南子」には男子が蘭を植ゑると、花は美であつても匂ひが無い、女子で無ければ、蘭に情が通じないとある、蘭の好淫説は「淮南子」あたりから來てゐるのではあるまいか。

七七 緋縮緬

古るい川柳に「またぐらを貴く見せる緋縮緬」とあり、緋縮緬の湯具、陰器の帳、奥には人間を作り出す不思議のものあり、此のものが性慾を誘ふに大なる力があるも故あるかな。柳里恭は其の著「ひとり寝」に「十三の時に唐學を學び、今二十一の暮まで覚えし學問、惚れし太夫の下帯とつりかへにしたし」とまで告白してゐる。去りながら恐るべきは緋縮緬である、紅葉山人は虎の皮の褌よりも緋縮緬の褌が恐ろしいと言つた。

七八 避妊薬

産兒制限の實地に行はれてゐる西洋では、避妊薬がいろ／＼に工夫され、其の種類は二百種にも上るといふが、近來は研究が追々進んで、有效無害のものが幾種かあると聞いてゐる。日本では避妊薬を賣ることが出来ない、併し事實避妊薬は行はれてゐる。それは名を花柳病を避ける薬に藉りて賣つてゐるが、其實避妊薬である。今日専ら行はれてゐるものには、「サンテ」といふがあり、又た「シクロ」といふがある、共に西洋のを模倣したもので、「シクロ」は花柳病避けが主で傍ら避妊の效があり、「サンテ」は避妊が主であるけれども其の機能をあらはに標榜することが出来ない爲めに、花柳病豫防を標榜してゐるが、多量に用ゐれば産兒の妨げをするといふて特效を暗示してゐる。「シクロ」は練齒磨のやうに管より絞り出して局部に入れるやうになつてをり、「サンテ」は、カプセルに包んで局部に入れ體温で溶解せしめるやうになつてゐるが、製法が十分でない爲めに兎もすると溶解せぬ缺點があり、尙ほ一段の工夫を要

すと云はれてゐる。

七九 戀に上下なし

戰國時代には男色が盛んに行はれた、そして其の餘習は徳川期にまで持越し、女色を禁ずる寺院などに専ら行はれた。戀には上下なしとは言ひながら、臣僕が主公に戀慕した實例も少からずある。偶々元和寛永の徳川氏の大事件を録した「元寛日記」を見ると、元和五年五月十四日の條に、家光公の近侍坂部五左衛門が人もあらうに、主君に戀慕した記事が載つてゐる。その者は終に家光公に手討にされたが、それは公に戀慕した爲めでなく、公が入浴中、其場に入つた少年に對しふしだらに行爲があつたので、その不作法を咎められ、又傷に及んだのである。左に其の一節を抄する。

十四日の晩、坂部佐五左衛門子、五左衛門を家光公御手討に被遊、于時家光公十六歳、其故は、佐五左衛門は、去る慶長九年^{甲辰}家光公御誕生、翌年山王權現に御參宮之時、秀忠公依仰

奉抱たる者也、是子息餘多持之、令繁昌、故及此儀、以此由緒子息五左衛門事被附家光公、於近習被召仕、然るに五左衛門家光公に奉戀慕、儲_レ折申_ニ委曲_ニ家光公不_レ掛_ニ御情_ニ殊以被_ニ召使_ニ不_レ便、然るに今日家光公被爲入御風呂、御小姓衆同入風呂、五左衛門も亦參_ニ御垢之役_ニ家光公小風呂に御座、五左衛門も有小風呂、潛戲_ニ御小姓衆_ニ家光公有御覽、自御風呂被爲上、召五左衛門、唯今之不作法覺たるかとして則被誅、一太刀にて死す、掛_ニ天罰_ニ皆_ニ咎_ニ焉。

八〇 大名の本草道樂

徳川期の太平無事の時代、諸侯に色々の道樂があつた。富山侯が非常の古錢道樂であつたのは、隠れもない事であるが、此の候には別に本草道樂といふものもあつて、嘗ては「本草通鑑」なるものを刊行し、其の證圖二十五卷の出版を企てたことがあつた。當時有名なる本草家小野蘭山の如きも、其の參謀であつたらしい。何分殿様の道樂仕事であるから、其の膝元で、原稿を作らせたり、版を彫らせたものだ。従つて製圖や製本の設備に非常の金を費したもので、傳ふる所では此の爲に藩札を發行したと迄云はれて居る。此の證圖は僅に五冊出たのみであるが、奉書刷りに極彩色を施し、其の美なる點に於ては此上無いものである。殊に彩色の顔料は最も精を極め、殆ど技術の極致に達した者だが、實を云へば慰み物に近いもので、餘り實用としての價値は無い。何故全部出版に至らなかつたかといふに、其の製版所に火災が起つて、設備一切が焼失した。其の際富山侯は非常に怒つて、其の製版所を扱つた役人を斬に處したと傳へられて居る。此の本は、今富山へ行つて尋ねて見ても、其の書名では分らない。故老の僅に之れを知つて居る者が、ア、あの銀札本草ですかと云うて居る位である。此の本の未刊の分第六冊から十冊迄の稿本は、如何なる譯か、ある質屋に今尙ほあるといふ。併し其の質屋は堅く秘して、之れを示さぬさうだ。

水戸の支藩の守山侯は、菊の道樂をやつて、非常の散財をした爲に、幕府の譴責を受けたことがある。それから見ると、富山侯が本草道樂の爲に人を斬り、藩札を發行し、銀札本草といふ紳名迄附けられて居ながら、幕府の咎を蒙らなつたのは、侯の仕合せといふべきであらう。

八一 百鬼夜譚

徳川末期のノンキ時代に、人をおどかさう／＼の遊戯があつた中に、深夜十数人が團欒して互ひに化物語を談じ、特に奥深い闇室に香爐を置き、一つ物語が終ると、一人が起つて其の闇中を辿り、線香に火を點じて香爐に挿む、それを繰り返して天明に達するのを興あること、した。迷信のあつた頃でもあり、闇中に悪戯をするものもあつて、臆病ものは此の遊戯に戦慄したものである。これにはさまざまの方法が工夫されたが、天明の頃有名な狂歌師連中が行つたのが、「狂歌百鬼夜狂」といふ書物となつて刊行されてゐる。此の書の首端には平秩東作の百ものがたりの記があつて、百の狂歌は皆な化物を詠じてゐる。此の席には七ヶ條の規定があつて、先づ闇室に文臺二つを燈の左に置き、その文臺に硯と料紙を載せ、其傍らに鉦鼓を置く。銘々が歌を記し了ると鐘を打ち、燈にある燈心を一本へらして退席する。此の燈には百筋の燈心が點してあるのだが、燈光の外に漏れることを忌んで青い紙で燈が掩うてある。順次こ

れを繰返して愈々百人目に當つた人は、最後に残つた一本の燈心の火をけし果て、障子や襖を揺り動かし化物殿に見參せんと踊らねばならぬことになつてゐる。そして條規に觸れるものがあれば、連中へ酒一斗を振舞はねばならぬ。此の狂歌百詠の場合に於ても、闇室に人知れず簀戸を持ち込んで道を遮つて驚かせたり、拂子を文臺近く置き、それを握らせて牛の尻尾と思はせたりしてゐる。殊にをかしいのは、あるものが人知れず焼芋をソツト床の間にあけて置いたのを探り當て、不思議なものがあると恐れると、宿屋飯盛がわれ其の正體を見顯はさんと、自から暗中を摸索し、それをつかみ戻つて人の制するをも顧みず、ムサ／＼と喰つてのけだので、さては飯盛の悪戯であつたと知れたなどが、此の遊戯の可笑味のある所だ。

八二 記念木材

史蹟や天然の記念物を保存する必要は近時識者の間に頻りに唱へられ、又種々の方面に實行もされて居るが、茲に自分の知つて居る範圍に於て、好事的に古い木材を集めて建築の材料に

した例が二つある。其の一つは、山陰道の松江の附近なる宍道の宿に木幡といふ豪家があつて、當主は黄屋と號し、自分も交はりのある人だが、此の人が古い木材を寄せ集めて一つの別荘を作り、それを獨來窩と名づけて居る。其の木材の目録を見ると、千年以前にも及ぶ種々なる珍材が集まつて居て、夫々其の大小や形に依り巧みに組立てられてある。先づ床脇の地袋の戸に用ゐられてあるのが浪速の四天王寺の扉で、是は推古時代のものとして知られ、其の扉には金具の痕などが残つて居る。又大和の當麻寺の塔の垂木の材が、矢張り床の附近に用ゐられてあるが、是は天平年間のものである。出雲の清水寺の古い材が茶室に用ゐられてある、これは大同元年のものと傳へられて居る。奈良の興福寺や京都の方廣寺の古い瓦が庭の飛石に代用されてゐるが、興福寺の瓦は應永年間、方廣寺のは慶長年間のものだ。欄間には出雲の神魂神社の破風板の彫などのあるものが用ゐられてゐる、やはり應永年間のものである。尙ほ其の欄間の取合せに出雲大社の扉（寛文年間のもの）が用ゐられ、床の隅の柱には京都清水寺の舞臺の柱（寛永十年のもの）が使はれて居る。又正徳年間江戸日本橋の傍に立てられた奉行所の制札が額として用ゐられて居る。斯様な譯で、すべてが古い歴史的の記念物より成立つて居て、

其の室に坐すると何人でも懐古の情を動かさぬ者はない。先づ此等は種々の記念材を集めて組立てた家として、最も大規模の部に屬するものであらう。

今一つは徳川頼倫侯の邸内にある、松浦武四郎の建てた有名な一疊敷である。松浦は多方面の趣味家で、蝦夷地の探險家としても知られて居るが、晩年に古い記念材を以て一つの家を作つて見たいと發心し、木片勸進を企て、日本中の知己に檄を飛ばし、古木材の寄贈を求めた。其の乞に應じて全國から集まつたもの凡そ百數十點。其の中には矢張り四天王寺の門の焼け残りの材とか、嵐山渡月橋の桁とか、奈良興福寺の古書院の板とか、嚴島の鳥居の古材とかといふ珍品も少なくなかつた。松浦は之れを巧みに組合せて、一疊敷を建築した。僅に一疊とはいひながら、其の小天地には書棚あり、押入あり、床あり、窓あり、障子あり、爐あり、机あり、一切のものが具はつて、それが悉く來歴付きの材料から成立つて居る。たゞ之れを前の木幡氏の蒐集に比べると、彼は甚だ大規模で、此は頗る規模の小さい相違があるのみだ。

八三 書物を秘した時代

今は書物の閱覽が自由となつて、どんな祕書でも手を盡せば、どうにか閱覽が出来るやうになつたが、昔しは種々の原因から圖書を甚しく秘した。それが爲め水戸で大日本史を編纂する時には頗る材料を集めるのに困難を感じた。唯だ諸大名の内に加賀の前田松雲公丈は、朝廷や幕府の命にも従はぬ諸方の祕書を借りもし謄寫もした。畢竟借覽の謝禮が莫大であつたので、其の報酬を期待して祕藏を開放したのである。新井白石が水戸の安積澹泊に答へた書中に、白石が某堂上家に就て平信範の人車記といふ保元時代の記録を拜觀した際の事が書かれてゐる。それによると、此の記録を示された時は人拂をして近侍のものも近づくを許されず、閱覽を終つた後には、決して之れを見たことを口外されては困ると特に注意されたとある。當時如何に圖書を秘したかの一端が知れるであらう。

前年奉仕西上の日に、あるやんことなき堂上家の方にて、重代の藏書ども、御見せ候由にて、罷越候、

殊の外に事を秘せられ候、家風にて、家司の類一人も、其坐に近づき申事かなはぬ體に候き、さて至極古き巻物、並折本に候もの、いかさま二十巻餘、手づから持出られ、見せられ候き、其中に一卷、蜘蛛の如き界の中に、日々の事を記候物の中に、保元の前夜の事ども、委細に有之候、名を尋候へば、人車記と御答にて候、本文のまゝ、寫取たく候へども、即座には、申も出されず候、そなたの尋なれば、巻の證のために見せ候、構て口外し給ふなと御申候、云々

八四 藏書印小話

書籍を大切にする人が自己の姓名や雅號を刻した藏書印を押すことは昔も今も變りが無い。其の藏書印も單に氏名を刻するに止まらずして、「子孫寶之」とか、「子孫永保」とかいふ風に、子々孫々永く此の書を珍藏すべしとの意味を刻したものが少くない。藏書家が其の苦心して集めた書籍に對する愛惜の情はさることながら、實際は其の書籍が子孫に永く傳へられる事は稀れで、多くは代が變れば直に賣却され、書物屋の店頭に現はれて來るのは誰しも現實に見て居る所である。茲に於て藏書印を作るに當り、すつと將來の事を見越して印文を撰んだ人が

少からずある。其二を云へば、松崎謙堂の藏書印は「曾在松崎氏」といふので、柴野栗山の印は「曾在柴碧海所」と刻されてある。又小説家の山東京山は、印刻に於ても名があつたが、其の藏書印は「不期身後、京山藏」とある、之れも矢張り同じ意味で、自分の後はどうなるか分らぬといふ事を現はしてゐる。大槻磐溪のは、意味は同じだが、や、複雑で、「得其人傳、不_レ必子孫」とある。文句の長いのは、「孔石山房主人秋田氏圖書記、集散任_レ天、然永爲_レ四海寶」といふやうなものもある。言葉は色々に違つて居るけれども皮肉に先を見越して居る點に於ては何れも一である。自分も其の輩に倣ひ、子孫に保存せよといつても逆も其の通りにならぬといふ意味を含めて、「子孫換_レ酒亦可」といふ藏書印を刻し、それを使用して居る。

しかし此等は何れかといへば特殊の例であつて、昔から書物を大事にする人は、中々さういふ風な大膽な事を言ひ兼ねるのが普通であつた。茲にをかしいのは森川竹窓の藏書印である。此人は藏書も澤山あつたけれども、遊びの金に困つては折角集めた本を賣つてしまふ。賣つた後は惜しくて堪らぬのだが、又困れば又賣る。遂に「此書不_レ換_レ妓」といふ藏書印を刻して其

れを押し、自から戒めることにしたといふ。

八五 錦繪の彫師と刷師

昔の錦繪では美人畫に最も重きを置いた、されば彫師と刷師の苦心も亦美人畫にあつた。彫師の方では頭彫りと稱して、顔や頭髪を彫るのが一番六かしいとされて居た。それ故普通の彫師は衣裳其他を彫り、老手が頭彫りを擔當したもので、それが出来ると刷師の手に廻る。刷師の方でも最も骨の折れるのはやはり面部や髪の毛等であつた。つまり筆者が如何に巧みに畫を書いて、之れを旨く彫り又良く刷らねば筆意が發揮しないので、此の意味に於て錦繪は一種の綜合藝術であつた。従つて彫師と刷師はピッタリ腹を合せ、作者の氣合を十分に心得ての上で無ければ成功せぬものであるが、どういふ譯か昔から彫師と刷師とは非常に仲が悪く、常に何かと苦情を言うたりケチを付け合つたり、全く大猿も畜ならぬ有様であつた。たゞ其の上に作者が在つて双方に對し絶えず八釜しくいふ爲め、どうにか物が出来上るので、彼等のみに任

せて置けば仕事の成績は全く擧らなかつたに相違ない。

彫師と刷師とは單に與へられた原稿通りに彫り、それを其の儘刷れば能事終るといふ譯で無く、前に云うたやうに其の畫家の心意氣をよく理解せぬと、彫りも刷りも旨く行かぬ譯であるが、それに付今日生き残つて居る彫師で、錦繪彫刻の奥義を心得て居る者の語る所によると、美人畫を彫る者は若い者で無いといかぬ、老人の彫つたものは、普通の人には分らぬけれども、其の道の者に見れば、何處と無く堅くて、生氣に乏しい、若い氣分が刀端に現はれて來て初めて畫が生きて來る、それ故昔は美人畫を彫る者は常に遊廓に出入した、それは單に道樂者が事に託しての遊びでは無く、やはり若い女に親しまねばさういふ氣分になれぬからであるというた。藝術製作上に氣分が大切であるとする、之れも一理あることだ。

八六 版木藝術の行末

版木の彫り方に就て其の道の人から一二聞いたことがある。享保あたり若くはそれより前の

版木の彫り方を見るに大體深彫のものが多し。何故かと尋ねて見ると、昔しは彫り方が後世と違つて、後世は先づ刀を字なり畫の輪廓なりに着け初め、すべて細い處を彫り終つて、最後に餘白の處をノミで浚ふことになつてゐるが、昔しは逆に、先づ餘白にノミを突き込んで中央から四圍に及ぼして浚ひ、それから字や畫に刀を着けたものである、深く浚ふだけ骨も折れ敏速も缺く譯であるから、追々淺ぼりとなつたのだといふ。尙ほ昔しから版木を彫る法として必らず版木を机案の上に置き、枉けたり倒さまにするやうなことなく、嚴格に位地を正して刀を揮ふことを常例としたといふ。乃ち版木を顛倒すれば彫り易い場合もあるが、それをせぬことが法となつてゐた。一寸考へると、形式に據はれてゐるかにも見えるが、實際は斯くせざれば、刷る場合に墨に淀みが出来、刷毛のサバキがよくなく、刷つた結果もわるいといつてゐる。又今日では寫真作用で原稿を版木に映りつけることが行はれてきたので便利のやうであるが、矢張彫師の手腕に待つことが多いのである。先づ寫眞の濕版をガラスからはがして其れを板にはりつけるのだが、此の濕版は最も薄きを尙び、之れを薄く寫すにも之れをはがすにも専門的技能を要するは勿論である。扱て十種の色があれば十枚の色版が要る、随つて十枚の濕版を作らね

ばならぬが、十枚を同時に寫すことが出来ないから、それ／＼に多少の相違があり、喰ひ違ひがある筈だ。だから寫真だからというて精確であると過信して其の儘彫つては飛んだ喰ひ違ひが生ずるので、彫師は寫真のみに依頼せず、必ず原書を傍らに置き、それに問うて彫ることになつてゐると聞いた。何の藝でも局外者の考へる様な樂なものではない。尙ほ又専門家の言ふ所に據ると、木板彫刻の藝術も最早末だといつてゐる。或る説には此の藝術の衰微を防ぐ爲めに特別保護を要するといふけれども、それは素人考で沖も維持が出来かねる、と云ふ譯は、昔は五年七年の年季を定めて小僧から打込んだから、其の習熟で名伎も出來たのだが、その年季奉公は今の時代に行はれず、年季奉公でなくとも、五年七年の修業は今時到底出來難い、そこへ保護などあつては、ますます氣が緩むばかりで、到底維持は困難である、要するに斯の道の持續は必らずしも生活問題にのみ繫つてはゐないと語つた。

八七 寶玉と犯罪

昔から玉が貴重なものとして居るのは東西共に相同じい。支那で夜光の玉といふのはダイヤモンドの事か否か知らぬが、古來非常に尊いものとして居て、一つの玉と幾つかの城とを取替へたなど、いふ傳説もある。又玉に準ずるものに眞珠の如きものもある。往年支那の兵亂に際し、西太后が豫ねて自分の死ぬ時に著る目的で作つて置いた葬服が何れかへ紛失した、其の葬服といふのは實に立派なもので、世界に名高い眞珠を幾百千と集めて、それで飾つたものである。西太后は其の紛失を深く惜んで、支那の領地を三分の一や四分の一割いて報酬にしてもよいからどうか捜して貰ひたい、と列國の使臣に訴へたと聞いてゐる。

貴重なものには不祥な犯罪が伴ふのが例である、支那の諺にも小人罪なし、璧を抱いて罪ありと云つて居る。由來寶石は極めて稀れであるから尊いのである、ダイヤモンドの尊いといふのも、畢竟其の産額が少ないからである、其の産地たるトランスヴァールでは、多く掘出すと價が下落するから、其の相場を下げぬ爲めに採掘を手控へることがあるとも聞いた。同じくダイヤモンドと云つても、其の質や光澤や形貌や、大小等に依つて甚しく其の價に高下があるはいふ迄も無い、此等すべての條件が具備したものと一顆幾十萬、幾百萬金に値するものも

ある。斯様のものになると、それは世界の珍である所から、一國の元首迄が之れを得るに熱中し、動もすれば其の爲に他國の元首との間に競争を起すなどといふこともある。尤も我國では古來あまり寶石を八釜しく云はぬ、封建時代に於て第一の寶とされて居たのは刀劍であつた。しかし其の刀劍が慾望的となつて、或は盜賊が寶刀を盗んだとか、或は諸侯がよからぬ手段を以て他家の寶刀を取出すに苦心したとか、色々の騒ぎの起つた有様は、外國で國王や貴族がダイヤモンドに大騒ぎをするのと同じ工合である。外國でダイヤモンドが小説の種となつて居ることの多いのは、日本の小説、講談に寶刀が多く材料となつて居るのと、物は異なるけれども其の趣はよく似て居る。

元來ダイヤモンドは純潔を象徴するものとして、ある時代には邪惡に對する護符とされて居た。斯様に考へられた時代には、萬一それが惡人の手に汚されるやうな事があると、玄妙な力が失せてしまつたと解釋され、自然色々の迷信が之れに付き纏うた。印度邊では、古くからダイヤモンドを生ある如く考へて、或は之れに男性と女性の別があるとか、色や形などに就ても種々吉凶の意味があるなど、信ぜられて居た。斯様に古來神祕的のものとされた寶石が、實を

いへば之れ程忌はしい歴史を持つて居るものは無い。尊貴の王妃の指先に燦爛として輝いて居る此の寶石が、實は幾度びか盜賊の手を経たもので、其の物が有名であればある程、犯罪の歴史が多く伴うて居る。もと此の寶石は極めて小さなものであるから、如何やうにもして隠すことが出来る。しかも小さな割合に非常な價を持つて居るので、其の一を得れば天下の大富豪になるのも敢へて困難で無い。爲めに西洋では多くの費用と多くの時間とを費やし、種々の犠牲を拂つても敢て辭せぬ程に之れを得ることに熱中する一種専門の賊がある。又其の犯行を探偵する者にも特に専門がある位で、幾百千篇の探偵小説は皆な之れを主題として書かれて居る。其の盜賊竝に探偵なるものは、之れを覗ふこと、奪ふこと、及び其の六かしい犯罪を摘發することを以て一種の名譽として居る。世界に名高いダイヤモンドと云つても、其の数は指を屈する程しか無い、其等は皆な幾度びか鮮血を濺いだ經歷を持つて居るもので、潔癖家の手にすべきものでは無いのである。

一顆の寶石が國家の治亂に關係を及ぼした事も、其の例が少なくない。たとへば佛國や露國のある時代の王妃が其の寶石を購ふ爲め國民に重税を課したといふやうな事が動機となり、國

亂が起つて朝廷の覆つた如き例は歴史にも載つて居る。佛國の王妃マリア・アントアネットがダイヤモンドの首飾事件で大革命の犠牲になつたり、露國ロマノフ家の皇后が六十萬ルーブルのダイヤモンドを得て、後ち遂に革命の慘禍を蒙つたなどは其の最も著名な事實で、たとひダイヤモンドが直接の原因で無いとしても、それが王家の贅澤を意味する所から國民の怨嗟を招いたことは争はれぬ。

附け加へていふべきは、日本の婦人は昔から役者の眞似をする、役者風情の眞似をして見た所で、格別贅澤なものでは無い。處が西洋では微賤の下婢の如きもが貴婦人の眞似をしたがる、それ故茲にダイヤモンド其他の寶石を身に附けて見たいといふことになつて、種々の犯罪が行はれる、其の犯罪は必ずしも物を盗むといふのでは無く、自己の貞操を賣つても其の慾を充たさうといふことになる、考へてみれば寶石程罪作りのものは無いと云つてよい。

尙ほ話の序に言つて置かねばならぬのは、少しく事は變るけれども、日本で寺、宮などの重寶が何時の間にか其の寺や宮を離れて、民間に落ちて居るものが少からずあり、其の中には國寶となるべきものもある。元來斯様の品は寺や宮の門外に出づべき筈の無いものであるが、そ

れが出て居るのを見ると、必ず何人か盗み出したものに相違無い。ある時代には神官や僧侶が竊かに其の寺、宮の寶物を持出して民間に賣つたものもあらう、それ故民間に落ちて居る重寶は矢張り西洋の名高いダイヤモンドと同様、贓品であるといふ來歴を持つて居るものと謂はねばならぬ。何處も同じく尊いものには其の尊い丈け忌はしい犯罪の歴史がくつ、いてゐて、西洋では其の歴史が多ければ多い程愈々尊いとされる趣がある。

八八 鷹の飼料徴發

昔し將軍家では鷹を飼養し、鷹匠たかじやうといふ鷹を司る職もあつたが、其の飼料を如何にして得たかと云ふに、各村の高に割當て、徴發したと見える。私の所持してゐる當時の帳面は、文化十二年品川領上大崎村の上納覺帳で、其の表紙に「兩御丸御鷹野諸御用採草蟲類納割合覺帳」とある。それを見るに、三月五六兩日蟲の採集額と高割が左のごとく書かれてゐる。

三月五日

八八 鷹の飼料徴發

一 蝦蟇二千七百二十九疋

外百二十一疋

桐ヶ谷村ヨリ繼合

三月六日

一同 千四百十二疋

外千四百三十八疋

下大崎村ヨリ

一同 六百二十八疋

惣合四千七百六十九疋

高三百九十七石四斗四升二合五勺

高一石ニ付 蝦 十二疋

次に内譯があつて、採集人の名が録してあれどそれは略する。

其次に蚯蚓採集の覺書がある。それは左の如し。

四月二十八日納

一 蚯蚓八百五十筋

同日ましの分

一 二百筋

同二十九日朝

一同 千百八十四筋

同日まし分

一同 二百筋

小メ二千四百三十四筋

一同 七百四十四筋 兩日納死失手當ノ分入

メ三千百七十九疋

高三百九十七石四斗四升二合五勺ニ割

高一石ニ付蚯蚓八疋ツバ

これにも内譯人名あれど略する。尙ほ此の外に採草の部には、「よもぎ」と「はこべ」竝に杉の葉の勘定がある、皆な高に割當て、徴發してゐる。烏も將軍家に飼はれてはなかく、厄介

八八 鷹の飼料徴發

であつたことの一斑が窺ひ知れるであらう。

八九 植字難

活字を組んで書物を發行するの便利を説くものはいくらもあるが、其の難きを云うたものは幾んど無い、爰に伊藤東涯が著はした「聖語述」を弘化四年東涯の玄孫元冲といふ醫師が活字版に附したものである、その序文に活字に組むの難きをいうてゐる。云く、

布字之難。余以爲猶閨秀繡_ニ春華_一也。一針誤穿。華不_レ成_レ形。一字訛印。書不_レ可_レ讀。況字皆左字。行盡左行。與_ニ尋常書寫_一。目力工夫。大不_ニ相同_一。而其便猶_ニ園丁掃_ニ寒林_一也。一筭立淨。若能布了。一板二百七十餘字。百千立印。且庶_ニ乎無_ニ訛傳_一。云々

活字を組むの難きを刺繡に譬へ、一針誤り穿てば華其の形を成さずといふ譬喩は、甚だ妙を覺える。尙ほ活版印刷の便を園丁の寒林を掃ふに譬へ、一筭立どころに淨しといふも亦妙を得てをる。

序に活版に就て云ふべきことがある。我邦の活版印刷の歴史には他國と趣の異つたことがある。第一は慶長あたりで活版を以つていろ／＼の書物を印刷してから餘り多くの年數を経ない元和寛永頃に、活字版を其儘版下にして刻したものがいくらかもある、これは何故であらうか。恐らく活版は便利なものとは云へ、今日の如く字も多くなく、組むことも面倒で、版に刻することは當時慣れてもゐたから、便利であるべき法に據らず、版に刻したものと思はれる。尙ほ他の理由は、活版では上り點が付き兼ねたので、それを附ける爲め整版にしたのであらう。これは他國に無いことである。又幕府の末期に多く活版本が出た、それは矢張り古い活字を搜して組んだものであるが、これにも妙な意味があつた。當時活字に組んだ本を幕府が整版と視せず大目おほめに視た氣味があつたので、謄寫に代へるといふ意味で多くの活字本が出た。整版とすれば幕府の忌諱に觸れるやうなものが、活版に附されたのは此の故であらう。これも他國には無いことである。

九〇 熊膽研究

熊膽が藥劑として其の機能が過信された時代に、偽物が盛んに販賣され、醫師と雖も其の眞質を辨じかねた。爰に永年多くの熊を捕獲して實地の研究をした人がある。その人は醫師でなく、越後高田の藩老鈴木甘井といふ人であつた。此の人は本草の大家大槻磬水や木村葦葎堂と時を同じうし、現に甘井の著した「熊膽眞偽辨」に對し、二家が推獎した書簡が序に代へて載つてゐる。此の著述は寫本で傳はり自分も所持してゐるが、如何にも穿鑿が該博で、日本竝に支那の諸書に散見する謬説を實驗から徹底的に正してゐる。甘井の實驗は二十年を費し、毎年十頭の熊を研究材料としたとある。本草家の内で熊のみを斯く熱心に研究したものは恐らく他にあらまいと思ふ。此頃は越後もまだ開けず、熊も各所に居つたと見える、其捕獲地として擧げてゐる所を見るに、頸城郡は杉澤村糸魚川の谷々と信濃境、岩船郡は村上と奥羽境、蒲原郡古志郡の上野境などである。偕て熊膽の眞偽を如何に判ずるかといふに、大槻磬水の書狀はそれを

簡潔に説いてゐる。

本篇眞偽を辨する法に曰く、水中に粟粒ほどを入るゝ時は、水上に浮んでクル／＼と運轉する甚危急にして、水中に絲筋の如く引て、末は器中にとゞまり、ムラ／＼として雲烟の如くなり、其色黄にして器中に滿ち、久くしては水一面になりて、散換して殘るものなし、此眞膽なりと。

磬水は尙ほ之れに附記して、人身の膽液も亦た必ず同じ運用あるべく、運旋迅速、轉動不止、遂には散換して體中の營養を爲すならん、此の試法を聞て豁然悟る所あり、雀躍に堪へずといつてゐる。

九一 マートル法の實施

尺度を改めてメートル法とすべしとは古くからの問題だが、日本でもヤット實施することになつた。併し長い習慣を俄かに改めるのは困難だといつて、實施までに二十年間の餘地を存した。如何にも困難と云へば困難だが、案ずるより生むが易いかも知れぬ。茲に一笑話がある。自分の知人に度量衡器を販賣してゐる人がある、其の人の話に、この頃一青年が物差を買ひに

來た。物差を下さいといふから、店先に居た者が、金かねですか鯨くじらですかと問うた、是は物差を賣る家で先づ以て問ふべき當然のことである、處が其の青年は之れを解することが出來ず、「イヤ、竹で宜しいのだ」というたので、其の人も思はず一笑を發したさうである。成程、今の青年には尺に金尺、鯨尺の區別のあることを殆んど知つて居ない者が多いので、金か鯨かと問はれると、金屬或は鯨を以て製した物差であるかの如く聞えたのだらう、是に於て竹で宜しいといふ答があつた譯で、甚だ滑稽な話だが、それは故らの滑稽で無く、自然の滑稽といふべきものである。斯様に現今の青年が、在來の度量衡に對する知識を缺いて居る處から見ると、もはやメートル法の實施も、さして困難で無いかの如く思はれる。

九二 不昧公の畫像

山陰道松江の藩主松平不昧公は有名な茶人であるが、此の人若い頃から禪學を修めて、頗る其道に通じた。斯様な經歷のある人だけに、其の生涯の行實は甚だ禪味を帯びて居た。茲に京

都の大徳寺に不昧公の畫像が藏せられて居る。大徳寺は不昧公が晩年暫く住した齋縁もある所から、その畫像が今日まで大切に取扱はれて居るのである。扱て其の畫像は如何なるものであるかといふと、圓窓を描いて、其の中にたゞ不昧公の名、即ち宗納の二字が書かれてある丈けである。これが其の人の畫像であるといふのは、禪宗の十牛から來て居るので、即ち牛も我も皆な忘る、その忘るといふ事を象徴して、無といふ意味を示すために、圓窓丈けを描いたものである。流石に禪三昧に入つた不昧公の意匠だけに、頗る人の意表に出て居る。尙ほ面白いのは、此の圓窓を描いた者が雪舟であることだ。即ち圓いものを書いた脇に、雪舟の落款がある。不昧公は書畫の趣味にも頗る深かつたが、其の關係から斯様なものを手に入れ、其れを見立て、自分の名を入れたのである。是は、ある意味からいふと故人をして自分の畫像を描かしたといふことにもなるので、甚だ趣の深いことを感ぜしめる。

九三 名匠如泥

松平不昧公は近世の大茶人と稱されてゐるが、公の薫陶に依つて起つた工藝家がすくなくない、中にも如泥といふ木工の達人があつた。其名の由來は後に説くが、此の人の技は眞に非凡で、到底他人の企て及ばない細工をやつた。今、芝公園の紅葉館に此人の作品が残つて居る。同館の古い二階の床脇に、透し彫りの、かなり大きな方形の製作物が嵌められてある。これが不昧公の遺物である事は人も知つて居る所だが、有名な如泥の細工である事は多くの人は知らぬ。どういふ譯で此の物が紅葉館にあるのか、其の由來は分らないが、もと不昧公の大崎の下屋敷にあつたのだと云ふ。此の細工が如何に巧妙であるかは、委しく説くまでもなく、心ある人は既に氣が付いてをる筈だ。此の作品は、卒然として見ると透し彫りとなつてゐる所と、平面を浮き彫りにした所と錯綜してゐるが、其の浮き彫りとなつてゐる部分、そこだけは透し彫りでないと思はれる所が、日光に照すと矢張り透し彫りであるのに驚かされる。桐の紋様が板の上に突起して巧みに彫刻されてゐるので誰れもこれに魅せられるが、よく見ると此紋様が全體板の裏にまで通つて透し彫りとなつてゐて、繊細の絲でも通しかねる透しが日光の通ずるので始めて分る。可なり厚味のある板であるのに、よくも肉眼で見かねる程の透しの刀を揮つたもの

と驚くの外はない。如泥の細工にはこれに限らず人の解し兼ねる細工が甚だ多いといふ。前田曙山氏に聞くに、不昧公の家には今も此の名工の作つた木の曲物の烟草盆があるといふ。それは薄い板を楕圓形にして合せたものだが、どうしても其の合せ目が分らぬ、木地の合せ目は、多くは木理を見ると織ぎ目の分るものであるが、之れを顕微鏡の下で見ても分らぬと云はれて居る。又紅葉館の透し彫の外に、松平家に残つて居る、やはり透しに彫つた或る製作物の如きは、如何にも其の透しの明きが狭くて、到底普通の刃物では彫ることの出来ない位のものである。それが、どんな刃物を以て彫られたのであるかが、工藝家の間に疑問とされて居る。

不昧公も此の如泥の藝の非凡なものには深く感服せられ、江戸に出て、千代田城に多くの諸侯と會合し、互にお國自慢などの出る時には、必ず如泥の事を吹聴された。ある時、薩摩侯が其の自慢を聞いて、それ程の名工であるならば一つ頼み致したいものがある、追つて使者を以て頼むすることとて、翌日になると薩摩邸から使者が來た。其の使者は一個の瓢箪を齎らし來つて、主人よりの依頼であるが、どうか此の瓢箪の中へ一面に紙を貼つて貰ひたいと申入れた。不昧公も此の難題には少なからず當惑したが、折ふし如泥が邸に居たので、早速呼出し

て、此の事を物語つた處、如泥は別に難色もなく、其れは格別面倒の事でもありません、遣りませうとお請をして、直に旅支度をと、のへ、本國松江に戻つた。暫く経つと又江戸へ上つて来て、お言付け通り出来ましたというて瓢箪を差出した。處が瓢箪のことであるから、其の内面に紙を貼つてあるかないか、それを調べやうもない。不昧公がお前は紙を貼つてあるといふけれども、内部の事で分らぬが、事實紙を貼つたのかと確めると、お疑ひならば此の通りとて、速座に瓢箪を割つて見せた。成程一面に紙が貼られて居るので、一旦は大に喜んだが薩摩侯の瓢箪を壊したと思つたから不昧公も大に閉口して、何故左様の粗忽な事をしたと叱ると、イヤ是は薩摩侯からお預りの品ではない、自分が同じやうな瓢箪を探し出して、試みに紙を貼つたものである、薩摩侯よりお誂へるものはチャンと大切にしていると、別に差出したので、公も漸く安心した。さて如何にして斯様の事が出来たかと聞くと、先づ國へ戻つて形の似た瓢箪を幾個か探して、手に入れた。それに試験的に紙を貼ることに大分時日を要したが、仕合の事は松江には不昧公の起した紙の製造場があつたので、其處へ行つて、毎日々々試験をした。即ち製造中の紙が未だ半流動體であるのを、瓢箪の中へ注ぎ込み、瓢箪を廻して、萬遍なく其の

流動物を内面に附着させ之れを乾して、程よき頃を見計つて、幾つか割つてみると、一面に紙が附着して居て、恰も貼り附けた如くなつて居る。斯様にして此の六かしい仕事が成功を告げたものであることが分つた。

此の一例でも分る通り、如泥は普通人の思ひも付かぬ工夫に富んで居た。併し、斯様の天才には有りがちの事だが、非常の大酒家で、金さへあれば飲む、随つて酔うて前後を忘れるといふやうな事が屢々あつた。ある時、酔歩蹣跚として市中を歩いて居ると、一人の武士に突當つた。當時のことだから武士は其の無禮を咎めて、斬捨てるといふやうな事になつたのを、不昧公が詫をいうて、之れを助けてやつた。其の時公は同人の大酒を戒しめる爲めに、如泥といふ名を與へたが、それが此の人の號となつたのだと。内藤仲氏の談に據る。

九四 早稲田—茗荷—槃特

早稲田は昔から茗荷の産地で、神田須田町の青物市場には早くから其の名が聞えて居たが、併し普通の人は殆んど其の地名を知らない位の、草深い田舎であつた。それが幾十年の後にな

つて、世界の道は早稻田に通ずる、と私が嘗て言つた如くに、それ程名高い所になつたのは、大隈侯が其處に邸宅を持つて居たことから、世界各国の人が日本へ來ると、外務省の在る霞ヶ關へは或は立寄らず、直に此の片田舎の早稻田へ馬車や自動車を駛らせるを常とし、大隈侯訪問は外國人が國へ歸る時の第一の土産とするに至つた爲めに外ならない。全體早稻田のみならず、あの附近は、明治の初年まで一帯の茗荷畑であつて、現に程近い小石川には、茗荷谷といふ地名すら残つて居る位である。そこで古い川柳には、此の附近を材料にしたものが少なくない。それに付、茲に一つ語るべき事がある。俗説に茗荷を食すれば物を忘れるといひ、或は之れを多く食へば呆痴になると云つて居る。そこで川柳子は、茗荷の事を詠む場合には、いつも呆痴の意味を含ませる。傳説に、釋迦の弟子に周利槃特といふ者があつて、大聖釋尊の弟子にも似ず、頗る愚鈍の人間であつた、其の事が「釋迦八相記」などいふ草双紙に面白可笑しく書かれてから、槃特といへば馬鹿を意味するものとして、多くの人に知られて居た。そこで早稻田の事を詠んだ川柳には、多くは茗荷の引合ひに槃特が引出されて居る。或る説に、槃特が死んだ後、埋葬したら、其處から草が生えた、其の草が即ち茗荷であるといふ所からして、

槃特の墓所目白の近所なり

早稻田の畑槃特の墓のやう

などいふ川柳も作られて居る。斯様に早稻田は、古くから呆痴の墓所として歌はれ、人を愚にする植物の産地として知られたものであるが、今はそこに人を賢にする大學が起つて、多くの人材が輩出してゐる。

九五 膝栗毛に序す

一九の著した膝栗毛も、今は「クラシック」となつて、若い人などには理解の出来ない、言葉や洒落が多いので、自然註釋を要することになつた。それにつきいつぞや江戸趣味の諸家が此の書の輪講を企て、その結果を出版したことがある。其の際人もあらうに私には是非序を書けと求められた。自分はその人でないけれども、其の奇抜な輪講に興を感じてゐたから、強ひて辭せず、悪文を寄せたことがある。今それを左に收める。

東海道でも木曾路でも鐵道のなかつた當時には中々の長程で、それを徒歩で踏破するのは實に大旅行であつたといつてよい、その大旅行記を徹頭徹尾シヤレづくめ滑稽づくめで書くといふことは恐らく西洋にも例のない文壇の一奇蹟であらう、随つて東海道や木曾路は名所圖會で紹介されたよりも、廣重や北齋の浮世繪で紹介されたよりも、又文人墨客の和漢の名文で紹介されたよりも一九の膝栗毛で廣く永く且つよく紹介されたのである、すなはち膝栗毛は當時の宿驛の生きたるパノラマである、著者の一九を或は今人中には知らぬものもあらうが、膝栗毛を知らぬものはない、此書を覗いて見たことの無いもの迄も其の書名だけは知つて居る、だからそれが徒歩の別稱ともなつたのである、實に膝を馬に擬した思ひ附は千古儔を絶つての意匠である、今では彌次、喜多は實在の人で、もあつたかの如く喧傳されて滑稽の典型、愛嬌の本尊、失敗のモデルのやうになつて居る、中にも彌次の方が一層持て、堂々たる帝國議會の議員をすら此名代にして居るのがある、彌次らん、彌次れ、彌次ると働く動詞が出来て、此語の洩れた新辭典が不備を鳴らされるは面白いではないか、維新の豪傑品川子爵は別招牌とするも、此名の繁昌は膝栗毛以來間斷なしといつてよい、按ふに旅行には無

事をこそ祈るが當然のだが、往々失錯のないのを無趣味として、やりそこなつて彌次喜多の型を誇る連中もある、旅行者の彌次喜多に私淑するや深しといふべしである、或は彌次喜多の舊蹟を史蹟同様に討ねて歩く者さへある、彼のスタールなどは膝栗毛に書かれた東海道を見たいのもあらうが、それはモウ現實には出来ぬことである、まだやつと百年をこいらの舊刊なのであるが、讀んだことのない者さへ書名を知り其の中の人物の名をば口にする所を見ると此書も一種のクラシックだと言へる、況んや書中の用語の多くが今ではモウ相當の學者にすら理解されない程度になつてゐるに於いてをやである、近頃博雅の諸君が其の蘊蓄を傾けてこの書の研究に力を盡されるは寔に謂あることでもあり、又實に破天荒の企てもあり、文壇に長く遠く記念すべき事でもある、吾輩は諸君が更に進んで三馬などの名著にも及ばれんことを望む、三田村君に是非にと責められて、ほんの火事場の彌次馬式にヤツシヨイ、ヤツシヨイと觸れ歩く役を勤むと云爾

九六 石 墨

太古時代には、如何なる墨が用ゐられて居たか、其れを今委しく語る譯で無いが、漢の時代に、石を墨に用ゐたといふことがある。即ち、或る種の石を硯に摩すと、其れから墨汁を生ずるといふのであつて、まだ人工に依り墨の作られなかつた古代には、恐らく斯様なものが用ゐられて居たものであらうと思はれる。日本で、墨の製造家として、最も古く聞えて居るのは奈良の古梅園で、是は或る時代には、支那にも譲らない程の名墨を製造した。古梅園の製墨法に依り、支那で作られた墨が、日本へ輸入されたことがあるなどは、古梅園の誇とすべき所と云つてよい。斯様に名墨を製造した古梅園の各種の作品は、古梅園墨譜に收められてあるが、扨て、此の古梅園の主人松井氏が、支那には古く石墨なるものありて、本にも見えて居るが、是は支那特有のものであらうか、日本にも有りはせないかと、疑をおこして、流石に墨の研究者丈けありて、日本全國に互つて、之れを探し廻つたが、更に其れと覺しきものに尋ね當らなかつた。處が或る日奈良の春日山に遊び、山を攀ち登つて、溪谷に下つた處、圖らずも水中に、ツイぞ見たことの無い、色の眞黒な、小さな石があつたので、其れを取上げて家に持歸り、試みに硯に合せて摩つて見ると、墨汁湧くが如く出て來たので、大に驚き、且つ喜んだ。斯様の溪流に石墨の斷片があるからには、何れかにまだ澤山あるのであらうと、更に其の嶮岨な山を探検した處、道も盡きて、匍匐して漸く上るといふやうな所に、果してかなり大きな墨石を發見した。是が即ち支那で謂ふ所の石墨なるもので、古梅園主人は、長い間全國を尋ねても見當らなかつたものが、自分の住して居る附近に存在して居たのは、燈臺下暗しといふべきものだ

と、墨譜の終りに其の發見の仕末を書いて居る。これは其の道の人には知れて居ることかも知れぬが、自分は初めてこれを知つたので、興深く感じた。

九七 逍遙博士の詠志

先年の大震災に種々の貴重なるもの、亡びた中に、再び得難い文獻、圖書の類も少からず焼

失した。是は頗る遺憾とすべきであるが、併し同時に又有つてもよく、寧ろ無い方が一層よいといふ書籍も多く亡びた。即ち殆んど玉石を混淆して焼いてしまつたといふ趣がある。此の大震災を天譴と稱するものもあるが、成程、あの當時淫靡な文學が流行して、随分如何ほしいものが出版されたり、餘りに感心しない思想を盛つた種々の著述が濫出したりした、それが悉く亡びたといふことを考へると、天譴といふことも意味のあるやうに感ぜられる。

此の震災の當時、難を免かれながら、却つて一種の感慨より、所藏の書籍を捨て、しまつたといふ、極めて稀なる例も無い譯ではない。坪内逍遙博士の如きは其れに近いものである。君は少からず貴重なる書籍を藏して居たが、感ずる所あつて、震災後、其の全部を擧げて、之れを早稻田の圖書館に寄附した。其際、その心意氣を詠んだ和歌數首を送られたが、それは次に掲ぐる如きものである。此の歌はまだ世の中に現はれて居ないが、之れを讀むと、假裝を脱して眞實に生きようとする博士の心境が、自から窺はれる。

心はたありし淨裸に歸るべき時は來にけり
借り着をしぬがむ
なまじひの心の衣ぬぎてこそまことのわれは生くべかりけれ

わが心一重となりてすゝろにも歌のひじりのあとをしぞ思ふ

尙ほ此の事に關係は無いが、坪内君には頗る食物に好き嫌ひがある。嘗て戯れに嫌ひなものを列擧して、歌にしたことがある。それは

われ好かず古風な干菓子諸罐詰二番煎じ茶ヤッザ翻譯

といふのであるが、是は單に食物のみを指して居るので無く、頗る寓意があるやうに思はれる。たとへば、此の歌の中にある古風の干菓子の如きは、之れを文學の方にも應用することが出来る。時代と交渉の無い、古い思想などは、古風の干菓子にも譬へられるであらう。又蓄音機に吹込まれた音樂の如きは、罐詰の味に似たるものとも言ひ得る。立派な原作を、下手に焼き直した作品などは、差詰め二番煎じ茶にたぐふべきものであらう。斯様に、此の歌を詠味して見ると、自家の嫌ひな食物を擧げて居る許りで無く、其の裏面には色々の含蓄があるやうに思はれて、面白く感ぜられる。

九八 佛蘭西の俳句

俳句が、僅に十七字の短詩形で、世界の文學に類例の無い、日本特有のものであることは、いふ迄も無い。之れを西洋の詩の型に箴めた例は敢て無い譯で無いが、しかし其れは可なり六かしいことで、如何に巧に譯してみても、どうしても原作の味が出て來ない。嘗て角田竹冷氏が、其の還曆の祝に「點滴」といふ小さな本を出版して、同好の人々に頒つたことがある。是は竹冷氏の得意の句に、其の長女なる人が、英文に長じて居るので、それを英譯して添へたものであつた。中々よく譯してあつたが、矢張り原作を十分に言ひ現はしたとは思はれない感があつた。是は彼我國語の相違上、止むを得ないことであらうと思ふ。

近來、日本の俳句が、大分西洋にも行はれて、西洋の言葉で、極めて俳句に近い詩を作る人が、彼方此方にある。茲に佛蘭西人に依つて作られた二三の俳句を擧げる。是は一九二四年に出版された「Cent Haïku」(俳諧百首ともいふべきか)といふ詩集に載つて居るもので、作

者は Renéan Blanc といふ人である。

Le ciel noir,

空は黒く

Les nez rouges,

鼻は赤く

Et la neige.

そして雪

An piano,

ピアノへ

Quatre mains,

四つの手

Un seul cour.

一つの心

Soir calme,

平 靜

La mer huileuse,

空は海へ

Apports un bruit de cloches l'orne.

傾倒する乳色の鏡

Dans la nuit noire,

眞黒な夜

Un étoile et son reflet,

一つ星と其の反射

Il y a donc de l'eau ?

ぢやそこに水があるのか？

右は直譯で俳句の形に譯したのでない。が併し、此の遣り口は確かに俳句の呼吸を得たものと言ひ得る。

九九 排佛毀釋

神佛混淆は日本で長い歴史を持つて居たものであるが、幕末時代國學の勃興すると共に、敬神の思想は勤王論と結び付いて、俄然神道を尊重する傾向を來たし、特に明治の初年に於ては、神祇省を設けて祭政一致の制を布いた結果として久しく混淆されて居た神佛を分離して、佛教に對し、あらゆる迫害を加ふるに至つた。何分維新の革命に乗じて、佛教に關したものは、何も彼も打壞すといふ譯で、其の號令は段々低い役人にも傳はり、中には面白半分、寺院に對し亂暴狼藉を極めたものもあり、特に佛像に對しては、未曾有の大破壊を行つた。明治初年に於ける罪惡を數へて見たらば、此の排佛毀釋といふことなどは、先づ第一に指を屈せらるべきであらう。

此の頃、佛師として有名なる高村光雲翁から、其の頃の話を聞き、多少の興を感じた。當時翁はまだ師匠の許にあつたが、佛像が盛に破壊せられる時だから、新たに佛像の製作を注文する者などの有らう筈はなく、たゞ僅かに佛像を變裝させる注文のある位のものであつた。それは神佛混淆の遺習から、當時尙ほ神社に佛像が置かれてあるものが多かつた。其中には中々名作もあるのだが、それが役人の目に觸れると、直に沒收される恐れがあるので、何とかして之れを救ふ道は無いかというて、其等の像を光雲翁の師匠の店へ持込んだ者が少からずある。そこで、當座の工夫として、其の坊主頭に冠をくつ、けたり、法衣の上に束帶やうのものを着けたりして、役人の目を脱れしめたとある。

茲に本所に羅漢寺といふ寺があつた。此の寺は種々變遷があつて今は目黒に移されて居るが

其の羅漢寺に榮螺堂といふがあつた。是は堂の中に高低があつて、ぐる／＼廻つて歩くと、恰かも榮螺の中の螺縁を辿るが如くに堂内を一巡して、外へ出られるやうに構造されてあつた。榮螺堂の名も其れから起つたもので、餘程面白い建築であつた。堂内螺縁の體をなした處に、百體の觀音が分置されてあつて、一巡する間に全部を拜して、出口へ出るといふ仕掛になつて居た。此の百體の觀音は、左程大きいもので無く、皆木彫で、それに鍍金が施されてあり、中にはすぐれた作品も少からず交つて居た。處が政府の排佛毀釋の方針が、段々擴張されて來ると共に、すべての佛像は其の價値を失ひ、此の百體の觀音像も、無用の長物視せられて、たうとう下金屋したかねやに賣つて了はうといふことになつた。下金屋といふのは、佛像などに金の附いて居るのを剥がす商估であるが、何分、鍍金の佛像と云つても、薄く金が塗られてある許りで、そのみを打算する商人の手にか、つては、全く二足三文の價値である。憐れにも榮螺堂の百體の觀音は悉く古俵に入れられ、舟に積んで、何某といふ下金屋の手に渡された。此の事を或る人が聞いて、如何にも惜しいことに思ひ、直に光雲翁の師匠の許へ駈付けて、斯く／＼の次第で、百體の觀音が今火の中へ入れられようとして居る、何とかして其の一部でも助ける

工夫は無いかというた。折ふし師匠は不在であつたので、止むなく光雲翁が代理として下金屋へ行つてみると、觀音像を包んだ古俵が累々として山の如く積まれてある。翁は片端から之れを點檢して、其の中から兼ねて名作と考へて居るものを五體丈け選り出した。處へ後ればせに師匠も遣つて來たが、それを見て、い、ことをして呉れた、せめて此の五體丈けでも助けたいものだというて、價を談判した末、遂に一體に就て一分二朱といふ値段で折合つて、其の五體を引取つた。残る九十五體の觀音は、間もなく悉く火中に投ぜられた。若し今少し時が後れたらば、五體の名作も皆同じ運命に出會ふ所であつたのだ。其の五體の中の一體は、光雲翁が師匠から申受けて、今でも其の家に置き、日夕香を捧げて居るといふことだが、翁の語るには、こんな事はほんの一例に過ぎないので、實に其の當時、何程の佛像が葬られたか、數も知れない位である、一體佛は人間を救ふものである譯だが、人間も亦た時によつては佛を救ふことがあると云つて深く慨嘆した。

一〇〇 碑 厄

支那の各時代を通じて碑學の隆盛になつたのは最近百年このかたであらう。交通が追々開ける結果として出土の碑が非常に多く、中には漢魏六朝の古碑のよいものも澤山にある。斯道の研究家康有爲氏の如きは、六朝の碑にある書は各時代の長所を悉く備へてゐる、書學の範は他に求めなくとも六朝に求めれば足りるというてゐる位、優越でもあり豊富でもある。斯様な碑石が續々出土するのは眞に書道の上に喜ぶべき事である。全體支那ほど金石殊に碑石の多い國は外に無い。其の金石の年表や目錄は、日本の較べると幾百倍も多くある。斯様に支那は古來碑に富んでをるけれども、其の既に失はれたものも實に夥しいと謂はれてゐる。昔し宋代歐陽公が其の金石錄に收めた古碑などでも、今日は既に十が一も存してゐないといふ。或る時代の天子は宮殿樓閣を興す爲めに、手當り次第古碑を其の材料に充て、或は基礎を築く爲め或は牆壁道路などを作る爲めに、矢鱈に取毀つた。これが碑に取つて實に大厄であつた。此の失は

れた古碑の内には惜しむべきものが必らず澤山あつたに相違ない。又碑の今一つの災厄は碑面が磨られて他の文と彫りかへられる事で、之れが爲めにも原碑の文が亡びたのが實に少なくない。「徐氏筆精」といふ書の碑厄の項に左のごとくいうてゐる。

水經注。洛陽天淵池中。有魏文帝九花樓。殿基悉是洛中故碑累之。澠水閒談云。景祐初。姜遵奉太后意。悉取長安碑石爲塔材。道山清話云。天聖中詔營浮圖。姜遵在永興。毀漢唐之堅好者。以代磚甃。國朝太祖登基金陵。悉取六朝舊碑。砌作御道。唐歐陽詹集云。九江有祖將軍廟碑。顏真卿撰文并書。後州吏有脩坏之勞。狀其未蹟。刻磨舊文。詹作文以弔之。平淮西碑。先琢韓退之。而刻段文昌。宋郡守陳某又琢段文。更刻韓文。一石遂遭兩厄。湖州天聖寺趙孟頫撰書錯盤龍碑記。國初昇入郡治。作太守去思碑。歐陽公金石錄所收古刻千卷。今什不得一二。皆遭此數厄耳。

一〇一 杏林内省錄

「杏林内省録」といふ書は備前岡山の藩醫緒方惟勝の著で、天保年間に刊行されてゐる。六冊本で、醫界の隨筆であるが、一讀多少の興味を感じた。大概の醫家の隨筆は、治療調劑に關するものが十の九までを占めてゐるが、此の書は治方方劑を外れて、専ら病家に對する心得をおもしろく説いてゐる。病家に對する心得を書いた書に、某の「醫戒」と云ふ一冊がある。それに較べると「内省録」は記事が如何にも豊富で、官醫、市醫、里醫の三門に別ち、各醫に就て二冊づゝ録してゐる。支那の引事も各項に互つてあるが、自家の經驗した事や日本の事實が多く、自然當時杏林界の風習などもわかり、醫の門外漢に興をそゝることが少なからずある。此の種の圖書は漢方醫書として高閣に束ねべきでない。療法にこそ漢洋の相違があり優劣もあらうが、病家に對する用意に異なる所があるべきでない。唯時勢が異なればおのづから病家に對しての用意も多少の相違があることは免れないが、異同と云へば唯これのみである。漢方の圖書たる故を以て陳腐讀むに足らずと唾棄するときは私の取らざる所だ。

先づ著者が如何なる人であるかと見るに、名門の人ではあるが、早く父を失つたのと、兄弟親戚の少なかつた爲め、血氣年少の時代訓戒する人が無く、放縱不羈、意の適する所に任せ

て、交を無頼の徒に結び、恣に聲色に耽り、博奕を事とし、大いに郷黨の譏を招いたと、自ら告白してゐる。そして卷末には支那の博奕の圖書をいくつか列擧してゐる。兎に角斯る境遇の人であるから、世間通であることは言ふまでもない、随つて其の言ふところが社會の裏面を描き人情の至微に觸れてゐる。

此の書を読んで先づ感ずるのは、醫家もなかくつらい家業であることである。動もすればよんどころない人から毒藥の調劑を頼まれることがある。後難を恐れるものは、毒藥と號して然らざるものを與へて、お茶を濁すこともあれど、さる胡麻化しの利かぬ場合もあつて、應ぜざれば一刀に斬り殺されるの危険もある。又諸侯の奥方の侍醫のつらさは、往々奥方の里方へ密使の役を蒙ること、斯る密使は君家に禍を孕む基となり、結局身を果す段階であるけれども、一時の謝儀に眩して辭し兼ねるのが人情の弱味である。或は君公の命を受け重役の政治向の評議を傍聽せしめられ、その報告を徵せられるやうな變則のことがある。君公の命とあれば重役も傍聽を拒むことは出来ないけれども、間違つた報告をされるのを憚つて、自然重役も斯る傍聽者があれば沈黙する。そして傍聽者も終には重役に嫌はれて黜けられるものである。又

諸侯の奥方殊に後室などの寵を得ると、他の朋輩から嫉まれて不義をしたなどの言ひかけを受けることもある。又諸侯に仕へる醫は總じて色々儀禮に拘束され、自信を行ふことが出来ず、劇劑を要する場合なども遠慮を要するので、治し得べき病を救ひ得ない様な事がある。斯る階級に仕へる侍醫が人知れずつらく感ずるのは此の點にある。

昔、貴族社會に奉仕した醫は、本業以外のことまでも心得おかねばならなかつた。これもつらいことである。某諸侯の公子年若くして雷を恐れることが甚しかつたので、侍醫に之れを治せよと命ぜられた。侍醫は頓才があつて、雷雨のあとに屋上や庭園に氷砂糖を撒いて、之れを雷の糞であると云ひ、且つ此の上もない美味なものだといつて、侍醫みづから之れを喰つて舌を鼓し、公子にも勧めて喜ばせ、こんな興から公子をして終に雷鳴を待つやうにならしめたといふ滑稽な談もある。又ある諸侯が意外に鄙事に就ての心得があり、侍醫に命じて飯を炊き汁を煮らせた所、慣れぬことで拙を極めた。侯は之れを見てみづから手を下し斯くすべきものと教へたので、侍醫は赤面したと云ふ珍談もある。侍醫は終始君公のお側近く侍居るもの故に、種々のことを質問されて、それに受け答をせねばならず、動もすると戯れに難問を發せ

られることもあるので、往々窮することがある。又隠し藝をと徴せられ、無藝の者は飽くまで辭するの外なく、爲めに不興を蒙ることもある。これらもつらい事の内に數ふべきである。

昔の諸侯の内幕には随分馬鹿らしいことがあつた。随つて侍醫も別してつらさを感じたであらう。著者は諸侯の陰事につき左の一話を録してゐる。

一大諸侯酒家にて痔疾を患ひ玉ひ、大便難く、廁に上る毎に、時を移し玉ふに因て、新に便器を製せらる、其形神輿ミコシの如く、黒髻欄干クワシを設け、二扨子ボを貫き、中央の下に便器を置く、酒宴中若便氣あれば、即便器を呼玉ふ、近臣或は侍女四人にて席上へ昇き來る、其中に入て便し玉ふ、臭氣の外にもれぬ様に錦褥にて、下の便器の在所四方とも覆ひ、因て杯を傾け酒宴し玉ふこと其藩の侍醫に聞けり。

諸侯の陰事をあばけばこんなことが少くなかつたのだが、すべて奥向の事は侍醫が堅く口外を禁ぜられ、誓詞を取らる、が例であるのに、こんな陰事を口外する侍醫は以ての外と、著者は其の人と交を絶つたとあるが、所謂馬鹿殿に仕へる侍醫は別してつらかつたに相違ない。

醫が危険を感ずるのは狂亂の病人を診療する場合などで、往々刀を抜き病人が醫に迫ることがある。或は沸湯を醫の頭に浴せかける事などもある。此の書にはいくつも事例を擧げてある

が、某醫は戶外に走り幾町も追ひかけられ、僅かに身を全うしたと記してゐる。こんなことは醫師の尤もつらい事に相違ないが、婦人の陰部を検することも困難の一に數へられてゐる。婦人は羞ぢて局部を露はすことを肯んじないのが通例で、面部を掩うても自分が一たびでもか、つた醫には飽くまで隠すものである。これが爲めに多くの醫者は手コずつて看す、病を重からしめ、或は不治に至らしめることもある。斯る病人に對しては、始めての醫に、婦人の面部を蔽はしめて見せしめるより外はないと實驗を録してゐる。

尙婦人患者殊に美貌の婦人に困ることのあるのは、往々醫に親しみ狂れる擧句、或はそれに挑まれて其の誘惑に陥り、不測の災を醸すことがある。所謂ツツモタセで、昔も今も絶えずある危険はこれだ。

婦人患者に對し言語を慎むべしとある中に、嘔飯すべきことがある。某村落の醫、婦人を診察して月經の有無を問ふに當り、花柳界の通語を用ゐ、お客はあるかと云ふを、婦人の解し兼ねたるを、傍に母あつて、一回田舎の客があつたと答へたとあるは、母も解しなかつたと見えぬ。それはまだしもの事、ある貧家の産後の婦人に夜なべ(夜業)をやるかと聞きしに、婦人は顔を赤らめて二三度やりましたと云うたとあるは、醫師の善意を惡解したのである。又下痢ありやと問ふべきを、婦人の解し兼ねる瀉すかと問ひしに、婦人はシヤをサと取り違ひ、答へるに困んだとあるなどは嘔飯に値する。

醫略に就ても種々の逸話が録してある中に、左の一話がある。

和漢駢車に曰、横川の僧琳賢、心匠風流なり、訴る事ありて、雅兼黃門の許へ参りしに、黃門對して近頃よまれし大原の瀧の歌こそ、いとをかしく聞えしと曰ひ玉ひければ、訴ることは如何にもありなん、此仰せこそ身にしみて嬉く侍れとて事を白さずして歸りけり

翁草に云、半時庵を或る俳士難問して言伏んと訪來るを、淡々これを察し、彼士が其年の歳暮の句を歳旦帳にて拾ひ出し、能覺て出逢ひ、初對面の挨拶終ると淡々、兼て足下には面會いたし度思ひしに、能こそ訪ひ玉へり、餘の事にても侍らす、當春何某より足下の歳暮の句を翁が春帳へ寄せられたり、此句凡ならず、感慨の餘り床しかりし杯聞えければ、彼士思ひ設けぬ事なれば、愚詠を左程御稱美下され、餘多の句中拙吟を能くも覺え玉ふ者かなと答ければ淡々、我老年に及べども純粹の句は不忘却と稱美する故、彼士始の思ひと相違して、是迄翁の家へ不立寄を悔て、遂に門人に成りしと云、淡々計略を運し、難問に勝て益なく負てはすまず、故に如斯計ひし也

都門に門戸を張る醫家へは往々他方の醫が來て難問を發して困らすことあり、宜しく此の故智

を襲ふべしとあるが、如何にも一種の擊退法である。

醫略の内には薬を用ゐず、患者の心理を利用して其病を驅逐する杯の事もあるが、卑陋なるは、醫業の繁榮を假装する爲の略である。即ち繁昌せざる醫が其の流行を假装するため、患者も無いのに朝夕しばしば家を出入したり、わざと深更に家に歸るなどは随分御苦勞の事で、薬籠持の隸僕こそ迷惑至極である。これと反對に繁昌する醫の用ゐる略は、病家に對し勿體ぶつて、動もすると往診を斷つたり、さなくとも迎へられても忙しいといふを理由に時々斷つたりする。著者はこれに就て云く、如斯は藝妓が情客に對し、眷戀の情を一層切ならしめんため、故意に蹴ることがある、それと同じやり方で、病家は醫者に蹴られると、却つて其の醫を高しとし、謝儀をまして一層熱心に迎へることになるものだというてゐる。亦た萩野台州といふ名醫が始めて京都に開業した時、平賀源内が一案を授け、足下早く名を揚げんとならば、斯くくすべしと勧めた。それは當時まだ珍しかつた羊を購うて、それを玄關先に繋ぐことであつた。台州其の勧めの通りにしたが、果して往來の貴賤が足を止めて、台州の門前は終日市をなし、忽ち洛中の評判となつて、台州を羊醫者と呼び大いに名を博し、終には召されて典

薬にまで進んだ。これも亦自家宣傳の一略に外ならぬ。

著者は亦た往々諧謔を弄し、醫の陋態を摘發してゐる。流行醫の玄關構へを城郭に比して云く、
今日流行醫の構へは城郭の如し、栗の木の駒寄こま寄せは逆木さかぎに學び、出し壁に換て出格子を附け、高石垣を擬て八枚の腰板を鱗次し、鐵砲穴に準じて物見窓を開け、堀水は打水に換へ、裏門ならて臆病口を設け、火矢防ぎの水溜を内庭に置き、時計の響は相圖の鐘の如く、堂號の額を懸たるは旗指上るに髣髴たり、大門支關八文字に開たるは、孔明が籠りたる街亭の城の如し、篝火に換る烏薪を大火鉢に燃し、奥の間の釜の音は琴の音かと聞迷ふ故、病寃疾敵引牽して寄來る、數多の敵勢も聞しに優る構かなと心中感ぜぬ者もなし、先陣二陣と責上り、待間程なく出來る大先生の調舌は宰我子貢にあらざれば、蘇秦張儀の如くにて、如何なる強敵病人も此醫師ならで、今の世に我一命を託するなし、假令盛り殺されたりとも何ぞ恨まん不厭と、思ひ付おもひさる奸謀云々

と流行醫が門戸を張つて俗衆を籠絡することを形容してゐる。尙ほ又醫は意なりといふ古言を假り、更に左の如く痛罵してゐるのも一興である。

人心視機關のんしんかきんに云、醫者意也と、確言萬事に通ず、醫者衣也、衣服を美にす、醫者威也、威儀敦重にす、

醫者異也 異言異體にす、醫者夷也、動もすれば人を夷ふ、醫者稻荷也、尾を出さずして人を誑かすと、奥先生曰、醫者居也、父祖の餘蔭にて居ながら大醫となる、醫者館也、アメをねぶらすを術とす、醫者唯也、何事もハヒ〜と云うて承諾す、醫者慰也、病者を誑かして慰めるを善とす、醫者圍也、かこいにて杓をふるを斃とすと、余(著者)云、醫者位也、位階に上る程藥代厚し、醫者以也、以辯誑人、醫者葦也、立のびる程易折、醫者違也、言行相違するなりと
痛罵骨を刺すとも云ふべき歟。

一〇二 大槻磐水記念會

大槻磐溪の父磐水が日本の新文明を裨補する上に偉大なる功績のあつたことは言ふ迄も無い。明治九年は此の人歿してより丁度五十年になるといふので、成島柳北、福地源一郎、岸田吟香等が發企となつて、此の名高い蘭學者を記念する爲の會が開かれた。明治の初年に於てかういふ意味の記念會の催されたのは、恐らく之れが初であらう。其の會の趣向がなか〜面白い。之れに案内した人は、皆な一度和蘭文典を繙いた者に限つたが、其の人々が三十人程あつ

て、杉田玄瑞、神田孝平、桂川甫周、加藤弘之、津田真道、西周、大島圭介、松本順、西村茂樹、中村正直、箕作秋坪、福澤諭吉、伊藤圭介、勝海舟、佐藤尙中等何れも當時何人も許す學界の耆宿であつた。外國人として特に招待したのは二代目シーボルトと露人ニコライの二名であつたが、シーボルトは事故の爲に來らず、ニコライだけが出席した。其の席上ニコライが演説して、自分は日本へ來て丁度十五年になる、今より考へると其の頃の日本の天地は何と無く暗がりのやうで、市中などを歩いて物にぶつかりはしないかといふやうな不安を感じた、それが追々開けて來て、今では本當に安心して呼吸が出来るやうになり、如何にも愉快である、之れも畢竟磐水先生の如き先覺者の御蔭であると云つた。

此會は當時としては類例の無い程ハイカラなもので、酒から料理一切西洋式たるは勿論、餘興として、特に陸軍から軍樂隊を招聘して奏樂した。日本の軍樂隊が、民間の需めに應じて出ることになつたのは之れが最初であつた。それに今一つ、今日でも一寸やれないのは、岸田吟香が宴半ばに盆を携へて客人の間を廻り、樂師に遣る纏頭を募つたことである、斯様に何から何まで新趣向で遣つてのけたのは時代の早い當時丈けに、今日から見ると洵に興味がある。

一〇三 縁切寺

尼寺で俗に縁切寺と云ふのが、日本に二つしか無い。縁切寺と云ふ譯は、婦人が此へ駈込めば收容されて寺の保護を受け、或る期間そこに居れば、自然離縁が出来るといふにある。法權もこゝには及ばなかつたのである。昔し斯様な寺が二つあつて、一は鎌倉の松ヶ岡にあつた東慶寺で、今一つは上州の新田郡の満徳寺である。此の二つの寺は今も孰れも廢寺同様となつてゐる。東慶寺の本堂は横濱の原君の三溪園に取込まれて保存されてゐる。此の二つの寺の内、東慶寺の方は東京に近い爲め多く世に知られてゐる。自分が此の寺に興味を持つたのは、一種他に無い寺法があつたからで、病氣保養の爲め久しく鎌倉に靜養した頃、屢々此の寺を訪ねて其の序に聊か此の寺の事を調べた事がある。併し自分の調べたのは餘り詳しくなかつたが、近來此の寺に就ていろいろ研究が起り、隨つていろいろの事が判つて來た。自分は茲に極めて大略をいふに過ぎない。

先づ寺の來歴からいふと、此の二つの寺は共に六百年の昔迄遡ることとなる。鎌倉の東慶寺の方は、北條時宗の未亡人が寺に住してから縁切の法が定められたと謂はれてゐる。鎌倉は當時禪宗が盛んであつて、多くの寺も出來た譯だが、自然女人濟度の爲めに、斯んな事も起つたものであらう。満徳寺の方は建久三年、徳川家の先祖に當る、新田義季の娘が其の開基となつてゐる。此の兩寺の制度は多少の相違もあつたかも知れぬが、何れも一種の特權を有してゐた。婦人が家庭の葛藤、夫と不和であるとか舅姑と不和であると云ふ様な事で居堪たまらず、身の寄邊の無い處から此の寺へ駈込めば、寺は其れを保護して、最初は三年そこに在ると當然離縁になるといふ、一種の不文律が行はれてゐるのである。最初の頃は其の駈込人を別に尼とするでは無く、有髪のまま、在寺を許したと謂はれてゐる。此へ駈込むと夫であらうが、親族であらうが、乃至幕府であらうとも、如何ともしがたいのであつて、即ち婦人の避難所であつたのだ。言ふ迄も無く當時女の權利などは一つも認められず、男計りが權利を持つて、妻に對して七去の權を握つてゐたから、女は虐けられても寄邊が無い爲めに、之れを佛教の方から救はんが爲に勅許を得て自然に此の特權を得るに至つた。

今日は日比谷に結婚の爲の設備はあるが、離縁所と云ふものは無い。併し今日の時勢に於ては離縁所は必ずしも必要が無いかも知れない。今日無い所の離縁所が當時在つたのは、前に述べたやうに偶然では無いが、しかし駆込人に對して別に宗教上の修行を要求せず、どこ迄も俗人として扱つた處に面白味を感じる。由來、宗教上の信念から俗縁を絶つて佛門へ入つた、ロマンチックな話は敢て珍らしく無い。荳道心の話や西行法師が旅の間に自分の妻にゆくりなく出逢つたといふが如きは人口に膾炙してゐるが、此等の人は皆宗教上の信念から斯様な境遇に入つたものであるが、この二つの寺の場合は全く趣を異にする、そしてそこに興味がある。

一體この二つの寺が何故に、法律にも等しい特權を持つたかといふと、一つの理由は高貴の人でなければ住職たることを得なかつた。即ち皇室の内親王とか、將軍家の連枝であるとかいふ地位の人でなければ座主ざすとなる事が出来なかつた。その關係からその寺も自から認められて、政府も之れを行政權の及ばない處としてゐた譯であらう。かつて後醍醐天皇の内親王も東慶寺の住職になられた事があつて、五代目用堂ようどう尼宮と申した。この時代に於て女を三年留め置くのは長きに失する、併し寺法は妄りに破ることが出来ぬといふので、二十四ヶ月に改めた。

それは二年といふのではなく、足掛三年といふことで、強ひて寺法も破らずに短縮が出来るといふので期間が改まつた、之れも此の尼宮の粹なさばきであつたと思ふ。

追々時代が移るに従ひ、寺法にも變遷があつて、寺法も緩み出した譯であるが、此に徳川家康の時に至つて、偶然の出来事から緩んだ寺法を更に固めて、此の特權を裏書することになつた、其の來歴に甚だ興味がある。奇態な事には此の二つの寺は、共に豊臣家と徳川家に因縁がある、東慶寺は秀頼の娘を中興の祖としてゐる、又滿徳寺は、秀頼の妻即ち家康の孫娘が中興の祖となつてゐる。之れが大阪の役の後、兩方の寺に分れて寺人をしたのも奇と云はなければならぬ。

秀頼の妻は大阪落城の際城から逃出したものだ、秀頼が死んだ以上は事實上縁も切れたやうなもので、何處へ再縁しても差支へなさうであるが、世間體さうも行かぬ、そこで先祖に因縁のある滿徳寺に入れて尼生活を遣らせた、又其の娘も豊臣家の種だから、遣り處が無く、幼少から東慶寺へ入れたものであらう。いろ／＼裏面には事情もあつたであらうが、實は此の母子共、縁切寺の住職たるべき因縁があるともいへる。なぜなれば元來大阪の役は縁切の戦であ

つて、兩家の間柄が破れて豊臣は亡びた、即ち絶縁の戦ひである。秀頼の妻は良人と運命を共にすべきであるのに駈出したのである、謂はゞ縁切寺に駈込みの型を遣つたも同様である、それが縁切寺に身を寄せる事になつたのも當然の運命とも云へるであらう。

それは兎も角、此に仕合せを得たのは此の二つの寺である。斯る徳川家の連枝を持つて行つた爲めに追々緩みか、つてゐた寺法を立直すことが出来た、徳川幕府が兩寺の寺法を厳格に持續すべく裏書したのである。當時は中々寺に權威があつて、何人も之れを犯すことが出来なかつた。秀頼の娘は第二十代の東慶寺の住職で、天秀尼と云つたが、寛永の或る年、會津の藩主加藤成明が、其の家老堀主水の妻の東慶寺に身を隠してゐるのを、武力を以て奪ひ去つた事がある。天秀尼は寺法を犯すものとして其母なる天樹院に之れを訴へた。當時は三代將軍の時で、將軍は即ち天樹院の弟に當る關係から、此の訴へに對して幕府は會津に對して峻嚴な處置を施し、四十二萬石の封を削つて改易を行つた。之れには他に事情もあつたかも知れぬが、兎も角寺の權威が非常にあつた事が分る。一體、家康とても武力を以て縁を切り、武力を以て孫娘を大阪城から奪ひ去つた事を考へると、會津侯の仕打と似たもので、誰か烏の雌雄を知らんやで

あるが、強是弱非で、強い者には叶はぬ、寺法を犯したといはれて見れば、會津も泣寝入る外はなかつたのである。

秀頼の未亡人は寺生活を遣つて後何うしたかと云ふに、本多家に嫁した、即ち再縁する前提として暫く身を尼に齎した譯である。或は替玉を使つて本人は寺に入らなかつたと云ふ説もあるが、ハッキリ分らぬ。其の何れにせよ、離縁の形式を寺で踏まなければ當時再縁が出来なかつたと見える。されば天樹院程の婦人でも、普通の駈込人と一度びは其の境遇を同じうした。兎も角縁切問題から見ても、大阪の役は縁切の戦ひで、其の擧句二つの縁切寺が繁昌するに至つた譯で、其の歴史以外にもロマンチックで興味があると思はれる。

徳川氏の初葉には、前に述べた如く縁切寺の寺法も嚴重であつたが、段々幕府の干渉が加はつて来て、後には寺役場といふものが置かれる様になつた。そこで駈込人が來ると、先づそれを押へて取調べ、場合に依ると拒絶するやうなことも起つた。後には離縁狀を携帯せぬものは寺に入れないといふことにもなつた。之れは全く寺法を無視したもので、離縁狀が貰へるくらゐならば何も此の寺へ駈込む必要は無い、貰へぬから來るのであるが、さて斯様な干渉を敢て

するに至つたといふのも、畢竟いろ／＼悪い者が入り込む様になつた結果であらう。勿論干渉は段々甚だしくなつて、入るものは是非髪を切らねばならぬ、又お経を讀まなければならぬことになつた。虚無僧といふものに幕府が困つた様に、不義をした女が駈込んだり、又密夫と申合せて當分身を隠す方便として駈込む様な、如何はしい事が段々起つた爲め、幕府でも取締上已むを得なかつたものであらう。

更に此の寺役場と云ふものが何をしたかと云ふに、離縁の調停や勸解を遣つたりしたものだ。夫には鎌倉の名主も参加して、親族の間に立つて斡旋して契約を取交し、荷物の始末迄もして遣つた。即ち此の役場は一種離縁の公證役場たる觀を呈した。その寺の附近には宿屋が一軒あつて、それが自然其の親類を宿めるといふ様な關係から、いろ／＼の世話をやいて、自然それが又勸解や調停の場合保證人と云ふ様なものになつて、今日に於ける區役所の前に代書人がゐると云つた工合であつたであらう。

さて駈込の女の生活状態は何うであつたかと想像して見る。其の住職こそは或る取除けはあるが、全く異性を知らない處女であつたが、駈込人は處女では無い。階級はいろ／＼であらう

が、皆な一家に風波を生じ、或は夫婦喧嘩をしたり、舅姑の苛責に堪へずして逃出したものがあつたらう、密通をして逃込んだ姦婦もあつたらう。此等のやからは懺悔の爲めでも、又修養の爲めでもなく、只一圖に離縁狀欲しさに來たものである、従つてお経を讀ませるといつても無論宗教心なぞのあらう筈は無い、それが讀刷れない經文を讀んだ様子が如何に滑稽であつたらう。無論一時たりとも髪を切つて紅も白粉も用ゐられず、精進潔齋、男ひでのする場所に二十四ヶ月を送らねばならなかつたのは、中々父母の喪に居るよりもつらかつたらう。

此の女人共がお互に並んで寝るとなると、之れがまた賑やかなものであつたらう。いろ／＼の愚痴話し、良人の悪口も出たであらう、舅姑の讒訴も出たであらう、而も大概は同じ境遇であるから定めし共鳴したであらう。中には姦夫との戀を語る様な魔性の女もあつて、人々の愚痴をマゼツ返したりするものもあつたらう。近く期が満ちて出るものはニコ／＼もので、新に寺入したものはベツ／＼であつたらう。長く寺にゐる古參の者は新入をいろ／＼苛めたであらう。外界とは絶対に交通を絶ち、門外へは一步も出ることが出来ぬ、只だ宿屋の中に入れて時に親族の消息を聞くことがあつて、それで時には怒つたり悲しんだりしたであらう。

寺では駈込んだ者を、扶持して食料を供給する餘裕は無かつた、随つて食料は自辨であつたと聞いてゐる。斯んな一種の生活状態を芝居に見たらば面白い場面となるであらう、如何にもロマンチックなもので、悲哀もあり滑稽もあり、そして艶もある。此等の婦人の内には正式の尼僧も交つてゐたであらう、其の有様を畫としても興味があるではないか。然るに何故か此の寺の事が脚本にも小説にもならず、また畫題にも取られず、只昔から川柳家のみ此のおもしろい材料を擅にしてゐるのは何故であらう？

一〇四 光琳研究

故久保田米僊翁が、嘗て京都賀茂川畔の旗亭に飲み、座に侍した藝妓に前の川中に遊んで居る鳥を指し、「あれがお前達の能く歌ふ千鳥だよ」と教へた處が藝妓は一向に之れを眞としな、千鳥はあんなものでない、もつと圓い格好のものだと言ひ張り、傍らの衝立てを指し「あれこそは千鳥です、比べて御覽なさい、前の川に居るのは似も付かない」とどうしても聞付

けなかつたと云ふ、此の衝立ての千鳥こそは光琳模様式の千鳥で、光琳が理想化した模様千鳥が我國人の目には却つて眞物と思はれて居る程に、光琳の感化力は廣く且つ大なるものである。光琳を唯だ圖案の意匠家に過ぎぬと考へた時代もあつたが、今は其眞價が認められ、その畫は内外の珍とする所となつた。元來光琳の畫は寫實を超越して獨特の妙がある、そして其の用ゐた繪の具には一家の工夫があり、上品で落付きがよい。繪も繪の具も何となく能や其の裝束の色に似通つた所がある。これは或は光琳が能に興味を持つた所から來たのではあるまいか。今は故人となつた小林文七氏は曾つて光琳の繪の具の特徴に就て研究したことがある。今左に其の一斑を擧げる。

- 一、光琳の畫は他様の如く筆を枯すことなく、十分水を含んだ筆を用ゐた、爲めに其畫風は力一杯に堂々とした落付きがある。飄逸はないが、ゆつくりした、豊富充實がある。
- 一、右の如く筆に十分水を含ませた結果、墨色なり、繪の具なりが、枝葉に迄も十分にじみ込んで、筆の初め終りが分らない様になつて居る。
- 一、一ツ木の葉に墨と綠青とを共に畫いて居る。
- 一、光琳の畫には、書き放しの物が殆んど無い、墨畫にても、泥引又は金泥塗りつぶし、又は薄墨地ぐ

まを用ゐる。

一、彩色の仕立ち。光琳の用ゐる仕立ちの工夫は種々あつて、例へば赤い花の仕立ちには、普通先づ胡粉を塗り、乾いた後に朱、臙脂などてくま取りするのが常法であるに、光琳は胡粉で書いて乾かぬ内に、朱、臙脂など云ふ高價なものを惜しげもなく塗るから、浸みくまが澤山に出来て、他流には類のない變つたものが出来る。

二、繪の具の調合も他流と違ひ群青に綠青を合せ、又は白い物に模様を描く爲めに塗るべき胡粉に金泥を合はせて塗つたものなどがある。

一、普通塗るにも困難な群青、綠青の様な重い繪の具を用ゐつゝも、墨と同様運筆自在に書きこなししてゐる。

一、菊の盛上げを描くにも盛上げ胡粉を用ゐず、直ちに上塗に用ゐる高價な胡粉で花びら一枚づゝ畫き上げる。

一、極細の密畫を畫くにも、一筆毎に面白く樂みつゝ描いた心持が其の畫面に歴々と見られる。

一、富豪が贅を盡すと同じく、光琳は畫の上に存分の贅澤を盡した。

一、使ひにくい濃い繪の具をも細く長く引く事を工夫した。

以上は光琳の特徴の一斑であつて、其の畫を鑑定する上にも参考となるべき事が尠くない。

一〇五 贋作家西村兼文

私の友人が、先年「書畫贋物語」といふ本を出版したことがある。面白本であつたが、自分はその原稿を見た時に、著者に向つて、之れ程整つた物を版にするならば、なぜ終りに贋作家列傳を添へなかつたかというた。古來贋作に長じた人は少からずある。人は贋作家といへば、一概に賤しめるが、併し、其の中には相當の藝術家も居るのである。其の列傳を書いて、之れを鑑賞家の参考とすることは、強ち無益の事では無いと思ふ。

茲にすぐれた贋作家を一人挙げよう。それは西村兼文といふ人である。徳川末期より明治にかけての人であるが、此の人の作つたものが正しいものと受取られて、現に多くの方面に愛藏されて居る。僧良辨ちゅうべんの書いた紺紙金泥の心經は貴重のものであるが、西村の贋作が三千圓といふ價で、某侯爵家の珍藏に歸して居る。自分は同じものを、其の千分の一で買つたことがある。それは如何にも巧に出来たもので、紙質でも書體でも、容易に眞贋の鑑定の出来ぬ位に作

られて居る。此の人は、質作には一種の天才であつた。ある時、古い活字を何處からか探し出し、同時に古代の紙を探し求めて、延喜十三年二月五日といふ年號迄其の活字で捺し、文選の斷片を作つたことがある。是は五六枚同時に印刷したが、どう見ても古色蒼然で、質物などは思はれない。尙ほ其れを尤もらしく見せる爲め、源親房印といふを摸造して一隅に捺し、又其の斷片を藏した寺の印迄捺して、これが出来ると、西村は京都に在る同好の好事家を歴訪した。俺は近頃かういふものを得た、君の事だから、若し欲しければ買つた値段で譲つてやらうといふので、好事家達も驚いた。延喜の朝にかゝる活字版などのあらうとは思はぬのに、どう見ても正しいものであるから、何れも喜んで、直ぐに云はれる代價を拂つて、手に入れた。扱て手に入れた人々は、友人に誇らんと甲乙を訪ねて、俺はかういふ珍物を買入れたと示してみると、實は俺も同じものを買つたといふ。更に丙丁と同人の間を持ち廻つてみると、皆同じものを持つて居るので、是は西村に一杯喰はされたと始めて氣がつき、皆口惜しがつた。本人の西村は頗る洒落な男で、俺は一日の中に皆駈けずり廻つて買はせた、それは一日で無いと自分の細工がバレるからで、此の一日で廻るといふことが、俺には非常の苦勞であつた、其の爲

め彼奴等は皆將某倒しになつたと笑つた。

此の西村が、又唐の天祐二年秋九月八日といふ年號のある、陶淵明の歸去來賦を、やはり同じ活字で作つた事がある。これも殆んど質作とは見えない様なものなので、人が驚いた。唐の年號のある版本は向うには絶対に無い、然るに日本の古い寺には支那にも無いものが残つて居るといふ觸出しであるので、書物の通人も之れには一杯喰はされた。當時日本へ来て居た支那の公使黎庶昌は有名な古書通であつたが、此の歸去來賦と、延喜の文選とを見て大に驚嘆し、流石に日本は古い國である、斯様なものが残つて居るのは實に驚き入ると云つて、歸國後、友人に吹聴の爲め長い跋文を添へて、版に刻した。斯様に、ひとり日本人のみならず、支那の通人さへ欺かれたのを見ても、如何に西村の質作の伎倆がすぐれて居るか、察せられる。

或る時重野安釋博士が西村に向つて、某大家には大分澤山古文書が集まつてゐるが、一度来て見てはどうだと云はれるので、誰かの案内で出掛けて行つた。重野博士が古文書を取り出して、色々説明されるのを、西村は黙々として、感心した態度で聞いて居た。やがて御馳走になつて門を出ると、其の案内した人に向つていふには、重野さんも案内し易い人だ、あの中に

は、少なくとも二十通位は、自分の作つたものがあると笑つた。先づ此人などは近世の質作家中の名人であつて、其の列傳の最後に名を止むべき人であらう。

一〇六 詩仙堂と養石山莊

詩仙堂は石川丈山隱栖の處で、京の修學院村大字一乗寺村に今も存してゐる、寛永十八年丈山が五十九歳の時此の堂を築いたと云はれてゐる、詩仙堂の名の由來は書齋の四壁に漢晋唐宋の詩人三十六家の畫像に詩を題して掲げたので此の名がある、丈山に六々山人の號のあるのも又三十六詩仙に取つたものであらう、先哲の書齋で残つてゐる内で最も古いもの、一であることは言ふまでもない。

私は丈山の此の遺蹟を思ふ毎に、支那の黃石齋の事を聯想せざるを得ない、黃石齋は明の有名な學者で忠節を以つて國難に殉じた人である、名は道周、字は幼元、又螭若と云ひ、天啓に進士に擧げられ、官は禮部尙書に至つた、此の人の風格がどことなく丈山に似てゐるやうである。

それは兎も角、此人の別莊養石山莊に書齋があつて、十朋軒、九串閣と二室に分れてゐる、その二室に石齋が古賢哲五十六家を選び、隸書で讚を書いて四壁に貼りつけ、日夕羣賢に思を寄せたといふ、尙ほ委しく云ふと、十朋軒には二十六家、九串閣には三十家の賢哲の讚を題したのである、此の事實に徴すると丈山の詩仙堂と頗る似寄つた所がある。似寄りの點はそれのみで無い、丈山の得意であつた隸書が、石齋の隸書と非常に似てゐるのも奇だ、石齋の養石山莊に貼つた題讚は黃樞といふ人に依つて版に刻され墨帖となつてゐるが、これと丈山の隸書と對照して見たならば、何人も其の酷似をうなづくであらう、私が丈山を思ふ毎に黃石齋を聯想するのは此等似寄の事があるからである。

一體丈山は誰れを師としてあれほどの隸書をかくやうになつたのであらうか、今までそれを調べた人は無いやうである、石齋の隸書と似てゐるからと云ふので一概に石齋に學んだとも斷じ兼ねるが、石齋は明末殉難の烈士として評判が高く、當時我が識者にもひどく崇敬を受けた、そして丈山の隱栖の頃は恰かも明の亡びる頃であつたことを思ふと、丈山も石齋に同情を寄せもし崇敬もしたであらうと想像される、そして崇敬の餘り書も之れに私淑したのではある

まいか。尙ほ三十六詩仙の書讀を堂中に置いたのも、石齋に倣うたものではあるまいか、何んとも云うても石齋が、羣賢の讚を題したのは詩仙堂經營の可なり前であつたに相違ない、即ち前にも云うた通り詩仙堂の經營は寛永十八年で、丁度明が滅亡に瀕し危険が石齋の身邊に迫りつ、あつた時だから、勿論優遊の時で無かつたのだ、なる程日本には歌仙を三十六數へる例がある、其の圖像を壁に掲げる例もある、三十六歌仙の代りに三十六詩仙を思ひつく位は漢學趣味の丈山に不思議は無いけれども、私しの推測のごとく丈山が石齋の書に私淑したとすると、詩仙を選んだことも何となく石齋に倣つたのではないかとの推測を禁じ得ない。墨帖には刻年を闕いてをるが、或は當時丈山は此の帖を手に入れ、之れを金科玉條として書も學び、書齋の意匠までも之れに倣つたのではあるまいか、三十六詩仙は多少の出入はあるが、石齋の選んだ五十六人中の人物が甚だ多いことも爰に一言して置く。自分は未だ石齋の養石山莊の地形などを調べて見る暇がないが、想像を馳せて見ると、此の山莊も丈山隱栖の凹凸窠に似寄つてをるらしくも思はれ、丈山の風格も石齋と似て居る様にも思はれて、兩者に一脈の通ずるものがあること、思はれ、妙に興味を感じる。最後に云うて置くが、丈山は石齋が國難に殉じて刑せられた後十數年在世で、寛文十二年九十歳で歿した。

一〇七 能樂界の椿事

明治三十年六月の事である、觀世清廉が梅若の舞臺で蟬丸の能を遣つて居る最中に、觀衆から一人の婦人が舞臺へ躍り上り「何のシャラ臭い、お前の如きが晴の舞臺に能を遣るとは」と、行きなり觀世を捕へて舞臺の下へ引摺り降したと云ふ騒ぎに、一時は觀衆總立となつたが、これは一時の事で、其の騒ぎは直に収まつた。併し収まらないのは觀世の爲めに能舞臺が汚され、能社會は侮辱されたと云ふ悶着。成る程これは能社會に對する開闢以來の大侮辱と云うてよろしいのだ。全體能は神事としてあつて汚れを厭ひ、昔は婦人の觀覽を禁じた位のものである。然るに神聖なる舞臺に婦人が躍り上り、演舞中のものを辱かしめるに至つては、實に斯界の珍事にして、昔しならば其の侮辱を受けたものは切腹を申付けられた上に、家斷絶は免かれざるほどの大事である。今は斯る制裁は無いにもせよ、斯道の同業者の面目を汚損したる一事に於

ては、昔も今も同様で、同業者が之れを黙視すべき謂はれはない。觀世清廉があれほどの家柄をつぎ、有力なるバトロンを持ちながら、其後久しく表向の舞臺に其の技を演ずることの出来なかつたのは是が爲めである、彼は全く斯界の日蔭者であつた。

扱て當日舞臺に躍り上つた奇怪な婦人はそも何者である。明治二十年頃でもあらうか、飯倉の吳服屋山城屋の嫡子に田中安太郎と云ふがあつて、立派に家の相續の出来る身分でありながら、わかいときから能に凝つて、其の能の道樂の爲めに勘當されたものだ、此の田中は松嶋の瑞巖寺の南天坊に禪學などを學んだこともあつて、一種の變物であつたが、これが能に凝つて諸所放浪の當時、大阪新地の藝妓でお徳と云ふものを落籍して妾となし、其後正妻に直した、舞臺に躍り上つた婦人は即ち此のお徳で、夫の命で斯る侮辱を加へたものである。

何故に田中が斯る侮辱を加へたかに就てはいろいろの説もあつた。併し田中の口から出たと云ふ所では、全く觀世は器用で藝はやるが本當に腹があつて遣るので無いから、どうしても三年南天坊より坐禪の教を受け、一生懸命に稽古に身を入れなければいかん、然るに藝には身を入れず、兎もすれば女狂ひに身を崩すから、懲らしめに遣つたのだと云つて居つたと云ふが、

其の原因は果して之れに在るか否やは分らない。兎に角田中との和解がつかない間は、觀世は表向晴の舞臺に出ることが事實に於て出来ないことになつた。梅若や寶生なども設令ひ内實氣の毒と申しても此の紛紜が解決されない内は、矢張表向交際が出来ないので、觀世も大に困つて手をかへ品をかへいろ／＼田中に詫を入れたことがあるが、田中はなか／＼承知しない、何うしても南天坊に坐禪を學んで大に身を修めなければ承知が出来ぬと云つて居るので、何れも手コずつて仕舞つた。

斯の如き紛紜が五六年も續いた、そして之れが長田秋濤の努力で解決された。秋濤は偶然田中といふを知つてゐたので、觀世の爲め仲裁の勞を取り、追々田中も折れたが、設令ひ一日でも南天坊に師事しなければ、行きが、り上和解が出来ぬと言ひ張るので、已むなく當時攝州西の宮にゐた南天坊方へ、秋濤が觀世を伴うて入門させたので、漸やく和解が出来、觀世は再び舞臺に立つことを得た。

それにしても田中が何故觀世を困めたかといふに、いろいろの説もあるが、能く詮索して見ると、成る程と領つける原因がある。田中が勘當の身となつて大阪に流浪中、某氏に救はれた

ことがある、處が當時矢張り滯阪中であつた觀世が某氏の妾と醜關係を生じたので、田中は思人の爲め憤を漏らしたのが原因であると云はれてゐる。尙ほ因に云ふが、此の田中は星亨氏の世話にもなり、星氏は田中の爲め實家から一萬圓の金を出させたこともあるといふが、田中の遣り口にどことなく星式の所があるやうに思ふ。

此の話は私しと高田博士と平塚の某所に數日滯在中、一日長田秋濤が觀世を伴うて來て、其の席に觀世は我等の爲めに二三曲の謠を唄ひ我等を喜ばせた、さて觀世が去つた後、秋濤が備さに語つた其の大略が右の如くである。

一〇八 釣の文學

幸田露伴氏が釣に興味があつて、釣に關して豊富な知識を有つて居られることは隠れもないが、いつぞや氏に就て釣の話聞いたことがある、此の隨筆を編するにつき、雜録類を翻へしで見ると、中から當時聞いたまゝを筆録したものが出て來た。幸田氏の隨筆には更らに委しい

ことが載つてゐるかも知れぬ、又た自分の筆録に誤りがあるかも知れんが、左に私の筆記の要略を掲げる。

釣魚の濫觴に就て露伴氏曰く、釣魚は何れの國でも有史以前からあつたと思はれる、我國に於てもさうで、嘗て相州三浦郡久比里村から發見された古い釣針は動物の骨で作られ、鏝もじりが外側（今は内側）に付いてあるのを見ても、如何に古い時代から行はれたかと云ふ事が分かる、隨つて古事記や日本書紀にも釣魚の事が尠なくない、例へば古事記には、櫛八玉神が鱸を釣つたと云ふ事などもあり、且つ「桮繩たぐなばの千尋繩打延ちひるのなほうちば」云々の事より推せば、一本釣から進んで延繩釣が行はれたものであらう。また一本釣の行はれたと云ふ事は、同書に「火遠理命うみさき海佐知うみさきを以て魚釣するに、總て一魚も得給はず、亦其釣をさへ海に失ひ給ひき」とあることでも證せられる。

降つて萬葉集になると比較的釣の事が少なく、鱸、鯛、鯉、鮎等を釣る事が出て居るばかりである。併し其中では、比較的鮎の歌が一番多い。又彼の浦島の話詠みしもの、中に、鯉と鯛を一度に釣上げたと云ふ事がある、浦島の話は一種の寓言であるが、恐らく此の歌の作者は

必らず釣の知識に乏しい者であつたに相違ない、なぜと云ふに、鯉は浮き魚、鯛は沈み魚で、随つて兩者の釣方は全く異つて居るから、此の二魚を一度に釣上げると云ふが如きは到底不能の事である、つまりは坐上の吟である。萬葉以後に至つては、歌も次第に人爲を尙び自然に遠ざかつて來たから、釣の歌などもなく、偶々あれば悲觀的に見たものである。王朝時代には百濟の慶仲と云ふ釣の名人があつたと云ふけれども、此の頃の事は委しくわからぬ。

徳川時代享保には「河川録」と稱する三卷物の書籍があつて、或る大名の著述だと云ふ事であるが、釣に關する書籍はこれが始めてある。これより古くは、「卜養狂歌集」中に浦島の釣竿を詠んだ歌がある。又其角の句に「ほのく」と朝飯匂ふね釣哉、嵐雪の句に「鯊釣や山村水廓酒旗の風」と吟じたものもある。此の其角の句にある「ね釣」と云ふのは、海の深い所の岩に附いて居る魚を獲ることである。天明度には手柄岡持の「我面白」に釣の事があるが、此の手柄岡持と云ふ名からして既に釣天狗の名で、此の人自身も釣好で、此の人の釣場は今日でも中川に在る。又洒落本の中、深川の事を書いたものに釣の事がある、がこれは深川の地が水に親しいためであらう。又寫本にて、黒田五柳庵と云ふ人の書いた「釣客傳」もある。

「兜軍記」には阿古屋の兄が母の病の爲めに、三年鯉を釣つたと云ふ話もあれば、また「八犬傳」には、房州に鯉が居ないと云ふ事を材料として、里見が其の爲め難題を受けたと云ふ話もある。此他馬琴は「美少年録」にも「夢想兵衛」にも用ゐた。天明に三馬の「岡釣はなし」があるが、此の書は岡釣師の愚態を描き、併せて魚同士の對話もある。明治に至つては、村井弦齋氏の「釣道樂」といふがある。

日本の文學に顯はれた釣魚は、ざつと恁んなものであるが、扱て支那に於てはどうかと云ふに、「詩經」や「論語」の中には釣の事はあるが、趣のあるもの乏しく、釣の本家本元と云へば先づ太公望に指を屈しなければなるまい、随つて太公望に關する記事頗る多く、「六韜」(僞書)にも「説苑」にも見えて居る。自分の考へには、此の人は貧窮の爲めに釣をやつたのであらう。太公望の釣場は磻溪とも云ひ、棘津とも滋泉とも云ふが、「水經」の話に此人の釣場が書いてある。要するに日本にも傳はつて居る、太公望が眞直の針で釣をしたと云ふ話は、何れの書物でも皆一致して居る。李白の詩から推せば、太公望は延繩を用ゐた事があつたかも知れない。

「列子」にも「莊子」にも釣の事が載つてゐる。「列子」に初めて出た「獨蠶子」と云ふのは「テグス」の事を言つたものと思ふ。「莊子」には、莊子自身が漢水に釣をしたことがある。又同書に任公子と云ふ人があつて、大漁を遣らうと思つて太い竿を以て釣つた處が、素晴らしい大魚を獲たので、之れが爲め其近邊の人々は、魚の喰飽をしたとある。此の話の可笑しいのは、恁んな大魚が岡釣で釣れた事だ。

「淮南子」に初めて釣の名人の名が見える、それは蟾何、娟娘の二人である。これには話がないけれども、思ふに兩人とも寓言中の人物で、實際は無かつたものであらう。「娟娘」など云ふのは、或は釣に用ゐる餌の蟲の名ではあるまいかと思ふ。

詩賦にては宋玉に釣の賦あり、又嚴子陵も釣客の一人として有名であつた。唐の時に「西塞山前白鷺飛、桃花流水鱖魚肥」と作つた張志和は、常に舟にて釣をしたと云ふことである。元來此人は大の釣好だつたけれども、魚に心がなかつた爲め餌を附けなかつたと云ふが、併し「青箬笠、綠蓑衣、斜風細雨不須歸」などの句ある處からして見ると、單に魚に心なくして雨中にまでも釣をすると云ふ様なことはあるまい、察する所此の人は釣の名人で、馬鹿釣の徒では

あるまいか。馬鹿釣と云ふのは、今日江戸川の或る釣人がやつて居るが、之れは餌を附けず針を磨き光らし、水中に引き動かして魚を獲る法である。扱又張志和の後に陸龜蒙、皮日休の二名人があつて、此の徒の著に「漁具錄」といふ一卷もある。此の書の中に「釣車」と云ふ語があるが、之れは絲を繰出す車の様な造り方である。又漢の裡に潜んで居る魚を追ひ出すに用ゐる、棒の先に環を付せる道具があつて、之れを「鳴榔」と名けて居るが、此の鳴榔の語も此の書中にある。此の二人は舟中に種々の道具を置いて釣をしたと云ふ事だ。此の二人の後には釣の徒も釣の話もない。「水滸傳」にも阮小二、阮小五の鯉取りの事はあるけれども釣の事はない。遙かの後「紅樓夢」中の一段に、富家の庭園の池邊にて、一家の人々及び來合はせた良家の女達と其の家の子息と釣をした話がある。

英國に於いてはウォルトンの著書がある、其の書には多少博物學上の誤謬もあるけれども、頗る面白い書である。孟子は、人の技術は地の利に若かず、地の利は天の利に若かずと云つて居るが、釣に於ては天の利に若かざる實例を見ることが多い。また諺に「釣は道樂のつき當り」といふ事がある。釣に就て種々の心を起すは人々の心々の異なるからで、或は自然と接する一

方法ともなるべきものである。小説、詩歌のみに止まらず、繪畫に於ても釣は好畫題だと思ふ。今日までは未だ釣魚を材料とした書籍が甚だ少ないが、將來は釣の趣あることに注意して之れを材料となさば、面白い作物が出来ると思ふ。

一〇九 伊東に遊びて

伊豆の伊東は熱海より五里離れた海岸で、多くの人の遊びに行く所であるが、自分は熱海へ幾十回となく出掛けながら、曾て伊東に遊んだことが無かつた。本年の正月も亦た熱海に遊んだが、今度は伊東迄自動車を通ずること、なつた爲め、初めて同地に遊ぶ機會を得た。

伊東を熱海に比較すると、色々の意味に於て劣つて居る。特に風景の點に於ては、何處を見廻しても凡山庸水で、甚だ飽足らぬ思がする。たゞ一つ詩味を感じたのは、市街を横斷して居る一帯の河流で、それを松川と呼んで居るが、川幅廣く水が清く、熱海の溪流の塵芥に充ちて居る如き比では無い。殊に其の川の兩岸には松林があつて、一種の風致を添へ、河水の海へ流

れ入る口には極めて趣のある岩石が突起して居て、それを亭子岩と呼んで居る。此の川の稍上流に、老樹鬱蒼として天を摩する森林があつて、そこに音無神社といふ古い社がある。其の崖下を流れる水を音無の流と名けて居るが、こゝが伊東で最も景勝の地だ。何故に音無の名があるかといふに、此の神社の神事は深夜に行はれるのが通例となつて居るが、神事の執行中は潺湲と流れる水の音も耳に入らぬと云ふ所から、音無と云ふ名が生じて來たのであるといふ。

此の神事に關しての面白い話は、神事を行ふ際は無論燈火を消してしまふのであるが、さなきだに老樹に圍まれて、晝なほ暗い所に、燈火を滅するのであるから、殆んど咫尺を辨ぜぬ許りである。そこに幾十百人の村の者が集まつて、神酒を戴く時、甲乙丙丁と盃を次々に廻すに當り、其の合圖として隣席の男なり女なりの尻を抓る、抓られた者は無言で其の盃を受けるといふ習慣になつて居て、それが今日に至る迄持續されて居る。其の爲め勢ひ若い男女の情交を媒する事になり、淫風を助けて宜しくないといふ説も起つて居るが、全體尻摘みといふやうな風習は古い性慾崇拜の遺習であらうから、それが男女の情交を助けるといふのも強ち不思議はないので、一概に風紀の爲めに忌むにも當るまい。昔、源頼朝が伊豆に流浪して居るとき、此

の地に伊東祐親を頼つて来た。滞在中、祐親の息女八重姫と戀に落ち、其の結果一子を擧げるに至つたが、其の戀に落ちた所は、即ち此の祠内であるといふ傳説のある所から見ると、多分暗中の尻摘みが、その戀の橋渡しをしたものであらう。其の八重姫の靈は此の神社に祀られて居るなど、いうて居る。眞偽は分らぬが、此の廢頽せる神社にかゝるロマンスを傳へて居ることは、伊東切つての興味ある事實であつて、熱海の貫一茶屋などに比べると、遙かに高級に屬する傳説といふべきであらう。

曾て島村抱月が此の地に遊び、此等のロマンスを耳にして大に感興を催ほし、是非頼朝と八重姫の情事を脚本に書いて見たいといふ事がある。しかしそれは遂に書かずじまひに終つたが、却つて脚本を書くどころで無く、同じ様な事を躬行實踐した。即ち音無神社にあらざる文藝協會に於て、松井須磨子の尻を摘んで彼が如きロマンスを演じた。その御手本は此の幽邃なる祠内にあつたのである。偶々道遙翁と共に、策を此の神社に拖いて、此の事を語り合ひ、一笑且つ一嘆した。伊東で面白く感じたのは、たゞ此の所のみで、他は皆な語るに足らない。

一一〇 池永道雲の家

日本の篆刻家で古く有名であるのは、池永道雲と高芙蓉である。池永道雲は「一刀萬象」といふ印譜を出したので廣く知られてゐるが、其の人の素姓などに就ては自分も此の頃まで委しく知らなかつた。知人に池永家と縁類關係のあるものがあり、それに就て聞く所に據れば、池永の家は昔しから藥種屋で、今も日本橋筋で營業を持続してゐるさうだ。此本店には立派な蔵があつて、道雲の大切にした遺物は皆なそれに入れてあつたが、一昨々年の大震火に罹つて全部烏有に歸した。其の中には「一刀萬象」の原印もあつたが惜しいことに失せた。尙ほ他に惜しいものは一面の琵琶で、それには常信の繪があり、通村の和歌の銘があつて、道雲が最も愛玩した名器であつたがこれも亡びた。但だ幸に道雲が苦心して著した「篆海」の稿本と他の草稿類が行李に納めてあり、非常の場合特に持出すことになつてゐたので焼失の厄を免かれたといふ。此の池永家の控邸が大井村にあり、或る貴重ものは其處に置かれてあつたが、それ等は

皆災禍を免かれた。その無事なるを得た名器の中に若干の佛像がある、中にも小さな塗金の薬師如来が一軀最も大切な家寶となつてゐる。全體池永家は薬種を營業としてゐる處から、薬師如来の像を殊に尊び、子孫に財産分けをするときには必ず薬師の佛像一體を添へる家法となつてゐるとかで、佛像も多く藏してあるといふが、其の家寶としてゐる薬師如来には特別の來歴がある。これは家康の舊藏で、陣中に於ても始終離さなかつたほどのものであつたのを、井伊侯の戦功を賞するために割愛したものである。それが何故池永に歸したかといふに、池永はもと井伊侯の出入のもので、道雲が秘藏した端溪の硯が、侯のお目にとまり、是非にと所望され、餘儀なく此佛像と交換することになり、扱てこそ家寶として居るのだと聞いた。

趣味談叢

一 寺は趣味の淵叢

日本で趣味の淵叢と申せば、それは寺院であると云はねばならぬ。寺院は趣味の發源地でもあり亦趣味の蓄積所でもある。寺院には古今變遷もあるが大體に於て建築が廣大壯麗であり、寺領が概して廣く、庭園が大きくて數奇を凝らしてゐる、天下の名園と云はれる者は大抵寺に屬してゐる。別して京都は各宗本山の所在地であるから、名刹が澤山にある。度々火災があつたり寺が貧乏になつたりして寺領は追々狭くなつてゐるが、其の昔信仰の熱烈であつた當時を考へると寺院は非常な隆盛を極めたものである。

今日金閣寺、銀閣寺を見ると、地區が案外に狭いので、足利氏の豪華も貧弱であるかに感ずるが、古圖を見ると決して今日の如き手狭のものでなかつたことが知れる。大覺寺は屢々皇居

となつた寺院で南北兩朝の和議が此處で決した大史蹟であり、相當に廣い壯麗のものであるけれども、これも古圖に見くらべると今存してゐるのは昔の十分一に過ぎない。比叡山にしても昔は山の麓の周圍幾十町が寺領であつて、餘程規模の大なるものであつたのだ。されば今日古い名利を訪うて古を偲び昔を回顧するには、現在のものに三割も五割もかけて考へなければ往時を髣髴することが出来ないのである。寺領が斯く廣大であつたから随つて收穫も多く、寺ほど富饒のものは無いと云はれた時代もあつた。富饒であつたから僧侶は衣食の爲めに働くを要しない、そこで文學を講じ詩書其の他諸藝を窮めることが出来た。昔の僧侶は今日と違つて戒律を嚴重に守つたから、勝手に遊び狂ふことも少く、清暇を文學諸藝に費すより外に遣悶の道がなかつた、それ故に文權は全く寺院に歸し、戰國時代などには京都の五山は文學の淵藪であつた。

僧侶は學識もあり書もよくし、詩も巧に詠じ、畫もかけば彫刻もやり、謠曲や能や茶儀や割烹何から何まで頭腦の働くに任せて工夫を凝した。勿論建築術、作庭法、插花の技、書畫表装の法に至るまで皆寺院から起つてゐる。建築と云うても寺院の建築のみでなく、茶室の構造も

寺から始まつてゐる。香を聞く技や音樂なども亦寺から源を發してゐる。そしてすべてこれ等あらゆるものが皆後世の範となるほどに發達した。乃ち美術工藝文學其他趣味といふ趣味は皆寺院が源泉で、それが追々社會に流傳した譯で、單に茶儀だけに就て考へても、これに淵源した諸般の工夫が日常生活に如何に多方面に應用されてゐるか、其の感化の深く廣きに驚かされるほど後世まで行き涉つてゐる。此の事は更に詳説するつもりであるが兎に角趣味を研究せんとするものは、何んとしても寺院に足を運んで其の源流の探討に没頭せざるを得ない。

寺院は右云ふごとく趣味の發源地であるが、更らに一歩進んで考へると、寺は趣味の蓄積所である。第一名刹となると寺それ自身が名器である、その藏する佛像も亦名器である。寺の什器什具も多くは名器である。名僧の書き残した墨蹟や其の手藝品も亦名器である。或る時代には天子や皇族が寺に隠退され、別荘のやうにしてお住ひになつたこともあるので、その御遺物や宸翰の類も存してゐる、これも貴重のものであることは言ふまでもない。尙ほ又高僧が修業の爲古く支那に渡り或は印度に入り携へ來つたものが自然寺に存してゐる、古いものになると唐代のものもある、それは經典の類が多きを占めてゐるけれども珍奇な佛具や調度や書畫の類

も少くない、これも亦名器である。此等いろいろのものを寺が藏してゐることを思ふと寺院は實に一大寶庫である。

尙ほ寺の法として佛に物を獻する慣例がある、これは布施から淵源してゐるのだが、死者の冥福を祈るために、其の生前の愛藏品を寺に寄進して永久保管を託することが古くから行はれて、東大寺の正倉院には聖武帝の御物が數多く保存されてゐるなどは著明な事實である。昔し宗教熱の熾であつた頃は最も大切な物を特に選んで寺に寄進をした、今時のやうに貴重なるものは家に残して不要なるものばかりを寄進するのとは全く違つてゐた。今日では寺に役立たぬものは寄進しないやうになつたが、昔しは死者の身に付いたものは何でも寺に納めた、其の結果寺にふさはしからぬ例へば婦人の華麗の衣服などや化粧道具までも納めた。尙ほ又死者の冥福を祈るために經卷を手寫して納めたり、忌辰毎にいろいろの物を獻じたりした。此の經卷の筆者の内には高い階級に屬する人も少くなかつたから貴重なものがある、其の他のものでも後世になつて見ると希有の美術工藝の逸物も少くないのである。

又當時崇佛が盛んであつた結果、佛に獻するものに工藝家が極度の力を籠めて其の傑作を捧げた、これが爲めに工藝上の發明もあり、藝術も爲めに大なる進歩を見た位である、斯様な次第で寺には貴重なる寶が多集つたわけである。そして寺は公けから保護もあつて、戦争があつても多くの場合兵燹を免かれ、寺の所在地が民家を離れてゐる爲めに火災が割合に少なく、火災の頻發する日本の國土に於て千年以上の名器の少からず残つてゐるのは寺院に保存されてゐるからである。

昔は寺法が嚴重で寶器は資財帳に録され散佚を防いだものであるが、追々寺法が亂れて資財帳にあるものが四方に散じ、どの寺でも今は寶物は甚だ少なくなつてゐる。されば俗間の手に在つて天下一品と云はれるもの、それは器物にせよ書畫にせよ、其の原籍を調べて見ると多くは寺の舊物であることを發見する。

右の如く寺は趣味の發源地であり又趣味の寶庫である。そして寺は清淨を經とし幽玄を緯とし、深遠なる哲理が絡んで、それから趣味が孕まれたのであるから、すべてに高雅の趣致があることは大なる特徴と云ふべきであらう。

二 茶人の趣味教育

はしがき

日本の社會に長い間趣味の教育を施した者は茶人であるといふ事は世人の熟知する處で、あながち新しい話でない。足利以來長い年代間、茶儀が上下の社會に流行し、其の間、茶人に依つて種々工夫された事が追々世上に流布して、夫れが多方面に互る趣味の淵源をなした事に就ては何人も異議は無からう。今日眼前の事に就ていふと、各自の家には、皆なそれ〴〵庭が附いて居る、中以下の家も、一寸した空地があれば必ず庭がある、即ち木を植ゑ石を配する。かかる装置も目刷れては別段の意味を感じぬもの、實は日本の家屋に附帶した一つの趣味で、畢竟は茶道から起つた事である。

尺寸の餘地なき棟割長屋の貧戸に於てすら、庭の代りに盆栽幾鉢かを並べて居る、これなども矢張り淵源は茶だ、茶人から教へられて貧人尙ほ且つ風流を有する。敢て趣味の人でなくとも、其の家に幾つかの骨董を傳へ、到る處多少の書畫や道具を見るのも、矢張り同じ流れから來たのである。

今日率然考へると、一向意味ありとも思へぬ事柄で、其の淵源を探ると、間接直接に茶儀から來た趣味的の事が多い。私が之から言はんとするは、茶人が趣味上の大教育をした事に關してであるが、元來私は茶人でない、茶儀の形式に就いては全然素人である、勿論此處では宗匠を眞似て、猥雑さばきや茶釜の使ひ方や茶杓の持ち方などに付いて彼れ是れ言ふのではない、寧ろ茶に附帶して發達した種々の事につき之れを趣味上から語つて見ようと思ふのである、茶人の趣味教育がどんな廣がり、どんな深さに迄及んで居るかを觀察して見ようと云ふのである。

茶の趣味

全體、茶趣味といふことは、一言には盡せぬが簡單に言へば、幽玄閑寂などいふ言葉で幾分かを現はして居る様に思ふ、茶は佛教と關係が深いから佛教的の味も有つて居ることは言ふ

までもない、茶は澁い趣味、わびた趣味、さびのある趣味である、芭蕉の古池の句は即ちさびを現はした者であるが、茶の趣味も是れに似通うて居る、唐様に云へば枯淡の趣味とも云ふべき歟。例へば家は大厦高樓を欲しない、紅簾高く捲き、銀燭輝くと云ふ如きは茶人の趣味でない、茶人の趣味は之に反して四疊半趣味である、人工の美を欲せずして天然美を欲する、即ち雪を楽しみ、月を愛し、花を賞するといふのが、其の趣味である、随つて家も成るべく天然に折合ふ様に、そして成る丈け人工の少ない天然に近いのを欲する、器具調度、亦華麗を求めずして澁きを尊びわびたるを喜ぶ、はでやかに人目を奪ふ物よりも、隠れたる處に趣の在る奥床しさを愛する。

四周皆壁の矮屋、壁は黒ずんだ鼠色で室内は黯然として居る、眼に映する者は、瓶に挿んである一輪の白椿あるのみと云ふ如きが大體茶室内の光景である。此の味は如何にも高雅である。今日の美術家に言はするも斯く迄高雅な色の配合は無いといふ。チト變つた方から例を取る様だが衣裳美の標本とも云ふべき藝者の工夫を凝らした其の衣裳はどうかと云ふと、ジミな鼠色の衣裳に澁い帯を締めて、僅かに半襟とパチンを派手にして、色の配合の調節を取つて居

る、これが丁度茶室内の色に倣つたものである、西洋カブレの美術家でもこれより以上の高雅な衣裳美は無いと云ふ位だ、藝妓の如き華美を競ふ者でも觀じ來れば、其の極致に至ると茶人の趣味を學ぶの外はない。

天地自然を楽しむといふ上から、例へば、月影淡く差入るを眺め、或はササと雪の降る聲を聞き、或はトウ／＼と釜のたぎる音を聞くなど、皆な幽玄趣味、自然の趣味を味ふものであつて、茶室の構造も之れに適する様出來て居る。境は氣を移すといふが、斯る室に在りてこそ始めて靜寂を味ふ事も出来るのである。されば茶人の欲する處は喧囂にあらずして靜肅である、歌舞音楽にあらずして靜坐閑晤を欲する、かくして自然を味へようとするのである。

茶人趣味は詩的趣味である、趣味の極致である、斯うでもない、あゝでもないといふ極に於て落込むは此の趣味である。大厦高樓を構へた擧句、榮華に飽きて後志す所は多く此の幽寂趣味である。富豪が大邸宅の外、幽雅の境にわざと狭い別莊を造るのも趣味向上の極己つと此處に至るのである。勿論其人の地位により、種々趣向も異り、又時代の風潮により、華美と質素の差は有るにしても、茶の本領は大體右の如きものである。此の茶人的趣味は、初め支那から渡

つたにしても、追々變化を受け漸次日本化した事、宛かも佛教が日本に渡來して日本化したと同じく、遂には純日本趣味といへるものになつた。

茶趣味は其の幽玄高尚なるが爲め、俗には理解の出來兼ねるほどのものであるが、日本人は長い間無意識に其の教育を受けて居るから、幾許か腦力のある者には略々直覺的に分る。然るに西洋人は容易に之を理解し得ない、嘗て亡友岡倉氏が西洋に行き、日本美術の講演を開いた時、日本美術の大部分を支配する茶人趣味を説くに當り、いたく其用語に苦んだ。例へば缺けた茶碗や手づくねの香合や其の他いろいろのさび物の美を説明するに當り、窮した餘り、不全の美、即ち「ビューティー・オフ・インパーフェクト」といふ言葉を案出したといふことである。不完全美と云ふ語も成る程或一部分の意味を現はしては居るが、全部をあらはすの言葉でない、しかし私は今此處で、其の事を詮索研究するつもりではない、唯だ西洋人が我が茶趣味を會得し得ない一例に引いた迄である。

茶儀と禮法

茶趣味といふ事は、到底簡単な説明で言ひ盡せるものではないが、併し前に大體述べた處で先づ概念を作り得たとして置いて、以下語る種々の方面を綜合した上で、一層明白な解説も得られることと思ふ。依つて之よりは茶儀が禮法に及ぼせる影響を略説しよう。

茶儀の爲めに第一に教訓を受けたのは禮法である。茶人も末世に至つては宗匠といふ茶儀を賣る者が起り、末節に拘泥して、つまらぬ事を大層六かしげに言ふ。併し此の如きは形式に流れる弊害の致す所で、多く論ずるに足らぬ。禮法と云うても溯つて見れば、極めて簡單なものである、早い話が四疊半の様な狭い處に數人の客を延き茶を點てるに就ては自から順序がなくてはならぬ、勝手氣儘に委するなどの餘地がないから、勢ひ茶を點てる方式が生れて來る、例せば物の置き工合や、物の出し入れの順序が無くてはならぬ、これ等は皆な便利から割出された者である。後世に至つては徒らに形式のみ流れて茶入を拭くに「に」の字に拭かねばならぬ、袱紗さばきを覺える丈でも半歳を要するなど、面倒に云うて、流派により種々繁雜な方式を定めて居るが、實は其の初めは盡く便利から割出したもので、其の順序が追々と一つの方式となつたに過ぎぬ。客側から言つても茶の如き閑寂を味ふ場所に於て無作法は許されぬ、其の間自

ら相當の禮が無くては始末がつかぬ、茶を飲み廻すにしても順序次第がなければ混雜する、推讓謙遜随つて起らざるを得ぬ、詰りは狭い處で秩序を保つ必要から来る。

又茶儀も飲食の問題故自から清潔を要する、座敷に塵を忌むは勿論、隠れたる處にも蜘蛛の巣を厭ひ、廁の掃除杯最も意を用ゐる。又秩序を重んずる上より約束も大切になり、世間流では三十分一時間の遅參を平氣で居る處を茶會許りは今日ですら定刻に參會する。又茶は本來わびたる趣味のもの故、質素が本體で、茶に附帶する會席酒飯の時も贅を好まず、適度といふ事を眼目とする。

凡そ客に對して主人が滿幅の力を籠めて待遇する、これが抑々禮の本で、茶人ほど客を遇するに心を勞する者は無い、如何なる無頓着の人でも茶會となると、自身工夫するのが例となつて居る、數多の從僕を有する家に於ても茶席に於ては決して婢僕を使用せず、主人自から斡旋するのが方式で、最も大切な禮である。

全體日本の禮法もそれ〴〵流派があり、末世には種々な形式の弊もあれど、大體は茶人の工夫した便利が骨子となり、茶の本領から流れ出た處に禮法の根本が見える。狭い窮窟な場所では茶の如き濫い趣味を味へようとする處に會し、どんな粗忽者でも喧嘩口論も出来ぬ、又放歌亂舞も出来ぬ、其境に入つては己づと嚴肅なる態度で禮かなに合ふ人となる、故に禮法を世人に教へた點に就ては言ふ迄もなく之を茶人の賜としなくてはなるまい。

鑑賞と鑑識の養成

日本人は直覺力を以て物を判する能がある、彼の西洋人が科學的に物を判するとは反對に直覺力に富む。是には種々原因もあるが、併し其の一つは茶人の薰陶から來て居る。

先づ茶夫れ自身に就て見るも、茶は古來其の質の精選に於て極點に達した。一時は茶の權威は素晴らしいものとなり、禁裏や將軍家へ献上の茶となると、先づ茶壺の詮議から始まり、其の形や質も數寄を極めたものである。されば茶質の吟味も尋常ならざりしは勿論、之を味ふ能力も大變發達した。随つて茶と密接の關係ある水の詮議にも浮身を窺したもので、其鑑賞力の發達した事は非常である。例へば茶を味うて其の銘を判じ當てるは申す迄もなく、水の巧者になると水を取り來つた地名までも判じ當てる、何れの河水と云ふ丈に止まらず、某の川の上流

とか中流とか云ふ迄も判断して過たぬに至つた。

鑑賞は茶や水に止まらぬ、書畫、茶器、建築、作庭、其他あらゆる方面に及んだものである。書畫にしても茶器にしても、皆それ／＼茶人の思はくが籠つて居る、其の物を鑑別するのみならず、主人の思惑迄看破するにあらざれば、恥辱とまで心得た位であるから、鑑賞力は勢ひ増進せざるを得ぬ。斯くして茶人の直覺力は非常に進み、茶碗や香合を見て、其の作者を判ずるのみならず、茶杓の如き者を僅かにケヅリ方の工合、甚しきは惟だ一刀の入れ方により、是は某の作、是は誰れの作と判じて、百發百中の妙にまで達した。勿論茶器を包む袋などの裂れ地が何んの時代何んと云ふ名のものなど云ふことは容易に判じ、書畫杯になると宋元あたりのひねり者まで嚙み分け、進んでは書いてある詩歌の意まで深く味ふ如き鑑賞力も生じた、實に鑑賞は細微の點に及んだものだ。全體茶人はひねり屋でひねりの極は往々謎に似た様の事もする、それを判ずるはなかく、難事である、又茶人の人に誇る程の者は必ずひねり者で、餘程進んだ頭腦でなければ鑑賞の出來兼ねる者が多い、それをやす／＼と鑑別し玩賞するにあらざれば茶人の中間入りも出來ぬ處から、銘々が苦心したことは想像に餘りある。

茶人の如上の如き苦心が遺傳的に後世の鑑賞鑑識の力を養ふに與つて力あることは云ふまでもない、又茶人の鑑賞の結果が今日に至るまで範となつて居る者も少くない、骨董や書畫や、其の鑑定の源流はと尋ねれば、到底これを茶人に歸せざるを得ぬ。

配合の趣味

更らに進んで前述鑑賞の事を一層細かくいふと、其處に配合の趣味といふ事を生ずる。全體物には夫れ自身趣味ある物と然らざる物とある、趣味の無い方の物と雖も、他の物と取合せると配合の上に意味を生じて、こゝに始めて一種の趣味を覺える事がある。又物それ自身趣味ある者も、夫れのみでは感興が薄く、之を他と配合して深い趣味を生ずる例が多い。例へば祝の意味の掛幅は平素は面白くもないが、何か祝の茶會を設ける時掛けると十分の興がある。乃木大將の書や遺愛の品など平素は餘り興もないが、之を大將の忌日に用ゐると初めて興がある。清風を詠じた詩歌は寒中には興を感ぜぬが、三伏炎暑の時用ゐて特殊の興味を感ずる。

茶人はかゝる點に深く思を致したもので、必ず或る適切の場合を選び、それに應ずるかけ物

を用ゐる、こゝに於て其幅の詩歌が非常に其意味を發揮する、又其器物も引立つ、さもなくば格別の興なきものが、其時と場合にシツクリ當てはまる時、甚だしく感興を呼ぶ、つまり斯かる物は茶人のお蔭で活かされる場合が多いのである、茶人は物を活かす事を後世に教へた。

更らに他に配合に就て一二の例を挙げれば、器物に在つても一色の物よりは、種々の色を取合すと、各自の趣味を餘計に發揮する。古きもの新らしきものと雜駁に陳列するよりは、同時代の物を配する方が調和する。或は時節場合に因んで工夫するも、配合の妙といふ事に趣味を求めるのである。されば物を活かすも殺すも配合に在りといふを得べく、素焼の茶碗の隣へ燦爛たる蒔繪の器物を置くなどは野暮の沙汰で、互ひに殺し合ふ事になる。

茶人の人知れず苦心する所は全く物の配合である、富んだ茶人が茶器を二藏ふたくらや三藏みくらも有して居ると云ふも畢竟時により場合により種々配合の變化を必要とするからである。初心の茶人の茶席に入つて先づ不快の念を感じるのも配合宜しきを得ぬからである。成上りの人が無闇矢鱈に多く物を集め、きらびやかな物とさびた物をゴツチャに並べ、又は上代の物と勸工場物と取合せ置く如きは頓珍漢の沙汰で、趣味界の人に嘔吐を催さしめる。要するに美と云ふものに大

切なる條件は配合である、其の鹽梅を教へたものは茶人である。

應用の趣味

豪華を戒め、質素を尊ぶ茶の本領からして、自然巧みに物を應用して廢物を活かす工夫が起る、此の點は大分經濟的の工夫を養成した。

茶人の大手腕も畢竟は應用の如何に在りと言つて宜しい。さなくば廢物となり終る物を見立て、之れを取り上げて座敷の用とする、或る場合には臺所道具が出世して座敷用となることもある。或は汚ならしい安物を玩ぶのは困るといふ者もあるが、之を濫い方面から見ると、其の取上げた品物に何處か一かどの趣味があるからの事で、趣味を外れて單に經濟ばかり考へるのではない。尋常人が看過する物の中で一種の眼力で見えて趣味を覺える様な物がいくらかもある、應用により、茶人が廢らんとする者の美を發揮した例は多きに苦む程ある。

庭を作るに自然石を見立て、其れを庭の材料の中心とするが如きも勿論應用で、原野に埋没する物を見立て、取るのである。庭に大切な樹木と並んで石がある、今日作庭に一等金のか

かるは石である、是れも其初め茶人の應用趣味から起つた事で、日本獨特の趣味である。何れの國でも日本の如く、自然石に價を附して賣つて居る所は無い。西洋人などは自然石が日本で販賣され、且つ高價であるのに一驚を喫して居る。

茶人が如何に應用の才を揮つたかの一例として大名茶人小堀遠州が桂の御所を經營した事を挙げよう。遠州は此經營を爲すに當り、彼は曰く、どうか建築が出来上る迄は一切私に任せて貰ひたい、仕事の半途の處を見られては困ると。扱て出来上つた御所は日本に於ける茶式建築の標本となつた程の者である。つらく、此の御所の建築を拜見するに、用材は概して細く、立關杯には中間に柱が一本入れてある、これが遠州の應用の力を十分に發揮したものである、當時京都方面の普請の用材は皆な丹山から取つたものであるが、交通不便の當時材木を伐り出すは根元の太い方のみ探り、うら尖きや品質のわるい處は棄て、腐朽に委したものである、遠州は流石に烟眼早くも此に意を致し、木材に鉋をかけるなどの月並をせず、棄てられた木材を皮つきの儘使用し、こゝに彼れが縦横の才を弄し、思ふ存分の茶的意匠を凝らした、其の建物は百世茶的建築の軌範と呼ばれるに至つた。

此の御所に附屬する庭園も、遠州の意匠で出来たものである。何人にも氣のつくのは樹間に隠見する石燈籠の甚だ小なる事である、夜間燈火を點じなければ有無が知れぬ程に低いのである。石燈籠の用は夜中點燈する處にあるのだから遠州は故ら大きい物を排して夜間初めて存在を知らせる趣向を工夫し、如何にも形式に囚はれず、趣味と質素を併せ取り、平凡を脱した處に其の手腕が窺はれる。當時は聚樂の第や、桃山御殿などいふ豪華を極めた堂々たる建築があつたのに、之に對抗して反對に質朴儉素の建築に應用の手腕を振つたのは面白い。榮枯浮沈は不思議なもので、聚樂第も桃山御殿も減じて跡方もないのに、この桂の御所のみは今猶儼然として大茶人の手腕を示して居ると云ふも妙ではあるまいか。

反故趣味

斷簡零紙にして、廢物同様に扱はれる墨蹟が、唯だ何等かの趣味ある爲めに遺棄を免れ、今日澤山残つて居るのは全く茶人のお蔭である。立派に纏まつて格好寸尺幅に適する様な墨蹟は誰人も之を棄てる事をしないが、落款もなく、動もすれば塗抹の痕さへある尺牘の斷片の如き

ものが、珍重せられて意外に澤山保存され、今猶之れを珍重する風のあるのは茶人の教訓によるのである。全體茶人は濫い趣味を愛する所から、まともな物よりは此種のひねり物を愛する趣味がある、且つ茶室の床は小さいから斯様な尺短かのものが用に立つ、此等も原因に相違ないが、尙此外に大なる理由とすべきは、茶人趣味は頗る高い所から上代の古墨蹟でなければ満足せぬ、然るに斯様なものは多く斷簡零紙の外存して居らぬが故に、自然之れを探ることもなるのである、則ち茶人の珍重する反故様の者の中には頗る貴重なものがある。空海道風の墨蹟や、支那宋元代の墨蹟にして支那本國に於てすら片紙も存せざる程の珍らしい物が、日本には比較的多く傳はり時々支那人をして驚愕せしめる。若し茶人が古墨蹟の斷簡を珍重せず、纏まらぬ者はすべて捨てたとしたらば、日本の貴重墨蹟は幾んど皆な失せて居つたであらう。併し落款の闕けて居る様な墨蹟を賞翫することは、餘程の鑑賞力が無ければならぬ、又尺牘などを味ふことも、もと高い趣味に屬する、茶人が後世に斯る趣味を教へたのは眞に偉とすべきである。

斷簡零紙を取り立て、珍重し、或は破損汚穢の墨蹟を役立てる爲めに表装の術も大いに發達した。第一は表装裂の選擇である、内容に調和せしめるには略々同時代の裂を擇ばねばならぬ、此に於て古裂保存の必要が生じた。爲めに殆んど屑屋に葬らるべき尺にも足らぬ裂まで珍重され、僅か一寸で何百圓といふ價を見るに至つた。かくして支那日本の古代の裂は多く保存されて居ること、恰かも墨蹟の如くであつて、支那人が毎度自國に無い古代裂を日本に見て驚くのも此故である。

同時に表装術も進歩した。古い墨蹟には殆んど完璧のものはないから、之れを修理するため表具師も心血を濺いだ、其極、紙のつぎ合はせ蟲喰の補修も精を極め、肉眼を以つて辨じ得ぬ程の妙を見るに至つた、これも亦茶人より得たる工藝上の進歩と謂はざるを得ぬ。

物を大切にする風尚

物を大切にすることは美なる習慣である。已に禮法の部にいへる如く、茶人は丁寧に物を取扱ふ、取落して破損せぬ様にと注意する、茶の作法の多くは物を大切にする法である。名器は勿論其他とても之を保存するには必ず先づ袋に入れる、箱に納める、紐をかける、或は二重箱に

納める、實に鄭重を極めたものである。其結果は昔し足利義政の手澤を経たる漆器も、千利休の指痕の存する陶器も今猶ほ儼然として存して居る。破損し易い此等の者が、人間の家に五百年も六百年も存して居ると云ふのも、全く茶人の教へた保存の法の宜しきを得た故である。

茶人は常に堅固に物を保存するを以て満足せず、物を包む袋裂を選ぶにも、箱を作る材を擇ぶにも、趣味的に色々の工夫をした。袋裂を選ぶには恰かも掛物の表装裂を選ぶと同様の心を勞した。又袋の製作にも精を極めた結果、袋物師の名人が輩出し、又箱を作るにも木材にやかましい條件があつて、箱匠の名工として京都の利齋のごときも出た、名器を納めるには此人ならではとあつて、當時百里二百里の遠地から京都へ態々注文したものである。

又、物の破損を修理するの法も發達した。缺けたものを痕跡の分らぬ位に接ぎ合せたり、或は金粉で繕うたりする術は皆精を極めた。是も茶人が物を愛惜する所から起つた慣はしで、破損しても名器を飽くまで珍重する美風は全く茶人から來て居る。

西洋でも支那でも名器を大切にすることは日本と同様であるが、併し日本の如く保存の丁寧な處は無い、器物を箱や袋に入れる習慣は日本限りと云つてもよい。支那には一種の箱があるが、

西洋人は一向箱に頓着せぬ。日本の名器を納める箱や袋には相當の價があり、書付などのある箱は、器物に齊しいほどの價があるのに、西洋人は之れを顧みないから、日本の商人は箱を外して賣るを常として居る、西洋人は無雜作に器物を新聞紙に包んだりボール函に入れたりして家へ持歸ると函を棄て去るが常である、日本の風から見ると實に亂暴である、假令西洋では別に保存の法あるにしても、日本の習慣には遠く及ばない。而して此の美風は茶人の薰陶から生じた者である。

茶人は物を大切にする爲めに箱を作る、斯道の大家に銘を書かせ、傳來を記させる、而して其の傳來の爲めに器に値打を生ずる、往々箱書を離れては器物に價のないこともある、即ち箱書あるが故に貴い事になる。例へば千利休の手澤を経た器であるといふ書付があつて、そして其の裏書人の名が信用ある者だと其の器物もひどく貴くなる、畢竟裏書は鑑定書であるから此の如き事のあるのも當然である。併し茶人が傳來を貴ぶに就てはモソツト高尚な意味がある、即ちその器物の傳來に依り最初の持主將た其持主の生存した時代に迄溯り其人や其時代をも味へようとする處に重要な意味を發見する。茶人は四疊半の小室に坐しつゝ、想を千古に馳する者

である、茶人程高遠なる聯想の趣味を有する者は無い。前にも言つた如く茶室には鼠色の壁の外幾んど背景がない、飾もない。併し此の無いといふ事は、或る意味からは無限といふ事にもなる。愁ひ色々の者があれば、其れが爲めに限られて背景が小さくなる。何も無いと却つて広い。想像によつて如何なる背景も案じ得られる。故に茶人の室は小なるも背景は絶大である。

藤村庸軒といふ學者茶人は、嘗て白紙を幅に仕立て其の一隅に贊をした、これは白紙の贊と言つて名高いものである、つまり彼は空白の無限を味つたのである。又よくある畫だが、一羽の鷺を描き、全幅皆な空白になつて居る杯は、西洋人から見ると其趣味が解し兼ねるかも知れぬが、其の空白な處に絶大の背景がある。愁ひ葦や樹や山などを配すると、背景が限られてそれ丈狭くなること前と同じ道理である。即ち有らゆる想像の餘地を残す事が背景を無限ならしめる所以で、茶人は聯想に依り各自勝手な背景を作る。四疊半の狭い室に、萬古の時代をも網羅するは茶人の聯想によるのである。

例へば平相國清盛の墨蹟を壁にかけ源平の銘ある器物を用ゐて茶席を開くとすれば、時は大正であつても座客は勢ひ溯つて思は七八百年前に馳せ、自然源平時代の人となる事を得る、こ

こが茶人が聯想を利用する高尚の趣向であつて、興味のある所である。

趣味と云うても深淺の相違こそあれ實は聯想より生ずるものが多い、今日雅俗いろ／＼の事の趣味を分析して見ると、聯想に淵源する者は十の八九を占める、而して茶人から教へられた者が實に少くない。但し聯想を以て直ちに背景と呼ぶは、或は語弊あらんも知れず、今は説明の便宜上背景の二字を假用したに過ぎぬ、深い研究は他日に譲るとしよう。

奥義は趣味の極致

凡そ茶儀には必ず主人が客に對する心盡し即ち客を歡待する爲めの趣向工夫を要する、語を替へて言へば精神の籠つた意匠を要する。是が趣味の極致ともいふべきもので、茶の活きるも死ぬも巧も拙も實に茲に存する。利休に當意即妙の工夫ありしは天才の流露、遠州に縦横の意匠ありしも亦天才の致す所、其他意匠の深淺は人により種々の階段もあらんが、兎に角名人になると人に語ることの出來ぬ臨機の働きがある、後にはこれを奥義と云うて大切にし祕する事になり、さながら摩訶不思議があるかの如く思はせる様になつた。

併し、此の奥義なるものは實は何も六かしい事ではない、前に言つた様な工夫の極致が取りも直さず奥義なのである。かゝる極致は最も老巧な茶人の工夫から生じたので、なまなか之を語るも凡匠には理解出来ず、又筆にも現はせぬ至極の妙處である。極めて研究の度の進んだ者でなければ、言つて聞かせても會得の出来ぬ事が所謂奥義となる。茶書を見るに往々「此處口傳」とある、如何にも祕密の如くなれど書く事の出来ぬ微細の呼吸を言ふので、唯だ口にのみ言ひ得る事を云ふに過ぎぬ、決して不思議の術ではない、故に奥義と云ふも其境に達し得る人に取つては多くは平凡なものである。

何れにしても、大茶人が一生の心血を濺いで其極一つ二つ經驗上から得た得意の工夫や呼吸は必ずあるに相違ない、これが後世の範となるものもあり、其場合や處を選ばずそれを用ゐると却つて笑を博する資料となることもあり、全くその運用は其人に在りて存するは云ふまでもない。全體、茶ほど靜かなものは無い、主客共に靜肅を旨とするが、併し是は外形であつて、茶人ほど頭腦の活動を要する者は無い、此の活機が靜寂の間おのづから發露して人を動かすのである。

近年井伊大老の茶の心得と云ふ書が、世に顯はれた。其書に曰く「茶を立てるには、如何なる場合に於ても一生一代と心得よ」とある。又客に對する心意氣を説き、普通客去ると、直ちに客を送り出して客が門を出づるや否や直ちに席へ戻つて道具を匆卒に片付け、さて、疲れたと云はぬ許りに客に就ての思ひ遣りも何も無いが、如斯は客を迎へる本旨に反すと説き且つ曰く「茶を以て人を迎へんほどの心掛けある以上は、客を送り出して後、其人が門外一町も行つたと思ふ頃迄も尙ほ且つ送つた處に佇立して其人を偲び、何處ら迄行つたかと思ひやり、扱て然る後靜かに座に復し、今日ありしこと共を種々と思ひ返しても見、更らに自ら一服茶を立て、之を賞し、追想に耽り、徐ろに茶器を片付けよ」とある。

此の如きが實は茶の奥義とも云ふべき者である、茶を一生一代の者と心得よとは疎かにせぬ意味で、つまり同じ席は二度と無い、一生懸命にやれ、十分に心盡しをせよとの教、實に客を待つに大切な心得である、これぞ眞の茶の本領である。

自分も嘗て似た様な事を考へたことがある、例へば某の節に某の人を迎へ、某の意味で茶を點てるは絶對其時に限るのである、假令同じ器物を用ゐるにしても、其の心持は其時限りよく

はまつて、特に其味を持たせなくては活きた茶にならぬ、如何にも此の季節、此の悲み事、此の祝ひ事には斯くありてこそと思はせる様に工夫し、客が老人なれば老人相應、客が婦人なれば女流相應きつちりはまる様にすることが大切である、言ひ換へれば之を他の場合に繰り返しては何の妙もなく興もなき迄に工夫を凝らした茶が始めて活きた茶になる。井伊大老の言は甚だ簡單なれども、敷衍すれば私の言と揆を一にする。到底客に對する心盡しは、斯く深く厚くなくてはならぬ、即ち精神的でなくてはならぬ。

彼の奥義といふも、つまりは斯かる意味を寓するに外ならぬ、末世の宗匠輩は、つまらぬ形式を祕密扱ひにして活計の餌にするは嗤ふべきことである。茶人の祖は皆な井伊大老の如き心掛けであつた。客に對する心盡しは禮法の源泉で、後世多く禮が形式に流れ虚禮となつたが、茶人の教へた眞の禮はこれである。

工藝美術と茶人

前段記述した所は、主として茶人が精神方面に於て後世の範を残した事に關してである、以

下轉じて茶人が諸種の工藝方面に傳へた型即ち茶人の趣味教育が工藝方面に如何程の影響を及ぼしたかといふ事を少し述べよう。

茲に工藝方面といふは、作庭、建築、木工、陶工、漆工、鑄工、石工、割烹などの事である、勿論此等多方面の事をそれごとく詳しく研究するとなると大部の著述を要する大仕事であるが、此には唯だ概括して大要を述べるに過ぎない。

工藝美術の發達は、徳川期に於て極度に達したと言つて可い。其の原因は何かといふに、徳川時代の天下太平は世界の史上に例の無い位長く續いた事や、列藩諸侯が、諸種の工藝を保護した事などに依るは勿論だが、足利時代から起つた茶儀が益々此間に發達して、その爲めに美術工藝が非常の影響を受けた事は争はれない事實である。已に述べた如く茶人の頭脳はいかにも靈活で、凡ての事物に就いて平凡では満足が出来ず、必ず何等かの趣味を加味せざれば止まなかつた。此の精神こそ工藝美術に取つて最も大切なもので、其の進歩發達の端緒はこゝから開けたのである。

茶儀も最初は、唯だ茶を粉にして夫を茶釜で湯と化すれば足りるとした者であつた、處が後

に泡を立てる事夫れ自らが藝術となるに至つた、一事は萬事で、之に附隨して萬端の藝術が發達した事も推するに難からぬ。茶人は種々なる事に思を凝らし、考案を練つた事は、殆んど想像の及ばぬ微細な點に及んで居る。今日では大抵の趣味家も其道専門の技術家の考案に任せて自らは唯だ追従するに過ぎないが、當時の茶人はなか／＼それでは満足が成り兼ね、彼等は自ら考案者であると共に、其考案を實現するに自ら手を下した、彼等はみづから窯を築き、手づくねの茶碗や香合や其他の器物を作つた、而してそれが却つて工人の作よりも風韻ありとして珍重された。

料理などでも、茶人は決して料理人に一任せぬ、必ず自ら獻立をなし自ら材料を取捨し、自ら鍋に親しみ、其鹽梅を試み、然る上に之を客に勧めるが常例で、決して紙の上の考案文では足れりとせず、少くとも或る點迄自ら其事を實地に試みる技師であつた、即ち指導者と工人との間に近接の關係の存した事は茶の方面に於て最も深い、これが爲めに工藝美術も大に起り又進歩したのである。而して此の茶人の指導の及んだ區域は意外に廣い、今日いろ／＼の者に雋味ありと認められる物は多くは茶人の意匠に淵源して居る。

作庭に就て言ふも同様である、四疊半の小舎に附帶する庭であるから、其地坪の狭いものが多く、動もすると猫の額とも云ふべき程の狹隘なる地坪を利用し、巧みに意匠を凝らして如何にも奥床しく見せるなどは全く茶人の工夫である、矢張り自から庭師となつて一木一石自家の頭腦から割り出すのである。

勿論茶人の作庭術は境に従ひ意匠百變する、それが茶人の働きである、丁度畫家が山水を作ると同様である、僅か三坪五坪の狹區を市井の間に求め、深山の趣を其の間に託するかと見れば、一方には又廣濶なる地に於て極反對の趣向を立てる。例の茶に名高い洛の大徳寺を訪うて見ると、比叡山を望む地形であるから、遠州は叡山を取り入れて庭の物とした。叡山を庭の骨子としたから其の展望を遮る一木一石も置かぬ、周圍には特に低い／＼垣根を結び、飽迄叡山を取入れて居る。唯だ牆壁を蔽ふ爲めに聊か植込があるに過ぎぬ。一向金が掛つて居らぬが、いかにも自然で且つ高雅である。

京都の寺々には天下に知られた名園が百を以て數へる。これ等は皆な茶人に依つて作られ、若くは範を茶人に取つたもので、それ／＼の特徴がある。實に庭園の意匠に富んで居る事は世

界に誇るに足る。本邦の庭は云ふ迄もなく世界獨歩の形式で西洋にも無く又支那にもない。かかる一派の庭を作り出したのは茶人の腕であつて、全然獨創的である。後世庭を作るに當り、苟くも此の範圍を脱する事の出来ないといふ迄に研究が深く及んで居るのは眞に茶人の賜である。

更らに之を建築の上に見るも、僅か四疊半の小屋を造るに當り、如何に工夫した處で、其の作り方は單純なもの、様に思はれるが、其の實決して單純でない。現に茶室構造の標本とも云ふべき「起し圖」といふ者は有名な茶室の構造を紙細工にしたものであるが、其類は百も二百もある。構造法の多趣多様な眞に驚くべきである。如斯き多様な構造法は一概に奇を好んで工夫した者ではない。或は地形、或は風土の關係、或は隣接した家屋の模様若くは四圍の山河の風景などより考へ、窓の付け様、爐の切り方、棚のつけ工合、水屋のある所等に種々と趣向を凝らした結果、斯く多趣多様な構造法が起るのである。

後世大きい家を造るに當つて茶室を手本にして設計すると、必らず便利のよい雅趣のある家が出来ると云ふのも、茶人が心血を濺いだ研究の賜で、四疊半の茶室は日本家屋の縮圖と言う

てもよろしい。

若し夫れ茶室内部の造作に至つては柱一本壁土一掬と雖もそれ／＼の工夫があり、質素を旨とすると同時に、決して世間の月並に落ちる様なことは無い。匏の有る世の中に木を削るは固より容易であるが、此の削るといふ事は實は常套に屬する、茶人は天然を樂む上から好んで皮付きの木を用ゐる。普通には節を忌むが、茶人はわざと節を見立て、之を現はして一趣向とする。或は枝付きの儘の木材迄も取入れて一趣向とすることもある、或は竹や蔓などの類迄も取入れて何等か趣向ある用の方をする、皆な茶人の苦心の存する所である。

茶人は窓一つ切るにも工夫を凝らす。窓の形に種々あるは勿論、窓に取付ける格子の如きも或は蔓を用ゐる竹を用ゐる、組み方に就ても多様な工夫がある。又板一枚削るにもそれ／＼の意匠がある。たとへばメンを取るにも平凡を避けて、何等かの工夫を凝らして味を持たせる、即ち一目して是は誰れの好、某の式といふ様に特徴を現はして居る。爐を切るにも障子襖にも形式がさまざまとあつて、其の工夫は實に意匠の極を凝らして居る。後世光悦流とか遠州好みなどと云うて居るのは、皆な茶人の特徴を言つたもので、茶人は尤も優れたる大工であると云うて

も誣言でない。

木工と云ふ畑に屬する工藝品に就て見るも、建築同様茶人の工夫に出でた者が今でも大部分を占めて居る。茶人の意匠には一種云ふ可らざる味がある、茶人はわびたことを好むから、作品も粗野に陥り易い道理であるが、そこが茶人の働きで、わびながら粗野に陥らぬ、王侯貴人が玩んでも恥しからぬ趣味の者を作る。例へば机や箱などに兎もすると、一つの板に他の全く異なつた板をつぎ合はしてカスガヒで縫うた者などがある、又桐板の机の一端を桑などの板で補つた様なものもある。もとは茶人が質素を旨とする所から、眞に破損したものを修補した所から始まつた者であらうが、他の板とつぎ合はせると却つて一種の味を覺える所から、後世は態と色々の板をつぎ合はせてカスガヒに留める細工が起つた。實は不完全なものであるが、其不完全の處に一種の美が籠つて居る、本篇の劈頭に岡倉氏の不完全美と云ふを引いたが、此等がその適例である。美が不完全だと云ふでは無い、不完全それ自身が美であるので、贅澤を事とする王侯貴人も此の美を愛して、此の繕つた様な者を坐右に置いて珍とするに至つた。動もすれば粗野に陥るべき者を、意匠の働きて却つて一種の趣味となす處が即ち茶人の頭腦の働きである。

全體茶人程、目の利いた者は無い。例へば棚や机などを作るに、其形や格好も無論大切であるが、一番大切なのは、其の寸尺である。長短大小の過不及はや、もすると物の全部の意匠を崩すことがある、所謂形物と唱へる物は茶人の目の尺度でうまく定めたもので、机に就て言へば、低からず高からず大ならず小ならず、頃合と云ふ格好は茶人の目の尺度によくなってはならぬ、後世棚や机や其他の調度類の範を茶人に取るは全く偶然でない。遠州の定めた色々の器具は寸尺が後世に録せられて、之に則るといふのも無闇に遠州を崇拜する餘り、理窟なしに追従するのではなく、後人が如何に工夫しても、遠州の定めた寸法に及ばないからである、かゝる事は到底普通木工輩の及ばない所であると言ふ迄もない。茶人が工藝美術に大なる進歩を促したことは此の簡単な説明でも思ひ半ばに過ぐるであらう。

次に漆工に就ていふも殆んど工藝美術の極度に達した。例へば宗哲の作つた棗なつめの如きを見ると何人も氣のつくことであるが、其の蓋と身の合せ目などは實に驚くべき精巧を極めて居る、合せ目の縁などはさながら剃刀で切つたかと思はれる程えらくして、觸れ、ば指が切れるか

と思ふ程で、連も塗り物とは思はれぬ程で後の漆工輩は舌を捲いて其の技の精妙に驚嘆して居る。是に見ても茶人の指導が如何に漆細工の發達に與つて居るかが窺はれる。

漆工は自ら蒔繪にも涉る。元來茶人はきらびやかなことを忌む、金銀細工杯は茶人の餘り欲する所でない、或る名茶人が諸侯から銀の茶杓を贈られて其拜領品を表に現はす事を厭ひ、之を隠れた水屋に用ゐたと云ふ話もある位だ。併し茶人とても蒔繪を好まぬ譯では無い、大名茶人などは多く燦爛たる金蒔繪の器を用ゐて居る、又金銀の蒔繪も意匠に依つてはわびた者にもなる、そこが又茶人の働きで、蒔繪も實は茶人の指導により大なる發達をした。光悦や光琳の蒔繪などは云ふまでもなく茶人趣味のものである。全體茶人は普通の工匠の思ひも寄らぬ工夫をするものである、例へば朽ちたる木の器物を作つてその縁などに精巧な蒔繪を施したり、外部の素朴と極反對に内部に燦爛たる蒔繪を施したりして殆んど調和の出來さうも無い事を好く調和せしめ、コントラストの美を發揮せしめる。かゝる意外の取合せは後世皆範を茶人の工夫に取つたものである。さてこゝに結論に云ふべきことを少し云うて置くが、茶人は全體貴族的趣味と平民的趣味をよく調合し、よく折合はせたものと自分は平素思つて、これをも茶人の手

柄として居るが、此の蒔繪の今の一例などは適切に此の事を説明する者である。

又陶器に就ても茶人は工藝上大なる教訓を垂れた。彼等は第一其非常に進んだ鑑識と鑑賞眼を以つて珍奇なる者雅趣ある者を選り取り、即ち當時に在つて珍とせられた唐物は勿論、高麗、南蠻、呂宋など隔絶した處の物の時代あるを取り来りて、其の茶室の用に供した。其の結果、日本の陶磁器製作に則とるべき範を與へ、摸倣工藝が大いに起つた。而して終には殆んど支那、高麗の夫れと争ひ得る程の青磁も製作され、或は南蠻と見違ふ程の備前物も起つた。摸倣藝術が今猶ほ傳はつて居るのも此の感化で、いろ／＼の工夫の起つたのも全く茶人のおかげである。

茶人は敢へて摸倣工藝に力めたのみでない、彼等は純日本式の陶磁器を作るに大いに苦心した。殊に土物に創作が多くある。例へば樂といふ軟かな土器を、機械を藉らず、手で作る事が非常に發達した、今日西洋の斯道の研究家が日本に来て、特に賞玩するのも此方面のものである。僅かに指頭の働きへの使用の如何により、趣ある物を作り出すといふが如き、高尚な趣味は日本の外に餘り無い。茶人は勿論凡ての趣味家が之れを珍とするも無理はないと云ふ譯

は、斯種の手づくね物には名人の指痕が存して居るからである。此等の器物は七分職人、三分茶人の手で出来て居るとも云へる、故に名人の心意氣が歴々と存して居つて夫れが言ふに言はれぬ一種の風韻を帯びて居る。尙ほ樂の外、瀬戸の如きも古るき時代より驚く可き程の發達をしたことは言ふまでも無い。

以上は唯だ一端を云ふに過ぎぬが、會席の膳部杯に用ゐるあらゆる陶磁器も皆な茶人の指導によつて著しく發達した。陶磁器工藝が茶人に負ふ所の大なるは誰れしも知つて居ることであるから、委しく言ふにも及ぶまい。

尙ほ以上の外に鑄工や石工がある。鑄工は釜を作り風呂を作り、五徳、湯沸し、火箸を作る等、數へ來ればいろいろの者がある、而して最も茶人が思を凝らし特に重きを置いたのは言ふまでもなく釜である。釜師はふるく茶人の指導を受けたもので、足利時代乃至天正時代に於て早く名工輩出し、有名な釜は意外に古き時代の者である。當時は戰國時代で刀劍の鍛へをやかましく云うた頃だから、釜師も自然技を刀工と争うた氣味もある。徳川期に至つても名工が澤山に出て居る。今日は茶儀と共に漸く此技も廢つたが、鐵瓶、湯沸しの佳品は今も矢張り此の

流れを汲んだ工人の手に成つて居る。

石工も石燈籠を作り手洗鉢を作り石橋を架する等に茶人の指導を受けた。石燈籠は茶人の精神を籠めたものである、今日では石燈籠と云へば、九段の靖國神社や芝の御靈屋おたまやに林立するのを見て一定の形式あるかの如く無雜作に考へるものもあるが、茶人の工夫した石燈籠は茶室同様、意匠百端である、僅かに一基二基の石燈籠で庭の全局に互り風致を爲す者であるから、茶人が種々な工夫を凝らしたのも無理は無い。後世多少の面白味のある石燈籠は皆な茶人の流れを汲んだもので、石工の師範は茶人である。

料理の事は前にも幾許云うたが、あれは専ら茶人が工藝にみづから手を下した例として擧げただに過ぎぬ、こゝには茶人が割烹方面を如何に開拓したかを云はんとするのである。茶人は應用や配合で妙に物を活かすものであることは既に前に云うた通りで、料理に於ても茶人は非常な働きをして後世に教へて居る。従前餘り顧みられなかつた様な野菜類が取り合せの都合で、食膳に上り珍とせらるゝに至つた様なものがいくらか數へ切れぬ程ある。魚類の調理や菓子の製法や、茶人の工夫に成つたものも、亦た實に澤山にある。大抵氣の利いた料理は茶よ

り淵源して居る。徳川時代より近頃まで割烹の雄と推された、山谷の八百膳の「料理通」と云ふ書も、實は茶人の工夫の目録に過ぎない。

こゝに茶人の料理に就て附記を要する一事は、其作法の西洋料理に似て居ることである。例へば銘々菓子を出すごとき、特に厨くやに於て製した菓子を薦めるごとき、膳部を賑はす爲めに食ひ切れもせぬ者を出すを忌むが如き、濃味の後に淡味を出してよく調和を取ること、すべて體裁よりも味に重きを置くが如き、一品食し終れば食器を取り除き他と易へること、すべて宴席上主人自ら斡旋する如き、類似の點が甚だ多い。畢竟便利を主として工夫すれば東西偶々其の揆を一にするも不思議は無いが、後世饗應と云へば、食はせるよりも見せるものを多く並べ、杯盤器皿席上に狼藉たる亂雜の光景を演ずるなどは決して褒むべきで無い、茶人の作法はどこまでも行届いて居る、一例としてこゝに東西料理の偶々一致する事を一言するのである。

終 結

以上各方面に亘つて茶人が後世に教へた數々を述べたが、實は擧ぐべきことはまだ澤山にあ

る、殊に茶人が文藝上に及ぼした影響や教訓は甚だ大なるものであるが、此の篇の餘りに長くなるらんことを慮り、わざと省くことにした。

前來縷述したことを要するに、形而上將た形而下の事につき苟くも趣味と云ふものに茶人の教を受けぬものは、幾んど無いと云うてもよい位にまで、茶人の教育は普及して居る。今日では人々皆な氣付かずに居るが、其の居る所の家、其の遊ぶ所のもの、其の口にする食物、其の日常の事に、茶人の餘澤を受けて居るものは決して少くない。京都は茶の本場であるから、茶儀の衰へた今日でも、なほ其感化がありくと存して居る、例へば揚枝一本箸一本削つても、又菓子箱一つ作つても多少の趣味があるのも茶人の感化の存して居る一端である。元來茶は飲料の一たるに過ぎぬ、それに附帶した種々の事が幾百年の長日月鍛へに鍛へ、工夫に工夫を重ね、あらゆる趣味を支配するまでに至つたと云ふは寧ろ不思議とも云ふべきである。幸ひに此の感化力の偉大なる茶は、善美の趣味を教訓した、これが何よりの仕合せである。既に各種の茶に淵源する趣味は前に陳べ去つたが、今又重ねて概括して其特長とも見るべきものをここに擧げて云へば、茶人の意匠は雅趣がある、風韻がある、匠氣を脱して居る、銜氣が無い、

深みがある、奥行がある、落つきがある、作者の個性が面白く現はれて居る、工夫が自然で無理が無い、けばくしく見飽かさない、單調でなく複雑である、多くの者に寓意がある、又俳味がある、幾何學的でなく放漫的である。吾人はわざと説明のために重複語までこゝに羅列したが、幾んど趣味界の常用讚辭は茶人の意匠に充てはめ盡して尙ほ足らざるを感ずる位である。茶人の教へた趣味は如斯く幸にして他國に誇るに足るほどの特長を有し、それが日本特有の趣味源を爲すに至つた。

幽玄なる又枯淡なる茶から起つた趣味が、廣く國民に及んだのは不思議のやうであるが、既にしぼく陳べたごとく、茶は本來贅澤を排してわびを本體とする所から、王侯貴人にあらずと雖も、之れに親しむ事が出来た、是が其の普及した所以であらう。茶は當初世捨人より起り、貴族の金屋玉堂に玩ばれ且つ發達したとは云へ、實は極めて平民的の者である、其の田舎屋同然の建築を茶室とする如き、其の棄てられんとする器物を取立て、茶器となす如き、野趣ある庭園を楽しむ如き、皆な平民的氣風を帯びて居る、然り、茶人は寧ろ此の平民的趣味を貴族に鼓吹した者である、言ひ換へれば貴族に平民の味を紹介した者は茶人である、貴族をして名さ

へ知らぬ野草を其の床の間に置かしめるに至つたのも、朽ちたる木もて作りたる器物、缺けたる茶碗を手に觸れしめ、之れを珍重せしめるに至つたのも皆茶人である。茶人は貴族と平民の距離遠き間を疏通接続し一面貴族をして平民の質朴簡素の味を知らしめたと共に一面平民をして貴族の華麗優美の味を知らしめた、即ち中間に介在する茶人は質素と美麗を併せ取つて之れを巧みに一器を作るの意匠となし、以て媒介者の本分を盡したのである。茶人は如斯く上下に斡旋した結果、茶が國民的の性質を備へるに至つた。昔しの話しに乞食まで茶儀を行ひ、柳澤洪園は乞食に招かれて、其の茶席に赴いたとさへ云はれて居る。茶が國民的であるから、其の意匠も其の趣味も上下を通じ、金屋玉堂より貧戸に至るまでも普及したのは怪むに足らぬ。

吾人は、日本人のあらゆる趣味が茶から來たと云はぬ、併し趣味の大部分の根柢が茶にあることを疑はぬ。日本には昔しから特に校舎などを設け、具體的に趣味教育を施したことは無い、部分的に或る趣味上の教育を施したことがあつたかも知れんが、國民的に普及した茶の趣味教育ほど大なる感化を與へたものがあるを知らぬ、其の感化の深大なるは宗教にも比すべき程のものである。吾人は茶が既往に於て斯くばかり大なる趣味教育をなした故を以て、今後茶

儀の復興を鼓吹せんとする者では無い、それと同時に將來時勢に相應する趣味教育が無くてはならぬと信じて居る者である、而して如何なる趣味教育を今後に興すべきかは本篇の問題外であるから他日の研究に譲ることにする、こゝには唯だ吾人が趣味上如何に茶人に負ふ所あつたかを種々の方面から聊か觀察を試みたに過ぎない。

三 反故趣味

一

反故を見立て、遊ぶことは茶人から導かれた趣味の一つである。反故と云へば紙屑籠に葬らるべきものと、人は早合點をする、随つて反故趣味は貧乏趣味であると理解するが常である。併し反故とても一概に一顧の價なしとして棄つべきでない。否、私などは反故に多大の趣味のあることを主張するものである。元よりすべての反故に興味があるとは云はぬ、其の性質の如

何によるは勿論の事である。

偕て反故と云うてもナカノノ範圍が廣い。半紙に樂書をした斷篇でも、蟲の喰つた經文の二三寸の零紙でも、メチャクに塗抹した草稿でも皆反故と云へる。實は反故と反故でないものとの境界は簡單に定め兼ねる。先づ大體普通幅や額などに成り兼ねる形のもの、或は落款の具はつてゐないもの、概して裝飾用にならぬものを反故と呼んだら凡その見當が付くであらう。尤も反故で表装され床の間の裝飾になつてゐるものもある、例へば手鑑てふかんと唱へる帖の如きは名家の斷簡零墨を集めたもので、立派に表装されてゐる。勿論多くの取り除けはあるが、大體前に云ふごときものが先づ反故として取扱はれてゐる。假令表装などがしてあつても、たゞ保存の爲めにさうしてあるものは反故と見做し得るであらう。

立派に表装をして幅となし額となし帖となし卷となし得る書畫は裝飾となるから誰れでも賞翫するが、反故となると極めて不人氣のものである。今不人氣である譯を分析して見ると、其の原因が凡そ七個條あると思ふ。第一、反故として閑却される位なものであるから美麗でない、第二、完璧を闕いて居る場合が多く、一と口に云へば纏まつて居らぬ、第三、幅にも額に

も帖にも巻にも成し兼ねる格好のものが多く、即ち格好が宜しく無い、第四、反故の類は多く落款を闕いて居る、無論印章などが捺して無い、第五、裏に何か書き付けてあつたりして概して穢ない、第六、草稿などになるとあちらこちら塗抹してみぐるしい、第七、蟲食などがあつたり、或は保存を粗略にした結果汚れたり切れたりして居る。まだ考へたら此外にもいろ／＼あるかも知れぬが、兎に角反故の不人氣なのは此等の理由によるのだ。併しこゝに斷つて置くが前にも云ふ通り反故の範圍もなか／＼廣汎であるから、すべて反故は必らずしも以上列舉したごとき性質であるとは云へぬ、中には落款もあり紙も満足で塗抹もなく格好もよいもので猶且つ反故として取扱はれて居るものがいくらかもある、以上は特に際立つた資質を挙げたものと了解して貰ひたい。

さて反故は斯のごとく不人氣のもので概して裝飾となり兼ねるものであるから、或る例外の場合を除けば（例へば空海の書が一字何百圓、定家や行成の書が二三行で何百圓と云ふ如き例もある）大體反故は満足な書畫に較べると價は實に廉いものである。併し價の有無と趣味の有無とは全く根柢を異にして居る、趣味があつても價の廉いものもある、價がいくら貴くとも趣味

の無いものもある。これは全然區別して考へねばならぬ事で、實際に於ていつも價の問題が絡んで兎もすれば價が高いから趣味がある様に考へられたり、價が廉いから趣味も亦薄い様にはれたりする間違が世間に甚だ廣く行はれて居る。別して金力に富んでも鑑定力を闕いて居る藏幅家にこの病のあることは誰れも知る所であらう。私が反故趣味を主張するのは決して反故の價を非反故の價と同等たらしめんとし、若くはそれ以上たらしめんとするのでは無い、主眼とする所は反故の趣味を發揮せんとするに在つて、價の如何は關する所でない。

反故は大體斯様のものとして、さて反故にはどんな趣味があるぞと云ふに、平たくいへば鶏肋の様なものである。魚のアラ煮の様なものである。鳥や魚のよい處を引離した後は惜しむに足らない様なもの、さて骨にからんで居る幾許の肉がなか／＼棄て難い味を有して居る。但し此の部分を喰ふには小笠原式に上品に喰ふことが出来ぬ、時には體裁構はず、指で手傳つてカブリ付くにあらざれば味ひ兼ねるが、味はつて見ると實にうまいので、食道樂の通人などは寧ろ此骨付を愛するのである。反故の趣味と云ふは大體こんなものである。

二

全體書にしても、書にしても、天真流露の處に一種云ふべからざる味が存する。此の天真流露の味は筆者が身構へをしないで興到り筆隨ふ時でなければ生れぬ者である。人に見せる爲めに書くものになると、どうも人情として身構へをする。人の批評を兎や角案すると興到つて書くにしてもどうも天真流露の味が無くなるものである。そこになると反故と見做さるべきものの方が、天真流露の味をよく發揮して居る。根が人に見せる爲めに書くのでないから、勝手氣儘に思ふ存分に書く、全く赤裸々である。即ち草稿や下書の方がよく出来て、清書の方が却つてわるいと云ふ事が時々起るのも此の故である。支那などでは天子へ奉る奏議の本書に往々抹殺したり直しがあつたりする者が墨帖になつて居る、これなども清書の方よりは草稿の方がよい爲めに草稿の方を呈するのである。士大夫が衣冠束帯して廟堂に立つ其有様を見ると一言一句をも苟くもせざるは勿論、咳嗽をも苟くもせぬ、如何にも其の態度は崇高で一種の美觀には相違ないが、さて趣はどうかと云ふと寧ろ私第に平服の儘、氣儘に坐臥し勝手に談笑し、天真を

赤裸に發露する時の方が誰れが見ても趣味を感じる。書畫などもこれと同じく、立派に表装して床に掲げる書畫は堂々として居るには相違ないが、矢張袴つきでどうも趣味を缺くものが少なくない。反故部類は私宅で足を投げ出し顔を崩して笑ふと云ふ工合に、遠慮會釋なく祕密でも何んでも思ふ存分さらけ出して書くから少しも衒氣がない、全く其人の面目を躍如として現はすので、随つて趣味を深く感ずる事になる。

全體、反故と云ふものは、物それ自身反故たる運命をもつて居るものばかりではない、所有者がそれを重んじないから反故となるものがいくらかもある。たとへば懇意同士の間に往復する書簡、若くは詩歌の唱和、或は朋友に書き示した畫のごとき類は對手が友人であるから重くは思はぬ、随つて一見の後委棄することが多い。併し局外者から見ると珍重すべきものが其中に必ずいくらかもあるに相違ない。殊に同人間の往復唱和等には最も天真流露の味の存するものであるから、無論油斷のならぬ反故が多く此方面に存する。懇意同士の間に行はれる贈答には其人が其の位置見識の上から表向現はす事を欲せざるものをも現はす、これが同人間の情誼より生ずる一現象であつて、往々其人の祕密が暴露される、これが誠に趣味の深いものである。所

謂る秘密と云ふは他人の知らない事實例へば謹嚴の人と思ひの外女色を漁るとか、花柳病を患へて居るとか云ふ事實の秘密計りでなく、晝など書けぬ人と思ひの外晝を書くとか、漢詩の外出来ぬ人と思ひの外洒落れた俗歌迄出来るとか、其人の本領とせざる事迄も現はすものは、全く人間の交際上から来るので、局外者から見ると實に趣味ある珍物であるが、さて朋友同士は互に重んじないから、終に反故として葬られたる物がいくらかもある。

三

どうも人には隠れた事を見たがり、秘したるを知りたがり、稀れなる品を欲しがる癖がある。而して此の欲望はいろ／＼の場合に於て反故により充たされると云ふ譯は、這般の者の多くは反故中に存するからである。これも亦反故に興味ある所以である。例へば世に公然と現はれない性質の書類の一二を舉げて見ると、密書は其の性質上世に公にさるべき者でない事は言ふまでもない。女流の筆も概して世に公にされない。紫式部の如き才學高き女流の筆の跡が世に傳はつたならば、頗る趣味あるものであらうが殆んど一つも傳はつて無い様である。淀君の

書などですら、時代がそんなに隔たつて居らぬのに餘り多く残つて居らぬ。夫婦間の書牘を始めとして、すべて家書は一家の私に屬するものであるから、これも其家に埋没して終に反故となつて仕舞ふ運命を有するが、名門の家書には随分珍とすべきものがあるは云ふまでもない。例へば冷泉家の反故の中には定家の書があるに相違なく、乾山と光琳とは兄弟であるから、乾山家の屏風の下張などを検索したら、光琳の書一枚や二枚は出て来る筈である。情夫と情人との間の往復書のごときは秘密書類であるは論を要せぬが、これは趣味のあるものだ。而して其の人物が偉人で、もあると一層趣味が深い。前年高山彦九郎が情婦に與へた書簡が、その情婦の返書と共に一軸となつて居るのを見た事がある。高山の如き木強漢の艶書であるから愈々趣味を深く感ずる。凡て夭折の人の書は多く世に傳はらない。而して稀に存する物は反故として存するのであるが、此類に於ても稀觀のものだけに中々深く趣味を感ずる者がある。自分の所藏に就て一例を舉げれば、眞淵門下の三才媛の隨一と云はれた油谷倭文子の書簡や詠草の如きは其の家に僅に傳はつたもので、外を尋ねても無い。是も其の家の紙屑籠しづみかごに入れられんとするのをヤット助けて貰つたのであるが、實は倭文子の書の確なものとはこれより外に幾んど

無い位なものだ。何しても歌も書も大家を凌ぐ腕前はあるが僅に二十歳位で歿した婦人である。から其の筆の跡が外に流布する筈は無い譯だ。さてまた不遇の人の筆蹟も前同様で世に持囃されない爲めに、矢張反故たるの不幸を免れないが、此等の人の内には却つて超絶した人物が少くない。随つて其作品にも超凡の趣味があるが、これも反故より捜し出すより外に詮方がないのだ。扱又忌諱に觸れた人、刑辟に觸れた人、籍歿などに遭つた人の墨蹟も多く傳はらない譯は、假令所持してゐても繫累を恐れて故らに棄てるもあり、籍歿などになると家産と共に取上げられて仕舞ふのであるから、此類の人の墨蹟の傳はらないのも道理である。

さて刑辟に觸れた人と云うても必ずしも常事犯に限らぬ。別して徳川時代などでは國政を是非した爲めに刑を受け、或は豪奢を極めた廉で籍歿を受けた人なども少くないから、其人の墨蹟に趣味のあるのも無理はない。殊に筆者が數奇に罹つた事跡等は一層の趣味を添へるものである。一例を挙げると竹内式部の如き大人物の墨蹟は珍とすべきであるが、さて其物が極めて稀であると云ふのも畢竟繫累を恐れて當時棄てたからである。最後に尙一つ擧ぐべきものがある、其れは禁忌書である。是は前の者とは違つて物それ自身が公にする事の出来ない法度はつとのも

のである。例へば時の權貴を嘲つた詩文とか、諷刺畫などの類、或は風俗を壞亂する類の書畫の如きは皆此部類に屬するものであるが、此等は無論趣味の豊なものである。しかし概して反故と見做すべきもの、内に存して居る。

四

反故中に尤も多數を占めるものは草稿であらう。草稿と云うても書の草稿ばかりでない、畫稿をも包含する、粉本のごときも矢張り畫稿と同様に見てよからう。數が多いから無趣味のものも澤山あるに相違ないが、面白いものも澤山ある筈だ。全體筆者の眞面目は尤も草稿に就て見るべきであることは前に云つた通りであるが、こゝには今少しく委しく云うて見よう。例へば著述などに就いて云ふと、作者の苦心の跡や思想の経路は、尤も分明に此の草稿で見られるものである、それが實に面白くつて堪らぬ味があるものだ。山陽の日本外史の草稿などを見ると、兵數などがいろ／＼に書き改められて居る。最初三千騎など書いてあるのを五千騎と改めたり、晝の戦ひとして書いたのを夜戦と改めたり、文字もキツカリはまる字を得るまでには二

回も三回も改めた痕跡が存して居る。さて是を見ると山陽がさながら畫を描く様に、此の場合には夜戦でなければ趣きがない、幾千と云ふ數では工合が悪いと云ふ鹽梅に、種々苦心して意匠を凝らした事が眼前にほのめき、版本の日本外史を讀むよりも遙かに興味を感ずるのである。

又千蔭^{ちかげ}の反故の大巻物となつた一卷がある。是は千蔭の縁者に感心な心掛の者があつて、祖父のあらゆる反故の廢紙とならん事を恐れて一卷に表装したものであるが、此の中に名高い萬葉略解の序文の草稿が收めてある。版本の序を讀んで見ると苦もなく書いた者とも見えるが、此の中が實は苦心の餘に成つた者で、一行に三四ヶ所づゝ眞黒に直してある、幾んど全稿完膚なしと云ふ有様だ。之をよく／＼稽查すると、千蔭の思想の經路が明に知れて中々に興がある。

前年上野の美術協會の展覽會に参考品として小林某の藏品で光琳の扇面屏風が出て居つた、それに伴うて光琳の粉本一卷が陳列されてあつた。此の粉本は光琳が此の屏風を書かんとし、て宗達の畫を集めたもので、嘗つて抱一が藏した物と傳へて居る。丁度屏風にある圖が此の粉本中に載つて居つて彼是對照する事が出来てヒドク面白く感じたが、粉本から本圖になるまでに、光琳が種々工夫を凝らした經路を見るには此の粉本が非常なる助をなして居る。成る程本

圖の方が流石に工夫が届いて居る様に見受けたが、併し粉本には粉本相應の趣味があつて、本圖よりも又よい處がある様に覺えた。どうも極彩色などを施すと骨法が多く没却されて仕舞ふものであるが、粉本には骨があり／＼と見えて居るから本圖よりも却つて面白い處がある。

これに就て思ひ出したが、世間に存する尤も大なる粉本と云へば東福寺の國寶となつて居る兆殿司^{てうでんす}の五百羅漢の稿本であらう。これは表装を施して三十餘幅になつて立派な箱に入つて居るから、反故とは云ひ兼ねるが寺では今まで餘り重んぜず、人にも示さず、反故の様考へて居た様だから、反故論の材料に持出しても強ち差支はあるまい。前年寺に懇請して初めて全部を一覽したが實に敬服した。これは粉本とは云ひながら、塗抹など加へた所はなく、彩色こそなけれ實に立派なものである。これを見て金碧燦爛たる本圖を見るよりも、一段面白く感ずるのは、雄健なる筆意が赤裸々に見える點であつて、筆者の技倆がいかにもよくわかる點に存する。本圖は金碧燦爛で目が眩せられ、それに塗料に骨法や筆意が没却されて居るから、われ／＼ごとき凡眼では却つて妙處を辨じ兼ねるが、此粉本を見ると其の大手腕が知れ、羅漢の面目が一段生氣ある様に感じた。反故と云うて輕んずるの非は申すまでもないが、こんな例を擧げる

と誰でもうなづくであらうと思ふ。畫家の粉本計りでなく、工藝家の圖案委しく云へば佛師金工陶工蒔繪師などの下圖の類も、無論草稿と見るべきもので、其の味ふべき趣は畫家の稿本と別にかはりがなくらくどく云ふにも及ぶまい。併し工藝家は概ね筆を弄ばない者である、唯だ其の筆の跡を存するは此等下繪に止まる位なものであるから、其の稀れなる點に於て、名工の下繪は味ふべき趣もあり、珍とすべき價もあるものである。

五

反故趣味の範圍を更に擴大して云へば古帳面、古證文の如きものに至るまで、悉皆網羅することになる。此等は本來無趣味のものであるけれども、其の筆者により、又其の時代によりては、必ずしも無趣味でない。例へば證文に就て云へば尾形光琳が茶器を抵當に入れて金を借りた借用證文のごとき確かに趣味がある。時代がひどく古くなると、古文書として種々學術上の参考となる計りでなく、記事にをかしみがあるとか、聯想上趣があるとか色々な點に於て趣味の存在するものである。國寶となつて居る東寺の百合文書ひやくかみのごとき、多くは天平寶龜頭の筆

で、一紙と雖も忽かせに出来ぬものであるが、實は證文や手紙のごとき反故に過ぎないのである。此等は史料として有益であるばかりでない、書を味つて見ても、文章を味つて見ても、紙や印などを味つて見ても、それら趣味のあるものである、即ち時代から趣味の生ずることが往々ある。

斯く考へて見ると、古帝都の反故と云ふものは滅多に棄つべきでない。自分の知人で或る鑑識ある老人は京都の街頭を散策中、或る商家の前に小僧が一冊の舊寫本を解いて行李に貼つて居るのを見て、何心なく立止まつて其の反故を見ると、實に貴重な者であつたので、驚いて其の反故を買ひ受けて歸つたと云ふ話がある。東京のごとき比較的新しい都市には時代反故などが紙屑籠から出る筈はない。寧ろ東京人は太腹で氣風が粗豪であるから、兎もすると包金を紙屑籠にほうり込む事もないでは無いから、金は見つかることもあるが貴重な反故はない。京都人はどんなに間違つてでも、金を紙屑籠にほうり込むことは無いが、反故で具眼者が見ると惜むべきものを時々刻々紙屑籠にほうり込んで居ることは必らずあるであらうと思はれる、是は實に惜むべきである。

六

古來貴重なる反故や趣味ある反故が無意識の間にくら失せたか數知れぬほど夥しきものがあるであらう。唯だ幸ひとも云ふべきはいくばくの貴重なる反故や趣味ある反故は二つの理由から眞に僅かばかり保たれて居る。一は昔しは紙が餘り廉價に得られない結果、大いに重んぜられ、反故と雖も二度の務をさせぬ内は棄てなかつた、即ち一面に何か書いてある紙を利用して必らず裏に何か書いたものである。例を取つて云へば反故裏に具注曆を書くとか、何か寫しものをするとか、草稿に用るとか云ふ鹽梅に、二度の務をさせて居るために、表裏両面の内何れか一方に必要な書きものがある、そのために辛うじて存して居るものが少なくない。伊勢で發見した禰宜譜ねぎふの如き、よく見ると六朝の玉篇を千年も前に寫した反故裏を利用して譜が認められてあつたので、具眼者は裏打の紙を苦心してはがして、玉篇の斷簡を世に出した。禰宜譜は格別のものでないが此の玉篇の斷簡が千金の價を有する。これはホンの一例に過ぎぬが、一

行でも今では相當の價ある天平經てんぺいけいの裏、若くは經書を寫した卷子の裏などに何か書きつけたもので今日其の貴重なる書たることを發見する場合が少なくないが、皆な紙が稀れであつた當時、儉約のために偶然後世に残つたと云ふに外ならぬのである。

今一つの原因は、茶人がわびた趣味よりきらびやかな書畫を排して草庵の床に調和を取るため、反故中より風韻のあるものをさがし出して、珍重することが長らく行はれた。これが又反故の幾許かが現存して居る原因である。古い手紙などの割合に残つて居るのは全く茶人が助けたお蔭と云うてよろしい。往年大阪に遊んだ折、大阪朝日新聞社の上野氏から貴重なる反故をいろ／＼示された其内に、面白く感じたのは冷泉家から出た反故で、西行法師の詠草の裏に定家の筆で例の明月記めいげきが書いてある。西行は定家の門人であるから、斯様の反故は定家の家にあるはずで、今日となつては定家も西行も實に貴いものであるが、前にも言つた通り師弟の間であるから定家は一向に西行の書を貴はぬ處から、終に反故に葬られた、而してそれが何故今日迄存在したかと云ふと全く茶人に助けられたのである。

貴重なる反故、趣味ある反故が以上のごとき原因により幾許か今日まで傳はつて居るが、さ

て失せたものはどれほどあるか、實にはかり知れぬほどある。其の失せた中にも一種の趣味眼や歴史眼を以て見たならば一紙何千圓と云ふ程のものも澤山あつたことであらう。然るに伯樂に遇はぬ爲めに還魂紙すまがしの料となり終つたもの、夥しい事を考へると、實に惜しんでも餘りある事である。某鑛山博士が會つて慨歎したことがある、日本の銅鑛の古來海外に輸出された高は實に夥しいものであるが、今こそ分析の術も進み銅に含有する金は及ぶべく分解して、混合せぬ様にして居るけれども、分析などを知らなかつた時代に、銅と合せて輸出した純金の高を積算して見たならば、實に何千何億萬圓に上る位であらう、コンな巨額な純金を銅のお伴として銅の價で、メチャ／＼に海外に出したと思ふと残念で堪らぬと語つたが、自分は反故に就ても全く此鑛山博士と感と同じうする。換言すれば金と銅とを識別する知識が無かつた爲め、非常な損をしたと同様に、反故を鑑識する明が無かつた爲め、アタラ貴重のものを皆な亡ぼして仕舞つたことを思ふと同歎を禁じ得ない。

七

私の反故趣味を喋々するのは、好事の故で無い。前のごとき悔を再びせざらんことを警戒する爲めである。あたら實を無意識の間に失はざらんことを注意するのである。書畫趣味を世間一般が或る形式を標準としてそれを經界疆域として居る、それを擴大して更らに趣味界を恢弘せんと欲するのである。之に就き會心の事は西本願寺の前法主が支那の西域に大遠征を試みた一事である。これは西本願寺のごとき有力者で無ければ出来兼ねる企てである。支那の西域は軍隊の警衛が無ければ一寸入り兼ねる危険の處である。無論何萬圓と云ふ旅費を要する事であるが、此遠征の目的は何であつたかと云ふにいくつも目的があつたらうが反故あさりも確かに其の目的の一であつて、而して此點に於て成功した。自分は幸ひに其の齋らし歸つた夥多の反故を閱覽する事を得たが、實に貴重の者である。それは六朝より唐代に渉るかきもので書もあり畫もあり一片紙一斷絹と雖も、幾んど支那にも日本にも匹敵の無い程のものである。全體六朝時代の書などは支那本國に於ても金石の上のみ傳はつて居るものであるが、法主の發見したものは幾百通皆肉書であつて、斷簡もあるが完璧のものも少なくない。誰れも知つて居る通り、書と云へば王羲之を第一に推すが羲之の肉筆は日本に無いは勿論支那にも無い。然るに今

度法主の發見した内に羲之は無かつたが羲之と同時代の人、寧ろ其の先輩の書が出て來た（先輩と云ふは年齢の上から云ふのである）。それは李柏と云ふ武將の書で、晉書に明かに名前の出て居る人である。此人は羲之のごとき能書ではないが、晉代の肉書の面目が初めて世界の人に知れるのであつて、實に貴重の者と謂はざるを得ない。此他六朝時代の寫經が幾十本とあり、唐代の彩色を施した佛畫の類が實に夥しくある。扱て此等が學術界に、將た趣味界に、今後研究に連れてどれほどの利益と快娛を與へるか、實に測りがたきものあるに相違ないが、此等貴重のもは實は皆反故であるのだ。西本願寺の法主は幾萬の金を散じ危難を冒して反故狩を遣つたのである。幾萬圓の金を立派な表装をした一幅の書畫に投ずる人はあるが、反故と云へば振り向きもしない世の中に、斯る破天荒の遠征を試みたのは實に反故のために虹の如き氣焰を吐いた者として愉快に堪へぬ感じがする。

八

反故などを玩ぶ者を好事家として排斥する者もある、併し反故と雖も實用を爲すものがいくらもある。即ち修史の材料として集める文書、博物館や圖書館に於て研究資料として蒐める文書のごとき皆な實用の上から一紙何百圓を拂ふを意とせざる場合が少なくない。まさか誰れも之れを好事と云うて排斥する譯にもゆくまい。而してひとり趣味のために、反故イヂリをする者のみを排する謂はれがあらうか。趣味を感じると云ふもツマリ美を感じるのである。反故で美を感じるがわるいならば凡て美を感じることがわるい事になる。這麼道理はあるまい。吾輩を以つて言はしめれば、反故趣味はさびた趣味であり、じみ趣味であり、すんだ趣味である爲めに一寸其の趣味が感じにくい。それがために一概に反故などはと排斥し去つて之れを弄ぶものを貶めるのではあるまいかと思ふ。そもくきらびやかで眼を眩するほどの裝飾的書畫は凡眼でも其の美を感じる。併しジミなる、サビたる、全く裝飾を闕く反故になると、其趣味を感じるにはさう無雜作な譯にはゆかぬ。少なくとも相當の鑑識を要する。落款が無くとも筆者を判するの力が無くてはならぬ。年號は闕けてあつても、其時代を判するの明を要する。種々の聯想より趣味を喚起するは特に反故の場合に多くあることであるが、これが爲めには相當の知識を要する。又時代や人物を味ふことも前と同じく反故の場合に尤も多くあることであ

るが、之れが爲めにも又相當の知識を要する。而して種々の考證から隠れた趣味を發揮するに
は愈々十分の學力が無ければならぬ事であるから、反故趣味は貧乏趣味とは云ふが、實は非常
に高尚な趣味とも云へる。其多數に人氣なく頗る受けの悪いと云ふも、つまり力がなければ翫
味が出来ぬからである。元來前に屢々云うた天真流露の味は反故趣味の特色であるが、これを
味ふ事は自然を味ふと同じく、高尚の事であるから、反故趣味を俗衆に鼓吹するは實は無理な
注文である。故に私は誰れにも之を味へよとは云はぬ。唯だ多數の書畫趣味を有する人が此の
方面を全く閑却するを如何にも遺憾に思ひ、何故趣味の方面を一層擴大し、此の沃野を開拓せ
ざるかを不審とし、爰に反故の爲めに冤を雪ぎ、且つ其隠れた趣味を聊か發揮したに過ぎぬ。

四 書簡の六趣味

一

手紙の趣味も反故趣味の一部に過ぎない、私は特に此の趣味を語らんとするに方り、私しの
所謂趣味といふ言葉に就て聊か辯じて置く必要があるやうに思ふ。全體趣味といふ言葉は種
種な場合に廣く遣はれてゐるが、通俗にいふ趣味にも二様の意義がある。假りに一を主觀的、
他を客觀的とも名けて置かう。さて其の主觀的にいふ趣味とは、英語の所謂 *Taste* といふ
語で、例へばあの人は趣味の廣い人だとか、どういふ趣味の人だとか、或は趣味が高いとか低
いとかいふ場合に用ゐられる方で、人の嗜好とか賞翫力とかいふ程の意義を有してゐる。随つ
て趣味は人格なりなども言はれる事になる。他の客觀的にいふ趣味とは、寧ろ物の方に屬す
ること、例へば之れは趣味のあるものだとか、或ひは無趣味な（殺風景な没風流な）話だとか
いふ場合で、専ら物の趣、風情、味ひなどいふ程の意味に使はれてゐる。併し趣味といふ言
葉は、元來相對的關係を豫想してゐる詞で、詳しく言ふと主觀の賞翫力が客觀に相當の對境を
見出し得た場合に、初めて完全な意義を有すること、なるので、随つて或人は趣味になか／＼
廣いが、或物には全く趣味を有つてをらぬとか、又或物は或る人には非常に趣味深く見える
が、或人には全く無趣味のものとしか見えぬなどとも言へるのである。こんな工合に見て來る

と、趣味といふ言葉も迂濶には使へぬことになるが、自分のこゝに言はうとする趣味は、通俗の慣用上寧ろ其の客觀的なる後者に屬する方で、單に物の趣きとか、味ひとかいふ位の意義に用ゐるのである。

既に趣味を物の趣きとか、味ひとかいふ意味に解して差支へないとすれば、趣味は少なくとも美の一種である。併し趣味は必ずしもきらびやかなものでない。又必ずしも精巧なものでもない。又必ずしも價の貴いものでもない。勿論趣味は價の貴いものにも、精巧なものにも、きらびやかなものにもあるには相違ないが、極めて質素な、わびたるもの、中にもある。たとへば古びた陶器や、竹細工や、其の他茶人などの珍重するものは概してきらびやかな方ではないが、却つて其の中に趣味の深いものが多い。趣味にもいろいろの種類がある、茶人の賞翫する趣味は、謂はゞし、ぶい方の趣味である。併しシブイ趣味は唯だ一面の趣味に過ぎない。華美なる趣味にも亦いろいろあるが、その高雅な點に於いては、シブイ趣味と必ずしも甲乙のあるわけでない。兎に角趣味は、物の有する一種の美で、而も賞翫力で煎じ上げた最も深遠崇高の美というてよろしい。美を賞翫する人も、此の域にまで達しなれば、未だ眞に美を賞翫する人といふことは出来ない。

二

そこで手紙の趣味は、どういふ趣味かといふと、物から言へば反故趣味である。極めてジミな趣味である。實は貧乏人に適する趣味であるが、妙なもので、貧乏人に適する趣味は、貧乏人却つて味ひ得ない。いろいろの趣味を味ひ盡し、かうでもないあ、でも無いと云ふ處から漸く反故に迄手が届くので、其性質はワビた趣味である。随つて手紙が茶人に専ら歓迎され、其斷簡零紙さへも幅にして、茶室に掲げられるといふやうな譯で、随つて古人の手紙が茶人に依つて今日まで保存されてゐる者も少なくない。これは丁度茶人が廢物同様の陶器を、茶碗や香合や水さしなどに利用してゐるのと同じ趣味から珍重するのであつて、他の器物杯との調和の上から見ても、古人の手紙が茶人に歓迎されるのは決して謂れない事ではない。兎に角手紙は茶人に歡ばれる程のものであるから、ワビた趣味である。ジミな趣味に屬するものである。元來手紙は短きは幾寸、長きも幾尺といふに過ぎないが、簡中に、無量の情が含み、贈答の

人を赤裸々にあらはし、恰も其人の聲を聞く如く思はしめるのみならず、これならでは知る由もなき秘密を知り、これならでは見る由もなき故人の筆蹟を見ることの出来るものであるから、その如何に興味多きかは改めて言ふまでもない。されど手紙も時代の古いのになると、文言があまりに簡潔で、随つて趣味もさまで深くない。古代は何につけても質素簡朴を貴び、手紙を人に持たせてやる場合など、書外は口上に譲るといふ習慣もあり、旁々趣味の深い手紙も實際少なかつたやうであるが、徳川氏以後追々時代の下るに従ひ簡素の風も破れ、次第に手紙に興味も加はり、終には山陽の手紙のごとく漢文などを交へたものも出来、或は俳文の如き一體も起り、或は畫などを挿入するやうにもなつて、愈々趣味を加へて來た。故に手紙の趣味は、比較的近世人の手に成つたものに深いものがあるというてよろしい。併し古い手紙にも趣味は絶無とは言へない、その簡潔素朴の處に、亦一種の趣味の存するものである。

三

凡そ人の賞翫に値ひすべき趣味あるもの、中で、手紙ほど得易い材料は少ない。古今に涉

り、あらゆる社會に涉つて、到る處その材料は満ちてゐる。どんな筆不精の人でも、又どんな地位の人でも、或る場合には、自分で手紙を書かねばならぬ。(大隈老侯のごとき取除けもあれど)であるから、若し求めようと思へすれば、今人の手紙は容易に得られる。尤も多くの手紙は一大抵の場合に――一覽後は反故籠に投ぜられるものであるから、これが爲めに減び易く、随つて得易からぬ道理であるが、實は其の紙屑籠から幾らも得られるのである。既に紙屑籠の中のものであるから、其の趣味を解せざる人に取つては、殆んど無代價同様の品で、之れを賞翫する方の側から云つても、これ程廉價の趣味はない。又之れほど害の伴はぬ、然も實用に縁の近い趣味はない。一體どんな道樂でも、必ず多少の弊害が伴ふ。手紙道樂もあまりに凝れば、多額の金を要することになるが、それにしても高が反故道樂で、大抵知れたものである。まして手紙は日用の樞要機關であるから、いろいろの手紙を集めて翫ぶうちには自分が手紙を書く上に参考となることが幾らもあつて、自然自分も手紙達者になるといふ裨益がある。又集め得た手紙に依つて考證的に發明することなども決して少なくない。

ひと口に手紙趣味と言へば、頗る漠然としてゐるが、仔細に考へて見ると、其の味ふ可き方

面は、なか／＼多様である。第一文章として味はれる。單に書としても味はれる。次に事實として味はれる。また之れが贈答の人物についても味ふことが出来る。その他骨董品としても、若しくは簡中に挿入してある詩歌俳諧繪畫などについても、將た又用箋封筒の類についても、それ／＼趣味の存するもので、此等を味へば味ふほど、益々興味が湧いて来る。今左に聊か類を分ち、それ／＼について、趣味の一斑を擧げて見よう、但し此の類別にはまだ當て筈である適切な字を得ないものもある。

一、文章の趣味 二、書の趣味 三、事實の趣味

四、人物の趣味 五、骨董趣味 六、附屬趣味

まづこんなもので、外にもまだ別に一類をなす程のものがあるかも知れぬが、何れどの類かに含められるであらうと思ふ。

四

手紙趣味は、第一その文章について味ふ可きもので、即ち手紙の文章の趣味は、手紙趣味の

本領と云うてもよい。例へば芭蕉が妙風に宛てた手紙の如き、

妙 風 宛

ば せ を

紅のやうなる桑のみ一籠、雪のやうなるしほ一升ばかり御こし被下候。かたじけなく存候。以上。

紅と雪との二字の働きて文章がどれほど引立つてゐるかわからぬ。手紙の文章が殊に興味深く、且つ廣いといふわけは、手紙はもと／＼情の傳令使ともいふ可きものであるから、普通の文章よりは人を動かす情感が多く籠つてゐる。又其性質上から廣げて他人に見せる者でないから、言はんと欲する所は臆面もなく言つてあつて飾り氣がない。それに俗語が多く用ゐられてゐるので一層味ひを増す。殊に諧謔を弄した文などになると、俗語は實に文中の花である。手紙は人の談話の代用で、其人の聲をさながらに聞くが如き者であるから、文章がすべて生きてゐる。彫琢を加へた普通の文章は之れに比べると全く死物である。次の消息の如きは所謂活きた文章の上乗の標本である。

九 右 衛 門 宛

ば せ を

夕飯にはあづきめしと承り、たのしみに致居候所へ、元山よりそばと申し候間、あづきは明日く。早々。

それに手紙はあらゆる方面の事を書くものであるから趣味の範圍が極めて廣い。此點に於ては凡ての文章に冠絶して居ると云うてもよろしい。若し手紙といふものがなかつたならば、漢學者の作は漢文の外、詩人の作は詩篇の外、工藝家などの作は器物の外、残つてゐるものは無かつたであらう。然るに手紙のみは如何なる人といへども書く可き必要がある所から、漢學者の書いた俗文も詩人の日用文も工藝家の筆の跡も畫家の消息も存してゐるわけで、あらゆる社會の文章は、手紙に於て悉く見ることが出来る。就中俳諧師などは、平素一種の思想を十七字の中に寓する手腕を鍛へてゐるので、其の手紙も非凡のものが少なくない。左に示す一茶の手紙の如き優に文章の妙を以て稱するに足ると思ふ。

いづぞやは夜をこめて鶏のそらねをはかりて御見舞、御深志ありがたくと一口にいふもあまりなぐり口上ながら、古井もとの心をする人ぞ汲むと心に拜み申候。其上何よりの御みやけ是亦忘れがたく、忝く奉存候。はたおかへりの頃は、牟禮の前坂通りは、のしこし山のあたりまで放泥ならんと奉察候。されどあんころのさたまなく、御里入りなされ候哉、奉賀候。私も年内に御禮がてら參上など、口にて云へど、甚だよわり候と見えて足だめしに古間まで參り候に坂口にて二度休み、ほくく漸く歸庵仕候。したが七種頃はよほどよろしからんと奉存候。それ迄御安清御累年可被遊、御禮申上候迄、かしく。

十二月八日

一

茶

春甫様 掬斗様

素鏡様 雲士様

又蕪村が大雅堂から松茸を買つた時に、取敢へず遣はしたといふ禮狀も頗る趣味がある。

二白、應舉様にもよろしく、且御内政玉瀾様よりたにざく御こしに候へ共、今日は右の仕合、重而した、め可申、よろしく御傳言可被下候。ちとよしだ山へ御同伴申度候へ共、何分俗用にせがまれ、ほとくひまのないことに候。

花墨有がたく拜讀仕候。しかれば長さ〇さ共に一尺五六寸あまりの珍しき大の松茸一もと御惠投被下、ありがたし。是は何れよりの御到來候や、何國の産物に候や、古來未曾有のもの

に候。愚子案ずるに、之は必ず丹陽弓削村の邊なる山より生出たるものと存候。恐多くも
□□もし世に在しまさば可奉入御尊覽ものと社中一統大わらひの事に候。時に只今は不計
急書最中の處故にくはしき御返事もなりがたし。何れ明日は月溪又は月居の二子の中の舌頭
に萬々可申上候間、左様御ぼしめし被下かし。合せの龜紙さしいそぎ大亂筆御高免被下か
し。先は御返事迄、如此。

中秋二十日

蕪 村

松茸や喰ふにもをし、やるもをし

など心にうかみしまゝの即吟御一笑

急書最中匆卒の筆ながら、大松茸の惠贈を受けて、懇親の間柄だけに當意即妙の諧謔。かゝる
場合に之れ以上の名文は容易く得られぬと思ふ。

五

手紙に味ふ可きは、文章に次いで書書の趣味であらう。これも文章と同じくあまり思ひ構へ

すすら／＼と匆卒の間にやつてのけた處に却つて味ひがある。別して本字假名錯綜してあやや
なす處に多く味ひがある。勿論能文の人必ずしも能書でなく、能書の人必ずしも能文ではな
いが、書は拙でも見識のある大家の書は自から一種の味ひがある。文章は取立て、言ふ程の妙
がなくとも、書の見事なのは單に書として味ふ事が出来る。白石や山陽などの手紙になると、
書も文も共に双美で何とも云へぬ味ひがある。文章家の文章は其の名文なるが故に自から後世
に傳はり、書家の書も亦其の能書なるが故に自から世に遺る。世には自から書を能くしながら
「吾は書家に非ず」など、稱して書を幅や額の類には決して書かぬ人もあるが、唯だ手紙だけ
は日用上止むを得ぬ所から書くので、兎もすると其れが其人の墨跡の後世に存してゐる唯一の
珍品であるといふ場合もある。畢竟するに廣く墨跡を蒐めて味はうとするには、手紙に依るの
外全く道がない。

手紙が與へる事實の趣味に至ては前二者に比して更に幾倍か深きを感じる。もと／＼手紙は
個人と個人との間に往復して互に情思を通はず機關だから其中には送る人も受取る人も赤裸々
に暴露されてゐる場合が多い。即ち飾立てがないから事實が有の儘に出てゐる。かの世間に傳

はる程の面白い事實、若くは重要な事實は史傳の上に立派に飾つた文章に書立てられて現はれるが、假令それが如何なる名文で書いてあつても其の關係者が自から筆を取つて書いた手紙程味ひがない。第一手紙には事實の誤謬がない。かの其角が文鱗に與へて大高子葉（源吾）等の吉良邸打入りの事を報じた手紙などは、赤穂義士當夜の状況を自分が目撃した通りに活寫してあるから誰れが讀んでも義士活動の聲が耳に聞える様に感ぜられる。それから大石良雄が細井廣澤に與へて、所謂復讐仕末を報じた手紙の如きも此意味に於て極めて趣味が深い。中には人に知られては困るやうな種類の祕密が手紙によつて發見されることもあるが、人の性は妙に他の祕密を探りたがるもので、之を探り當てると非常に快感を覺える。例へば武田信玄が其の寵童春田某に義兄弟の約束をした手紙の如きは今は堀り出されて史料となつてゐるが、これは甲州豪傑の祕密で、誰れが讀んでも一種の趣味を感じる事實である。

手紙の趣味は與へる人與へられる人の人物の上にも亦少からず關係がある。兩方の人物が面白いとか或は高名の人とかいふ場合に最も趣味がある。又單に與へる人とか與へられる人とかの一方が立派な人物だといふだけではさまで趣味深くはない。例へば名家が書物屋や骨董屋な

どに遣つた手紙がそれである。尤も一方が名のない人であつても、それが女流などである場合、例へば名士が情婦や校書などに送つた手紙とか、道徳堅固の高僧が思ひもよらぬ隠し妻杯に與へた手紙の如きは、一段と趣味深く感ぜられる。併し所謂人物趣味は所詮名流が名流に與へた手紙に越すものはない。大人物と大人物の間に交換された手紙を見ると必ず非凡のことがあつて、兩方の性格が十分暴露されてあつて非常に面白く感ぜられる。加之斯る名流の手紙の中には屢々他の名流が引合に出されてゐるが、それが又少からず趣味を添へる。前に掲げた蕪村が大雅に送つた手紙の如きは、兩人の間に遣り取りされたといふ丈けでも十分趣味があるのに、その上大雅の妻の玉瀾の事もあり、圓山應舉や松村月溪、江森月居杯も引合に出されてゐるから一層の趣味を添へる。

六

又名家の間に往復された手紙の中には、やゝもすると匆卒の際に返事を別の紙に書く暇がなく、直ちに先方から來た手紙の餘白へ朱筆などで返事を書き、先方の名に様を付け、自分の名

に附けてある様を消して、それを送り返したやうなものもある。こんな手紙には一幅の内に名流二人の筆跡を併せ見るを得て一段の趣味を増すのである。

履端の御慶千里同風奉恭賀候、先生益御機嫌能被遊御重齡、抃喜

御同慶に候

の至奉存候、右新禧御祝辭且御動止相同度、謹修短簡候、御序之節宜

御尋忝、隨分無別條候

被仰上可被下奉願候、恐惶謹言

二 十七

正月八日

上 市川三亥様

柴彦助様

御門生中様

彦花押

又云、去秋面遊後時々相伺申可候處遊歴中無定處、其故御無沙汰仕候

御入念の儀忝く存候

此節京師に罷在候、延引の段宜敷御取成可被下候

御歸府相待候

右は市川米庵と柴栗山との間に往復された手紙で、行外餘白枠内の文字が栗山の書いた朱筆の返書である。此等の手紙になると、書の趣味の條下にも適用して言ふことが出来る。

七

文章敢へて妙といふにあらず、事實敢へて奇といふにもあらず、書敢へて佳といふにもあらず、然も或る好事家の間に珍重されるものがある。此等の人の賞翫の眼目は、その稀觀の點に在る、或は時代が古いといふ點にある、或は著名の人に認められたといふ點にある。かくの如き賞翫は寧ろ骨董趣味の賞翫に屬する。但し前に述べた數項の趣味も自から此の骨董趣味と

相關涉してゐることは勿論であるが、たゞ骨董趣味に於ては何等當面の趣味なきものをも、如上の理由に依つて之れを賞翫する、例へば雪舟や利休などの手紙の如き僅か二三行認めてあつて、それも文章や書の上にさまで趣味があるといふのでもないものに、非常の價值をつけて珍重するのは全く骨董趣味と言はねばならぬ。勿論雪舟の手紙などは稀觀の點から高い相場のつくのも無理はないが、一體骨董相場といひものは趣味の上から割出した相場ではない、偶々其人の作物が世に持て囃されて、然も品が少ないといふので價が高くなるのである、随つて手紙趣味からいふと極めて價の貴いものでも骨董の方では必ずしも貴くなく、骨董趣味から高價に取扱はれてゐるものでも手紙の趣味から見ると一向につまらないものが少なくない。

八

又多く名家の書翰を蒐集して賞翫することも、骨董趣味の領域に屬すべきものと見てよからう。勿論手紙は一通々にそれ／＼趣味はあるが多く集めると愈々深く其の趣味を感じるものである、殊に之れを時代別に、若くは専門別に、即ち學者は學者、詩人は詩人、畫家は畫家、

或は學者杯の中でも漢學者は漢學者、國學者は國學者といふ風に大種別を立て、さて其大種別の學者の中を更に流派に依つて分ち、若くは父子兄弟姉妹を揃へ、若くは師弟の關係ある者などは師の次へ門人を置くといふ工合にして見ると、用語や思想の上に自然と脈の通じ得るのみならず、書體の上にも同様の脈が通じて居つて、極めて面白い趣味を感じる。山陽一家の書翰を集めて一巻にして見ると、人は色々異なつても頼家の脈といふものが一貫して居て、それが種々なる點に於て看取し得られる。又仁齋一家の手紙を一巻にして見ると、例の五人の子息の所謂五藏の面目は各々變つて居ながら矢張り同じ脈の一貫して居る所が見え、そして首尾藏二人が他の兄弟を抜いて雋絶してゐることも看取せられる。かの馬琴と親類附合をしたといふ「北越雪譜」の著者鈴木牧之の手紙なども、唯縁もない所に置いたのみでは一向趣味もないが、それを馬琴の次へ配すると、牧之が生きて來るといふやうな譯で、雜駁に配列した丈では面白味がない。

九

附屬趣味の部類では、手紙の附屬品、例へば用箋封筒なども包含するのであるが、主として手紙の本文の情景を補足するために添加したものを指していふのである。即ち畫心のあるものが、目撃した山水の風景を手紙に寫し込むとか、或は人から物をもらつた禮狀にその品物を寫生して挿むとか、或は自分の見て面白いと思ふ器物などを形で示すとか、或は紅葉狩に出た折などに家づとの紅葉の一片を手紙に貼りつけて送るとか、或は新刻の印、新獲の印などを餘白に捺して示すとか、近作の詩篇俳句などを文句の中に點綴するとかは皆な此部類に屬するもので、之れが又手紙に趣味を添へること夥しい。人より馳走になつた翌日宿醉で起きかねる狀景を繪にして返禮旁々送る書狀杯は、只ひたすら禮を述べて遣るよりも遙かに趣味がある。封筒の如きも今は無趣味の品のみ多いが昔は色々意匠を凝らしたのがあつて、之がために本文の趣味を添へたものである。サツと昔には手紙を人に遣はす場合に柳や櫻の枝や其他季節々々の風情ある木の枝などに結びつけて持たせてやるといふことが流行つた、其頃は紙にも麴かまゆの色目といふことがあつて、自然木の枝も其紙の色と調和を保つ様にそれ々々選擇の法もあつた、此等も附屬趣味の一といふ可きである。それから今日行はれてゐる繪葉書なども矢張り此の部類

に入るべきものであらう。

五 書簡蒐集から得た三十則

私はかつて書翰を集める道樂をやつたことがある、十四五年計りもそれに没頭した。此の道樂を始めた動機はと云へば偶然の思ひつきからで、深い理窟のあつた譯では無かつた、私は多少書畫の趣味を有つてゐるが、手元不如意で、價の高いものをドシ／＼購ふ事が出来ぬ、せめて反故でも集めて見よう、反故ならば價は高が知れてゐる、一幅の書畫に數百圓數千圓投するよりも、同じ價で數百圓の名家の書簡を集める方が、身分相應でもあり或は趣味は却つて此方が深いかも知れんと考へたのが、そも／＼の始まりであつた。今になつて白狀するが最初は高をく、つて、書簡の如き者を一ト通り集めるに多額の金もいるまいと思つたのであつたが、やつて見るとなかく／＼さうたやすくはゆかぬ。稀れなものになると立派な掛物を購ふほどの價を拂はねば無論手に入らず、段々深入りするに隨ひ豫期は全く裏切られた。實は己が好む所に偏

して學者とか畫家とか或る部門に限つて専ら集めたなら、案外容易であつたかも知れんが、時代こそ徳川期以後と畫したが、其の部門はあらゆるものに迫んだ、即ち漢學者も國學者も僧も詩人も俳人も歌人も畫家茶人其の他諸般工藝家に至るまで何でもこいと舞臺を擴けたから、書畫道樂と稍々近いやうな事になつた。段々集めて行く内に多少の研究心も起り、系統的に蒐集したい念も起つて來た、例へば儒者に就て云へば闇齋派、徂徠派といふ様に門別を立て、成るべくその流派の人の書簡を網羅したいといふ望も起つた。さうなると愈々蒐集がむづかしく、一門の長とも云はるべき人の書簡は案外たやすく手に入つても末流の人のが却つて手に入り兼ねる様なことで、頗る面倒を感じ、すべて思ふ通りに運ばなかつた。併し書翰研究には系統的蒐集が大切であると感じた。同じ流派に屬する書簡を時代別に並べて見ると、そこに何等かの意義ある様に感じた。大體同じ流派に屬する人の書簡には何となく一貫相通するの脈があり、書體にしてもどこかに似寄りがあつて、一通々々バラ／＼に見て何の興味も意義もないことが、類別して見ると始めておのづから一縷の脈を發見するものである。尤も別りやすいのは、頼家一門の書簡を春水兄弟山陽父子其他一族の書簡十數通を寄せて見ると、何人も直ちに

感ずるのは血族の書體並に文章に争ひ難い似寄りの點を發見することで、趣味も亦おのづから湧いてくる。併し血族關係の系統をたどつての蒐集は、學派の系統をたどるよりも一層困難である譯は、名聲の無い人の手紙は手に入り難い、別して婦人の手紙を得ることが困難である。此等の書簡を得んとするには其家に就いて求めるより外はない、或は其人の郷貫に入つて捜すより外は無い、決して居ながら得らるべきものでない。私は久しく備前にゐた人から熊澤蕃山一家の書簡を得たことがある、これなどは蕃山並に其の一族が備前に居つたから残つてゐたので、外の地方では得らるべきで無い。要するに理想的に系統ある蒐集をすることは大事業で、私などの企て及ばないことだ。

私は徳川期からの書簡を聊か集めたに過ぎないのであるが、徳川期というても初期は既に古文書の部類に屬する。すべて古文書類に入るものは、一種の様式があつて大體文章が簡潔で普通五六行に過ぎないのが多く、公文などになると委細は使者の口上に譲るとしてある。勿論破格に長文のものもあるが、大體簡約であつて、歴史の考證には大切の材料であるが、餘り興味のある者でない。慶長天正頃の手紙でも家庭に往復したもの知友間に交換した書簡などには興

味のあるものもあるが、追々長文の書簡體が起り情意の委曲を悉すやうになつてから始めて手紙に興味が生じてきた。私の蒐集は何れかと云へば趣味本位であつたから、時代は比較的若い、尤も近い所は明治にまでも迫んだが、幕末と明治以後には十分力を入れることが出来なかつた。然るに偶然大隈家に收藏さる、幾千通の書簡を涉獵することが出来たので、私の蒐集の不備を少くとも眼だけで補ひ得たやうな次第で、私に取つてはまことに僥倖であつた。

私は多くの書簡を集めて手紙に就ての趣味を聊か研究し、其の結果を書きつけて見たことがある、それは三十則の多様に互る。中には一則の内に綜合し得るものもあるが、今は十分整理する暇がないから、曾つて書きつけたまゝ、左に録する。

一、能筆能文（書美、文章美）。

此の部類のものは筆者の誰彼に拘らず趣味を感じるが、筆者が名家なる場合は一層趣味を覺える。

一、稀に墨蹟の存する人の書簡。

中江藤樹や山鹿素行などの書簡は少ないものである、随つて其の珍奇なるためにも趣味を

感ずる。

一、筆者の性格を赤裸に現はしたものの。

偽はらざる告白をしたり、自家の長短を自評したりしてゐる書簡には、概して興味を覺える。

一、天下の大事を語るもの。

顯要の地位にある人が國家の機務を語るものには、云ふまでもなく興味がある。

一、偉人同士の往復。

如何にエライ人の手紙でも相手が低級では内容は振はない、地位が匹敵する場合に於て始めて内容の見るべきものがある。

一、意外の事に觸れた書簡。

祕事を語るものは概して興味をそゝる、意外の事の多くは祕事に屬し、有道の君子と思はれてゐる人が、蓄妾の事實を語る様なのは此の部類に屬する。

一、文藝を語るもの。

俗用ぬきで風流韻事にわたり、或は書を論じ、書を評し、若くは小説を談ずるの類は概して興味がある。

一、書翰中に戯畫俳句詩歌などを交ゆるもの。

これは言ふまでもなく趣味がある。

一、婦人に宛てた書簡殊に情事に關するもの。

遊治郎の書簡は論外であるが、地位ある人の書いた此般の書簡は甚だ趣味がある。

一、婦人の書簡。

女流ながら國事に與つたもの、例へば野村望東尼の書簡の類、或は名妓の書簡などは趣味がある。

一、諧謔の文。

懇意關係で往復する書簡には往々解願の書狀がある。

一、絶筆と見るべき書簡。

最後の執筆といふ意味に於て趣味がある。

一、書翰を認めた其年月日に意味あるもの。

例へば大戰從軍の際敵の降服の場合に認めた書狀の如きは記念として趣味がある。

一、書畫骨董の來歴眞實等を敘した書簡。

これは鑑定書に應用し得るものだから、其書畫や骨董を所持する者は特に珍重する。

二、手紙の外は絶対に墨蹟の傳はらざる人の書翰。

工藝家の書翰の如きは此の一例である、陶工とか塗師とか彫工などで著名のものがあるが、其人の墨蹟は決して傳はらん、唯だ用を辨ずる爲め手紙だけは書くから、珍とする價値がある。

一、獄中より發した書信。

渡邊華山が獄中より發した書簡は名高い、悲惨の境遇に居る人の書狀は概して一種の趣味がある。

二、發信地の珍な場合の書狀。

例へば諸侯が花柳の地に流連して其處から人に與へた書狀などである。

一、一通の書狀に往復の文章備はるもの。

昔しは匆卒の場合、懇意の間柄で往復した書簡に返事を書き入れる習慣があつた。臣下より書狀で君公に種々の事を申立てる、それに對し君公自筆で其の申立各條に可否を書いたり自説を書いたりする例は事實あつた、一通で双方の唱酬がある所に趣味がある。

一、隱語の文、謎の文。

外聞を憚り謎のやうな隱語を弄するものに面白いものがある、斯る文には多く當座作りの假りの名を遣ふが、其名にも趣味を感じる、國事に關して同士と相通ずる書簡などに此類がある。

一、貴人より奴僕に與へた書狀。

昔しは、あるまじき事ではあるが、褒賞の意味で破格の事が無いでもない、又萬已むを得ざる場合に稀れにこのことがある。

一、重要事件關係者の書狀。

例へば赤穂義士復讐に關する書狀、水戸浪士櫻田の變に關する書狀の如きを云ふ。

一、高僧の俗事に關しての書狀。

例へば良寛が米味噌の無心を云ふ様な書狀は興がある。

一、すぢ違ひの文章で書いた手紙。

漢文家が國學畑の和文で書いたり、又反對に國學者が漢文で書く様なものに興味がある。

一、旅情を敘する紀行風の書信。

これも一種のもので、往々風景のスケッチなどの挿入しあるものは別して趣がある。此種の書信は大概長文だ。

一、對話に代へての書狀。

曲亭馬琴の知人に寄せた書狀の多くは一通數十尺の長きにわたり、恰かも其人と對坐して半日若くは一日語るに代へて、細々と家庭の事や浮世話までも申送る、これも書信の一體で、材料豊富の爲めに興味を惹く。

一、學術其他に關し辯論議の書狀。

これも長きを例とし、矢張書狀の一體と見るべきものだ、新井白石が水戸の安積澹泊と應

答の書状のごときがこれで、趣味もあり裨益もある。

一、外人の邦語に書きたる書状。

長崎に久しく在住した支那人などに縦横日本の假名まで書けるものがあつた、此等が書いた邦文の書状は必らずしも珍らしくない、洋人がマ加里なりに書いた手紙などは一種の面白味がある。

二、懺悔並に謝罪の書状。

こんな書状は書く人はつらいであらうが、讀むと面白い、別して當事者が立派な地位ある人であれば尤も興味を覺える。

三、極めて簡單なる書状。

長文の手紙が必らずしも興味ありとは限らぬ、僅かに二三行で寸鐵人を殺す的の書状は寧ろ興味を惹くことが多い。

四、書簡箋封筒の趣味。

最後に添加を要するものは書簡箋封筒である。これは共に書簡に趣味を添へる。江戸時代

には書簡箋に地模様を刷りこむことが流行し、男子でもサヤ形の打込口紅の半切をつかつた、封筒にも北齋や廣重などが下繪を書いたもので、いろいろ面白いものがある。

書簡に關するいろいろの趣味を數へて見ると數十則に及ぶ、まだ漏らしたこともあるかも知れんが、自分が書簡蒐集に就て體驗したことのみを擧げたに過ぎない。

六 日誌の趣味

各人が日々に録する日誌は手紙と密接の關係があるもので、例へば手紙にはその人の面影が横に現はれてゐるとすると、日記の方にはその人の事跡が縦に記されてあるとも云へる。之れを愛玩者の側から見ても殆ど同一趣味に屬するものである。自分は手紙を珍重すると共に、日記にも少からず趣味を有つてゐる一人である。

全體日記の趣味と手紙の趣味とは略々相似たものである。手紙は其筆者の性格を最も赤裸々に現はすもので、人間の樂屋は手紙に依つて窺ふことが出来る。殊にその親族や債權者などに

與へた手紙の如きは、何といつても一番粉飾がない。人間はかゝる場合に於いて最もよく眞面目を發揮する。即ち此等の手紙を見てその人物を想像する、手紙の面白味は全く此處にあるので、日記にも亦丁度それと同じやうな趣味がある。日記は謂はゞ私乗である。單に自分の心覺を、人に示す爲めに書くものではない。矢張手紙同様に自分の眞情を直寫したものである。此の點に於いては手紙と少しも異らないのみか、更に數層趣を増すものである。といふのは、とにかく日々の見聞を繼續して筆にするのであるから、書く事柄に連絡があつて断片的のものではない。それから手紙は個人を相手にして書くのであるから、甲なら甲、乙なら乙に關した或一つの出来事しか分らないが、日記のくはしいものになると、それが纏めて書いてあるから、断片的でない纏つた趣味を感じる事が出来る。また日記がその人の著作よりも却つて情味に富める所以は、筆者が自分の見たま、聞いたま、を、印象のまだ新しい中に書くからである。即ち事に觸れ感興に乗じて思ふ儘に書いたものであるから、筆者の人物を現はす點に於いてもこれに勝るものはない譯である。世の古老といはる、人々が「自分は實際眼前見た事であるから決して間違ひはない」と自分も言ふし、聞く者も亦之れを信じて疑はないが、無論その

人は虚を言はず、記憶も確かな積りであつても、年月を隔てると間違ひが起り易い。老人でなくともかゝる間違ひは我々の日常經驗する所である。現に亡友有賀博士のごときも「史學上の考證に就いて或る古老に尋ねたが、どうも間違ひが多くて困る。寧ろ粗末でも書いたものの方が可い」と言はれた事がある。随つてその時の事實所感を印象の明らかなうちに書き留めて置いたものが、最も信憑し得る事となる。此の點に於いて日記や手紙の如きは、單に趣味上の問題でなく、歴史上から見ても重要な材料である。自分は平生此の兩面の意味から、古今の日記を珍重する。茲に日記といふうちには、無論紀行をも含むので、一體紀行は旅の日記であるから、之れを含めていふのに、別に不思議はない。

さて従來世に聞えた貴い日記は随分少くないが、それらの中で日記の標本として最も傑れたものは何かといふに、先づ何人でも知つて居る、彼の「玉葉」、一名「玉海」であらう。これは源平時代に出来たもので、九條兼實公かみざねの日記である。併し公の自筆の原本は、何時しか湮ほろびてしまつて今傳はつて居ない。九條家に現存して居る分も實はその寫本だといふ事であるが、大きな鳥の子紙に書いた、體裁の極めて堂々たるものであるさうな。自分は嘗てそれを寫眞に撮

つたのを見た事があるが、成程書なども立派なもので、それが數百卷あつて、例の國書刊行會の本にして、凡そ八百頁のもの三冊、都合二千五百頁餘、全部日本風の漢文で書かれてある。處で此の「玉葉」が何故そんなに貴いかといふに、第一筆者兼實公が、みづから當時の樞機に參して居られたといふことで、源平時代の記録の現存して居るものは殆ど無いといつてもよい位の處へ、當時の而も樞機に參した人が、親しく見聞した事どもを細かに書いて置かれたものであるから、歴史上から見て此の上もなく貴い價值がある。之れを讀むと、朝廷の儀式はもとより、源平の相争つて居た状態が、掌を指すが如く明らかになつて来る。清盛や重盛の如き人物の眞の性格が、從來世に解せられて居たとは稍趣を異にして、眼底に髣髴として映じて来る。日記の標本として先づ第一に此の「玉葉」を挙げた理由はその邊にあるので、是に依つて見ても日記が單に讀む者に非常な興味を與へるのみならず、寧ろその必要缺くべからざるものたることをも示してゐる。といふのは、今日になつて源平時代の眞相を窺ひ知るには、僅に此の「玉葉」を典據とするより外、他に殆ど信すべきものが無いからである。成程「源平盛衰記」の如きは、當時の物語として古く出來たものには相違ないが、併しあれは俗書である。今

日からいへば、必しも一概に排斥すべきものでは無いかも知れぬが、又必しも一概に據るべき者としてはならぬ事は、既に世の定論となつて居る。然るに從來の史家の多くは悉く「盛衰記」などに據つて居る。かの水戸であれだけの苦心を重ねて編まれた「大日本史」而も當時の有名な學者を網羅し且つ親藩の勢力を以て作り上げた「大日本史」のごときですら、その源平時代の事蹟を叙するに當つて、専ら「盛衰記」にのみ據られたといふ事は、實に惜むべき大闕典と謂はねばならぬ。當時の學者が、九條家に斯程まで立派な「玉葉」のある事を知らなかつた筈は無いであらうに、何故それをば主なる考證の材料とはしなかつたか、自分は今から思つて實に不審に堪へない。

「玉葉」を仔細に讀んで見ると、從來の俗説の誤つて傳へられてゐる事實が大分發見される。例へばかの清盛は一概に悪人、重盛は人間以上の善人として解せられてゐる説なども、「玉葉」に據ると頗る疑はしい問題となつて来る。其他源平時代の種々なる大事件に就いても、從來の俗説を根本より打破するに足るべき幾多の確證を得るにも拘らず、「大日本史」が全然此の貴重なる材料を閑却して顧みなかつたのは、返すくも残念な事である。

それからもう一つ南北朝時代の日記で「園太曆」といふがある。是は洞院公賢きんかた公の筆録で、其の大部である點に於て、尙ほ其の記事の周密なる點に於て、其の筆録者の地位、學殖識見の高く且つ深き點に於て實に優れたものである。此の時代は戰國紛亂の頃で、當時の事態が錯綜を極め、實相を辨じ兼ねる時であるのに、此の日誌は如何にも明快に、面白く、宛然實境を見るが如くに書いてある。尊氏、直義と義詮の間の纏れや、南方の和議と其の破綻や、後村上天皇の京都に於ける御仁政や、男山合戰前後の記事などは、殊に精彩に富んでゐる。此の日誌は應長元年二月から始まつて五十年續いてゐる。原本は具注曆に書き込んだもので百二十三卷ある譯だが、多少の闕もあつて、原本は帝室に備はり、世間に流布してゐるのは其の抄録本である。これが古るい處では「玉葉」に次ぐものであらう。

今一つ此の種の日記の例を挙げると、松平樂翁公の日記が亦歴史上から見て重要なものである。公は有名な當時の賢宰相で、殊には文學の才もあり、種々なる著作さへ廣く世に傳つてゐるのであるが、これは公が極めて祕密にしてその執政中の事などを忌憚なく直筆して遺された數卷の記録である。併し公はあの通り注意深い人であつたから、これを匣の中に入れて嚴封

し、そして後世執政の地位に昇る人があつたなら、その時に之れを開いて見よと遺言して子孫に傳へられた。匣の表には「宇下人言」と題してある。これは定信といふ文字をくつした隠言であらうといふ説である。その記録をば前年に公の子孫が開いて見たといふので、帝國大學の史料編纂所では、早速その一本を寫し取つたと聞いてゐる。自分はまだ之れを見る機會を得ないけれども、その記録には恐らく公が一代の中に非常に苦心された、所謂「尊號事件」などの真相も委しく記してあるだらうと思ふ。又それと同時に同じ様な事が將軍家にも起つて、結局中山大納言に謹慎を命じて辛く納めたといふ事態の詳細をも、此の記録で明らかに知ることが出来ようと思ふ。日記といふものは後世になつても、此の如く表面には委しく傳はつて居ない埋没された事實の典據となるものであるから、事の大小公私を問はず、日記の有用なることは今更多言するまでもない。今日顯要の地位にある人達は、只自分の學書の爲めばかりでなく、後世の爲めにも、日記は是非付けて置くべき必要がある。自分は繰り返していふ、現今樞機に參する人達は、その事が嘗に一身一家のみならず、國家の盛衰治亂に關する事を書き得る地位に在るのであるから、特に日記を付ける習慣を作られんことを切望する次第である。

近頃の人で、自分の注文通りの日記を書かれた人は、勝海舟翁である。翁は長い間徳川幕府の樞機に参した人であるが、少壯時代から日記を付ける習慣があつて、一身一家の鎖事に就いても、政治向の公事に就いても、殆ど一生を終るまで之れを付け通された。そして翁の日記は他の人のに比べると、餘程綿密に調べて書いてある。吾々の一枚や半枚に簡単にその日の出来事を書くのと違つて、何か一つ事件が起ると、それに附帯する總ての書類は、参考の爲めに盡く日記の中に寫し取るといふ、甚だ念の入つた遣方である。一體日記を途中で廢しないで長く付けてゆく秘訣は、簡単に一日の出来事を記すに留めるといふ遣方に限るのであるが、海舟翁に至つては頗る精細なもので、殊に維新の際には幾度か死地に出入して居ながら、未だ曾て一日も之れを廢せなかつたと聞いてゐる。翁は維新の變動に於ける立役者であつただけに、唯一家の私記といふよりも、寧ろ政治上歴史上より見て貴いものである。自分一個の考へでは、是は相當の保管法を立て、永遠に保存すべきものであると思ふ。翁の如きは日記の方から云へば實にこちらの注文通りの人物で、一つは日記に對する趣味もあつたであらうが、一つは後世の爲めにするといふ考もあつたに相違ない。斯る心掛を以て書かれた日記が、後世史家を益する

ることは實に多大なものである。

そこで自分は平生思ふに、山陽の如き白石の如き、随分昔から學者もあれば名文を書く人もあつた。併し此等の人々は、どういふものか細かに日記を書いて居ない。それでも白石は「折たく柴の記」に、生涯の大略を書いて居るから、其れによつて一通りの事は知ること出来るが、山陽なども若し漢文ばかりに力めず、一家の日記を書いて置いたならば、よしや一國の治亂興廢に係る程でなくとも、非常に趣味の豊かな面白いものが出来たであらうと思ふ。書けば立派に書かれる筆を持ちながら、書いて居ないのを見ると、自分は實に遺憾に堪へない。是は話が他へされるが、若し史上の人物で、種々な事蹟に富んだ人、或は裏面の消息に通じた人、或は官宦、或は嬖妾、或は……などが、それ〴〵日記を付けて置いたとしたなら、どんなにか面白いものがあつたであらう。又之れを裏から考へて、若し假りに「日記を付けさせて見たい人々？」などいふ題で、古今の人物から選んで見るのも、一寸趣味ある事と思ふ。先づ差當り淀君などは、その筆頭を占める位があるかも知れぬ。

秀吉時代に名醫といはれた曲直瀬道三といふ人に、「醫學天正記」といふものがある、勿論

是は後に付けた名だ。道三は當時の大家であつたから、上は畏き邊より公卿武將など名ある人を診察して投藥した、その日記、謂はゞ醫案の如きものである。某日某人を診察、何の藥を盛るといふ風に書いてあつて、無論普通の日記といふべきものではないが、當時の大人物は殆ど其の醫案の中に網羅されて居て、之れを見ると非常に面白い。意外の人物が意外の病氣に罹り、世の大豪傑と思はれて居る人物が病氣の爲めにいたく取り亂した様や、謹嚴な人物と思はれて居る者が花柳病に悩んで居たり、また畏きあたりの拜診の様子なども窺ひ知ることが出来る。秀吉や清正や三成などの人物も、之れに依つてその一端が解せられる。で、今一步を進めて、此の人が日記に興味を有し、單に職業上の事計りでなく、如上の人物に接する毎に、清正が何といつた、秀吉が斯う云つたといふやうな事を書いて置いたなら、如何に興味深く又如何に後世を益したであらう。明治以後の大醫青山博士や佐藤博士などは、常に顯要の地位にある人々に接する機会が多いのであるから、忙しい身體ではあらうが、一つ此の邊に注意して、「醫學天正記」の缺を補ふに足るやうなものを書いて置かれたらばよからうと思つたこともある。

日記の書き方には色々ある。事務的の者に至つては有用は有用であるが、趣味こいふべきものは比較的少ない。併し日記にも非常に複雑した體があつて、見聞した事實は固より、詩文歌俳諧を控へて置いたり、また畫などを挿入したものもある。特に旅行家がその旅日記に繪を以て道中の寫生を試みたものなどは、文章と相俟つて、畫文共に粗なりとも實に無限の興味を覺える。

馬琴の日記などは所謂面白い日記の一つである。是は早稻田大學に三四卷ある。帝國大學に十卷ばかりあつたが、それは焼失した。半紙本で一年分が一冊になつて居て、一冊が大凡百枚ばかり、細字で餘白なく書いてある。是迄知れたものが十五六冊あるから、先づ十五年の間は分る。それを讀んで見ると、馬琴の人と爲りが、極めて機微なる方面から仔細に窺はれる。從來馬琴を傳したのも少くないが、その日記を研究して筆を執つたものは殆ど無いやうである。是は馬琴傳を草するには實に缺くべからざる好材料であるから、今後彼を傳せんとする者は、是非とも之れに就いて十分なる研究を試みて貰ひたい。記してある事件は多くは私家に關する瑣事で、中には著作の進行、原稿料の交渉などの記事もあるが、その細君の爲めに苦し

んだことがひどく澤山書いてある。馬琴の細君は劇烈なヒステリーに罹つて居て、兎角世間に出ては、家の内情や夫の秘密や悪口やを云つて廻つたので、馬琴の如き細心の、而も特に門戸を張つて高く止まつて居た人が、如何に苦しんだかは、此の日記を見ると仔細に知ることが出来る。また馬琴には「改過筆記」といふものがある。これは隨筆中にあるが、一面日記とも見るべきもので、細字で大凡二三十枚もあらう。之れに依つても彼が裏面を窺ひ知ることが出来る。全體は方位の論で、子の宗伯の虚弱なことに苦心した事が書いてある。或時自分で方位を見て、庭に池を掘つて其土を或處に置くと、急に宗伯の病がひどくなつた。早速方位の大家に見て貰ふと、それは池を掘つたのが悪いといふので、元のやうに土を直すと同時に病氣も直つたから、以後深く方位の論を信じて、之れが研究をはじめたといふ始末。無論之れも世間には示さなかつたものであるが、今讀んで見ると、何ともいへぬ趣味が感じられる。かゝることはその家の私記、即ち日記でなくては見られぬ事で、之れに依つて初めて馬琴の赤裸々な面目を知ることが出来る。

今一つは渡邊華山の日記である。華山の日記は斷片でボツ／＼世間に現はれて居るが、是は種々の方面から趣味を發揮したものである。晝に巧に書に長じ且つ詩を善くし、文人との交際も廣く、小藩ながら家老の地位に居り、見識から云つても西洋の文物に多少通じて居た。これだけでもその人の手に成つた日記の如何に興味なるかはほゞ察せられる。無論その日記の中には、自分でかいた繪が挿入してある。主公田原の城主三宅氏が、日光の社參を命ぜられた時の行列の圖などは頗る振つたもので、日記の數頁に涉つて描いてある。繪は略描ではあるが、多少淡彩をも施してあつて、その陣笠を冠つて馬に跨つた肥大の人物の上に渡邊登カハと書き、他の人物にもそれ／＼名が記してある。その他俳諧も出來たと見えて、諸所に書き付けてあるし、書畫の摸寫なども諸所に點綴してある。一藩の首班に列して居たから、藩邸の事情をも書いてある。日光社參の時に一藩大に苦み、堂々たる諸侯にして二百か三百の金の調達に東奔西走した有様など、此等は到底日記でなくては知ることの出來ない事實である。また主公が色に荒んで諸方に側室を求められ、それを諫止するに苦心した事なども書いてある。その他友人や奇行ある者などの行爲をあやどり、一體が謹嚴な人だけに眞面目な事が多く書いてあるが、中には一寸甘い種も挟んである。その「全樂堂日録」中の「征參録」(これは天保癸巳正月參河

に旅した時の日録）正月二十四日の條下を見ると、

「小田原に宿る、定右衛門先に行きてやどりを定む、予夜に入り到る。此宿は商人をとむる亭にて、いとさわがし。予はおくまりたる所に宿りをさだめたり。隣に男と女との聲す。いとなまめけるさまにて、男は此わたりの農夫にや聲太とやかにて、いひ寄らんとせるを、女はよそ事いひなして、曉に歸らん御身の、かく云ひ合ひて夜など深し玉ふなよ、とく寢玉ひれなどいふを、猶「ねりていふ。寢ん事は家に歸りても出来ぬべし、痛く酒とらへて心ゆくばかりにうめき出でんものをと聲振り立るを、おしとゞめなどせるうちに、宿のもの勘定のはし錢なりとて二緡ふたごばかり持いたれるやうなり。男、此錢のあまれる要なし、いとゞ安き費なりとて此錢を女にとらすを、女はなほもうけひかず、猶強ひ取入れて聲低うなまめける。」

など、書いてゐる。華山ほどの謹愼な人物でも、旅中にこんな事に出逢つて見れば、流石に空吹く風さ澄しても居られなかつたものと見える。

一口に面白い日記といふ中にも、態と文章を潤色して、後世に遺す爲めに書いたものも随分少くない。例へば「土佐日記」とか、「更科日記」とか、「紫式部日記」とか、近くは「湘烟日記」などはその例である。此等是如何にも文學上の産物として價值あるものには相違ないが、

その文學上の價值のあるだけそれだけ、所謂事實の記録としては前述の者などより却つて價値に乏しい。矢張り日記は殊更でなく、人に示さぬつもりで書いたもの、方が、眞に日記としての特色があるのである。例へば「家忠日記」の如きがそれである。「家忠日記」は曩に帝國大學の史誌叢書として出版されてゐるから誰れも知つて居る書であるが、家忠いだしは深溝の松平と云つて、家康と同時代の人である。そしてその日記は天正五年より文祿三年に至る十八年間の事に亘つて居る。書いてある事は極めて簡單で、一日僅に一行に足らぬ程しかないが、これが歴史家の参考として珍重される所以は、當時の歴史上の事實を調べるに當つて、此の日記に依つて月日などを正確に考證し得る便宜があるからである。もとゞゞ武人の筆に成つたものであるから、その書き方が如何にも眞率で、毫も殊更らしい處がなく、その天正五年の大晦日の前あたりを見ると、

二十九日 亥 辛 吉田へ借錢納所へ人をつかはし候

など、借錢をした事までも書いてある。その他無意味な繪などが、諸所に挿入してあるのを見ると、まるで子供の徒戯で、極めて單純な武人の一種の寫真を見る様な心地がする。畢竟する

に此の「家忠日記」の價値は、武人流の筆法で、有りの儘を書いてあるといふ點に存する。

日記は本來一家の私乗であるから、有りのまゝに書くのが當然であるのに、兎角人間は衒ひ飾りたがる傾があるので困る。他日誰れかに見られはせぬかといふ懸念からして、或は事實を糊塗したり、或はわざと文章を潤色したりなどするのは、決して日記の本體ではあるまいと思ふ。

自分は嘗て支那の或る學者の日記を見た事がある。その日記には家事を種々と書いてある中に「與老妻同衾」といふ事まであつた。又近世の歌人で橘曙覧といふ人の歌は有りの儘を如何にも自由に詠んでゐる、例へば今夜は寒いから粥を焚いて食べたとか、或は酒を飲んだとかいふ事を歌に現はしてゐる。此等は人に見られる事を恐れる點からいふと、随分大膽とも云へるが、日記を付ける人は寧ろ此の位の勇氣がなくては困る。眞率といふことは、實に日記を付ける人の唯一の心がけである。

如上の話は甚だ錯雜してはゐるが、所謂日記の趣味及び日記の價値といふ事に就いては略々説き盡した積りである。要するに日記は、その眞なるが故に興味深く、眞なるが故に價値があるるのであるから、吾れ人共に極めて眞率なる態度を以て、成るべく精しく日常見聞の事を付ける習慣を養成すべきである。況んや今日顯要の地位に立ち國家の樞機に參する人々の如きは、寧ろ天下後世の爲め義務としても日記を付けて置く必要がある、自分は敢へて三たびいふ。

七 圖書趣味一斑

圖書の趣味ほど多方面のものは無い、一と通り述べるにしても數百紙を要する。圖書には幾十百の種類がある、硬いものもあれば軟かいものもある、皆なそれ／＼に異つた趣味がある。時代の古るい版本には、支那の宋元、日本の正平五山の版や慶長のもある。寫本になるとそれよりも以前のものもあつて、此等には崇高の趣味がある。更らに各種各門の内容に就ては、到底舉げ切れないほど多般の趣味がある。

私は今極めて範圍を狭め、普通閑却されてゐる方面に就て、聊か圖書の趣味を陳べて見ようと思ふ。第一、書物の格好が多様である。大は韓版の如き普通本の二倍三倍もある大きなもの

より豆本の如き小なるものもあり、醫書によくある豎長のものもあれば枕本の如き横長のものもあり、卷子もあれば帖子もある。綴ぢ方に就ても、普通の冊子のごとく外部の左端に糸をあらはす綴ぢ方もあり、西洋風に似た列蝶綴ぢといふもある。最も複雑な書物の装釘に私が假りに名づけて子母冊といふのがある、これは一冊の本に長短大小幾種のもものが備つてゐる、即ち外部の表には豎長の冊子があり、其の反対の側に同じ形ではあるが横廣のものが連続してゐる、その二つの中を割つて見ると、一方には外部の本の大きさを二分した方形の書冊が二つ備はつてゐる、他の一方にも形の不同の者が二冊若くは三冊、外部の書冊の大きさに符するものも備はつてゐる、外部両面の冊子を親と見立てれば、中のは子とも見るべきだから、私は之れを子母冊と名づけるのである。これは版本にはないが、私の書生時代には手帖として賣つてあつたものだが、其の紙は薄葉であつたやうに記憶する、一冊の手帖にいろ／＼のことを書き得るやうに工夫したものだ。日外友人が西洋諸國の圖書館を遍歴して、七八百年前英國に行はれた書冊に之れと同様の装釘のものがあつたと語つたので、初めて外國にも此の式のあることを知つた。お經の帖子となつてゐるのに、一々帙をつけることが煩しい所から、下の表紙を左右擴

大し、それを左右から折りまけて表面を掩うて帙とする一種の形式もある。此他にも色々變つた綴ぢ方や装釘の式があるから、装釘丈でも相當の趣味がある。

更らに表紙について見ると、是れ亦千差萬別で、時代々々の特色がある。例へば天正頃の普通の書物の表紙は、質朴で澁を引いたものなどが多く、無趣味であるが、文祿の役即ち朝鮮征伐を経てからのものを見ると、爰に一變化が起つたことを發見する、それは今日も傳つてゐる蓮花くづしの唐草が、裏から押して凸起の地紋をなしてゐるものである。これは朝鮮から分捕つた多くの書籍に就て、表紙の意匠を學んだものであつて、朝鮮征伐の前後で表紙の意匠に畫然たる區別がある。獨りこれに止まらず、各時代を通じて、流行其他の關係から、表紙や包紙に幾何かの變遷や特色があるが、此等を多く比較して見ると其處に淺からぬ興味がある。

次は題簽である。是などは何でもないと思へばそれまでであるが、實は書物に大切な關係がある。古しい時代のものになると、名手の肉筆もあり、序跋同様名家の書を版にしたものもある。標題は書物の内容の眞髓を僅々數字に現はしたものだから、昔しは之れを重んじ、内容は筆工の手で書かれても、標題だけは名家の手に成つたものが多い。之れを何十通も集めて時

代別にして見ると、おのづから書風の變遷もわかり、題署の工夫にも相異があることが分つて、其間に又趣味を覺える。

更らに表紙をはぐつて、見返しの處に貼つてあるタイトルページになると、本によつては無いものもあるが、古い本には大抵貼られてある。これには本當の書名があるから、題簽よりも確實のものとされ、西洋あたりでも之れを尊んでゐる。長い標題は往々略して題簽に書くけれども、タイトルページには全部があるのが通例で、眞の書名を知るにはこれに據るの外は無い。のみならずタイトルページには著者の名や刊年や發行所までが多くの場合具はり、相當に意匠を凝らして色刷にしたり、輪廓に文様などを彫つたりして趣味もあるが、書史學から見ると大切な意味が此のページに存してゐる。

更らに序跋になると一層の趣味がある。刊本には名家の筆蹟を其儘に刻したものが多く、文章にも書にも味ふべきものがある。序跋はその時代々の大家が書いてをるが、兎もすると筆者の墨蹟が此の序跋以外に傳はらないやうなこともあつて、斯る場合に於てはこの序跋が尤も珍とされる。たとへば其書物の出た當時、時の宰相などが書いたものも、其後朝廷が變りでも

すると、忌んで削つてしまふことがある。日本では餘り無いことだが、支那では頻々とある。書物は同じでも序跋が變つたり缺けたりすると、最初の、が愈々珍とされる。又今日こそ古板を尊ぶけれども、ある時代には新板で無ければ行はれなかつたこともあつた。そこで新板らしく見せるため、古い序跋を取り去つたこともある。斯る事情で失せた序跋には賢哲の書いたものも少からずあり、兎もすると其の墨蹟以外絶對に其の人の書が無い場合もあるから、原本の序跋が益々大切になつてくる。そこで好事家の中には、古い序跋のみを集めて、法帖に擬つて之れを珍とするものすらある。

次は紙である。實用上から云へば、どんな紙であつてもよいやうなもの、書物の研究から云ふと紙は極めて大切なものである。支那では今日ベラ／＼した唐紙を用ゐてゐるが、昔はさうでなく、唐時代には日本の天平時代と同じく麻紙があるし、宋あたりの紙は日本の紙と似通つてゐる。時代により紙の製法が異つてゐるから、いつごろの本かといふことを見る上にも紙の研究が大切で、またそれに趣味もある。日本に於ては或る時代京都で専ら書物を拵へた爲め、紙質も概ね一定してゐるが、地方々々に作つた書物になると紙に地方の特質もあるか

ら、此等を時代別、地方別に集めて見ると、紙の製造の變遷もわかり、書物を鑑定する指南ともなる。紙の内でも尤も趣味のあるのは、光悦の工夫したと傳へてゐる、嵯峨本の紙であらう。これは鳥の子紙に雲母繪があり、五色に染められてゐる。又西本願寺の三十六人集の紙に至つては一枚毎に模様を異にし、美術の精を盡し、實に驚異に値するものである。

次は藏書印である。藏書印は古代の書物には概して捺して無いが、足利時代以後に於ては、書物を珍藏する關係から捺用されてゐる。此藏書印は藏者を聯想せしめて興味をそゝるものである。即ち誰々の印、何々文庫の印が捺してあると、直ちに其の人の手澤であることをあらはし、其の人を追憶せしめて爰に聯想の趣味を發する。藏書印を珍重することは、ひとり日本のみでなく、西洋でも行はれてゐる。唯だ印記の式が異つてゐる。西洋の印記はエックス・リップスというて、小さな紙に思ひ／＼の意匠を凝らし圖書や文字を印刷し、之れを書冊に貼りつけ、それに銘々の名を自記するのだ。此の印記が高名な詩人や豪傑であると、好事家は何百圓何千圓を拂ふことを辭せぬほど珍重されてゐる。日本でも上代に頗る稀れな印記がある。即ち光明皇后の御印と云はれてゐる「内家私印」の印が經卷などに捺されてゐると千金の價がある。

る。古版本、古鈔本を多く藏してゐる足利文庫には武田信玄の印のある書物がある、これなども珍とすべきものだ。およそ名家の藏記をあるに任せて集めて見ると、當に故人に對する聯想を生ずるのみならず、印刻の變遷なども知れて、篆刻家にも大切な資料となる。

以上は普通書冊の形をなしてゐるものに附屬してゐながら、閑却されてゐる趣味を聊か擧げたに過ぎない。更らに圖書の細微に就て其の趣味を現はすことは、短篇の及ばぬ所であるから爰に云はないが、左に何人も趣味を感じ易い十類の圖書を擧げて見よう。

(一) 佚書 支那の書物でありながら、古らく支那に亡びて却つてそれが日本に存してゐるものが少なく無い。曾つて僧六如が支那に逸した佛典のみを集めて支那に贈つたこともあり、林述齋が支那に亡びた儒書を集めて「佚存叢書」として出版したこともある。此他朝野に散在してゐる支那の逸書で頗る貴重のもものが少なくない。清朝の初め明代の書を忌んで燒棄した爲め彼れに亡びて日本に存するものが内閣文庫に藏するだけでも少なくない。此等は日本の誇りとする所で、誰れも愉快に感ずるであらう。

(二) 五山版 足利時代は戰國時代であつて、文權は僧侶の手に歸し、京都の五山は文學の

淵叢で、こゝから出版された儒佛の書がすくなくない、それを概して五山版というてゐるが、此等が日本に於て幾んど最初の版本である爲め珍らしくある、そして此の部類には宋版、元槧の覆刻されたものが多く、原版の風味を傳へてゐるために、崇高の趣味がある。

(三) 勅版 文祿の役朝鮮から活字が持來され、それに倣つて新たに活字が出來、勅版書が幾種か出來た。それは皆經書であるが、勅版といふ所に高い趣味もあり、最古の活字版といふ所にも亦趣味がある。

(四) 慶長版 文祿慶長から朝鮮活字で出來た本が少なくないが、爾來朝鮮活字に倣つて吾邦にもいろ／＼の活字が作られ、精粗種々の版がある。それは皆今の活字の出來る遙かに前に屬するので、此等古活字本は一種古雅の趣があり、其の本が稀觀の故を以つて珍とされてゐる。幾百種といふ此等古活字本を集めて比較研究することも亦興のある事だ。

(五) 外人の手に成つた版本 外國人が日本に來て日本の文化に資するために苦辛して多くの儒佛の書を出版した事がある。其の著しいのは兪良甫といふ支那の歸化人で、「月江語錄」「碧山堂集」「李善注文選」「傳法正宗記」「韓文」「柳文」等數百卷を刻した。而かも

其の時代が古らく室町時代である事を思ふと、一個人の事業としては偉とせざるを得ぬ。此等の圖書は五山版と共に歴史的の趣味がある。

(六) ジェシュイット版 外國人の手で日本の圖書を刻した著しい例が今一つある。それは文祿慶長の頃に、ジェシュイット派の僧が布教の爲め活版機械を齎らし來つて、いろ／＼宗派の本も出したが、「太平記」や「平家物語」や字類などを原文を書き直して版にした。これは西洋人の手になつただけ、版面に特色もあり珍奇のものであるが、禁教と共に玉石共に燬かれて、今は日本に稀れに存するが、幾百千の異教徒を刑した鮮血の紀念としても面白いものである。

(七) 各藩の出版書 徳川氏が各藩に文學を奨励した結果、何れの藩でも競つて、思ひ／＼に種々の出版をした。其の最も著しいものは水戸の「大日本史」であるが、支那の佳本を選んで覆刻したものも少なくない、そして此等の圖書は概して佳刻である。そのあらゆるものを一堂に集めて各藩の伎倆を較べて見るなどは頗る興味のあることである。

(八) 絶版書 徳川幕府の忌諱に觸れて絶版されたものが數多くある、それ等の書物は今搜

せば強ち無いでもない、それを見るとおよそ幕府の政略も知れて興味を感じる。絶版の厄に遇つたものは風教に害あるもの、徳川家の祕密に關するもの、幕府を誹毀したものもあるが、中には何故忌んだか原因の知れ兼ねる者もある、地誌、地圖などの類で餘りに委しいといふので絶版を命じたものなどは、祕密を旨とする幕府の政略から來たとも見えるが、後世になると會得が出来ないであらう。何れにしても此の部類の圖書には一種の歴史があつて趣味もある。

(九) 公表を忌む圖書 性慾に關する圖書は風俗を壞亂する嫌があるから公表を厭ふけれども、性慾研究には春本と雖も材料である、これには圖書もあり文章もあつて、花柳界の猥書は皆此の門に屬する。これ等は今日圖書館にもあつて、禁忌圖書として、特種の研究家にあらざれば見せぬことになつてゐるが、斯る隠れたものは趣味ありとして見たがるのは人情である。

(十) 偽書 偽書には様々の種類がある、己が才力學殖をあらはさん爲め著名な人の作に託したのもあり、戯れに他人の名で出したのもあり、或は自家の説を強める方便として古人に同様の説ありとて假託の書を作るものもある、潮音の「大成經」などは神佛兩部の典故が古くからあると思はせるために作つたものである。此の外にも色々あるが、偽書を作る者は學力が豊富でなければならぬから、一概に偽書の故を以て唾棄すべきでなく、一種掬すべき趣味のあるものだ。

八 古書あさりと圖書館生活

私の毎日の道樂は市中に出て書物を漁り廻ることで、これが殆ど日課である。震災後は古書が殊に拂底で、ある時は手を空しうして歸ることもある。然し獲物が無くても興味はある。丁度狩獵家が時に一物をも得ずして歸ることのありながら、再び銃を手にして出掛ける心持と同じだ。畢竟希望が興である、ホープと道伴れである所に興味が存するのだ。

扱て會心の書物を取り當てたとすると、其の喜は非常である。時には近邊の旗亭に立寄り、本を傍らに侍らして祝杯を擧げることもある。求め得た本を家に携へて來ることを私は戯れに

「珍客来る」と呼んでゐる。この珍客を時には寢所にまで引き入れることもある。お客といつても決して歸すことはない。毎日斯く珍客を迎へてこれを接待することが私の道樂である。

書物に興味の無い人には或は理解が出来ないかも知れんが、書物を愛するものには意外のことまで興を感じる。例へば古い書籍には表紙が闕けてゐたり、標題が失せてゐたり、帙や箱が無かつたりする、そこで先づ之れを補はんとする心持が起る。或は其の職のものを煩はしたり、或は己れ自から手を入れたりする。可なり面倒なことであるけれども、これが既に一の興味である。

購ひ入れた書物を目録に入れるのも愉快である。別して久しく尋ねてゐたものが手に入つたとき、或は零本が完本となつたとき、或は他人の所有しない稀觀の書を得たときなどは勿論愉快を感じる。或は大破の書物を修理させ、それが立派に出来たとき、或は永くか、つて自ら寫し若くは人に寫させて、それが出来上つたとき、其の標題を書く場合には愉快を感じる。

尙ほ一年の間に豫定を立てた其の數に満ち、或は超えた時も愉快である。他人に貸した圖書が年を経て無事に戻つてきたとき、意外な人から貴重の圖書を贈られた時、他人の所蔵本と比

較して自分所持の本が優越であることを感じた場合など、皆愉快を感じる。

自分は曾て圖書館を管理した時、書物を愛する上に愉快を感じる場合を數へ立て、見たことがある。一個人の場合と圖書館にあつて書物を取扱ふ場合とは聊か關係も違つて來るが、しかし書物を取扱ふ人にとつては私藏でも他藏でも愉快は同じでなければならぬ。外界から見ると毎日々々書物をイチクリ廻してゐるのは味もない様に思ふであらうが、實際は然らず、圖書館生活には他人のえ知らぬ愉快もある、愉快があればこそ其職に退屈せずに居られるのである。即ち試みに二十五快を左に列擧する。

- 一、新館完成の時。
 - 一、圖書費の増額を得た時。
- 一、不時に圖書費の収入を得た時。
 - 一、數年を費した目録カードの脱稿した時。
- 一、數年を要した寫本の成りたる時。
 - 一、圖書整理に段落を告げた時。
- 一、圖書の數、十萬を突破の都度。
 - 一、缺本の完本となつた時。
- 一、紛失の圖書の發見された時。
 - 一、雜本より貴重書を發見した時。
- 一、修理成りたる製本に題簽を録する時。
 - 一、新購書に藏印を捺す時。

- 一、不備を感じた圖書の備はつた時。
- 一、會心の陳列を爲し觀者を喜ばしめた時。
- 一、練達の館員(司書)を得た時。
- 一、館本の他館本に比し優りたる時。
- 一、佳本の寄贈、寄託を得た時。
- 一、閱覽者滿員竝に圖書の收穫多き日。
- 一、或重要事件に館本の大きな働きをなした時。
- 一、年度末に顯著な成績を發表し得た時。
- 一、廉價に佳書を購ひ得た時。
- 一、圖書調べの結果一冊の「缺」もなき場合。
- 一、他館に無き稀觀の書を得た時。
- 一、管理法、分類法等に新工夫を得た時。
- 一、近火に災を免かれた時。

九 豆本蒐集談

一

私は公私の爲め十萬に近い書物をこれ迄蒐集した。性來書物が好きで、今でも毎日書物漁りを日課のやうにしてゐる。大正七年にフトした思ひつきから、小さな本を寄せ集める事を始めた。其の動機は二三珍しい最小形の本が手に入つたので聊か趣味を覚え、それが病みつきとなつた。自分は毎日散策するが、目的なしで唯だブラ／＼歩き廻ることが出来ん。そこで小本を捜して歩くのを散策の目的とした。エラさうなことを申すが、既に十萬の本を集めた經歷からすれば、大牢に飽いたとも云はれよう。此の上は佃煮の様な小鮮こそ却つて一種の味があらうと云ふのが私の心意氣であつた。全體小形の本は取扱の煩はしいもので、圖書館あたりでも嫌つてをる。個人の私藏にも多く無いのが通例で、私とてもこんな物を寄せ集めたことは既往にない。併し誰れも心掛けない事であるから遣つて見る氣が起つた。第一錢嵩にならず、又形が小さいので散策中得るに随つて懐や袂に入れて持ちかへることが容易である。但し此の類の書物がどこの書店にも澤山積んであつて有り觸れてゐては興が無い。所が此の小本はなか／＼稀れなもので、或種の外は容易に見當らない、随つて之れを獲るに多少勞せざるを得ない、その勞を要する所に興味がある。これがそも／＼私の蒐集を志した當初の考である。

茲に本の大きさに就て多少の説明を要する。全體小さな本にいろいろの名があるが、寸尺をハッキリ言ひあらはした名はない。支那では巾箱本といふと小さな本を意味してゐるが、可なり大きなものもある。寸珍本、袖珍本、皆な小さな本のことであるが、寸尺に制限がない、縦三寸の本も縦四寸の本も皆な寸珍本、袖珍本と云はれてゐる。實は同じく寸珍本でも或る寸尺を超えては澤山にあるものだ。例へば縦四寸の本は割合に多くある、縦四寸五分の本になると愈々多くある。唯だ俗に豆本まめほんというてゐるのが最も小形のことを意味してゐる、即ち普通縦二寸位若くはそれ以下のもので無ければ豆本とは申さぬ。西洋でも誰れも知る通り「ポケット・ブック」と申せば小形の本であるけれども、これは日本の袖珍本と同じ様に最小の本とは限らず、最小の本に對しては別に名がある、「ビジョウ・ブック」といふのがそれである。即ち吾邦の豆本が「ビジョウ・ブック」に當るでせう。

どうせ小さい本を寄せるとあれば、最小の豆本に限り、それに興味もある譯だ。さうなると数が甚だ少なく且つ玩具に近いものだから、私は定尺を豆本よりも大きく極めた。即ち縦三寸五分幅二寸五分のものを蒐集の標尺とした。實物に就て申せば館柳灣の「林園月令」や「和漢名

數」の如きが、凡そ此の尺に當る。此の大きさが一番恰好がよい。勿論これより小なれば小なるほど私は喜ぶのであるけれども、それは餘り澤山ない。私の蒐集した千五百種の内、定尺よりも小さいものは二百種もあるだらうが、昨年早稲田の圖書館に陳列して見たのは此部類である、版本計りでは二百種はない、書畫帖の類までも入れてヤット此數に達する位だ。中には浮世繪などを豆帳に作つたものもいくらか交つてゐた。此等の豆本の少ないのは云ふまでもないが、その外でも私の定尺にハマル小本は割合に少ない。

大きさは右の如くであるが、製本の體裁に種々の差別があつて、卷子もあれば帖子もあり、横帳式もあれば列蝶綴もある。版式も亦區々で、木版もあれば銅版もあり、活版もあり、石版もある。又寫本もある。紙も、普通の紙の外薄葉、鳥の子、洋紙と様々あつて、定尺に相當するものはすべて採つてゐる。勿論日本版でも朝鮮版でも支那版でも西洋版でも嫌はないが、西洋版にはまだ手が十分届きかねてゐる。又いくらか形が小さくても採らないものもある、支那で科擧考試の際の内證本や龜惡な支那脚本の類は採らず、西洋紙に印刷した粗惡の本も多く採らない。

扱て當初蒐集に着手した際は、先づ百種を得んと心掛けたが、あとから考へると餘りに志が小に過ぎた。併し百種を集めることが實際餘り容易でもなかつた。斯る事に經驗の無い人は寸珍百種をかき集めるは朝飯前と思ふかも知んが、實際はさうたやすく寄らぬ。有觸れた者はこの書店にもあるが、その有觸れものを三四十種集めて、さて其上となるとナカ／＼容易に見當らん。實は寸珍豆本は失せ易いもので、又普通需用のない者であるから、書店も之れを重んぜず、多くは塵芥同様に見てゐるから餘り注意も拂はず、特別に此の種の本を集めて置く書店も無い。だから幾軒の書店を漁つても同じ物はどこにもあるが、變つたものと云へば一冊も見出すことが難しい位であつた。それだから僅かに百種を寄せ集めるに二三月も費して可なりに勞を感じた。そして百種に達した時にこんな事を考へた。いくら大都會でも此の種の圖書は甚だ少ない、自分の微力で假りにも買占めるなどいふ事は言ひ得ないが、此の種の圖書だけは買占もさまで難事ではない、三都に涉つて極點まで漁つたとしても高の知れたこと、こんな

ことを考へたこともあつたが、併し自分の此の考は全く裏切られた。其の後追々漁つて平生足を入れない書店に迄も入つて見ると、ボツ／＼見當る、更らに書店の即賣會などに行つて見ると、爰にも三種や五種は手に入るやうな譯で、毎日多少の收穫があり、手を空しうして歸つた事は殆んど無かつた。さうかうする中に私が此の種の本を集めるといふことが書肆の知る所となり、私をアテに方々を捜すことになつたので、いろ／＼のが出て來た。大抵は自分の所持してゐるのと重複して書肆を失望させたことも一再ならずあつたが、こんなことの爲めに手に入つたものも少なく無かつた。終には何かの序に京、大阪に出張して漁り、人に依頼して名古屋、金澤其他を搜索させもした。追々私のこの兒戲に類する蒐集が評判となつて、従前殆んど値の無かつたほどのものが段々高價のものになつて來た。價が高くなると物は現はれ出るもので、意外の方面から、種々のものを齎らし來るものもあり、三ヶ月ばかりの間に三百種に達し、更らに望蜀の念が起つて、五百種位は集め得るであらうと蒐集を繼續して見ると、矢張り毎日二種や三種は手に入り、終に五百の數に達した時には、よい加減にこんなことを廢めようかとも考へたが、しかし漁つて見れば底知れずあるやうにも思はれ、極點まで遣つたら、此の

小本に就て自然一種の研究も出来るであらうと考へ、千種集めたいと心がけたのが、そもそ／＼蒐集を始めてから一年後の事であつた。これから千に達するには愈々困難を感じたが、此の間の経過を委曲に語ると煩雜であるから省略するとして、扨て實際の経験を経ると到底私の定尺に相當する板本だけでは、千五百の數を得ることは出来なかつた。私は多くの小本を集めてみて不満に感じたのは、案外趣味の乏しい事と、小本の形で欲しいものが小本となつてゐない事であつた。そこで趣味を添へる爲めに名家の肉筆の書畫帖を百計りを求め、又小本として欲しい詩や俳句や和歌その他いろ／＼のものを自身で謄寫して百種近くの小本を作つた。自寫本のみでは興がないから、知友を煩して寫してもらつたものもある。又印友の珍藏の印を小冊に捺してもらひ、五六十冊の印譜も作つた。こんなことまでもして辛うじて千五百に達した。けれども、これで極點まで達したかどうかからん。今でも稀れに手に入るものもあり、在りと知れてゐるもので今猶手に入らぬものもある、だからまだどれほどあるかわからん。溯つて最初百種を得んと心掛けた時、尙五百種に達したら已まんと思つた時の事を追憶すると、自ら志の餘りに

小であつたことを失笑せざるを得ない。若し百種五百種程度で止めたならば、多分私は寸珍本は五百種以上はないものと人にも語り自らも斯様に信じたであらう。然るに搜して見れば百種以上更らに千種あつたことを思ふと、志の小なる可からざることを感ぜざるを得ぬ。

集めた千五百種、其冊數は多分三千を超えたらうが、此の小本に就てアラッボク觀察して見ると、古版本が甚だ少ない。日本版では寛文、寶曆、元祿位が最も古く、支那版では明版以前のものは一つも手に入らない。大形の本でも慶長若くはそれより前、支那に於ては明以前のものは極めて少ないわけだから、少ないのも當然である。日本版で寸珍本の多く出来たのは文化文政あたりからで、それより後は益々多く、明治十一二年ころには銅版の小本が盛んに出て、支那に輸出されたものも少なくない。大體古版本は形は小さくとも版式が整つてゐない、本の小さい割合に匡郭が大きかつたり、字が大き過ぎたりして恰好がよろしくない。元祿あたりから追々體裁が調ひ挿繪も加はるやうになつて來たが、大いに整つたのは化政頃からである。銅版や石版や活版などが行はれるやうになり、それにつれて寸珍本は多く出たが、體裁もそれにつれて漸く整つて來た。

さて又各部門に分つて、どの部類の者が多いかといふに、私の目録で見ますと、詩が最も多く、二百種に近いほどある。それに次ぐのが浮世繪のある小児用の本若くは婦人用のものなどが百六七十もある。それに次ぐものは印譜類で、百種もある。韻書字書がそれに次ぎ、八十種。經子類、史傳の類が七十種。國文が六十種。書(法帖類)五十種。文集四十餘種。釋教三十餘種。俳書三十數種。地誌三十二種。其他の部門は多くは二十種に滿たぬ。尙どの部門にも入り兼ねるものが雜部として三百種位ある。そして肉筆の畫帖百許りと洋本六七十は此の外で、洋本は詩と字書が多數を占めてゐる。

三

私は小本を蒐集して多少書史學に裨補するやうな研究をしたいと思ひ、聊か試みたけれども餘り得る所が無かつた。私は第一小本を専門に發行した書店があるか否やを調べて見たが、どうも無い様である。西洋では流石に其専門の書肆がある。スコットランドのブライスと云ふ店は、豆本發行を以つて名の高いもので、其の目録を見ると、ファクシミレーが載せてあるが、

蟲眼鏡で見なければ見えない程の小本も多くある、大體聖書や字書や詩集が多く出版されてゐる、シエークスピヤの全集が五寸許の高さの廻轉書架を二段に畫して收めてあるものは日本へも渡つてゐるから、多くの人も知つてゐるであらう、然るに日本には斯様な豆本出版を専門とする書店は聞き及ばない。「源氏物語」「小謠百番」の如き雜本ひなげんや、豆本の「三代集」「八代集」の如きは版元が同一であるやうだが、書店の名がハッキリ知れん。多分小本出版を専らとした本屋は無いのであらう。明治になつてから岸田吟香は樂善堂で精錡水を賣る傍ら多く銅版、石印の寸珍本を作つて支那に輸出した。其の種類は少くないから、これなどがや、専門の相を備へてゐるとも申されようか。尙ほ私の知りたと思つたのは、古來小本を喜びもし、自ら作りもした人は誰れかといふことだが、これも古い所はわからん。唯だ近世小本趣味のあつた人は、田能村竹田、館柳灣、松浦武四郎位しか私にも知れん。竹田は「今才調集」十冊を寸珍本に覆刻して其の序に小本趣味を明記し、小本の便利なことなどをいろいろ舉げて、大にして粗ならんより小にして精なるに若かずと云うてをる。柳灣の作つた本は「林園月令」を初めとし、「晚唐詩選」「王荊公詩集」等、皆な同形の寸珍本であるから小本に趣味のあつたことが窺は

れる。多分柳灣の出版物が範となつてその後出たものは概ね此の體裁に則つたらしい。松浦武四郎は自作の紀行七八種、其他蝦夷に關する便覽の様なものも皆小本で作つてゐる。松浦は一疊敷の室を作つた好事家だから、矢張小本に興味があつたと見える。一疊敷を作らんとして木片を全國に勸進した、其の材を集めて出來た室を披露する爲めに版にした「木片勸進」と題する書物も寸珍本である。此の外林述齋が自作の詩を寸珍本に幾通りか出してゐるのと、樂翁が「三草集」と名づけて自筆の和歌集を三冊寸珍本に作つてゐる。此等の人々は寸珍本の趣味家に加へることが出來よう。

四

私が研究した中で較々要領を得たものは、小本を出版する原因動機である、その動機と原因は間接に小本それ自身を説明してゐるから、大略左に要點を掲げて見る。

第一 携帶の便利 交通の不便な世の中に長い旅行などする時、荷物の嵩む爲め書物などは携帶が出來ぬ、それに應ずるため小本の出來るのは自然の勢である。支那のやうな大きな

國土の官吏は屢々交迭する、鐵道も何もないから書物の運搬は容易でないので、巾箱本を調法がらのだ。

尙ほ職業柄常に携帶を要する者がある。例へば詩人の韻書に於ける、俳人の歳事記に於ける、謠曲家の謠本に於ける、宗教家の聖書、佛典に於ける、技師のガイドブック、測量師のフォルミラ、皆隨時必用を感じるものであるから、手軽に懐中に入れ得る小本を要する。

尙ほ常住坐臥身を離し難いものもある、神佛の守護符の如き、御圖の類などである。守護符と云へば書物外である様だが必ずしも守札のみでない、佛教に於て「心經」や「普門品」「法華經」などを守りとするものもある、神道で「神名譜」などを守りとするものもある。御圖にも必ず御圖札の吉凶を説明する書物が附屬するものである。

第二 小品ならではの折合はぬ場合 小兒はそれ自身小品であるから、その用ゐる書物の如きもおのづから小ならざるを得ぬ、玩具的畫本の如き可愛小形に作るのが世界普通である。

婦人に至つては、小兒にあらずと雖も小さいものがその優味に調和する、随つて婦人のた

めに作られた禮儀作法の書物や化粧の本や百人一首や往來ものなどは皆極めて小さく出来てゐる。

言ふまでもなく雛壇に備へる書物は小ならざるを得ぬ。内裏様を始め他の人物も小兒よりも更らに小なるが故に、一切の小なる調度と調和せしむるため、小本を要する、随つて雛本で「源氏物語」や「百人一首」や「小謠百番」なども昔から出来てゐる。

用器の小なる爲め小本を要する場合もある。例へば婦人のハコセコに納まる本は豆本でなければならぬ。又昔は、「ガラ／＼」と云うて、貝などの形に作つた煎餅の中に小品の玩具を入れたが、こんな中に入れる繪本などは最小形の豆本でなければならぬ。

尙ほ近世煎茶家は矢鱈に小品の茶器を遊ぶ事となつたが、斯る小品に調和する文房具として圖書なり書畫帖なりも小品ならざるを得ぬ。事實に於て煎茶家は、小品の圖書を珍重してゐる。

第三 秘密を要する爲めに 支那には盛に受験用の小本が出来てゐる。是は科擧で人を登用した時代、考試の時に受験者が、懷中に忍ばせてカンニングをやる道具で、表向試験場へ

携帯を許さないものである。

尙ほ春晝は猥褻のものとして禁ぜられてゐるが、意外の人の紙入に此の物が入つてゐる、昔しの御殿女中のハコセコには多くこれが潜んでゐた、春晝に小品の多くあるのは此の故であらう。

宗教上の儀式に頗る複雑のものがあつて、その順序次第を記憶することが難い、そこで其の次第を小さな豆本に作つて之れを指の間に挿入し、式場で内證に之れを見るなども矢張此の部類に屬するものだ。

第四 調法主義 大部の書物を小形に縮刷するのは、前に掲げた運搬の便利からも來てゐるが、そればかりでは無い。假令ひ持ち運ぶ必要はなくとも、小形のものゝは座右に置くにも調法である。一冊若くは二三冊に縮刷してあれば、幾十冊を翻へすよりも便利である。字書などの如く常に用ゐるものには尤も此の便を感じる。すべて廣汎に必要な書物は一軒の家に幾部も入用することがある。例へば本宅に備へる外に別荘にも要する、本店に必要な外、多くの支店にも必要があるといふやうな場合に應ずるには、縮刷の小本が最も調法

である。

第五 天形本を要せざるもの 書物の内容が大形本を要せざるものがいくらかもある。例へば人名録の如き、圖書其他物品の目録の如き、簡単な語類の如き、俳諧詩歌の類題の如き皆な一行幾許も字数の無いものは小本に作るが紙の經濟になるばかりか、體裁もよいものである。俳句なども十七字であるから此の部類に入る。又印は間々大なるものもあるが、通例小なるが多いから、これも小本に作つてよろしい、事實印譜には小本が多い。

第六 好事家の道樂 敢て廣く流布を目的とするでなく、昔しは好事家が道樂に小本を作つて知己へ配つて自ら興ずることがあつた。今も稀にある。如斯きは營利外のことであるから、版刻も印刷も装釘も美で珍なるものがある。殊に奇を衒ふ爲めに圖外れに形を小さくし、刻師の難んずる繊細の圖まで入れるから、小本の上乗なるものは此の道樂本に限るとも云へる。

此の道樂には二派の流れがある。一は謙遜の意味から、自作の詩歌、俳句、畫などを大本にして出すは憚るとあつて遠慮の上から小さくする。これは罪の無いやり方であるが、之れに反對の流れもある。それは態と皮肉に小本を作つて大なる物を作る人に立て衝くので、此の方には聊か罪もあるけれども、斯る流に屬する道樂者流の作には往々逸品があるものだ。

第七 縮小術の進歩が起因して 縮小術の發明と進歩は小本製作の上に一革命を起した。先づ寫眞術が起り、それを銅版に移し、藥劑で凸凹の面が出来、それが直ちに版となるのであるから、これほど便利なことはいない。昔しの木版には銅版の及び難い精刻もあるが、原本をそつくりその儘縮小することは出来なかつた。畫でも書でも書き直す爲めに原本の味を失つたが、銅ではそつくり原本通りに縮小されるから、亞歐堂や立々堂が始めて此の術を行つた時には、世間は好奇心に驅られ種々のものを縮刷した。勿論多くの覆刻も此の法に據つたけれども、重に玩具にひとしいものが多く出た。例へば錦繪などを一寸四方甚しきは蟲眼鏡でなければ見えない位な縮刷をやつて人を驚かしたものだ。これが爲めに小品趣味を可なりにそつたやうである。それから後に石版が起り、銅版の缺點を補うて、軟か味のある鮮明なものが出来るやうになつて、小本を作るに一層の便利を開いたことは誰

れも知る通りである。併し趣味家は矢張り木彫の縮刷を好んでゐる。但し木彫の縮刷も、今では寫眞術を應用せねばならぬ、これだけは文化の賜である。

五

小本の製造される原因動機はおよそ右の通りだが、更らにどんな本が最上のものであるか、どんな本が珍らしいかと問ふ人もあるが、これは實物を陳列した上で無ければ説明が出来兼ねる。唯だ爰では聊か私の經驗で、およそ某々の條件の備はつたものが佳本であると、アラツボク舉げる以上委曲の説明が出来兼ねる。

一 既に小本を可とする以上は小なれば小なるだけ理想的である譯だが、それにしても餘りに小に過ぎるものは全く實用に供されぬ。例へば竪五分程のものは豆本の中でも最小形に屬するが、それより小なるものは蟲眼鏡をかけなければ讀み兼ねる。自分の集めた中にも此の寸尺のものはあるが、如此きものは實際取扱が困難であるから、いくら小さくともこの二倍大、即ち竪一寸位を最小の限度としたい。

二 小本に最も適する紙は薄葉である。此の紙を用るれば嵩が減じ、シナ／＼して弾力があるから開閉卷舒の呼吸がよろしい。

三 版式は木彫の整版を可とする。銅版や石版や活版は、作るに手がかゝらない丈、それだけ品格が落ちる。細字の整版は彫工の尤も難んずる所であるだけに、技巧もあり趣味もある。

四 寫本も一概に排すべきでない。名家の自筆で精力を注いだものは最も歓迎すべきだ。併し見事な細字を作ることとは非常に難く、昔しは随分これを能くする人もあつたが、今は殆んど無い。巧緻を缺く惡筆寫本は銅版石版に劣るは云ふまでもない。

五 繪のあるべきものには繪がほしい、彩色があれば別して嬉しい。

六 體裁の精美を欲する。小なれば小なるほど體裁の不備が目立つものである。寛文あたりの昔しの小本は匡郭が割合に大きい爲めに天地の餘白が少なく、字形も割合大きいから體裁は醜い。どうしても大本をそつくり或る割合に縮小した體裁で無ければならぬ。

七 装釘も大本と同一で無ければならぬ。小なる故を以て省略があつては困る。勿論装釘の

形式は卷子でも帖子でも列蝶綴ちでも宜しいが、大きなものと同じを欲する。冊子なれば帙を要する、亦箱も附屬してほしい。

八 どんな書が小本に作られてゐるかといふに、普通紙数の少ない小篇が刻されてゐる。即ち「孝經」とか「心經」とか「普門品」とか「百人一首」とかいふやうな有り觸れたものが、幾通りも出来てゐる。小篇は小木に作るに尤もふさはしい又刻するにも容易であるからでもあるのだが、望ましいことは大部の書が豆本より稍々大きな形に刻され、三十冊五十冊の嵩があつたら、如何に吾々に喜ばれるであらうか。「源氏物語」が雑壇用に豆本で二十八冊出来てゐるけれども、それは五十四帖の概要を各冊に略叙したものに過ぎない。銅版や石版では稍々大部のものが出来てゐるが、木版では謠曲本などが最も大部のもので、甚だ物足らぬ感がある。

要するに、小本に喜ばるべき條件は即ち大本に喜ばる、條件で、形に大小の別があるだけの事だ。私のコレクションの中で前掲の諸項にハマル理想的のものも幾らかあるけれども、極めて小形なれば玩具に近く、大部のものは木版に出来てゐないので、あきたらない趣がある。但し三千冊ばかりの小本を雜然と一室にさらけ出して見ると、小人島の書物市に臨んだ様な奇な趣もあるが、一々手に把つて見ると趣味を覚えるものが甚だ少ない。私が肉筆の書畫帖の最小形のもの百ばかり添へたのは、幾ばくか索然たる無趣味を補はんとしたのである。

近頃聞く所に據ると、英吉利で、ある商業組合から皇后陛下に、人形の家とでもいふ様な極めて小さな家屋を獻じた。その家屋には電話でも自動車でも百般の必要のものは悉く備はり、一室が圖書室となつてゐて、それには親指程の豆本が無數に積まれ、當代名家の自筆本が縮めて影寫され、そのみで二百種ほどもあると云ふが、流石に好事も茲に到つては徹底したもので、日本では遺憾ながら、古來これに較べる事の出来る例は一つも見出し兼ねる。

一〇 百筆の蒐集

市河米庵が多くの筆をあつめた掣に倣ひ私も筆を集めたことがある、それは今より十數年前のことで、米庵は實用の名筆を集めたのであるが、私のゆき方はそれと異つて、筆管の意匠を

中心として百種異なるものを集めることに没頭した。米庵と趣向を換へた譯は、前輩の眞似をするのが厭やでもあり、前輩に學ばんとしても時勢が變つて、支那で搜しても名筆が手に入りかねる、古く製した名筆がたまさかあつても、毛が疲れてゐて實用になり兼ねるといふ様な理由で筆管の意匠を蒐集の目標として三四年の間百方搜して、約百四五十種程手に入れた。好いものは少なかつたが、や、可なるものを百種選んで陳列して見ると、種々の色彩が陸離として一種美觀を呈した。容器に就て思ひついたのは、漢法醫が昔用ゐて今は不用に歸してゐる藥籠箱が、割合に精巧に出来てゐて、四五の抽子があり、尺長の筆でも優に入る奥行があるので、筆の容器とするには屈竟のものであつた。此の箱を四五個搜して、それに筆を類別して装置し、時に出して之を玩んだ。こんな道樂は多くの人がやらぬと見え、往々訪ひ來つて、一覽を乞ふ者もあつた。

筆は文房器の内でも尤も大切のものであるから、古來、筆管に意匠を凝したことは一と通りでない、僅かに百餘のコレクションに就て見ても、其の意匠の多般であるのに一驚を喫する位である、若し千種も寄せたなら一層興を覺えたであらうが、さうは氣根がつかかなかつた。集めた筆の内には和漢兩様あつて、中には飾り筆として作つたものもあつた、好事家が物數寄に奇を衒つて作つたものもあつた、支那に倣つたものや日本の上代の筆に倣つたものもあり、多様多般であつたが、今左に材料別に十二類に分つて聊か意匠の大略を註して見るが、凡そ這般のものは實物を見てこそ興味も感ずるが、書いて見ると、其の百分の一も髣髴し得ないから、案外に面白味が無い。

(一) 竹 普通の材はこれである。但し竹にも種々の種類がある、ウンと張り出した節を二つ程そのままに筆管としたのがある、之れは羅漢竹である、斑竹は虫の巢が印した痕をいふのだが、朱斑竹が最も美である、煤竹があり、小町竹といふ實竹があり、籠の如く細かに編んだのがあり、筆管の上頭に毛を植ゑる代りに、サ、ラの如く、竹を細かに叩いて毛に代へたものがあり、布袋竹といふ多節のものがある。概して竹管には刻字を以て趣味を添へたものが多く、筆銘、筆工の名字の刻してあるは勿論だが、或は「心經」の全部、赤壁前後の賦などを細刻したのがあり、或は山水や人物を刻したのものもある。

(二) 木 木は各種を用ゐてゐる。紫檀は最も通例であるが、趣味のあるのは黄楊木であ

る、白檀其他香木もあり、樹皮のあるま、材料としたものもある、櫻の皮を張りつめたものもある、又萩を木地そのまゝに用いたものもある。意匠はいろ／＼であるが、彫刻に頗る念の入つたものがある、明代のものなどには雲龍や花卉や人物が透し彫となつてゐて、高雅驚くべきものがある。漆や蒔絵を施したのも木が材料であるけれども、それは其の部に陳べる。高雅の趣は木地そのまゝの所にある。

(三) 漆 全部漆を材料とし、それに彫刻を施したものが堆朱である、これには各時代のものがあつて、貴いのは明代のもので清朝の作は品が下る、筆の内でも價の貴いのはこれである、黒の漆で作つた同じものを堆黒といふ、或はグリといつてゐる、これには一種の特徴ある影を見る。髹漆に至ては百端であるが、總體金泥で塗潰した無地のものが日本の貴族に用ゐられた。銀地の上に薄く漆をかけたものを白檀塗りといつてゐる。沈金彫といふがあり、擬堆朱があり、外國の塗り方を摸したものにコマ手があり、キンマ手があり、共に一種の風韻がある。蒔絵は純日本式の筆管に多く見るが、皆貴族殊に婦人の料である。

(四) 陶 陶製も甚だ多種である。萬曆赤繪には多く龍の文様がある、高麗の雲鶴手や青磁や黄瀬戸や紫泥なども稀れにあるが、染付が最も喜ばれる。すべて陶筆は作るに多少の困難があり、保存にも困難がある、染付の細筆の鞘まで具足してゐる一對で、それが古渡りとなると非常な價がある。畢竟保存が困難であるので、無疵ものが容易に手に入らぬからだ。煎茶家が珍とするのもこれである。

(五) 硯 白硯、青硯、紅硯、種々あるけれども、紅硯を尤も珍とする、但し時代がなければならぬ。水晶や礪礪やガラスも此の部内に入る。此等の材に彫刻を施すことは至難であるから普通無地である。

(六) 石 蠟石や凍石、稀れには鶏血石や黄蠟などで作つたものがある、硯と違つて質が軟かであるから、畫や文様が刻されてゐる。硯と共に缺點とすべきは重きに過ぐることで、飾り筆たるを免れぬ。

(七) 鐵 明珍風の製作で軽く出来てゐる、勿論中はウツロである。自分の得たのは細管で、銀象眼があつた。

(八) 銅[△] 宣徳風の黄銅やサハリなどのものがある、軽く出来てゐるのが實用になる。塗金のあるものもあり、彫刻のあるものもあるが、多く象眼がしてある。

(九) 螺鈿[△] 貝を蒔繪の中に装置したもので、精巧の作で時代のあるものは極めて高雅なものである、七寶は其類を異にすれども假りにこゝに入れてゐるが、これも極めて美觀のもので、幾種もあるが、明代のものが高雅で、清朝のものは頗る品が劣る。

(十) 金銀[△] 銀製の筆管は強ち珍らしくないが、金製のは自分の手に入らなかつた、併しあり得るものであらう。此種のもものは案外に俗氣があつて趣味が薄い。

(十一) 牙[△] 此類には角や骨をも入れる、割合に多くあるのは象牙である、純白に木地を露はしたものが高雅で、彫刻を施したり朱漆で文様を畫したりしたものは概ね木地がよくな

い。
(十二) 雜[△] 筆草といふ一種の植物がある。これは細い毛髪のごときものが、幹の一端に叢生してゐる、それを利用して毛筆の代りに用ゐる。又紙筆といふは、唐紙や奉書の如き紙を巻いて管の如く圓くし、其の上頭を削り細めてボサ／＼と和らけ、毛に代へて用ゐるも

のである。

材料別に類を立てると大體右の如くであるが、これは自分の僅かのコレクションの實驗から擧げたに過ぎぬ。筆管の意匠も他の調度の意匠と同様で、工夫次第でどんなものも出来るから、材料は凡そ十二類位としても、意匠には限りがない筈である。

大體筆管の形は眞直なのが正則であるけれども、時には管の上部のふくれたのがある、亦中程のふくらんだのものもある、鞘もそれに應じて胴のふくれたのがある。母子筆と唱へ、筆管の底から中小の筆が出る装置になつてゐるものもある。極めて稀れにある例だが、人骨を筆管に作つたものがある。太宰府の吉嗣拜山は右手を失つて、左手で畫を書いたが、筆の管には自家の右手の骨を材料として作つたと聞いてゐる。自分の蒐集は筆管を主としたものだけれども、毛が失せてゐるものは興が無かつた、必ず相當の筆工に補つて貰つた。往々鞘の缺けてゐるものもあつた、これの補足が尤も困難であつた。明代の年號や名工の名の刻されたものや、滿洲文字や梵字や名家名流の名が刻されたり、詩歌など刻されたものは意匠以外に興味を添へ、尤も好ましいものであるけれども、斯るものは希有で、集めたもの、内で此種は極めて少なかつた。

私が筆管の蒐集に没頭した頃、ある友人は筆を置く書齋を不律庵と名けて庵記を寄せた、不律は筆の異名であることは申すまでもないが、人に律せられない我儘生活が私の好む所で、不律の二字が氣に喰つたので、一時、書齋の名としたこともある。

一一 印の趣味

私は篆刻には全くの素人である、唯だ印を遊び印を愛する所から印の趣味に就て多少の説を持してゐる。勿論その道の人に言ふのではない、印に理解の無い人に聊か印に五つの趣味のあることを、つとめて平易に説明して見ようと思ふ。

一體、印ほど多方面の趣味のあるものは無いと云へる。第一に金石趣味があり、第二に書畫趣味があり、第三に文學趣味があり、第四に工藝趣味があり、第五に骨董趣味がある。少くともこの五類に分つて云ふ程の事があると思ふ。

印の刻法などの事は略するとしても、印が實用から、おひくゝ趣味的に取扱はれる様に推し

移つた次第くらゐは、ざつと語る必要があらうと思ふ。凡てのものが實用から始つて、それがおひくゝに趣味のものとなる。例へば、刀劍のやうなものがそれである。刀劍は實用本位から云へば、唯切れさへすればよいのである。それが段々發達して、焼きの味だとか匂ひだとか品位だとか、色々やかましくなつて、初めは裝劍の事などは何うでもよかつたのであらうが、おひおひ裝飾の附屬品まで美術的になつて來て、實用と共に、刀劍に美術的趣味が非常に加つて來た事は誰も知る通りである。印も亦その通りで、古昔支那の秦漢時代には、印は全く實用のものであつた。その實用の一例を云へば、選叙に用ゐる場合、即ち某官に任ずると云ふやうな時に、辭令を渡す意味で、その官名を刻した印を與へた。そんな譯だから、戰爭中でも、官名が變ると咄嗟に印を刻して與へなければならなかつた。即ち陣中に於ても、印を刻したものである。斯様な時代には、印は實用本位で、印材なども極めて質朴なもので、鈕なども、大抵は連環或は鼻鈕と云ふやうな極めて簡單なものであつた。然しこの印が、勳章同様の大切なものである所から、非常に重んぜられ、人の貴ぶものであるから、自然印を彫るにも名手を選んだに相違ない。

斯様な實用本位の時代でも、色々官等の階級により、印材も體勢も、異ならざるを得なかつた。即ち玉や金銀などを、階級の高い所には用ゐねばならぬといふ所から、こゝに裝飾が自然に起つて、そろ／＼趣味のものとなつて來た。例へば國璽とか、皇帝の璽とか、官印など云ふものは、それ相應の權威がなければならぬ、従つて材も體勢も、殊に鈕なども、堂々たる面目がなくてはならぬと云ふ自然の必要からして、印の素朴な時代に於ても、此等の印だけは、如何にも立派なものであつた。日本に今現に存在する委奴國王の印と云ふものは、漢から日本へ渡つて來たものであるが、それは純金で、決して素朴なものと云へない所から見ても、其一端が知れるであらう。秦漢と云へば頗る古いから、凡ての藝術が幼稚であつたらうなど、考へるは大なる謬りで、その時代に鑄金術なども發達して居た事は、漢鏡を見ても分り、又篆字の高雅なる事、刻法の嚴正なる事は實に驚く可き程のものであつて、漢以來支那で千年も苦心して居るけれども、到底之に及ばない程のものである。それだから、實用本位時代に於て、既に自然に備はる文學趣味も、鑄金趣味も、彫刻趣味も、後世を壓するものがあつた。

然るに、世が段々推し移るに従ひ、恰も我が刀劍に於けると同様に、愈々趣味的に進化して、終に明代に於て頗る印界に精華を發した。先づ、支那の皇帝の用ゐる印が如何に多様であるかを見ても、その一斑が想像される。日本で天子の印と云へば、唯大きな一つの印しかないが、支那では天子の印が少くとも二十顆くらゐある。それは捺す場合々に依つて異つて居るので、その種々なる場合に捺す印の事は「徐氏筆精」に掲げてあるが今は略する。それで此等二十顆ばかりの印は皆八寸角も有るやうな大きなもので、材は玉或は金銀などである。そんな者を今日撃する事は出來ないが、いつぞや乾隆帝の妃の印を見た事がある。是は支那の騷亂の時に、まぎれて日本に來たものだが、七八分ばかりの立派な青玉で、鈕も堂々たるもので、殊に純金の印覆が附屬して居た。此等を見ても略々想像がつくのである。又いつぞや日本と支那とが條約を訂結した場合に、兩國の全權が互に調印をする段になると、支那全權の印の如何にも堂々たるに對し、日本全權の印が甚だ貧弱で、とても太刀打が出來ないので何と無く恥入つたと云ふ話もあるくらゐで、流石に支那は印の本場だけある。

ずつと古くは、印は唯氏名、官名などを刻するに止まつたが、段々他の風流の文字や語を刻することに成り、所謂遊印なるものが行はれて、鈕などの體勢も益々進化して、禽獸などは勿

論、やがて山水、人物、花卉、佛像など云ふものをも作るやうになつた。此等の變遷は今委しく語る事は出来ないが、およその推移は先づ一通りこんな工合のものであるとして、専ら趣味に就て語る事とする。

一、金石趣味

金石と云ふ事に就いては、長々しい説明はいらぬと思ふ。即ち鐘鼎なり碑なりを云ふのであつて、支那が尤も之れに富んで居る。凡べて古いもので後世に傳はるものは金石の外はないので、考古學者の尤も大切に考へるのは、この意味に於てである。支那には古くから碑を建てる習慣もあり、又鐘鼎なども、祭器に種々な文字を刻するの習慣がある。此等は極めて古い時代、即ち三代頃から既にこの習慣があつて、斯様な古い時代を知らんと欲すれば、是に據るより外にないのである。碑なども、支那歴代の者を數へたら、殆んど無數とも云へる程のものであるが、色々の場合に破壊されたり、或は建築の用材となつて大分失はれた。それでもまだ澤山に残つて居る。さてこの金石に刻されてゐる文字は、學者や好事家に珍重せられて、

その拓本に依つて字學を研究したり、史料をあさつたり、老蒼の古代を味はつたりするものが支那には甚だ多くあつた。それが一種の高い趣味となり、日本にもその流れを汲んだ人が澤山あつて、一派の趣味を成して居る事は人の知る通りである。

印も亦金石の部に屬する。この金石の部では、印は尤も形の小さなもので、古くは秦漢からあり、その字は當時刻されたものであるから、字學を研究し、史料を補ふ點に於て、碑や鐘鼎と同様の價值がある。殊に印は形が小さいけれども他の金石の及ばない特長がある。と云ふのは、碑石の字などは皆石工の刻するものであるに反して、印は相當の學力の有る者が、自から刻すると云ふ習ひになつて居るのであるから、その筆力や風韻は、碑などの及ぶ所で無いとも云へる。且つ碑には餘り篆字は多くないが、印には篆字が、殆んど本位となつて居るから、篆書を味ふには、印でなければならぬと云ふ特徴もある。勿論、鐘鼎に於ても、字は篆體に刻されて居るから、印は矢張り鐘鼎と比すべきものである。

近來鐘鼎などで六朝あたりのものが盛んに掘出されて、昔の人の見る事の出来なかつたものが、今どしどし見られるやうになり、印も同様で、彼方此方から秦漢あたりのものが掘出さ

れ、これ亦頗る數を加へて來て居る、金石趣味は爲めに益々弘がつて來た。印は頗る形の小さいもので、碑の如く動かないものとは違ひ、又鐘鼎の如く重いものでもないもので、几案の上之れを玩ぶことの出来る程のものであるから、金石趣味を味ふには尤も重寶なものである。

二、書畫趣味

印に書畫の趣味のある事は、深く説くまでもない。然しそれにしても、言ひ洩す事の出來ないのは、元來印は鐵筆で書いたものであるのに、上手に刻したものになると、何處となく軟か味がある、即ち漢印などには、最小の字劃の間に、えも言はれぬ軟か味が寓されてゐる。この軟か味は書法に於て尤も大切な所であつて、印の書を味ふ中心はこゝにある。明代あたりに印刻の名手が盛んに起つて、非常な花を咲かしたが、軟か味に於て、どうしても漢印に及ばぬ。漢印は自ら字に品位があつて、後世に學び得ない威嚴がある。漢代の書の趣味と云ふものは、色々の碑や鐘鼎などに依つても味はれるのであるが、印に於て別して味はれる仔細は、例へば、前に言つた通り、碑には篆字が少い、鐘鼎は多く篆字に書いてあるが、鐘鼎と印との異る

所は、鐘鼎は可なり廣い面に字を彫るので、従つて字の布置なども單調であるが、印となる所は、多くは方一寸、或は一寸五分、小さいものは何分と云ふくらゐのもので、そこへ幾何かの字を填めるのであるから、字の布置安排が餘程大切な條件で、その調子が取れないと云ふ事になると、全局の造り損じとなる、これは他の金石にはない、印に限つて苦心を要する一の特徴とも云ふべきものである。要するに、印面の文字は僅か四五字、乃至十字二十字と云ふに過ぎぬ、そしてその間に神采奕々たるものがあらねばならぬと云ふ譯だから、書の趣味は尤も印に籠つて居ると云はれよう。

書の趣味に就いては、誰も理解が出来るが、私は更に印の文字に書趣が存すると言ひたい。それは印に畫を刻したものを云ふのではない、篆字に自から書趣が有るのだ。先づ、印には朱白の刻法がある。朱字は崛起したもので、山嶽丘陵に比すべく、白字は凹刻で、河海、沼湖に比すべきである。朱白の二顆を上下に捺した有様は、山河を合せた形貌を具備する。又往々一顆の中に朱白錯綜の刻法もあるが、これは一顆の中に山河を併備するやうなものである。それでこの凹凸の刻法から自から書趣を感じ得るが、そのみではない。元來篆字は象形文字であ

るから、字それ自身に畫趣がある。例へば鴛鴦の二字などは、鳥の形をそなへて、布字の按排で、抱き合つて、どれが上か下かも分り兼ねるやうに刻されて居る。此等は何と云つても全然畫である。この他、月、山、林、木、雲、花、鳥と云ふやうな手近い象形文字は、いくらもある。こんな字のある印面は、その文字の象形に依つて觀面に畫趣を感じる、強ひて聯想の爲めとは云へぬ。全體印面の字の按排配合、字の長短粗密は、恰も畫を作ると一般で、ホンの少しばかりの不調和があつても全局の遣り損じとなつて、美をなさぬ。畫に一木一石の不釣合があつても、畫が破れると同然である。されば字が必ずしも物を象らずとも、自から畫趣を感ぜしめるのである。風景に例へて見れば、字の密なものは深緑の夏時を想はしめ、字の粗なものは落葉寥零の秋を想はしめる。嚴正の字を見ると莊重にして衣冠の人を想はしめ、飄逸洒落の刻を見ると仙客を想はしめ、或は嬋妍婀娜、美人に較ぶべき者もある。字の姿勢は頗る多様で、長短あり、肥瘦あり、蒼老あり、輕妙もあつて、刻者の精神の注ぐ所、字は印面に活躍して生氣横溢し、何とも云へぬ味があつて、死物である印に生きた趣致が存し、名刻に對するときは、自ら畫に對するの心地がする。印面に畫趣を感ずると云ふのは、決して牽強附會の説でない。

三、文學趣味

翻つて、印文印語を見るに、こゝに一種の文學がある。氏名の印は別として、遊印には種々の語を刻する。それには箴言あり、諷刺あり、抱負を寓するあり、禪語、茶語、酒語、遊戲の文など、千差萬別で、往々字數の百にも上る長篇を刻する事もあるが、印は形の小さいものであるから、語は簡潔を欲する、簡潔を欲する結果として、語でも詩でも、多くは約するのが例となつて、こゝに簡勁な一體の文が生れる。即ち印語は詩に似て詩にあらず、詩よりも寧ろ含蓄の深いものだ。更に言へば、詩の滓を去つて、その膩を絞つたやうなものだ。印語に寸鐵人を殺す的の譬語の多いのは、その爲めである。印語は確かに一種の文學である。僅かに二字三字で、百言にも匹敵する簡潔な文は、尤も高雅で、印文に興味を感ずる所以はこゝに存する。尙ほ、印の文學は印文のみでない。印には刻者の款識がある。これは鈕に刻するを例として居る。古くは干支年月、刻者の名くらゐを刻したものだ、近世に至つて可なり長い款識を刻する事になつて、冬心齋の如きは専ら長落款を刻した。長落款は恰も書畫に於ける題贊と一般

で、刻者の作意、抱負、刻する時の心持、印文を選んだ所以、人に依囑された所以、人に贈る所以など、其の趣向は色々だが、この小品の文にも一種の味があつて、こゝにも亦文學趣味を感ずる。

四、工藝趣味

工藝趣味は印材の製作に存する。この製作は一種の美術であるが、製作のことを云ふ前に、材に就いて少しく語らねばならぬ。材は頗る多様多般で、玉、石、金銀銅鐵、水晶、瑪瑙、木、竹、牙、犀角、陶など、色々の種類がある。玉には青玉もあれば、紅玉もあり、翡翠もある。石には凍石もあれば、蠟石もあり、出産地に就いて種々の名がある。壽山とか、昌化とか云ふのは、皆産地から得た名で、それ〴〵特徴がある。木には紫檀もあれば黄楊もあり、梅とか、扶桑木とか、一々擧げる事の出来ないほどある。瑪瑙や水晶などにも、種々の別がある。又石の中で凍石や蠟石にも色々種別があるが、一々擧げる事は煩はしい。この多くの印材、殊に尤も多く用ゐる石材の、尤も雅なるものは支那に産し、他國はとて及ばぬ。支那は妙に文房に

適する雅石に富んだ國である。石ばかりではない、玉も水晶も、支那産でなければ印材とする事が出来ぬ。此等の材は單に刀のアタリがよいと云ふばかりでなく、天然に人の寵を得るの質を備へて居る。その玲瓏の質、その燦爛たる澤、五彩目を奪ふの色は何とも云へぬ美である。就中、凍石と云ふものは、織緯のないもので、品位頗る高く、色彩は種々であるが、その貴い者は黄金以上である。昌化石は通例雞血石と云うてゐるが、その斑が濃厚の血の如くで、人受けのよいものである。蠟石も白色のものは如何にも美事で、牛乳の固形體を見る如くである。此等數多き材を錯綜して、一盆に載せて見ると、五彩人の目を眩するものがある。されば材だけでも人を惹きつける趣味がある。然しその美は、加工の後に發する。加工の第一は、石理を去るに在り。磨り淨めるに在り。面白斑をあらはすに在り。石材も、切り様に依つてはアタラ美事な斑を全く失ふ事もある、そこに工藝的手腕を要する。加工の次第は、多く鈕を作るに在り。材身に山水や人物などを薄く彫るものもあるが、材の上頭に種々の形を立體的に彫る事が尤も多い。例へば獅子、馬、牛、象、龍、或は人物羅漢、或は果物花卉、或は樓閣などの類を刻する。この刻で材の美は益々美を加へて來る。如何に印の趣味を缺く人も、是を見て趣味を感

せずには居られないことになる。この鈕の彫刻は一種の技能を要するもので、その作に一種の風韻と雅趣とが具はらねばならぬ。これを缺いては、文房の具とはならぬ。例へば根付などを巧みに彫刻する工手は、印の鈕を彫り得るであらうと思ふ人もあらうが、どうも成功せぬ。形は出来ても、俗に落ちて風韻が備はらぬ。

支那製の鈕は如何なる工手の作か、曾つて作者の名は傳はらぬが如何にも妙を得てゐる。日本の工手は假令ひ彫刻をよくしても、印の鈕を作るとなると、とても及ばぬ、鈕の彫刻は一派の藝である。兎もすると、印人自身鈕を作る事がある、それが却つて成功する事のあるのは、藝は拙でも風韻があるからだ。鑄印も同じ事で、蠟型を作るに、石に刻すると同様の技能がいる。普通の鑄工の作つたものは矢張り風韻が無いので、印人自から蠟型を作る事が多い。又陶磁の印も、普通の陶工が作つたものは多くは出来過ぎて、風韻を闕く嫌ひがある。少くとも印の趣味を解する陶工で無ければ成功せぬ。要するに、印を工藝品として見ると、最も高雅の美術に屬することは謂ふまでもない。

五、骨董趣味

前に印は金石の尤も小なるものと云うたが、其小なる所に骨董趣味があるので、是を几案の上において遊び、又掌上に撫摩するのも小形であるからだ。古い印には出土品も少くない、古戰場などから往々掘り出すのは陣歿者の佩用したもので、歴史上の記念品である。中には往々名の聞こえた人の氏名や官名などを刻したのもあつて、そこに骨董趣味が生ずる。又漢代などの玉印は、風化作用で、その質が甚だしく變じて、不透明のものとなつてゐるが、そこに亦蒼古の味があるとして骨董家に玩ばれる。骨董は元來來歴を貴ぶものであるが、印ほど來歴の確然たるものは無い。その刻してある名が、直ちにその來歴を語るものである。同時にその手の澤を経た珍藏品であることは、言ふまでもない。更に進んでその材が珍貴であつたり、鈕などの加工が秀で、もゐるとなれば、こゝに亦一段の骨董趣味が添はるのである。印は自用のものでも、文房中大切な位地を占めるものであるが、希覯の古印などになると、文房の雄に推さるべきものである。

以上五類に分つて、それ／＼の趣味を案するに、印ほど、形の小さな割合に多方面の趣味のあるものは無いと云ふことが出来る。多くの趣味ある物品は、骨董趣味や工藝趣味があつても、文學趣味が闕けたり、書畫趣味や金石趣味があつても、工藝趣味や骨董趣味を闕いたりするのがいくらかもあるが、すべてを具備してゐるものは印である。卒然として印を見ると、單に一塊の金石で、實用を足すためにはゴム印でもよい様であるが、それは趣味を問はぬ人達の言ふ事で、共に印を語るべき資格の無いものである。

一二 書齋六面觀

世間一般を見渡すに、最も書齋の必要を感じる讀書家著述家といふ方面の人は、多くはその境遇の不如意からして書齋らしきものを持たず、大抵は普通の室を以つて間に合せてゐる。却

つて書齋をさほど必要としない方面の人が、美しい書齋を構へてゐる。此等の書齋は、多くの場合その家の裝飾となつてゐる。設備の目的が最初から實用的でなくて裝飾にあるのだから、美麗でもあり風流でもあり、一見整然として何一つ散亂してゐないのみならず、調度や總べての設備に數寄を凝らして頗る雅趣に富んでゐる。併し此等は書齋の本來の面目を發揮したもので無い。

凡そ書齋の本領は裝飾であるべきでない、いはゞ仕事場作業場である。勿論主人の性格嗜好で、常に整然と片付いてゐる事を喜ぶ人と、紛亂雜然たる中に平然たる人とがあり、或は極めて俗なところを便とする人と、雅なところを樂む人とがあるけれども、仕事場には仕事場たるの面目を具へなければならぬ。

書齋は主人の業務に因りても自ら趣を殊にすべきである、その著しい種別を試みに擧げて見れば、先づ左の六種となる。

一、僧房の書齋。

二、俳人の草庵。

三、書畫作家の書齋。

四、理化醫家の書齋。

一二 書齋六面觀

四五五

五、鑑賞家の書齋。

(一) 僧房では先づ多くの場合住職の平常の居室が書齋を兼ねてゐる。その特色としては、室は必ず風致に富んだ庭に向つてゐる。その室は假令貧弱であつても、庭だけは先づ誇るべき趣を備へてゐるのが通例である。それから室の床には佛像があり佛具が具はり、香爐や花瓶なども揃つてゐる。藏書が積まれてある中には經卷の類が必ず發見されるのも、その一特色に數へねばならぬ。

(二) 俳人の草庵といふのも或點では僧房の書齋に似たところがあるが、然し専らワビを好む、従つて室内に閑寂の趣が漂つてゐる。室内には多くの物を置かず、縁先には寛の水を引くとか、寂びた庭の様子も清貧に甘んずる風を見せてゐる。

(三) 畫家の書齋は多く畫室その物であるから、普通の書齋とは大いに趣を殊にしてゐる。書家のも先づ大體に於て畫家と趣を同じうしてゐるが、共にその室は比較的手廣であり、光線も十分に採り入れてゐる。多くの書籍を置き並べることが無い代りに、大きな毛氈が室の中央に延べられて威張つてゐる。傍には筆硯の類と印の小籠笥などがあり、繪具皿や揮毫用の品々が

陳列されてゐる。

(四) 理化學或は醫學方面の人々の書齋は、多くの場合ラボラトリーである。従つて他の書齋に見ない機械や藥品や標本などが澤山並んで、書籍と共に重要な物となつてゐる。室内へ水を引いてあるとか、加熱の設備があるとかいふ場合には、和風の疊敷でなく洋風になつてゐると勿論である。

(五) 書畫骨董を品評したり鑑賞する人の書齋は、勢ひ書畫骨董の類が眞贋様々に持込まれて堆くなつてゐる。この部に屬すべき人に蒐集家といふやうな方面がある。古錢を集めるとか、刀劍、古鏡、土器などを集めるとか、郵便切手やマツチのペーパーなどを集める。さういふ人の書齋には、徹頭徹尾その唯一の條件に合つたものだけが置き並べられてゐることが毎度である。

(六) 洋風の書齋は、單に建築上から和風と違ふから一類としたに過ぎぬ。先づ大まかに考へて、書齋に右のやうな種別がある。

さて書齋はその人々の仕事場であつて裝飾で無いとすると、書齋ほど大切な室はない、左に

書齋を六方面から觀察を試みよう。

一、書齋は或人に取つては家の要部である

文人などでは、書齋は一日の中最も長く居る處である。随分、夜深しもする處である。家の要部であらねばならぬ。その構造は便利に、健康に適ふべく、居工合がよくなければならぬ。更らに委しく云へば、清閑であらねばならぬ。光線、風透しがよくなければならぬ。鬱を破ることが無ければならぬ。——例へば窓外に庭を見るの類である。それを思ふと、陰氣な茶室をそのまゝ、書齋にあてる等は最も當を得ざるものであらう。又日本では家中で最も大切な場所を來客用の座敷にするが、西洋では書齋や居間を重んずるのも此の所以である。

二、書齋は或意味に於て秘密の室である

著述を事とする人の書齋などには書類の散ることをおそれる。書きかけの原稿で人に見られるのを忌むものもあらう。時を惜しむものはこゝに立籠つて、留守を遣つても知れぬ場所が書

齋である。懇意の友人は別として、書齋には多くは客を引き入れない。秘密の室であるから自然秘密のものが此處に置かれる。家族の寫眞とか愛人の肖像とか、他人に見せることを憚る日誌とか、時には家用簿、著作の種本、畫稿、詩人ならば詩の初稿、政治家ならば運動の懸引に關する書類の如き、多くは人に示す事を憚るものなどが此の室に置かれる。昔から、人の性格によつて、書齋には絶対に家人と雖も入ることを許さなかつた人もある。書類を紛亂されるのなどを許さぬのが主因だが、兎もすると秘密の何物かあつて、人に見られることを厭ふ場合もあるやうだ。

三、書齋は或意味に於て家の寶庫である

書齋は讀書著述の場所であるから、多くの圖書は便宜上こゝに備へ付けられる。勿論書齋の廣狹、其の主人の貧富により、別に倉庫を有する人のごとき、書物は倉庫に藏する例外もあるに相違ないが、大抵愛玩の圖書は手近く置くのが例である。倉庫の備はらぬ家に於ては圖書は積み得られる限り爰に置く。圖書ばかりでなく、其の人の珍藏のものは書畫文房何によらず此

處に置く。手近に置いて親しまんためからも、紛失散亂を防ぐ上からも書齋に置くは安全でもあり、檢索にも便利であるからである。此の點からすると、その人の愛玩品の藏せられる所が書齋で、書齋はその人の寶庫と云ふべきである。

四、書齋は又趣味の場所である

書齋は、或意味に於て仕事場である。著作家などには精神上の工場とも謂へよう。併し書齋は必らずしも著述家ばかりの者ではない。讀書著述家にしても常住坐臥の處だとすると、おのづから精神を慰めるものがなければならぬ。そこで盆栽を置くとか、畫幅を掲げる位は、どんな無趣味な人もやる。少しく多方面に興味を有する人になると、古風で行けば爐を切つて茶を煎ずるもあらう、香をきくもあらう、こゝに酒具を置いて杯を傾くるもあらう、所謂燕樂の處だ。或は謠曲や長唄などをうなるもあらう。種々のスポーツを計畫するもあらう。何れにしても其の人相應の趣味が少くともこゝに現はれる。

五、書齋は策源地なり

書齋は靜思の處だ。わるいことを考へる奴がこゝに坐すると、碌なことを考へ出さぬ。昔なにかしと云ふ支那の宰相は、その書齋に半日閉ぢ籠ると、必らず翌日は虐政を行つたといふ。よい方になると、天下國家を益する大思想もこゝから生ずる。政治家、文學者、宗教家の震天動地の大なるプロダクションは皆な此の室から生れる。實に一家中の大策源地がこゝである。人體に譬へると、書齋は腦髓であらねばならぬ。シニークスピヤもルソーもカントも皆なこゝから不朽の作を出した。

六、構造如何

既に書齋に以上云ふ如き多方面の重大な意味があるとなると、これが構造の工夫にも自ら念が入らねばなるまい。日本の習慣として日々使用もせぬ座敷に主力を注ぎ、位地も宅地の要部を占め、金も専らこゝにかけるのが常であるけれども、他人に虚勢を張るよりも常住坐臥の自

家の書齋に力を籠めることが肝要とも云へる。別して讀書家著述家などの書齋には其の構造に工夫がある。但し銘々の流儀や趣味や嗜好にさまざまの違があるから、他人が如何に工夫しても、それが何人にも調法がられ歓迎されるといふ譯にはゆかぬ。世間普通に、他人の建てた家は不便だと誰しも云ふ位である、況んやその個性に最も關係ある書齋に於てをやだ。

併し大體の注文を云はしむれば、屋敷内の清閑の處を選びたい、立關の客の聲が直ぐ聞こえる處などは困る。日當りのよい風通りのよい、庭の要部に面する様な位置を占めたい。隠居らしく成るべく邪魔にならぬ處など、云つて、屋敷の隅に建てるなどは古風な遣り口で、書齋を牢屋と同視するものである。

書齋はなるべく二室ほしい。一室は洋風、一室は和風にして、洋室は廣く和室は小さく、兩室の間には襖はいらぬ。部屋は南を受け東の明いてゐる様にしたい、そのために和室は東寄りになりたい。人によつて、書齋の薄暗いのを好むもあり、明るく輝くのを欲するもある。著述家の性癖は東西甚だ區々であるが、十分の光線を取り又風通りのよい様にしたい、明暗はカーテンでいくらでも調節が出来る。書架は洋室の方に相當の工夫をして、和洋兩書を十分置き得

る様に、且つ場所をとらぬやうに壁の中に作りつけにしたい。燵も洋室に据付ける。その燵を据付けた上には、壁に箆め込む様にして二三重の棚を架し、文具の類を置く所にしたい。机は和洋共なるべく大きなものを用ゐるが調法である。文具を置くにも、書物を廣げるにも、書きかけの原稿を載せておくにも。

洋室の机邊には別に適當の書架を要する。常用の書物は足を勞することなく直ぐに手の届く所にありたい。

椅子は極めて低からんことを要する、聊か高くても疲勞し易い。また洋室には安樂椅子もない。壁際には相當に物の納まる抽子付きの洋箆筒を据付けて、大切なもの、書畫の類などもこれに入れるとしたい。それから小卓子を置いて二三の椅子を添へ、來客の用に供したい。おおよそ此等は皆洋室の方に置くが便利であるから、勢ひ其の室は比較的大なるをよしとする。勿論なるべくスペースを利用して、體裁を破らぬ限り、むき出しの棚、或は隠れた棚を作り、物の整理に供することが肝要である。

尚ほ又、洋室には庭に臨んでベランダを設けたい。必ずしも大なるを要しないが、夏時涼を

納れ、或は月を賞し、或は一杯を傾くるに妙であらう。

日本室は椅子に飽きた時に移る用に供する。窓近く大なる机を置く外、餘り多くのものを置くに及ばぬ。しかし茶器を用意し、日本畫幅などは此室にかけたい。

最後に一つ肝要の注文があるのは、此の書齋に隣つて寢室の欲しいことである。深夜何時にても書齋に出入の出来ることは讀書家著述家にとつて最も大切であるのは言ふまでもない。

浴室までこれに備はれば申分ないが、廁だけは是非備はらねばならぬ。

一三 酒趣百則

(一) 酒中の趣を云ふ者古來多し、而して遂に支那人に及ばざるなり、李白が「天若不愛酒、天不在酒星、地若不愛酒、地應無酒泉、天地既愛酒、愛酒不愧天」と、何ぞ其の着想の雄大なる、又曰く「三杯通大道、一斗合自然」と、其の規模の大にして含蓄の深き、百言千語、酒趣を言ふも此の詩句の外に出づる能はず、支那は文字の國、而して酒文學の國なる哉。

(二) 曰く杯賢と杓聖と我れ萬戸の封を與へん、曰く酒國長春あり、曰く酒狂天地を空しうす、曰く酒は愁城を衝いて奇兵を出す、皆な酒の徳を頌するなり、而して酒の美を言うて其色其器其趣に及ぶもの、人口に膾炙するの詩あり、云く「蘭陵美酒鬱金香、玉碗盛來琥珀杯、但使主人能醉客、不知何處是他鄉」

(三) 戴逵の酒讚に云く「醇醪之興、與理不乖、古人既陶、至樂乃開、目絶群動、耳

隔_レ迅雷、萬異既冥、惟無_レ有_レ懷_レ醉中の趣を悉して遺憾なし、而して余は釋法の酒頌を喜び常に誦す、云く「酒天虛無、酒地綿邈、酒國安恬、無_レ君臣貴賤之拘、無_レ財利之圖、無_レ刑罰之避、陶々焉、蕩々焉、其樂不可_レ得而量_レ也」

(四) 列子も亦酒の徳を擧ぐ、曰く醉人車より墜ち敢て死せざる者、骨節人と異なるが故にあらず、其神全きが故也、渠れ乗るも知らず、墜つるも亦知らず、死生恐懼は其胸中に入らず、故に物に觸る、も敢て懼れず、渠れの全きを酒に得る所以也と、醉人蘇養自像に讚して「松風颯々、瘦藤在_レ手、惟此白叟、獨全_レ於酒」と云ふもの即ち列子の語を藉る也。

(五) 高啓歌つて曰く「莫_レ惜黃金醉_レ青春、幾人不_レ飲身亦貧」酒を飲むと否と必らずしも貧富に關せず、俚語に酒飲まず藏を作らずとあり、青春に醉ふは人間一代の歴史に關く可からざる頁、是れ無ければ趣味を闕き活氣を闕き、アタラ歴史を寂寞たらしむ。

(六) 酒趣は境に因つて多し、花晨月夕皆な酒に可ならざるなし、古人曰く「花前惟以_レ醉爲_レ郷」と、洵に然り、然れども概してしめ、やかなる境を可とす、水邊可なり、烟雨濛々の處可なり、綠陰日を遮る所可なり、溪谷幽奇の處可なり、飛瀑に對する可なり、雪境も亦可なり、靜かに細やかに淺く長く酌むは、斯る境に於てこそ、白日赫耀、目を眩するの處は、金屋玉堂と雖も吾人之を排す。

(七) 酒の趣は淺酌にあり、徐ろに飲み時を移すを以て不經濟と爲す莫かれ、趣味も逸興も杯に親しむの間に在り、時の長きを要する所以也、一巨觥を傾け瞬刻忽ち醉ふが如きは、是れ戦場の酒、火事場の酒のみ、趣味の酒にあらず。

(八) 酒は洒落の境を欲す、貴人富豪の宴、街氣漲るの境は、美酒佳肴席に滿つと雖も、或は醉を發せず、村居佳釀無しと雖も、却つて趣を感じるにあり、陸放翁村居久しく出でず、出づれば村人鋤犁を棄て、争うて迎へ、饗するに酒食を以てす、其温情は以て一大白を擧げしむるに足る、酒の清濁必らずしも問ふを要せず、放翁此間の消息を歌ふの詩、一讀人をして村酒趣味を欣羨せしむ、

野人知_レ我出_レ門稀、男輟_レ鋤耒婦下_レ機、堀得_レ苾菰炊_レ正熟、一杯苦勸護_レ寒歸
野人喜_レ我偶閑遊、取_レ酒忽々勸_レ小留、舍後携_レ籃挑_レ菜甲、門前喚_レ擔買_レ梨頭、
放翁又無差別に人を留めて共に飲むの興を言ふ、曰く「酒壚強挽_レ人同醉、散去何曾識_レ是誰」

如此き酒落の境は酒家の尤も快とする所也。

(九) 酒は境に因り趣を異にし又姿を殊にす、余曾つて酒姿十則を撰び、每則一二の例を設けて酒境の一斑を言ふ。

- 一 酒の清 清新の晨飲む、浴後飲む、流に臨んで飲む、新たに酒器を調へて飲む
- 二 酒の閑 釣を垂れて飲む、雨を聽いて飲む、月を賞して飲む
- 三 酒の寂 半夜獨り起きて飲む、愛人去つて後飲む、病中飲む、旅舎に獨り酌む
- 四 酒の淡 僧房に飲む、村居菜を咬んで飲む、俳庵に飲む
- 五 酒の綺 佳人と相對して飲む、錦屏内に飲む、畫舫中に飲む
- 六 酒の豪 杯を引き劍を看る、捕鯨船上に飲む、出獵功成つて飲む、軍營に飲む
- 七 酒の惋 離人と飲む、災後飲む、碑に對して飲む
- 八 酒の壯 凱旋の酒、氣鋭の青年と共に飲む、國事を論じて飲む
- 九 酒の噪 稠人廣座の飲、酒を賭けて拳を闘はす、高く歌ひ起つて舞ふ
- 十 酒の奇 飛行船上の酒、潛航艇内の飲、蠻人の居に飲む

(一〇)

寺門靜軒の痴談、彷徨の酒訓八則を擧ぐ、曰く風に臨んで調を寄せ、月に對して

高く歌ひ、巧を窮め奇を搜り、杯を啣んで雅諠なるを、是を清酒といふ。珍羞羅列し、燈火かや
 やき、觥籌錯落し、笙歌雜遝す、是を濃酒と云ふ。新朋まじはり集まり、雅俗の分なく、四座
 喧しく呼ぶ、市井多く之を濁酒といふ。樽殘し燭冷かに僮僕蕭然たるに蓋を擧げて長談し、飲
 ます散せず、是を淡酒と云ふ。筵を肆ね席を設け、侍從雲の如く、博帶峩冠うやくしうして
 詐り多き、是を苦酒と云ふ。紅袖偃歌、青衣爵を進め、軟玉溫香にして、淺く斟み低く唱ふ、
 是を甜酒と云ふ。勉強して樽を開き、主吝色多く、留らんと欲して味なく、去らんと欲して能
 はず、是を酸酒と云ふ。苛政森嚴、五官並び用る、心を驚かし目を注ぎ、草木皆兵なるを、是
 を辣酒と云ふと。

(一一)

余も亦彷徨に倣うて、酒訓七則を作る、曰く酒有れば飲み無ければ廢す、必らず
 しも清濁を論せず、又境の如何を問はず、而して樂んで淫せざる者、酒の聖歟。曰く樽空しき
 時人より酒を贈り來る、貧人に酒を與ふ、新朋我れを待つに酒を以てす、酒の俠歟。曰く興到
 らずして酒先づ盡く、事あり飲を妨ぐ、妻妾の酒に吝なる、皆共に酒の嫌なり。曰く主人客を

迎へ富を街ふ、酒席に惡畫を挂く、主人漫りに酒を強ふ、是れ酒の俗なる者。曰く船中の酒、病餘の飲、異郷の酒、物を混じたる酒、出獄後の飲、皆酒の險なり。曰く酔後人を罵る、醉態を粧うて人を欺く、酒癖人を困しむ、是れ酒の賊。而して内外各種の酒を無差別に嗜み、敢て眇域を置かざる者は酒の淵と謂ふ可き歟。

(一二) 醉餘幾回か處を換へて飲む、之れを梯酒はしこまと云ふ、人多く酒客の爲めに病む、梯酒實は惡癖なり、然れども境變すれば興も亦新なり、亦酒家の一趣味たるを失はず、貴人に招かれ儀禮に挿はれたる後、旗亭に入つて縱飲放談する如き、酒間議論を闘はし、漸く倦んで美人の家に就て飲む如き、皆梯酒なるも、趣味は即ち在り、梯酒必らずしも非とす可らず、若し夫れ新朋相携へ、街頭を散策し、到る處のバー(酒場)に一杯を傾け、多々益々辨ずるを快とする如きは、亦是れ洋風の梯酒にして書生の一興とする所、是れも亦趣味上一概に非とす可きにあらず。

(一三) 酒の爲めに失あり、悔いて酒を廢す、事殺風景に近しと雖も、而かも其の言ふ所に詩趣ある者を衛元と爲す、渠が酒の失策を謝するの文は千古傳ふるに足る、曰く「茲れより

酒星を天獄に囚ひ、醉月を秦坑に焚かん」と、酒豪の放言何ぞ堂々たる。

(一四) 劉乙と云ふ酒客醉に乗じて人と妓を争ひ、醒めて慚悔、酒失の先例彙纂を編し、之れを「百悔經」と名づけ、朋友故舊に贈つて斷酒を誓ひ終身飲まずと、入念の禁酒と謂ふ可し。

(一五) 禁酒を誓はんとして妻を欺く者劉伯倫あり、劉酒に病み、渴甚だし、婦に酒を求む、婦酒を捐て器を毀ち、涕泣諫めて曰く、君の飲ただ過ぐ、攝生の道に非ず、宜しく之れを斷つべし、劉曰く甚だ善し、我れ能く自ら禁ずる能はず、唯だ當に鬼神に祈り、自ら誓つて之れを斷たんのみ、便ち酒肉を神前に供へしむ、劉跪き恭しく誓文を讀む、曰く「天の劉倫を生ずる、酒を以て名を爲さしむ、一飲一斛、五斛にして醉を解く、婦人の言や聽く可らず」と、讀み了り、祭壇の酒肉を取り飲み且つ食ひ、酣醉陶然たり、劉は千古の酒豪なり、此の佳話無かる可らず、吾邦酒客の爲す所、或は之れに類する者あり、實は皆劉に倣ふ也。

(一六) 宿醉は病に似て病にあらず、苦痛なれども、自から其間に味あり、古來詩人中酒を吟する者少からず、而して能く其間の消息を道破する者を宋の太素となす、曰く「靜嫌鸚鵡

鬧、渴憶荔枝香、病與慵相續、心和夢尙狂、非真中酒者、不能知此味」と。

(一七) 古人或は中酒の氣味を落第の時に比す、李廓の詩に「氣味如落第」と、藤井竹外の中酒の詩に「中酒今朝起更遲、如愁如夢又如癡、山妻怪我偷失笑、想到唐賢落第時」と云ふは前詩と同意なり、竹外又病愈を酒の醒むるに比す、曰く「快如宿酒頓醒時」と、酒家にあらざれば此の譬喩に想到する能はず。

(一八) 宿醒抵ね晩景に到れば解く、之れを治するに醫藥あるなし、唯だ靜臥點燈の時を待つあるのみ、饗庭篁村嘗つて戯れに曰く、我れに祕藥あり「行燈の黒燒」是れなりと、蓋し晩景を待つを云ふ也、皮日休、晚來宿醉漸く解け飲を思ふの詩あり、曰く「鬱林步障晝遮明、一炷濃香養病醒、何事晚來還欲飲、隔牆聞賣蛤蜊聲」と、人或は酒客を貶して意地穢いぢたなと云ふ、余爲めに辯疏す、夫れ土壁の破れたるは土を以て修む、酒腸の損じたるを補ふに酒を以てするに何の不可あらん。

(一九) 酒規に云く「酒入れば舌出づ、舌出で、言失す、言失すれば自から棄つ、身を棄てんよりは、酒を棄つるに如かず」と、酒規も茲に到つては野暮也。

(二〇) 詩人一杯の量無き者あり、而かも其詩酒意を帶ぶる者あり、酒意あつて僅かに乾燥を免かる、詩人は酒意あるを要す。

(二一) 古來俳人酒を詠する者多し、而かも多作其角に若く者なし、又酒趣を道破する者其角の右に出づる者なし、渠は眞に酒意ある詩人なり、會津八朔余の爲めに酒句若干を抄す、今左に其の二三を録す。

和古詩

琴を焼て水鶏を煮る夜酒さびし

曲終不見人

あかつきの反吐は隣かほと、ぎす

人もこぬ夜の獨酌

初雪や十になるこの酒のかん

旅店

富士の雪蠅は酒屋に残りけり

花盛ふくべふみ見る人もあり
徳利狂人いたはしや花ゆくにこそ
もどかしや誰に對して小盞

曲水にあの氣遣は茶碗哉

酒を妻妻を妾の花見哉

かたつぶり酒の肴に這はせけり

各句皆風趣あり、而して酒句に無かる可らざる勁氣の筆端に逆る者、ひとり豪放跌宕の此俳人に於て見る。

(二二) 林間紅葉を焚いて酒を温む、是れ田園の一風流、野人風流を解せずして自から此事あり、其角の「紅葉には誰が教へけん酒のかん」と歌ふ者、此間の消息を漏らす者也。

(二三) 芭蕉は多く飲まず、集中酒句極めて少なし、然れども翁も亦酒味を解したるに似たり、唯だ翁の欲する所は閑寂に在り、人の草庵に訪ひ來り共に飲むが如きは、翁の五月蠅しとせし所也、其閑居の箴に曰く

あ、物臭の翁や、日頃は人の訪ひ來るもうるさく、人にもまみえじ人をも招かじとあまた、
び心に誓ふ、されど月の夜雪の朝のみ友の慕はる、もわりなしや、物をもいはず獨り酒のみ
て心にとひ心にかたる、庵の戸押しあけて雪をながめ又は盃をとりて筆を染め筆をすつ、あ
あものぐさの翁や

酒のめばいと寝られぬ夜の雪

芭蕉曾つて酔人の繪に題して

月花もなくて酒のむひとり哉

と歌ふ、是れ閑居の箴と同意にして、閑寂を愛したる翁の面目躍如たるを覺ゆ。

(二四) 芭蕉常に其角の暴飲を憂ふ、嘗つて尊朝親王の「飲酒一枚起請」を寫し、一簡を添へて其角に寄せ、其の暴飲を戒む、簡末に一句を題す、曰く

朝顔に我はめしくふ男哉

と、其角の首肯を得たりや否や、傳へ云ふ芭蕉痔疾を患ふと、是れ或は翁が酒を節したる所以歟。

(二五) 蕪村、天明の風として、瑠璃を旨とし、主觀の句甚だ少し、然れども彼れの句皆畫趣あり、

酒十駄のりもてゆくや夏木立

あき風や酒肆に詩うたふ漁者樵者

綠陰深き處、馱馬酒を載せて行く光景畫の如し、酒肆の漁者樵者は宛然一幅の漁樵問答の畫を觀る思あり、醒人と雖も此等の景致を美とするに異論無けん、蕪村一派の長は此の畫趣にあり、短も亦こゝに在る歟。

(二六) 一茶に至りては句々肺腑より出で、直ちに其心境を吐く、曰く

花咲くや日傘のかけの野酒盛

大酒の諫言らしや閑古鳥

相伴に蚊も騒ぐなり菖蒲酒

楳の火や小言八百酒五杯

一茶は幾許の酒量ありしや、知る能はず、然れども雪國に生れたる渠は恐らく相當の量ありし

ならん、七番日記に左の記あり、

大醉^{シテ}出^レ肆歸、夜丑刻、大^ニ寢^テ不^レ知^レ己、板間^ニ尿^ス、今年五十三始^テ過^ス也

以て察すべし。

(二七) 酒の中毒、酒を飲まざれば用を辨ぜざる者あり、昔し支那に孔思遠と云ふ人あり、骨鯁能く獄を斷ず、醉日多きに居ると雖も毫も判決を過たず、時人云ふ「孔公二十九日醉、勝^ニ世人二十九日醒^ニ」と、孔も亦酒の中毒に罹る者か、然れども此如き中毒は否なる者に比して復かに優る。

(二八) 支那の典籍、酒に關する笑資を供給する多し、晉元帝の時に、阮孚字は遙集と云ふものあり、身幹矮小にして頭禿、酒を嗜むこと甚しく、且つ滑稽の才あり、元帝之れを愛す、嘗て室内に酒十瓶を置く、瓶大一斛を容る、上皆帽を加ふ、以て阮孚に戯れんとす、適^ニ孚室に入り來る、一見驚喜して曰く、吾が兄弟途に迷ふか、何ぞ宮中に入り來る、早く去つて家に還れと、因つて人を役して勿々十瓶の酒を持ち歸る、元帝撫然大笑す、阮孚は我が曾呂利を以て比すべき歟。

(二九) 浪華に帯を賣る信父あり、腰に一瓢を帯び、長日街頭を歩いて客を求む、倦めば地に坐して一杯を傾く、此時必ず懷を探り、二個の小土偶を出し、活人に對するごとく、親兵衛太郎兵衛と名を呼び相親しむ、或人其の洒落を喜び、酒樓に伴ひ共に飲まんと誘ふ、信父肯んぜずして曰く、休めよ、吾れ卿等と共に飲むを欲せず、吾れの酒敵は茲に在り、土偶を指し、此の二人は吾れと共に來り吾れと共に歸る、吾が心に隨ふもの此の他にあるなしと、酒史只此の一佳話を洩らす可からず。

(三〇) 大阪の鴻儒中井履軒、酒を嗜む、常に案頭酒を置き、書を讀む、杯を舉ぐる毎に必らず頸邊の瘤を撫す、時人曰く、履軒の下物は瘤なりと。

(三一) 熊澤蕃山作と傳ふる今様に曰く「劉伯倫や李太白、酒を飲まねば唯の人」と、劉や李や千古酒界の聖と仰がる、酒人の榮と云ふべし、皮日休、樽に題するの詩に曰く「他年調帝言何事、請贈劉伶作醉侯」劉伶は伯倫なり。

(三二) 大窪詩佛酒を嗜む、山本北山の塾に寓するの日、密かに小壺を以て酒を貯へ、時に出して之れを飲む、一日詩佛外に出づ、北山塾を檢し、詩佛の坐邊に之れを見て曰く、我が

門に在りて此の小磁壺を用るる者は誰ぞ、凡そ小を好む者、焉んぞ與に天下の大を語るに足らんやと、既にして詩佛歸り來る、或人之れを告ぐ、詩佛怫然として再び出で、一大空樽を挈けて至り、之れを案上に置き、少許の酒を買うて之れを樽中に注ぎ、軋々柄を抜き且つ斟み且つ飲み、大聲放言、此れより以後日々是の如くすと、中根香亭語る。

(三三) 頼山陽、攝州伊丹の釀「劍菱」を愛し、攝州歌を作り、此酒の爲めに氣焰を吐く、曰く「兵可_レ用酒可_レ飲、海内何州當_ニ何品_一」と、渠れは此地に據りて起りたる豪傑の功業を擧げ、終に此佳酒を戦血滿地嘉禾と化したるに歸す、山陽は釀地の爲めに一大廣告を爲したる者、今に至るも攝州は天下無比の釀地なり、東都舊時佳酒無し、其芳烈玲瓏の醇酒を輸したる者、關西殊に攝州とす、東人眞に西人に謝せざる可らず。

(三四) 關西の酒權、固と池田伊丹に在り、當時此等の地より江戸に酒を輸送するの煩は眞に意料の外に在りたり、東海道五十三驛、幾千幾萬の樽はすべて駄馬の背に託され、馬夫は鼻唄を唄ひつゝ、一路隊をなして街道に絡繹たりし、之れが爲めに驛路殷賑を極む、是れ實は廣告的商略にも依りたらんが、鹽分酒味を害ふの迷信は、海路の輸送を不可とし、専ら陸路

に依りたる也。

(三五) 當時江戸の酒客が、如何に西來の酒を珍としたるかは、駄馬五十三驛、駄送の多費を拂ふを意とせざりしに徴するも知らる、元來江戸程酒客の多き處あらず、或る人云く、三都の特徴は京の着倒れ、大阪の食ひ倒れ、江戸は飲んだくれなりと、洵に其言の如し、而して江戸の飲んだくれは、西の酒を呼ぶ因ともなり、又西の酒に養成せられたる結果とも謂ふを得べし。

(三六) 東都の、西に酒を仰ぐ、今猶ほ舊の如しと雖も、西の産地にはおのづから盛衰變移あり、伊丹池田の繁榮は、既に灘なは五郷に轉じ、酒權は今灘に存する也、其の五郷と云ふ者、一に云く東郷の魚崎、即ち櫻正宗の醸地なり、二に云く中郷の御影、石屋、東明、即ち菊正宗、白鶴等の醸地なり、三に云く、西郷の大石、新在家、岩屋、即ち牡丹正宗、澤之鶴の醸地也、四に云く、西宮郷の西之宮、即ち白鹿の醸地也、五に云く、今津郷の今津、即ち大關、東自慢の醸地也。

(三七) 池田伊丹は何故に灘に打負けたるか、灘五郷の醸家古來の迷信を排し、敢然多費

を要する陸送に代ふるに、簡便なる海送を以てしたること其一因ならん、又活氣ある海運の輸送が江戸兒の氣風に投じたるも一因ならん、而かも主因は灘酒に存する一種他の及ばざる芳烈の風味に歸せざるを得ず、此酒一たび東都に入るや、關都の酒客靡然として之れに赴き、從來尾の龜崎より多量の酒を輸したる者、遽然驅逐せられて其跡を絶つに至れり。

(三八) 酒界に於ける灘の功や偉なり、而して主功は終に櫻正宗の醸家山邑太郎右衛門に歸せざるを得ず、夫の清酒を澄まして透明ならしめ、よく赤色を變じて薄き琥珀の色となし、且つ其粘分を除き、之れに芳烈の風味を寓したる者は實に山邑也、山邑の苦心談に曰く、事は天保年間に在り、某年原料米多きに過ぎ、其剩米の處分に困みたり、當時の醸造おのづから時期の一定するあり、且つ東都に之れを輸送するにも一定の便船あり、今日の如く臨時輸送の便ある無し、故に年一回の醸期を經過する時は、勢ひ翌年の醸期を待つの外なし、山邑於是剩米の處分に就て案ずらく、斯る時に於てこそ醸法の改善を試むべしと、乃ち剩米全部を三回まで水車に掛けて搗き、之れをして精白雪の如くならしめ、以て醸造を試む、蓋し當時の醸米は玄米を僅かに一回搗ぐが例にて、是れは全く異例とす、如斯き精良の原料を以て醸したる酒を検する

に、色淡に粘氣なく香氣亦前と同じからず、山邑思へらく、如斯きもの恐らく一種習をなしたる酒客の好尚に適せざるべしと、之れを放擲して省みざりしに、茲に山邑に一驚を喫せしめしは、此酒保存久しきに涉るも、毫も味を損せざりしこと也、山邑於是初めて東都の品評を乞はんと意を決し、之れを東送するに及んで新川の市場は此の空前の佳酒を見て驚き、盛んに賞揚して山邑の功を鳴らしたり、吾人が口にするの醇酒は即ち是れ也。

(三九) 酒銘、酒の販賣に關係すること大なり、先づ酒腸を刺戟し酒客を虜にする者は酒銘なり、酒名殊に擇ばざる可らず、元來、酒は男性的なり、酒名も男性的たるを可とす、或は命ずるに女性的の名を以てしたる者あり、即ち福姬と云ふ如き、董と云ふごとき、或は俳優の名めかしき杜若、薪水、路阜と云ふごとき、皆な關西釀家の酒名なれども、酒客の嗜好に投ぜず、概ね失敗に歸したり、近來月桂冠の名を命じたる酒あり、時代に應ぜんとするの命名必らずしも不可なりとせず、然れども亦難なきにあらず、余曾つて戯れて曰く、桂冠は頭に上る者、而して酒の忌む所にあらずやと、酒銘を撰ぶの難き、以て見るべし。

(四〇) 正宗の銘、何ぞ雄偉なる、此名は豪傑伊達正宗を聯想し、又名刀正宗を聯想せし

む、而かも銘の由來は豪傑にも名刀にも交渉なきに似たり、傳へ云ふ、山邑太郎右衛門、深草元政の草廬を訪うて銘を請ふ、元政坐右の經卷を顧みて曰く、茲に「臨濟正宗」あり、正宗の二字を取る可ならんと、此の傳説に據れば正宗は本家本元の義に庶幾きに似たり。

(四一) 正宗の名、一時酒界を風靡す、其名山邑の有に屬すと雖も、他の釀家皆な此名を以て酒を賣る、正宗終に普通名詞となる、往年商標條例の定まるや、山邑此の名を争ふ、時の兵庫縣知事内海忠勝處理に困しむ、終に山邑に諭して正宗を普通名詞たらしめ、則つて冠字を以てせしむ、即ち櫻、菊等の字を冠らしむる者これより始まる。

(四二) 酒の名、重箱讀を爲す者多し、白鹿をシロシカと云はずハクシカと云ひ、白鶴をシロツルと云はずハクツルと云ふごときは是れ、蓋し稱呼に勁氣あらしめんと欲するのみ。

(四三) 御影に嘉納を姓とする釀家二あり、一は嘉納治郎右衛門、菊、正宗を出す、一は嘉納治兵衛、白鶴を出す、他に師範學校長嘉納治五郎の家あるも今酒造業に關係なし、嘉納の姓に關し傳ふらく、曾つて南北朝の時、自釀の酒を後醍醐帝に獻じて其の嘉納する所となる、一族光榮として姓とすと、附會の説に似たり、唯だ酒に交渉あるを以て録する耳。

(四四) 酒を醸する、水を選ぶの緊要なる、猶茶を煎るに佳水を要するが如し、西の宮に一井あり、天下無比の佳水とし、醸家之れを寶とす、此水の發見に就ても山邑功あり、天保年間、山邑、魚崎西の宮兩處に酒を醸す、而して製法材料共に同一なるに、何時も魚崎の製、西の宮の製に及ばず、山邑終に其の原因の水にあることに想ひ到り、天保十一年の醸期に、特に西の宮の井水二斗を容る、の樽を四十八頭の牛に駄して魚崎に運搬せしめ、之れを以て試醸す、酒熟して檢するに、果して西の宮の製と同一の佳酒を得たりと云ふ。

(四五) 醸酒に大切なる材料、米水の外に一あり、容器の材是れなり、灘五郷の酒の佳なる、單に醸法の精と佳水とに因るのみならず、樽材宜しきを得るが故あり、灘の樽を造るには必らず芳野杉を以てす、此杉一種の香と色とを有す、灘醸の芳芬は實に此の木香に因り、其淡黄の色亦此の木に負ふ所あり、故に芳野杉林は樽材の専用として養成せられ、酒の色の薄きを好む風尙に投せんには、杉材の色も之れに應ずるやう培養變化を生ぜざる可らずと、此の杉林は大和の土豪土倉氏の所有に係り、樽材の價格二百萬圓を超ゆと云ふ。

(四六) 近來玻璃瓶を容器として酒を鬻ぐこと益々盛んなり、而して酒客甚だ喜ばず、日

光の透射酒味を害するのみならず、容器の芳香を酒に移すの作用を闕くが故也、元來酒は暗を欲す、而して樽は暗と香とを兼有するの器也。

(四七) 頼山陽初め飲を解せず、馬關に「鶴」と銘する酒を口にして初めて酒を嗜むに至る、「鶴」は山陽の酒の師と謂ふべし、而して此の「鶴」の醸界に名聲を博したるは、山陽の父春水が其樽薦に題したるより始まる、奇縁と謂ふべし。

(四八) 鶴號は灘酒なり、醸主初め春水に標章の揮毫を乞はんと欲し、中井履軒に圖る、履軒曰く、春水、薦の題字と知らば恐らく應ぜざるべし、其れには一策ありと、一夕宴を張り、春水を招飲す、酒闌にして履軒卒然紙を展べて一大「鶴」字を作らんことを求む、春水其故を知らず、一揮請に應ず、是れ即ち「鶴」字の原稿なり。

(四九) 余曾つて大隈侯に代つて紀州の醸家南方氏の爲めに酒名を撰び、「一統」と云ふ、一統は一等と音相通じ、亦酒界の王たらんとする抱負を寓す、此酒爾來廣く行はる、幸田露伴此酒の頌を作る、曰く「三杯大道に通じ、一斗自然に合す、醉郷由來彼我を分たず、其氣は和平、其俗は大同、寰宇おのづからにして合して一となる、偉なる哉酒」と

(五〇) 吉川泰次郎、土佐の人、酒量あり、余嘗つて向嶋の居に訪ふ、時三伏、溽暑甚し、主人納涼臺四脚を庭前に置き、余を玆に延き、膳を設けて對酌す、臺の四邊に榻を置き、侍女六名四邊に居る、窈窕花の如し、瓶を捧ぐる者、團扇に風を送る者、下物を運ぶ者、各々其の掌る所を異にす、激談數刻、酒漸く熟す、忽ち一天雨を催し來る、主人天を仰いで曰く、小雨憂ふるに足らずと、傘を呼び、侍女をして主客の背後より高く翳さしむ、雨滴點々傘頭より落ち來るも主人意とせず、終に大雨盆を覆すに迫んで倉皇室に入る、此事二十數年前に在りて此人今亡きも、此事今猶ほ忘る能はず、曾つて南唐の孫晟の逸事を讀む、此人宴に几案を設けず、衆妓をして各々一器を執り、環立して侍せしむ、號して肉臺盤と云ふと、吉川の爲す所、これに庶し。

(五一) 尾崎紅葉飲を解せず、余時に伴うて酒樓に飲む、僅に一杯を傾くれば、忽ち玉山頹れ、大の字形をなして座中に横臥し、鼾聲雷の如し、余常に酒席の悪客と云ふ、何ぞ圖らん、彼れも亦余を以て悪客となさんとは、余曾つて歳旦に彼れの居を訪ひ、其の書齋に飲み、數瓶を傾く、其の歿するに迫んで其の日誌を検するに、歳旦の條に余の事に及び、終りに記し

て「新年の悪客」と云ふ、余其の報復の嚴なるを見て、破顔一笑す。

(五二) 我邦の國稅、其最も大なる者を酒稅となす、曾つては地租國稅の主位を占めしも、今は酒稅に讓る、酒稅は實に一億圓に垂んとす、假りに全部を清酒と做し、石二十圓の稅を以て除すれば、産額實に五百萬石なり、酒客の多き知るべき也、此等の飲徒は、間接に國費を助くる者、之れを愛國者と云はんも不可なきに似たり。

(五三) 新潟縣の釀造高十五萬石に近し、其の國庫に納むるの稅額約三百萬圓、幾んど縣稅に匹敵す、而して新潟市に輸入する灘酒は、一ヶ年概ね二百石とす、曾つて明治四十三年、縣廳に於て鍋茶屋に一ヶ月消費する灘酒を調査したる事あり、右に據れば四斗樽九本とす、即ち三石六斗なり、之れを一ヶ年に積算する時は、四十二石餘に當る、鍋茶屋一所に於て輸入總額の五分の一を消費すること以て觀るべし。

(五四) 朝鮮の濁酒釀造高二百萬石、而して免れて未だ稅を輸せず、今内地の如く之れに課するに石二圓の濁酒稅を以てすれば、優に二箇師團を置くを得べし。

(五五) 本邦の如き米産國に於て、米を原料とする酒の産出益、盛んなるべきは自然の趨

勢也、顧ふに單に趨勢にのみ委すべからず、進んで之れを獎勵し、以つて世界に大輸出を爲す國策を爲さざる可からず、曾つて海江田信義等、塊のスタイン博士に就て、日本の國策を問ふ、博士の教ふる所も亦如斯し、但だ博士は曰く、日本酒に一種の惡臭あり、外人之れを厭ふ、日本酒を世界の用に供せんとせば、此の闕陥を改めざる可からずと、スタイン流石に日本酒の闕陥を知る、日本酒の今後に要する改善は此點にあらん歟。

(五六) 昔時の酒價を録する書、敢て鮮しとせず、然れどもこゝに收むるを欲せず、但だ詩中酒價を云ふ者雅也、眞宗曾つて群臣を太清樓に會して宴を張る、上遽に近臣に問うて曰く、唐酒價幾何と、左右能く對ふる者なし、唯だ丁晋公奏して曰く、唐酒每升三十錢と、上曰く、卿何ぞ之れを知る、丁曰く、臣曾つて杜甫の詩を讀む、曰く「蚤來就飲一斛酒、恰有三百青銅錢」と、上大いに喜んで曰く、杜甫の詩、酒史に充つべしと、「玉壺清話」に載せたり。

(五七) 瓢は眞に酒徒の器たるに背かず、酒あれば起き酒無ければ顛す、花晨月夕酒徒に隨伴し、常に酒徒と歡を同じうす、而して飲むこと多ければ醉顔紅を潮す、又酒徒と同じ、余曾つて愛瓢家に聞く、瓢の紅色を帯び玲瓏顔を照らす者は多く酒を貯ふるに依る、而して醉酒

を盛るにあらざれば、佳色と光澤を發せしむる能はずと、瓢はどこまでも酒徒と嗜好を同じうす。

(五八) 余が家一古瓢を藏す、三四合を入る、廣瀬旭莊の舊什にして、後頼山陽の有に歸す、瓢身に金字の題語あり、曰く「春聽黃鸝、秋看紅葉」又曰く「此瓢余所愛、丙（一字磨滅）七月贈頼君」「旭莊謙」（印）と、則ち此瓢旭莊山陽に贈る所の者、知るべし、二家に伴うて幾多好山水の跋涉を経たることを、形貌畫趣あり、色澤亦掬すべし、余が家珍の一なり。

(五九) 此瓢に諸名家の題識一卷を添ふ、卷首に杉聽雨翁、瓢を描き、瓢身の餘白に書して曰く「旭莊贈頼子成」又左の題語あり、

每助興思古今韻士、曾媒好遊天下山水

辛丑三月下浣

聽雨居士題

好是杖頭瓢酒、勝他牛角漢書

聽雨又題

吉嗣拜山、長篇を題す、曰く

尤物非易得、獲之喜欲顛、其形奇且雅、頸短腹便々、坐樣如老衲、臥容亦似仙、摩挲常在膝、隨伴不離肩、扶醉擬李白、多飲比顏淵、不須囊下酒、只費杖頭錢、拳杯誇同癖、使人口流涎

戊戌小春日

獨臂翁拜山□□

高森碎巖、一瓢を書き、五絶を題す、曰く

百歲經風霜、名士存手澤、把玩感最深、花朝與月夕

(六〇) 余此瓢を獲、幾許もなく西京に遊び、一日鳩居堂を訪ふ、主人余に示すに山陽遺愛の一瓢を以てす、匣に銘して赤鳳卵と云ふ、別に一卷を添ふ、諸家の題識頗る備はる、此瓢余の者に比すれば較々大、形貌も同じからず、雅趣に至つては余の物却つて優るあるを覺ゆ、但だ余の意に適ひるは其の銘に在り、主人曰く、是れ余が先代愛玩の物、山陽に奪ひ去られて久しきを経、近年漸く復歸を得たり、是れ吾家の非賣品也と。

(六一) 余此瓢に望を囑したるも割愛を得る能はざるを遺憾とせり、鳩居主人曰く、別に

一瓢あり、大小形狀時代色澤酷似す、吾家之れを姉妹瓢となす、往年頼庫山、匣に銘を題して赤鳳卵と云ふ、曰く、既に鳳卵あり又鳳卵無かる可からずと、乃ち出し示すを見れば、洵に姉妹瓢と云ふに背かず、匣背に庫山の識語あり、曰く

鳩居堂主人、藏一古瓢、曰赤鳳卵、原係山陽先生愛玩、頃日又購獲一瓢形酷似者、名曰赤鳳卵云、余爲祝曰、鳳凰瑞應鳥也、雄曰鳳、雌曰凰、今也併有雌雄二卵、洵爲奇瑞也、若夫靈驗、主人毎夕把杯相對、陶然自得焉、余所不能窺知也

丙午之八月

頼潔題匣併志

此瓢余遂に購うて歸る、思へらく、既に赤鳳卵あり、他の山陽手澤の存する者を赤鳳卵と名く、るも妨げ無きに似たりと、終に銘して赤鳳卵と云ひ、他と配して姉妹瓢と爲すと云ふ。

(六二) 小原鐵心、杯の大小順序を論じて云く、邦俗初め小杯を用る、酣醉に及んで大杯を擧げ鯨飲するは非也、初は多く儀禮に捕はれ、寛濶なる能はず、此間徒らに多くの時を費す、若かず次序を顛倒し、先づ大杯を傾け、一舉陶然、直ちに城府を破り、蔗境に進み、然る後徐ろに小杯を重ねんにはと、是れ一應理あり、而かも詮するに時間經濟の論のみ、初め處女

の如く、終り脱兎の如き、只是れ酒客自然の態、而して醉郷の不文律也、時間經濟を以て一概に律するは非也。

(六三) 古人大盃に「武藏野」の名を與ふ、「節用大全」に解あり、云ふ野見不盡のみつくまれずの意と、又杯中に蜂蛇を畫く者あり、刺せば飲むの意。

(六四) 曾つて東都の好事家五十三の杯を作り、東海道五十三驛に擬す、各驛の風物を圖するごとき平凡の意匠に落ちず、東都より京師に至る、都邑の規模繁閑に問ひ、盃の大小深淺を異にすと、「傍廂かたひまし」にあり、然れども此等は唯だ好事のみ、必らずしも酒の趣味と關せず。

(六五) 人に酒を侑むるに巧拙あり、其機一に杯盤を出すの遲速に繫る、想ふに酒を侑むる秘訣は、下物の有無を論ぜず、咄嗟杯を出すにある歟、大石良雄嘗つて突然貴賓の駕を枉ぐるに會し、其の永く留む可からざるを思ひ、咄嗟膳に羹碗を載せて出し杯を侑む、暫くして別に羹を持し來り、先きの者と易ふ、前に出したる羹碗の無一物なること謂ふ迄もなし、當時の禮、主人特に挨拶を爲さざれば箸を取らざるを例とす、空碗を出して馬脚を現はさる所以也、良雄の機智は人を留むるの範とすべき歟、夫の下物の調理成るまで杯を出さず、遅引して終に

機を失する如き、徒らに客を留めて倦ましむる如き、皆酒を侑むるに拙なる者也、多くの客は嘯時近づけば逃ぐるが如く去るを習とし、厨下の用意徒勞に歸すること往々あり、何は無くとも先づ杯を出すこそ、酒を客に侑むるの上手なれ。

(六六) 爛は酒客の重大條件なり、酒の死活は繫つて爛の一字にあり、之れをして熱からず温からず、能く芳烈の香を發揮せしむる者は適度の爛に在り、抑々茶の湯加減に湯候ゆこうの規あり、酒の爛にも湯候の規無かる可けんや。

(六七) 杯盤中の酒器最も大任を荷ふ者を杯洗と爲す、洗器固と清潔ならざる可からず、而かも通例此器ほど不潔の者あらず、他の口に觸れたる者を幾回か洗滌し、器中の水其色を變ずるも尙ほ顧みず、不快も亦甚だし、本來洗器は杯を洗ふ毎に改むるを要す、若し煩を厭はゞ水注を具へ、獸酬毎に水を注ぐべし、余浪華にあるの日、好んで堂嶋の酒樓「かどの」に抵り飲む、此樓座席潔、調理佳なるのみならず、主婦必らず席に侍し、特に洗器を司る、其の洗器を換ふるの頻繁なる、一時間に五六回に及ぶ、而して必らず盛るに熱湯を以てす、酒客皆之れを快とす。

(六八) 「思ひざし」の語、艶にして情あり、佳人の唇頭より發すれば鯁骨爲めに溶す、此語なまめかしきが故に、柳巷花街にのみ行はれ、士君子漫りに口に發せず、何ぞ圖らん、此語早く「太平記」に出で、鎌倉武士の唇頭より發せんとは、高時自害の條に云く、高重、舍弟の新左衛門に酌を取らせ、三度傾けて、攝津刑部大夫入道道準が前におき、思指まうすぞ、是を肴とし給へ云々、又松岡城周章の條に云く、厩侍には赤松信濃守範資上座して、(中略)いざや最後の酒盛して自害の思ひざしんとて、大なる酒樽に酒をたへ、銚子に盃取副てとあり、以て此語の古く荒くれ男の間に行はれたるを見るべし、當時思ひざしに對し、思どりの語あり、今用ゐるなし。

(六九) 廣瀬旭莊の「九桂草堂隨筆」に一奇話を録す、曰く別府の僧蘭谷生平酒を嗜む、人の宴に赴き、酒出づると遅き時は、待ち兼ねて我が腹中の焼石將に出でんとすと叫ぶ、安政丁巳、其同郷の友矢田孝治來り語る、蘭谷酒を飲む、數升にして酔はず、一日切りに酒を欲したるも酒の到る遅々たり、待ち兼ねて頻りに呼ぶ中に、忽然咽喉より一片石を吐く、長さ二寸幅六七分許、此石を出してより全く酒量を失ふと、會つて其石を盆中に置き、澆ぐに酒を以てせ

しに忽ち吸收し、數升の酒一滴を剩さず、家兄淡窓其一半を乞うて、試む、一半と雖も吸收の力異なるなし、時人之れを酒石と云ふと。

(七〇) 總べて商品、之れを賣ぐ専門の肆、特別の名あり、今瓶に名づくる二三の市語を録せん、曰く相爛、居酒屋常用、鳶口形の德利を云ふ、曰くナダ德利、普通所謂貧乏德利を云ふ、曰く布袋、備前德利を云ふ、曰く竹の五盃、肥前産、模様ある白丁德利を云ふ、概して専門商德利と云はず、一合德利を一合爛、五勺德利を五勺爛と云ふを例とす、市語俗なりと雖も、酒客之れを知るも亦妨げなし。

(七一) 酒客往々蟹或は鼈の甲に酒を盛り、之れを火上に置き、沸騰を俟つて飲む、又鰻肉若くは鳥肉を碗に入れ、熱酒を注いで飲む、共に一種の風味あり、「湧幢小品」を閲するに之れに類する者あり「冬月客到、以肉及雜味、置大碗中、注熱酒、遞客、名曰頭腦酒、蓋以避寒也」と、或は頭腦酒を虛無僧酒とも云ふ、貧家酒資に乏しく多酌する能はず、一舉熱酒を以て酔を買はんとする也。

(七十二) 酒客に酒を戒む、酒客常に之れを聽かず、而して其の遯辭往々詩趣あり、艾子常

に酔ふ、門生私語して曰く、到底諫止す可からず、當に險事を以て之れを休むべし、一日先生酒を吐き甚だ困しむ、門生密かに豕腸を先生に示して曰く、凡そ人五臓を具ふ、今師一臓を失ふ、何を以てか生きん、艾子熟視して笑つて曰く、唐の名僧は三藏さんざうなるも尙ほ生く、余に尙ほ四臓しざう在り、憂ふる莫かれと、孔群も酒を嗜む、或る人之れを戒めて曰く、酒肆の覆甌布の日に月に糜爛するを見ずやと、群答へて曰く、糟漬の肉の久しきに堪ふるを知らずや。

(七三) 酒に浴するの談、落語家より屢々聽く、支那に石裕と云ふ人あり、酒數斛を槽に入れ、沐浴して後子弟に告げて曰く、吾れ平生酒を飲む、但だ恨むらくは毛髪をして其味を識らしめず、今日酒を以て毛髪を洗ふ、初めて身體髮膚不公平無きを得たりと。

(七四) 劉伶嘗つて客と江を渡り、颶風に遇ひ舟覆らんとす、衆皆慌然色を失ふ、伶獨り酒甕を抱き黙して言はず、風收まり人其故を問ふ、答へて曰く、死生命のみ、若し甕を覆へし酒を失はば、此際何を以て懷を遣らんと。

(七五) 張華の「博物志」一笑話を録す、君山の上に美酒數斗あり、之れを飲む者死せず、武帝人を遣して求む、果して之れを得たり、東方朔曰く、臣が熟知の酒也、請ふ視しよせよ

と、一飲皆な盡く、帝怒つて朔を殺さんと欲す、朔曰く、臣を殺して若し死せば、此酒不死の酒にあらず、此酒果して不死の酒とせば、殺すも亦死せずと、帝笑つて之れを赦す。

(七六) 李太白は一斗百篇、筆を援つて立どころに成る、杜子美は苦吟瑠鑄、一字を苟くもせず、太白子美に一詩を贈つて云く「借問因何太瘦生、唯爲從前作詩苦」と、其の推敲に困しみ瘦を致すを嘲る也、杜子美も黙止せず、一詩を寄せて曰く「何時一尊酒、重與細論しよ文」と、君の如く飲んで許り居ると、何時再び細かに文を論ずる時があらうとは皮肉也、細の一字、太白の作の縝密を缺くを譏る也。

(七七) 酒客死に臨み遺命を傳へ、瓶形の墓を作らしめたる例我邦に在り、支那には鄭泉と云ふ人博學にして奇志あり、酒を嗜むこと甚し、卒するに臨みて曰く、必らず我れを陶家の側らに葬れ、庶はくは百年の後化して土となり、幸に陶家に取られて酒壺を作るの材料とならば、實に我心を獲んと。

(七八) 酒客死して尙ほ醉意を墓誌に存する者は傳奕となす、此人自から墓誌を製して曰く「傳奕青山白雲人也、以醉死」と、醉死を標榜して憚らざる、流石に奇拔也。

(七九) 芳賀博士能く飲む、洋行中一眼、明を失するも、尙ほ酒を廢する能はず、歸朝の日同人迎へて其の所感を聽く、曰く余洋行中感ずる所の者惟酒のみ、曰く戰時到る處酒を買ふに困みたり、曰く某國規を設け時を定めて酒を賣る、時間外購ふ能はず、曰く某所酒を得るに困しみ、一瓶の麥酒を購ふに十五圓を投じたりと、談到頭酒の一字を離る、能はず、談後食卓に就く、同人博士に問ふ、兄酒を禁すと聞く、奈何、曰く然り、唯だ少量のウキスキーを用ゐると、コップに滿酌、二杯を引いて平然たり。

(八〇) 中江兆民酒豪を以て聞こゆ、嘗つて大隈侯邸に會す、兆民曰く、余近年酒を廢す、然れども全く絶つ能はず、爲めに禁酒の一案を立つ、曰く、晚餐に方り飯に箸を下さんとする時、一氣一杯を傾く、恰かも飯前汁を啜ると一般也、但し量コップ一杯に限る、稠人廣座の宴に赴くも此故を以て獻酬を辭し、此規を亂ること無しと、殺風景を免れずと雖も亦是れ節酒の一法と謂ふを得べし。

(八一) 余の戚家の主人禪を修む、酒量あり、思へらく、酒習慣に捕はる可からず、飲むも可、飲まざるも可、多飲可、小飲も亦可、能く自在なるを得て、始めて慣習の桎梏を免る、

に庶幾しと、依つて自ら試む、初め晩酌必らず其量を限度とし、規を守る三十日、更らに日を隔て、飲む、是れ又三十日に及び、終に能く自在の境に達するを得たり、余會つて此の經歷を聽き、深く其の克己に服す。

(八二) 山谷の八百善に酒規あり、伴なき客に酒を給せず、蓋し醉餘扶くるの人なきを慮る也、余往年之れを知らずして獨り行き此厄に遇ふ、知らず、今尙ほ此規を存するや否や。

(八三) 酒の未だ熟せざる、之れを新酒と云ふ、支那詩人の饗頭と云ふ者これなり、余甚だ好まず、往年越後高田に寓するの日、某期全く酒家に古酒を絶つ、僅かに三里許を距る地に一酒家の古酒を鬻ぐあるのみ、余寓所に此酒を藏し、酒樓に登る毎に必らず自ら携へて行く。

(八四) 濁酒固と清酒に及ばず、然れども濁酒の佳なる者、清酒の太だ佳ならざる者と孰れ、往年小野東洋(梓)と房州に遊説するの日、某村の宴に臨む、地僻にして佳酒なし、村人特に濁酒を余に薦めて曰く、都人士此味を知らず、清酒を闕くにあらずと雖も、特に此の濁酒を薦むと、余性來甚だ之れを厭ふ、嚶蹙して一杯を傾け、佳味意外に出で覺えず舌を鼓す、笑つて曰く、如斯き濁酒は都人士も亦辭する所にあらずと、蓋し村釀の清酒、却つて精製の濁醪

に若かざるを以て、特に余に供する也。

(八五) 余絶酒の日、偶々旅順陥落の快報に接す、此夜某所に祝宴あり、席上入澤國手に會す、余曰く、國家此慶あり、余も亦特に一巨觥を舉げて祝せんとす、可ならん乎、國手余の病を知る、曰く不可なり、宜しく牛乳を啜り酒に換ふべき也と、國手は固と下戸、汁粉を嗜んで終に糖尿の病に罹る、共に酒を談ず可からざる者歟、呵々。

(八六) 纏足は支那婦人の陋習なり、而かも彼に在りては纏足を美人の一要件とし、蕩子冶郎、金蓮の纖々を見て魂を蕩し魄を動かす、眞に意料の外に在り、某書に美人の睡鞋(臥寢用の靴)を杯とし、之れを風流となすことを記す、痴態笑ふ可きに似たり、顧ふに支那の俗、婦人の足を秘すること、恰かも吾が婦女子の乳を秘すと一般、苟くも許すの人にあらざれば見るを許さず、美人の靴を杯とし風流とするも亦故なきにあらず。

(八七) 酒を待つて感興を發する者何ぞ限らん、角觥を觀る時の如き、必然一杯無かる可からず、好角の觀者皆渾身の力を用ゐて輪贏を争ふ、酒力を藉りて元氣を鼓舞し來れば興益、深し、兩國開場の日、其の附近の電車に酒客を多く見るは此故也。

(八八) 酒は意氣を助く、應急土功の速成を欲する時の如き、機智ある者、往々酒を人夫に與へて其意氣を鼓舞す、大土功或は一氣に成る、昔し水災に應ずる急施工事の速かに成る者、酒力に藉る多し、今は官、形式に拘し、臨機の方便を取らず、工事澁滯する所以也。

(八九) 余曾つて烈寒の冬候、籃輿はしな嶺を踰ゆ、事三十年前に在り、當時輿を昇く者、所謂名物雲助となす、彼等は一揮の外單衣の半纏を肩に掛くるのみ、之を赤裸々と云はんも不可なし、彼等は建場毎に客に酒資を強請して必らず一杯を傾く、旅客皆之れを厭ふ、余思へらく、是れ陋習と云ふと雖も、實は旅客の喫緊事なり、彼等が寒と嶮とを意とせず、双肩軽く飛ぶが如く能く走る者は實に酒力に由る、其の走るは人の走るにあらずして酒の走る也。

(九〇) 蝦夷の土人酒を嗜む、飲に先だち必ず神に獻ず、彼等慎んで曾つて此禮を怠らず、數年前、淺草公園に蝦夷の老幼男女を伴ひ來り熊祭を演ぜしめたる者あり、余偶々兒女を伴うて場に入つて觀る、幕落ちて時を移すも開かず、會主、觀客の倦まんことを慮り、告げて曰く、普通の演劇は水を以て酒に換ふるとを得べし、但だ蝦夷人之れを肯んせず、云ふ水を酒に擬して神に獻ずるは是れ神を欺く者なりと、今壺中の酒盡き人を酒家に走らせたり、請ふ且ら

く待てと、余土俗の淳朴と興行師の利慾と衝突するを思つて爲めに一笑す。

(九一) 茶を嗜むの人、或は酒を解せざるあり、漫りに曰ふ、酒徒何ぞ茶の眞味を知らんやと、是れ實は謬る、醉餘の茶は風味百倍す、酒徒にあらざれば箇中の味を知る能はざるなり、酒客の好んで茶を談ずる者ある、偶然にあらず。

(九二) 飛瀑は李白得意の酒境也、但だ此境醉を發すること難し、余會つて三伏の暑候越の黒姫山下の瀧を訪ひ、泡沫逆る所の一巖に踞して一瓢を傾け盡す、瓢一升を容る、而して醉を覺えず、蓋し涼冷酒氣を壓し、其發揮を妨ぐるに依る、涼區を去つて漸く暑熱を感じるや、酒氣こゝに初めて發し、さいがは絲魚河の旅舎に着する頃、醉步蹣跚たり。

(九三) 醉人と醒人と對論する程、平仄の合はぬ者は無し、一は熱し一は冷、一は昂り一は靜、一は激し一は平、唯だ醉人と醉人は意氣全く相投ず、高調を以て酬ゆれば高調を以て應じ、一熱すれば他も熱し、一激すれば他も亦激す、一高一低、琴瑟相和するが如し、而して兩人の酒量相敵し醉調同じき時、特に調和を視る、若し夫れ酣醉漸く泥域に到らんとする時、談論全く體を失ひ、動もすれば論點を外して兩々相争ひ、盡くるの期無からんとす、如斯き者、

醒人より見れば笑ふに堪へたりと雖も、醉人の覺らざる者は、兩々共に亂る、が故に其失を知らざるのみ、是れ亦酒境の一趣味と云ふべき歟。

(九四) 飲を解する者酒を絶つと雖も、醉人と談笑して能く和することを得、蓋し箇中の趣を解するが故也、余會つて幸田露伴を招飲す、時に余酒を廢して飲まず、客の酒伴を闕くの故に、或は匆々酒を撤せんことを慮り、露伴に問ふに釣魚の事を以てす、釣魚蓋し露伴得意の道樂也、余の釣り出し果して功を奏し、露伴興に入り飲み且つ談じ、酒熟して更の深きを知らず、此間應答、客聲を高くすれば吾れ又高くし、客氣發揚れば吾れも亦揚ぐ、抑揚兩々相和し、醉人と醉人と相對したる如き者ありしは、余故らに和したるにあらず、醉人に對して、吾れ知らず酒心地となり、おのづから然る耳、李長卿會つて東坡を評して曰く「不善飲而喜人善飲、蘇長公深得酒仙三昧」と、善く飲む者、僅かに酒を廢して人の善く飲むを喜ぶ、余東坡に及ばざること遠し。

(九五) 人の藏書印、文必らず子孫の珍重すべきを云ふ、而かも子孫必らずしも祖考の意を服膺せず、余感ずる所あり、「子孫換酒亦可」の六字を撰んで藏書記と爲す。

(九六) 曩日兩國の賣立に山陽の一行幅を視る、文に云く「痛飲眞吾師」と、筆力雄健、氣韻生動、蓋し山陽醉中の筆歟、山陽の詩文妙を極むる者、其の思構なく痛飲の餘に成る、山陽に此の語無かる可からず、余此の幅に垂涎して終に逸す、今に於て遺憾の情無き能はず。

(以下四則は本篇修訂の際忌む所あり削る)

一四 水百態

今夏暑を水郷に避け、日夕水に親しみ、聊々水の趣味を感ず、隨感隨錄、終に百數十則を得、今其の百則を摘録し、水百態と題す、叙事倫次なく、構思奇警を闕く、固より大方に示さんが爲めに作るにあらず、三伏の暑熱を忘れんとする一時の漫筆のみ。

明治己酉八月於雙魚堂中

春城識

○水の大觀、家祖代海翁の文に盡く、云く「深山之樹卉、雨露之澤焉、滴哉、滴矣、津乎、液乎、成就蟻徑、導蚯蚓、匯塊礫、迂徐潤下、溢于凹而觸于崑角、浸發微響、以會於巖淵、然而蜚泉汨々逸聲若風之颼颼、束於瀑以格數百千仞也、雲霧四興靈天聞々號々如轟霆、若地之震裂于此、激於潭而蓄澗、頌隸斡巨石、律々砢々諸溪之駁奔而配于百川、泄

則瀦沼湖、擊則溝瀆渠、爲是弗韋弗效、悠々乎分于涓澮、補虛、瀉盈、已而尋盟於江河、以揚素波、疊狂瀾、千里一曲滾々焉涵岸、流演破俄以奮起、遂壓潮混於海矣、嗟夫水之云爲爾々厥始也慰調渴之不歎、其終也育天下而有贏、能至此極焉者、盡矣」
○水の語原を案ずるに、水は漏り出る也、海は空水也、波は鳴水也、泡は彌湧也、海嘯は強波也、瀧はタギル也、井は居也、活動せざる態を云ふ、池はいける也、魚をいける所を云ふ、川は汚掃、即ち汚穢を掃ふより來る歟。

○天地萬物の生成は、水を原始となすとは周易繫辭の天一地二の言に據りて宋儒の立てし説なり、曰く天一生水、地六成水之、天地萬物の原始を推して水に歸せしは、豈に研究すべき真理なしとせんや。

○洋々として際涯を見ず、觸る、に巖なく、礙ふるに淵なく、清濁渾然痕なく、獅子の濶歩することく、堂々として流る、者は、聖人君子に譬ふべし。

○激浪奔放、疾きこと矢の如く、一往千里、石を飛ばし巖を動かし、鞳鞳澎湃、觸る、者遮るもの、擊破せずんば已まざるの概あるもの、霸者に譬ふべし。

○涓々玉の如く珠の如き細流、規律なく路傍に縦横するもの、穉子の態を以つて譬ふべき歟。
○流れ小に水清く、底浅く石見え、野花亂れ咲くの間を潜り、潺湲として流る、者は處女の態に譬ふべき歟。

○覆盆の強雨、倏忽到り倏忽霽る、其の到るや雷鳴り電閃き、天地晦冥咫尺辨ぜず、其霽る、や天日輝き、一空纖雲を留めず、如斯は男子的態度、吾儕之を愛す。

○忽ちにして晴、忽ちにして陰、僅かに一晴を得れば忽ちに一雨來る、之れに譬ふべき人、往貴族社會に見る。

○細雨濛々數日に亘りて霽れず、粉末の水氣微分の罅隙に竄入し、衣服百物を濕潤せざれば已まざる者、所謂る梅天の淫霖、何人も忌む所、婦女子の啼泣、之れに庶幾し。

○水の滄蓄渾濁、淵を爲す所、富贍の相あり。

○水枯れ石出で、僅かに剩水を見る、貧窶の相あり。

○古歌に云く「そこひなき淵やはさわぐ山川の浅き瀬にこそあだ波は立て」人事に譬ふれば通人は多く言はず、半可通却つて多く言ふ、恰かも空罐を載せて走る車の騒然たると一般、老子

曰く「知者不言、言者不知」

○亂石相逼るの間、水は石を闘つて過ぐ、人に譬ふれば褊狹の人。

○傾斜ある筧に水の走るを見て、尤も水の急なるを知る。

○草庵寂寞たり、唯だ匆忙を見るものは筧の水のみ。

○山中寂寞と云ふを得ず、瀑布の落下する、溪流の石に觸る、其聲雨の如く雷の如く、轟々終日喧しく、幾んど市井に人語を聞くと同じ、而して人は市聲を忌みて水聲を意とせず、人間の神經質なる所以。

○飛瀑一方に懸り、溪流他方に在り、瀑聲の轟々、溪聲の涃々、相和して耳を聳せんとす、偶々驟雨至り、沛然として車軸を覆すの概あり、此の光景天地皆水也、而して人の此の間に在る、宛かも潜水器中の人と一般、一種悽愴の感に撃たる、吾れ鹽原の水郷に於て此の光景を實歴す。

○水は器に依て形を異にす、水ほど従順なるものはあらず、然れども水は必らず卑きに就く、水ほど頑固なるものはあらず。

○点滴は悽愴の感を起さしむ、何となれば、垂亡の相なればなり、燈を以つて譬ふれば、油盡くるに垂んとして火光瞬くの時也、人を以つて譬ふれば、將に絶息せんとして最後の呼吸を爲すの時也。

○水の味最も美なるは、夏時峻坂を攀ち登り、流汗背に滿ち、氣喘ぎ喉潤る、時、巖窟の清水を掬ふの際にあり、詩人曰く「平生於物固無取、消受山中水一杯」是れ此間の妙味、車輿道を行くもの、解せざる處。

○酔後渴を覺え井に走つて幾杯を傾く、其味金莖の玉露も管ならず、而して醒人は此味を知らず。

○水ほど旨きものはなし、臨終の人多く末期の水をのむ。

○京都は水の名所也、其清冽に於て其風味に於て天下に冠たり、吾れ平生水を口にせざるも、京都に遊ぶ毎に之れを口にし、晚間必ず節を曳いて橋下の淙々を聞く。

○「巖根秋水淨冷々、纔到此中心自醒」、支那の陶元亮は田水の聲を聞いてすら胸中の凝滯を釋くと云へり、曰く「時剖胸襟、一洗荆棘、此水過吾師大人矣」と、若し吾が鴨水を觀

せしめば、彼れ何とか云はん。

○余賣茶翁の書幅を藏す、陸鴻漸六羨歌中の一句を抄す、曰く「千羨萬羨江西水」と、茶人の書として適切を感ず。

○雨は感慨を惹く者、別して夜雨、客中の雨然りとす、故に雨は詩人に喜ばる、但だ感慨を惹き易きが故に神經患者に嫌はる。

○夏時僮僕を役して水を庭園に灌がしむ、樹石濕うて淋漓、一脈の涼意始めて動く、僮僕を悩うて曰く、卿等は日輪と鬪ふ也、其功偉也、其勞大也と、僮僕欣然として喜色あり。

○山水の美多く僻境に在り、故に遊人到らず、遊人到らざるが故に客を待つ備なし、不便は不便なりと雖も俗氣を帯ばざる處却つて妙、川柳子曰く、絶景に金つかふべき所なしと、眞に然り。

○野味を帶ぶるもの概して旨し、鹽のごとき、其の精製せるものよりは、多少ニガリを存する者却つて味あり、水に於ても、蒸溜水に味なく、山間の水に味あり、要は野味を存するに依る。

○同じく是れ水、皮膚より發すれば汗と呼び、陰部より發すれば尿と云ふ、然らば清水は汗、
鑛泉は尿に譬ふべき歟、咄、何ぞ譬喩の野卑なる。

○川柳子曰く「大井川より品川くびつたけ」これ水利家、地理學者の知らざる道理、呵々。

○水は外物を假りて多く趣をなす、溪流に橋の架する、亭榭の水に臨む、紅燈の水に映する、
流螢の水面を飛ぶ、小艇の水に泛ぶ、漁夫の網を翻す、兒童の綸を垂る、水禽の水を掠めて飛
ぶ、皆な水に趣を添ふ。

○影の水に映じて趣味あるもの、曰く帆影、曰く橋影、曰く山影、曰く塔影、曰く花影、曰く
月影、曰く燈影、曰く雲影、曰く樓影、曰く鳥影。

○聲の水を度りて趣あるもの、曰く櫓聲、曰く鐘聲、曰く絃聲、曰く欸乃、曰く笛聲、曰く禽
聲、曰く擣衣。

○夜雨一過、街上燈光滿地、吾れ此光景を愛す。

○近購鴨匡の幅に一詩を録す「宿鷺濕難飛、留舟白沙嘴、一燈看入雲、滿地皆空水」暮雨の景、
寫し得て妙を覺ゆ。

○夜水は活氣なし、唯だ燈影の落射を得て活氣あり。

○水に横の水あり、豎の水あり、曲線の水あり、横の水は豎の水の美なるに若かず、豎の水は
曲水の奇なるに如かず。

○横、豎、曲、其の何れにしても規則立ちたるは概して趣を闕く、横水の河も石の遮斷を得て
始めて趣あり、豎水の瀑布も屈折ありて始めて趣あり、曲水も變化なければ趣なし、外國人此
理を推して日本美術を味はゞ、眞諦を得るに庶幾からん。

○電力燈を點じ電力聲を通ずるは時好的新式の設備也、而して山間の都會に比々此の設備あ
り、動もすれば一等都會地に先んずるの勢あるは山間水に富む故也、都府の兒童は電燈電話の
機を見慣る、も電力發源の狀を知らず、却つて僻陬の村兒牧童之を知る所以も、亦其の附近に
水力發電所あるが故也、天下の事此に類する者なきか。

○俚語に云ふ、婦人は水性なりと、是れ陰陽家の説に出づ、未だ其の據る所を知らず、然れど
も近世生理上の研究に據れば此言偶々事實と吻合す、曰く婦人の體は男子に比し確かに多量の
水分を含有す、婦人の多く束縛塞、薩摩芋の如き澱粉性食物を嗜むは、其の體質水分多きに因

る也。

○隧道を穿つて水を通ずる所、鐵道のトンネルに比すれば遙かに趣あり、余嘗つて琵琶疏水の隧道を過ぐ、一船約十二三人を容る、屋蓋あり、船首に燈火を點す、水道の幅二船を駢ぶを得べし、初め閘門に入る、陰黒咫尺を辨ぜず、漸くにして目、闇に慣る、凝視すればアーチの側面に鐵鎖を装置す、船手之を繰り、船は一側面に沿うて行く也、燈光は微に暗流を照らし、船下水聲を聴くのみ、悽然愴然、神悸れ氣沈み、船客皆默す、忽ち前面に燈火を認む、頃刻にして一船來り、舳々相摩して過ぐ、船手互に呼應し、兩舳の乗客期せずして萬歳を叫ぶ、亦一種の光景也。

○古池古井は閑寂の趣あり、此趣日本人以外概ね解せず、閑寂はサビと云ふ日本特有の語なり。

○我邦の名瀑名水多く浮屠氏の探檢に依り世にあらはる、随つて佛典の語を名とするもの少からず、又概ね水邊に佛像を置く、幽寂の味は境とよく調和し、崇高の趣を一層深くす。

○村居水景の佳なる者、曰く農夫清流に蔬菜を洗ふ、曰く家鴨水に遊ぶ、曰く雨後澗水岸を吞

む、曰く野水盈々村童牛に飲ふ、曰く村娘甕を提けて柳外に蛙聲を汲む、曰く澗流清うして馬を浴す、曰く農夫雨中蓐を採る、一々擧ぐるに暇あらず。

○昔し紀文は夏時隅田川に幾千の白扇を流して打興じたり、紀文は確かに水の趣味を知るもの、墨水に配するに白扇を以てす、特に妙を覺ゆ、維新後に至るも、墨水に流燈の事あり、而して今はなし。

○水勢の猛と雖も巨巖を流下すること難し、絶對不能にあらず、偉大の力を要するのみ、但だ逆に巨巖を上流に上らしむるには必らずしも大なる力を要せず、蓋し水の巖石の遮斷に遇ふや、必らず之れと相搏ち、其餘勢岩の座下を掘る、随つて激すれば随つて掘り、終に座下に凹處を生じ、巨巖をして之れに落ちこましむ、而して之れに落込むは上流に一步を進むる也、如斯にして日々夜々月々歳々、同一の事を繰り返し、久しきを経て、著しき前進を見るに至る、人は石の上流に溯るを不可思議と云ふ、實は理に於て然らざるを得ず。

○雨後風起れば大水來ると云ふ、事實も亦然り、余初め其故を解せず、後漸く其解を得たり、蓋し山にあるの樹木其數幾十萬、其樹木の葉幾億萬、雨の葉を濡して葉上に停留する水量、

葉に就て見れば僅かに數滴に過ぎず、然れども幾億萬葉の上に停留する水量を合すれば幾十萬斛の大を爲す、而して日光之れを乾かすに遅なく、強風一揮すれば、此の幾十萬斛の水は直ちに地上に落下し、或る部分は地下に入るべきも、或る部分は流れて終に河に投ず、雨後の風、出水の因を爲すは此故也。

○山大の氷塊、點々水に浮び、白熊水牛其間に出没す、是れ絶北荒陬の境に於て觀るの景、駭然崇高の感に撃たる、は是れ。

○毎年避暑の客、其數萬を以て數ふ、海に行き河に行き又山に行く、其費す所幾千萬金、而して其の目的は一掬の涼味を買はんとするに在り、涼味は水に在り、渠等は究竟水を買ひに行く也。

○歐人水の趣を寫して妙を極むる者、ラスキンあり、ヴァン・ダイクあり、渠等の筆は周匝にして繊細、觀察亦奇警、東洋人の及び難き所あり、ラスキン微水の流る、狀を叙して曰く、

When water, not in very great body, runs in a rocky bed much interrupted by hollows, so that it can rest every now and then in a pool as it goes along, it does not acquire

a continuous velocity of motion. It pauses after every leap, and curls about, and rests a little, and then goes on again, and if in this comparatively tranquil and rational state of mind it meets with an obstacle, as a rock or stone, it parts on each side of it with a little bubbling foam, and goes round, if it comes to a step in its bed, it leaps it lightly, and then after a little plashing at the bottom, stops again to take breath.

ヴァン・ダイク山湖の風光を頌して曰く、

When ever looked at from a height, it seems like some precious elixir held in an emerald chalice—a gem set in a frame of hills and forests.

又曰く、

The mountain-lake is Nature-pure, simple, and unfeigned. No one can fail to admire it and love it. It is one of nature's brightest jewels set in her green girdle of hills.

何ぞ其の形容の美にして妙なる。

○魚眼蟹眼は水の沸騰の狀、松韻濤聲は水の沸騰の聲。

○寂然たる緑池は水の囚はれたる態、吾れ好まず。

○河水雅名を有する者多し、而して吾は尤も刀水の佳を稱す。

○一帆動かす午風死す、海は此時黒甜郷に在り。

○野渡は趣あるもの、衆人舟を争うてどよめく聲に驚かされ、叢中の白鷺江に映じて飛ぶの光景は畫趣あり、深夜獨り水際に立つて船を喚べども人答へず、江烟深く罩めて前岸を見ず、唯だ水聲を聴くの光景は、人をして悽然の感に堪へざらしむ。

○落花を浮べる水は艶なり。

○想思の文ある紅葉、笈を傳うて情人の手に落つ、無情の水こゝに至つて情あり。

○兩厓深く落ち込み、藥研の如き底に細く白く水の流る、を嗽るは趣あり、淙々として地下に聲のみを聞き水を見ざるは奥ゆかし。

○溪水水車を回轉し、剩水茅舎を繞り、厨に入り湯槽に入り、盈々器に溢れ、晝夜變換瞬時も息はざるもの、溪村に於てひとり見るの景、都下の富豪をして村叟を美殺せしむるは是れ。

○郷里近き僻村に清冽なる岩清水あり、石を以て築きたる尺四方の容器を以て之を受く、水量

斗に満たすと雖も三伏の暑候會て涸渴を見ず、余歸省の途次必ず之れを過ぎ、一茅店に憩ひ之れを掬するを例とす、西行の「とうくと落る岩ほのこけ清水くみほすこともなき住居かな」の和歌、吾人こゝに於て趣味を感ず。

○水上の游は趣あり、秦淮には今猶ほ畫舫を浮ぶと聞く、我邦又江戸時代に於て妓を載せ舟游を爲すこと盛んに行はる、故に江邊著名の酒樓多し、曰く八百善（山谷）、曰く橋本（龜戸）、曰く平清（深川）、曰く龜清（柳橋）、皆水邊に樓を營むは游船と連絡を保つに外ならず。

○東坡赤壁の游は風流の令典として永く後世に喧傳す、土佐の容堂、前赤壁の夕べ舟を浮ぶるを以て家例とす、曾て秋月種樹に一簡を寄せ此の事を報ず、曰く「明夜東坡先生舟遊の夜、僕家例にて風流社同舟にて飲酒吹簫相樂候、此節故彈正臺之巨擘に豫じめ居置、正々堂々出掛申候、阿々、三叉漁長」と、以て證となす。

○杭州小西湖の水、茶を煎るによく又墨を磨するによし、文祿の役豊公幾櫓の水を輪致し、之れを京師の某川に注ぐ、爾來其水文人墨客に珍重せられ、好事の人或は百里人を勞して之れを取るに至る、讚州の後藤漆谷曾て人を派し遙かに此水を取らしむ、使者僞はり近村の清水を取

り之れを呈す、漆谷一嘗直ちに其偽を看破すと、是れ讚州友人の語る所、文苑の一話柄と爲すに足る。

○寛政四年、大村侯唐商をして西湖の水を取らしむ、皆川淇園其餘瀝を得て喜ぶこと甚し、即ち墨に和して西湖の圖を寫し、自から其の事由を題す、圖成り尙半勺の餘滴あり、淇園之れを圓山應舉に贈る、應舉喜び又西湖の圖一幅を製す、今共に藏して某家に在りと云ふ、佳水の墨苑に重んぜらるゝ、以つて見るべし。

○昔し浦島龍宮に遊び、金殿晶樓百珍千寶を見ると、是れもと假託信するに足らず、而して今の潛水夫は事實海底に珍寶を探り往々龍宮に遊ぶ、唯だ今の龍宮は鋼鐵製也、これ昔しと同じからざるの一、又昔しは龍宮を見るのみにて之れを水上に曳き來る能はず、今は容易に之れを曳き揚ぐ、これ又異なるの一、今昔の相違驚くに堪へたり、而して今の龍宮は軍艦即ち是れ。

○水を泳ぐ者は水の溫度を知り、其の速力を知り、又其の味を知る、彼輩曰く、都會の河水は尤も不愉快を覺ゆ、水微温にして往々石油の氣を帶ぶと。

○釣客船に起臥し往々數日に涉る、語つて曰く、漁舟に身を寄せ水上に寢臥して夜を明すもの

にあらずんば、眞個水上の趣味を解せず、月夜には月夜の趣あり、暗夜には暗夜の趣あり、宇宙幽寂の趣は夜半に於て始めて味ふを得べしと、又曰く、睡中物音に驚き、覺むれば大魚舷側に躍り、頭を露はして船に薄る、月光水を帶ぶるの魚頭を照らし、魚眼の閃々と共に一種怪物到るが如き感を起さしむと、其境に在らざれば實驗しがたき光景也。

○幸田露伴釣に精し、曾つて曰く、支那に於て釣の通人は太公望にあらずして唐代の陸龜蒙なり、又曰く、手柄岡持は狂歌師なるを知るも釣の名手たるを知らず、手柄と云ひ岡持と云ひ、皆な釣に關する器なりと。

○畫人瀑布に配するに酒客李白を以てす、是れ偶然にあらず、瀑邊に酒を飲めば醉を覺えず、何人も瀑布に對して小李白たるを得る也、余嘗つて瀑邊に酒を飲む、升餘の瓢を傾け盡すも醉を覺えず、歸途に就くに及び氣温遽かに變じ忽ち醉を發し、幾んど倒れんとするに至る、以つて瀑布の人に酒を侑むる、解語花の上に出づるを見るべく、又瀑邊に多く飲み遽かに地を易ふるの危険を見るべし。

○文章に水分多きものあり、山分の多きものあり、東坡の文章水分多し、故に波瀾動盪、韓退

之の文山分多し、故に峰巒峭起す、或は又韓海蘇潮と云ふ、東坡の文を潮にし退之の文を海に譬ふ、共に肯綮に當る。

○蘆荻浦に連り白鷺群をなして雪片の如く飛ぶ時に、鯨吼一聲水を度つて來る、水邊の晚景自から畫趣あり。

○古歌に云く「しのぶ夜の雨はなかくたよりにて」と、盜跖之れを藉れば惡をなし、男女之れを藉れば相思を通す。

○吾は水邊の涼棚を愛す、而して尤も鴨水の涼棚を愛す、鴨水淺くして清冽、晚間水中幾十の涼榻を置く、大抵一榻數人を坐せしむ、榻上燈あり火光水に映じて趣あり、掌を鳴らせば茶菓杯盤咄嗟に辨す、榻下潺々聲あり、以つて杯を洗ふべく足を濯ふべし、而して橋下別に涼棚を架す、宛然劇場の棧敷と一般、碁碁の目の如き區劃あり、一區約四人を容る、而して一條の通路あり、仰けば橋上の履聲屨聲を聞き、俯しては潺々たる水聲を聽く、一種の奇構他に例を見ず。

○水の趣味は意料外の者に及ぶ、例へば兵の如し、海戦は昔しも今も陸戦に比すれば趣味ある

にあらずや。

○海に趣を添ふるもの、曰く島嶼、曰く亂嶼、曰く風帆、曰く城樓、曰く燈臺、曰く棧橋、曰く巨鯨。

○板橋趣味なし、霜を帶ぶれば趣味あり、蜘蛛趣味なし、露を帶ぶれば趣味あり、茅舍趣味なし、雪を戴けば趣味あり。

○古來飛瀑の詩多し、吾は吳梅村の五絶の簡にして盡せるを愛す、曰く「亂瀑界蒼厓、松風吹雨急、石廊虛無人、高寒不能立」

○秋水は澄澈瑩の如く幽靜の趣あり、朗月の映するも佳、紅葉の風に隨つて飛び水上に浮ぶも亦佳、村上佛山の詩に曰く「秋水磨明鏡、寒潭晚照餘、漁翁舉網處、紅葉多於魚」と、秋水の趣を得たり。

○都下の山水俗了を免る、者幾んど無し、唯だ山間溪流の趣を有する處は一の茶溪あるのみ、車馬道を過ぐるもの毎に路上より之れを瞰下すれども眞趣を得るなし、但だ舟に棹して過ぐるもの初めて詩趣の多きに一驚を喫す。

○毒暑人を薰じ骨灰ならんとす、此時驟雨一過、水に千金の價あり。

○某侯銀橋を架し之れに白砂糖を盛り以つて雪に擬す、然れども到頭自然の雪の美なるに如かず、某閣老銀線を巖邊に装置し瀧に擬す、然れども終に自然の瀧の美なるに及ばず。

○海上波躍り宛然白兔飛ぶの觀を爲す時、舟師戒めて船を出さず、蓋し波濤飛兔の狀を爲すを以て、風浪劇甚海路危險の徵と爲す也、清人は同一光景を白鷺濤と云ふ、惟ふに白兔實を寫すに遜き歟、狩野一流の畫、往々波上白兔躍るの景あり、形容終に實物に化し此の畫あるか、攷ふべし。

○微雨蕭々の夜、遠く水邊の漁篝を望む、篝火往々地上を離れて見ゆることあり、不思議に似て不思議にあらず、實は水蒸氣の作用に外ならず。

○友人五峰の詩に云く「健鯉躍波龍氣動、一池雲影黑濛々」一種の水景、涼味掬すべし。

○俳人鬼貫の句に云く「飛鯉の底に雲行く流かな」雲の瀑底に通ふ風景、寫し得て妙、是れもと水蒸氣の爲す業、本邦に於て敢て珍らしからざるも、乾燥地の人或は解し難からん。

○余鷗波の露を咏するの七絶を愛し毎に之れを誦す、曰く「凝若瓊脂散似泡、團々綴得宿

菅茅、黄昏走上青秧葉、清夜滴來丹桂梢、月下濃時蟲韻明、花間濕處蝶魂交、最憐冷淡野塘曉、萬點荷珠風裏拋」

○旋渦は水の曲線の最も美なるもの、其小なるものは池水に於ても之れを見る、小旋渦は愛すべし、其大なるものは島嶼水を遮り海中に於て見る、大旋渦は壯觀也、而して觀者悽愴の感に擊たる。

○物の相容れざる水火營ならずと云ふ、水能く火を滅するを指す、到底火は水に敵する能はず、勢力に於て又分量に於て、況んや火は水に代用し得ずと雖も、水は火に代用し得るに於てをや、見よ石炭を用ゐたる工業は今水力電氣を用ゐるにあらずや、石炭盡くるも憂ふるを要せず、水は無盡藏にして無限の火を作るを得、水能く火を滅し又能く火を作る、水なる哉、水の勢力洪大無邊。

○水の眞味を解する者、曰く茶人、曰く染織家、曰く釀造家、曰く釣客、曰く游泳家、曰く畫家、曰く厨人、曰く水道吏、而して醫家、藥劑師、化學者に至つてはすべての水を不純潔となし、特に蒸溜せざれば使用せず。

○水は革新の好模楷也、動けば清く動かざれば腐る、井水のごとき、汲むこと甚しければ益々佳水を得、水は革新を教ふる好師範也。

○塵埃を避くるの適處は水上に若くなし、故に能代の漆工は海上に船を漕ぎ出して漆を施す、是れ能代産漆器の晃々鏡の如く纖塵を留めざる所以。

○水は到る處得難きにあらず、然れども佳水は甚だ得難し、年々幾千萬斛の釀酒を産する灘に於て、佳水は僅かに一井に過ぎずと。

○水若くは水に因める者を以て名を命ずる者何ぞ限らん、曰く春水、曰く楓江、曰く甕江、曰く佩川、曰く梁川、曰く藍川、曰く秋水、曰く菱湖、曰く嵐溪、曰く楓湖、曰く東湖、曰く北海、曰く磐水、曰く磐溪、曰く柳灣、曰く桃水、曰く南海、曰く東洋、曰く南洋、曰く南湖、曰く南溟、曰く若水、曰く如水、曰く言水、曰く瀟水、曰く赤水、曰く鰐水、曰く百川、曰く雨華庵、曰く海屋、曰く鴨厓、曰く桐江、曰く松塘、曰く春濤、曰く雲泉、曰く雲峯、曰く雨峯、曰く雨谷、曰く雨山、曰く梅潭、曰く露伴、曰く雪山、曰く蘆雪、曰く觀瀾、曰く雪舟、曰く雪村、曰く澤庵、曰く雲濤、此他列舉に遑あらず。

○山は水の配を得て始めて好個の風景を爲す、名山も水を闕けば其の趣味半ばを失ふ。

○山水は其互ひに相扶けて風致を作る點より見れば朋友也、山あれば多く水あり、互ひに相隨伴して離れざる點より見れば夫妻也、故に山あり水を闕き水あり山を缺くは獨身也、寡婦也、共に圓滿ならず。

○月瀬の梅の天下に名高きも水あるに依る、清流に沿ふの谿谷皆な梅樹にして、中に一谿梅樹密生、老幹垂れて水に及ぶものあり、試みに舟に棹して過ぐれば花影水中に倒射し、舟は花を碎いて行く、其の枝幹の水に達する邊に舟を駐めて水を掬すれば自から馥郁の香あるを覺ゆ。

○水は岩礁を得て趣を爲す、唯だ巨巖參差舟を通せざる所は、激浪雪を噴くの壯觀ありと雖も趣單調にして奥床しき味なし、ひとり保津川は巨巖あり、深潭あり、急湍あり、境幽邃にして水路屈曲能く舟を通ず、是れ保津の勝の天下に冠たる所以。

○日本は一大水國也、周圍には大なる海洋ありて、これより蒸發する水蒸氣は濛々常に全土を包み、其の山嶽に撞觸するや、凝つて雨雪と成り、散じて河川沼湖となる、水は到る處に満々

たり。

○水の操縦は何れの國に於ても難んずと雖も、本邦の如き大水國に於て最も甚しとなす、智力に於て財力に於て大いに費す所無くんば、其操縦得て望む可からず。

○堤防の歴史を案するに、初めは水の氾濫に任ずること未開時代の通態とす、支那朝鮮に於ては今日に於ても無堤防の所多し、漸く進んで土を築き水の氾濫を防過す、之れを堤防の始めとす、但し堤防に除害と興利とあり、前者は目的消極にあり、後者は目的積極にあり、日本に於ては徳川以前の堤防は大抵前者に屬し、徳川氏に至り初めて興利の堤防あり、世益々文明に赴くに隨ひ土功大に進み、堤防を築く代りに河身を掘り下げ若くは幾條の水路を通じて水の排出を圖る、即ち治水術進歩の極致は窮竟深く穿つに在りて、高き堤防を不用に歸せしむるに在る歟。

○本邦の治水は堤防を是れ主とす、水量高きこと一尺なれば堤防又一尺を加ふ、堤防益々高うして河底愈々上り、往々河底の平地より高きこと數丈餘に及ぶ者あるを觀る、即ち堤防を築くを以て治水の能事となす間は治水の術未だ幼稚なりと謂はざるを得ず、即ち高堤防は國の未開

を白狀するものにして、又土木技師の不名譽を表白する者と謂ふべし。

○治水を策するに第一の必要は、洪水の先例、大水の歴史也、然るに不幸にして先例沿革は文獻其の詳を闕き、僅かに存する者は口碑に過ぎず、此の口碑は古來治水を策する者の規矩とし繩墨とせる者、文獻其詳を闕く場合に於て固より重んぜざる可からず。

○昔しは土木の技術進まさりしが故に主として重きを歴史に措けり、今は新式の技術漸く進まんとして未だ精に到らず、而して早く口碑を失ひ又歴史を忽視するの風生ず、治水の策支吾を生ずるも怪むを要せんや。

○水は其量に於て大小を豫測す可からざるもの、是に於て古來治水を策する者必らず水路の傍近に餘地を存して萬一に備ふ、今は既往の水量を知るに由なく、又將來の水量を測る能はずして漫りに餘地を削り、以て經濟の策を得たる者と爲す、是れ即ち苟有の事實を必無として打算の基礎とする者、今の治水術は夫れ危い哉。

○徳川時代の水巧者の遺言に聞くに、利根の堤防の堅牢となりしは、八代吉宗享保以後の事とす、曰く「古法は、さのみ兩岸の水防を高大にせず、大洪水は兩岸諸所平均に座越まこさせて、上あ

水を一圓に押開かせ候様に、川上も川下も心得たれば、却て土手の切れ崩る、事なかりし」と、亦治水計畫及び監督の官長たる人の忘るべからざる金言なり。

○日本は水力跋扈の國也、水力跋扈するが故に自然の風景に富む、風景美に於て世界に超絶するは水力跋扈の賜也。

○風景美誇るべし、然れども水力跋扈の爲め國家の蒙むる損害果して幾何ぞ、此の大損害は實に風景美に拂ふの租税也。

○大水毎に風流の處多く慘害を免れず、即ち懸崖樓を起し水邊亭を築くの處、皆な打撃を受けて悲惨を極む、怪むを要せず、遊賞地は多く水の左右管帶區なり、水の游滯跋扈地なり、其の打撃を受くるは當然水に對する貢租と見るの外なし、古人云く「築堤束水、必遺川澤之分、使_レ左右游滯寬緩_レ」

○自然の山水に富む風流地に亭榭別業を營むは固と富人の業也、其一朝水災に罹り經營を犠牲に供し、輕からざる租税を拂ふは富人自から招來する災とも見るべし、惟だ百政集權の中央政府の下、幾萬の人家を水下に没し蒼生を饑餓に泣かしむるに至つては、斷じて爲政家其責を免

かる可からず、願ふに本邦の爲政家は人に對しては嚴酷にして假藉を知らずと雖も、水に對しては古來寛大に過ぎ、威令行はれず、幾んど無政府の狀あり。

○何が故に風景美は水力跋扈の賜と云ふ、蓋し水は大なる自然の美術家なり、渠は營々倦むなく、幾百年幾千年將た幾萬年、殆んど休息なく山を削り谿を穿ち河を開くが爲めに巨斧を揮ひ、更らに雨露霜雪の如き細斧を藉つて密に彫刻し、奇巖_ニ、に生じ怪石_ニ、に起る、或は峭立柱の如く雲に聳つものあり、壁立屏風のごとく透遞屈折するものあり、或は洞門洞穴を穿ち、て人を通ずるあり、或は人形、魚形、鳥獸形を作るあり、或は仰ぎ或は俯し、或は起ち或は臥し、或は水上に或は巖上に、而して山に於ては飛瀑を懸け、海に於ては澳灣を削り、人間をして造化の美に驚歎せしむる者、皆な水の彫刻作用に外ならず。

○水の技巧を弄する、岩石の質に依つて難易あり、夫の石灰岩は其質軟、故に水の技巧を施す又容易にして、此種の巖石に殊に奇工を見る、然れども軟巖の彫刻は巧緻に過ぎ、往々俗に陷るの觀あり、花崗岩に至つては其質堅硬、之れを彫鑿すること甚だ容易ならず、水の刀を揮ふに苦心する所の者は是れ、然れども彫鑿の結果は奇抜にして雄渾の趣あり、宛かも雪舟一流の

畫に對する如く、人をして崇高の念を起さしむ、地理學者は如上の彫刻を浸蝕と云ふ。

○水は多能なるも兩極圈内に於て巖石土壤の浸蝕彫鏤して風景美を形作るの材料無きに窮する時は、自から固結して山嶽を作り島嶼を作る、水は眞に風景の神、如何なる所に於ても風景を美にせざれば満足せず。

○浸蝕は水の活動作用也、海洋の或る水深以上には波動なく潮流及ばず、全く水は靜止して活動なし、隨つて山壑谿谷の參差たるものなく、彫鏤の妙を極めたる奇巖怪石あるを得ず、且つ日光達せず全然闇黒界なるが故に色彩ある海藻魚類ある無し、海底は唯だ貝殻を交へたる無趣味の沙漠のみ、海底の陸地に接續する故を以て陸上の趣あるべしと想像するは非也、水も流石に人目の及ばざる所には無益の勞を費すを欲せずと見えたり。

○水の技巧を弄する單に彫刻のみにあらず、五色の靈筆を弄して彩色を施すに於ても亦妙を極む、試みに水蒸氣の作品を見よ、曰く海市、曰く蜃氣樓、曰く虹橋、曰く紅霞、曰く蒼靄、曰く彩雲、曰く六花、曰く蘿葛、曰く莓苔、一々列擧するに遑あらず。

○水を以て兵に譬ふ、海洋は億萬貔貅の本營にして地上は其の戰場也、而して河川は其の退

路と見るべき歟。

○水は退路に於ても間斷なく戰鬥を繼續す、而して其の激戦地は概ね川の上流にあり、渠等の巖石起伏する谿間を過ぐるや、其の勢力の如何に猛激なるかを見よ、渠等の石を搏つや、其の聲雷霆の如く、激浪高く捲き、泡沫四方に飛び、石躍り巖動く、渠等は其の進路を遮る障礙物を一空せざれば已まざるの概あり、之れを兵に喩ふれば、氣鋭の士官白兵肉薄の狀に似たり。

○水上流の激戦地を経て漸く平野に入るや、堂々として流れ、大人濶歩の勢あり、兵に譬ふれば、名將大兵を擁して野戦を布くの概あり。

○水漸く中流を経て下流に入る、流域甚だ擴がり、地勢幾んど傾斜なく、宛然沙漠の如し、水こゝに迫むで勢大いに衰へ、毫も活氣を見ず、兵に譬ふれば、老癯の將卒百戰に疲れ、隊伍を亂して退却するに似たり。

○水の初め溪流を奔つて漸く平野に入るや、扇形に展開せる石礫の累々層を爲すを見る、是れ上流に於て水が岩と闘ふに用ゐたる武器也、此の石礫は固と戰鬥中水の拿捕したる者、渠等は拿捕の敵を以て敵を打つの武器に充つ、水の兵法は巧妙也。

○河は己れの浸蝕作用に依り、其の削りたる多量の巖屑を又己れの力に依つて掃除す、河口に堆を爲す三角洲は即ち山屑の掃き溜也。

○古來の傳説に云く、水はあらゆる魔術妖術よりも優るの秘術を有すと、然り、水は自然界の大妖術家なり、而して此の巨匠は日本に於て殊に多く、古來幾んど人の之れを牽制するなく、任意に其の手腕を揮はしむ、本邦の名山水に富む、怪しむを要せんや。

○河に直線の者と屈曲多き者とあり、流域を遮る障碍物の有無により此の別あり、即ち屈曲多き河は水の苦勞したる經歷を語る者也。

○古人云く「讀史之難、莫如釋地、釋地之難、莫如言水」と、眞に然り、蓋し水は地域を畫して界を爲すもの、然るに水固と動性、其の位地往々變ず、水史に精しからざれば誤は終に釋地に及ぶ、史家水史の研鑽を忽諸に附す可からず。

○水の操縱古來人の難んずる所、但だ平面の水を操縱する法は略々備はると雖も尙ほ且つ時に之れを難んず、而して水を高きに登すの法に至つては、其の研究全く今後の事に屬す、到底水を操縱して自在に幾百千尺の高きに致すの法備はらざる限りは、大阪の如き大火の再び起らざ

るを必ず可からず、水道の如き又十分の便を得可からず。

○蘭亭高士を會し、曲水杯を浮べて韻を探るは千古の風流、我邦古來騷人の之れに倣ふもの多し、而して今此の事なきは惜むべし、吾れは世界の海を曲水に擬し、治わく列國を誘うて會員となし、世界的曲水會を一等都府に開き、蘭亭の法に依り須要の問題を探り、時を限りて答案を附し、互ひに所見を鬪はすの益あり興あるを想ふ、知らず、世界好事の士、誰れか此の盟主たるものぞ。

○水の大と云ひ小と云ふ、要は比較の語也、日本の自然山水に比すれば尺盆の山水は小品なり、大陸の大山大水を以て我が山水を見れば皆小品にして、恰かも盆中の假山水の如きものあらん、吾れ島國に局限し未だ大陸の大山水を知らず、百水を筆するに小品の水の範圍を脱する能はざるは慙愧に堪へざる所也。

春城隨筆 終

25553

大正十五年十二月十七日印刷
大正十五年十二月二十日發行

(春城隨筆)

定價貳圓八拾錢

著者 市島謙吉
東京市牛込區東五軒町三十五番地

發行者 種村宗八
東京市牛込區辨天町百五十七番地

印刷者 竹內喜太郎
東京市牛込區履町七番地

不許
複製

發行所

早稻田大學出版部

東京市牛込區早稻田

(振替) 東京一三二四三
名古屋二二二四三
大阪六八九〇〇

日清印刷株式會社印刷

増訂新版

市島春城著

隨筆賴山陽

▼本書は何故、無際限に賣れる？

(一)材料は著者が四拾年間苦心蒐集したもの、而も從來の著述中に漏れた斬新な材料を網羅したこと(二)山陽に對する褒貶的態度を超越して其人間味を赤裸々に表したこと(三)隨筆體に面白く描き、どの頁を讀んでも趣味津津たること、などが主なる理由であらう。今回更に新發見の材料に依る記事八十餘頁及珍奇な寫真數葉を添加した。殊に竹田が寫生した山陽竹田對座の圖は山陽の肖像畫として真に天下一品である。

三六判七二〇頁
 口繪多數入美裝
 定價參圓
 郵稅拾貳錢

東京 早稲田大學出版部發行 振替 東京一三一三
 大阪 六八九〇

賣捌所

東京 神田	東京 京橋	東京 京橋	大阪 西區	名古屋 市
東京 堂	北 隆館	東 海堂	盛 文館	星 野書店
其 他	各 地	各 地	各 地	各 地

市島春城著

藝苑一夕話

三六判全九百頁
總布函入美裝
價各貳圓參拾錢
郵稅拾貳錢

(上下二卷) ▼江戸文人詩客の逸話集

本書は『蟹の泡』の姉妹篇とも言ふべきもので、それが西洋の逸話を集めたのに對して、これは日本藝苑の逸話集である。即ち江戸文化が頂點に達して幾多の文人詩客を輩出した文化文政時代に於ける「ツムヂ曲り」の人の逸話を中心としたもので、無邪氣で而も極めて味のある珍談は、一度手にすれば一氣に讀了せしめて了ふ底の魅力がある。

東京 早稲田大學出版部 東京 早稲田大學出版部
牛代 三二一 牛代 三二一
振替 一〇〇九八六

市島春城著

蟹の泡

三六判五百頁
總布函入美裝
定價金貳圓
郵稅金八錢

本書に輯めた小話百五十篇、其の多くが東西先賢の逸話に屬する所から、書名を「蟹の泡」と題した。畢竟藝苑の天才と云はるゝ人は、其の言行概ね一風變つてゐて常徑を履まず、多くが世間の所謂「ツムヂ曲り」なるもので、言はゞ蟹の横行にも似た行き方である。而して又蟹には元來腸が無いと云はれてゐるが、之等先賢の行徑常軌を逸して居ながら、亦甚だ無邪氣な點がそれによく似てゐる。
：此書が讀者に破顔一笑の興を添へることもあれば、全くこの「ツムヂ曲り」諸先輩の賜に外ならないのである。(著者序文の一節)

東京 早稲田大學出版部 東京 早稲田大學出版部
牛代 三二一 牛代 三二一
振替 一〇〇九八六

市島春城著

大隈侯一言一行

三六判五四〇頁
總布函入美裝
定價貳圓參拾錢
郵稅拾貳錢

▼侯の眞筆(寫眞版)二枚 其他口繪八枚

世界的偉人大隈侯逝いて以來、國民が侯を哀惜追慕するの情、益々加はる。此の偉人の日常生活の精細は、何人も知らんと欲して未だ知り得ざる所。茲に市島氏あり、侯に隨身すること四十餘年、侯の一言一行を悉く日記に誌し置き、其一顰一笑をも洩さず。今此日記を土臺として侯の言行を口述し、文壇の雄將にして平生隈侯を敬仰せる梅溪氏を筆録す。侯の家庭生活、趣味、嗜好、人物觀、社會觀、各種の逸話を網羅せる空前の隨筆的傳記にして、侯の面目宛から生けるが如し。寔に侯を千古に傳ふべき一大書也。

東京 早稲田大學出版部 東京 東牛 京込
三二一 一 京東 部 版 出 學 大 田 稻 早
〇〇九八六 阪大

MOMIYAMA

1743